第三部　イン・ザ・ゾーン

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ねえトト、ここはもうカンザスじゃないような気がするわ

ドロシー、オズの国に着いて

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

□□□□□□□

氷の聖者（アイス・ハイリゲン）たちの日々をわれわれは無事に乗り越えた――聖パンクラティウス、聖ゼルヴァティウス、聖ボニファティウス、そして「冷たい（カルテ）ゾフィー」[1]……葡萄畑の上の雲の中から彼らは冷気を吹きつけ霜を降らし、今年の収穫を破壊してやると意気込む。情容赦ない聖人たちは、年によっては（特に戦争の年が酷い）無慈悲で気短かで、尊大に勝ち誇る。聖人らしくないどころかキリスト教徒らしくもない。葡萄園の農夫や摘み手、ワイン愛好者は祈るしかない。だが祈りが届いたとして、聖者たちがどう思うかはわからない――荒々しく笑うか、異教徒風に腹を立てるか。五月の革命勢力から冬の体制を守り抜こうとする武官たちの胸中など知りようがないではないか。

　聖人たちが今年見いだしたのは、平和が戻ってほんの数日後の田園風景だ。ドラゴンの歯[2]や墜落したスツーカ爆撃機の機体、焼かれた戦車の上に、すでに緑の蔓が勢力を盛り返している。太陽は丘陵を暖め、河川の水はワインのようにきらめき落ちる。聖人たちも蛮行は控えたようだ。夜も温和、霜はなし。まさに平和の春であって、これで神様が百日間の陽光をお恵みになるなら素敵なヴィンテージ・イヤーになるだろう。

1　五月十二日からの四日間がそれぞれの聖人の祝日。遅霜の季節と重なるので「氷の聖者」と呼ばれる。

2　戦車の進入を食い止めるための強化コンクリートの列。それを神話風に見立てている。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

南に広がるワインの里に比べ、北のノルトハウゼン[3]は、氷の聖者に対し、より警戒が必要だが、ここでも季節の進みは順調だ。スロースロップが乗りこんできた早朝、町の上空から雨が途切れとぎれに吹きつけていた。裸足の足の裏はマメがつぶれ、上から新しいマメができているが、濡れた草が冷やしてくれる。山上が日に照らされだした。靴は盗まれてしまった。スイス国境からたくさん乗りついだ列車のどれか、ババリア地方のどこかでぐっすり眠っているときに、どこかの流民[4]が、夢より軽い指先でヒュイと持ちさっていったのだ。代わりに赤いチューリップの花を足の指に挟んでいった。スロースロップはチューリップを示しとして受けとめる。カッチェを示すサインとして。〈ゾーン〉[5]では彼のまわりに示しが群れるだろう。先祖たちも身近に登場する。まるで〈暗黒のアフリカ〉に原住民の研究に行って、彼らの古くさい迷信に引きこまれたみたいなことになる。いや実際、妙なことに、先だっての晩スロースロップは、生まれて初めてアフリカ人と出会ったのだ。月光の下の貨物列車の屋根の上で。言葉を交わしたのはたったの一、二分、というのも背後でデュエイン・マーヴィ少佐が貨車から転がりおちて、線路脇の小石だまりをドッタバッタと弾んで谷間へ転がっていったからなのだが、もちろんそのときヘレロ族の先祖信仰の話など、ひとつもしていない。それでも自分の先祖様を近くに感じるようになった。〈ゾーン〉に包みこまれ、物事の境目がぼやけてきたからだろうか。バックルつきの黒衣を着た彼自身の白人・アングロサクソンの先祖様。敬虔なプロテスタントで、木々の葉っぱの揺らぎの影にも、秋のリンゴ園に寝そべる牛にも、かしましい神の声を聞いていた・・・

カッチェを示すサインもあれば、彼女の分身も登場した。ある晩彼は廃屋となった屋敷

3 ハルツ山の南のふもとに位置する町。直訳すると「北の家」。

4 「流民」はDP（displaced persons）に対する訳語。戦争や迫害によって居住地を追われた「難民」たちのことだが、文脈によっては「棄民」とも訳す。

5 占領されたドイツは東側をソ連軍、西北をイギリス、西南をアメリカとフランスの軍に占領統治された。スロースロップは現在アメリカの占領地、翌月にはソ連の占領地へと移動する。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ちょ使用のブレインハウスに入り込み、瑠璃の眼をした人形のブロンドの髪を火にくべた。その瑠璃の眼を彼はポケットにしまい込み、数日後それと交換で車にのせてもらって、茹でたジャガイモを半分もらった。犬が遠くで吠え、南風が樺林を吹き鳴らした。溶けだした春の最後の流れが退却していくメインの道に彼はいた。近くに、カムラー少将[6]のロケット部隊のひとつが、軍隊的（ミリタリー）で同時に産業的（コーポレート）な死の姿をさらしていた。潰された猛攻の跡に、部品、モジュール、機体のフレーム、腐食の進むバッテリー、雨にぬれ泥にかえる機密の紙を遺して。スロースロップは追いつづける。どんな手掛かりも、列車に飛びのって後を追う価値があるから・・・

人形の髪は人間の髪だった。燃やすと嫌な匂いが鼻をつく。焚火の向う側から何かカチカチと動く音がした。彼は毛布を引っつかみ、窓の壊れた窓枠から飛びでるタイミングをうかがう。手榴弾かと思ったそれは色鮮やかなペンキを塗った小さなドイツ製の玩具だった。車輪つきのオランウータンがキキキといいながら焚き火の明かりの中へやってくる。胴体を小刻みに、首をゆったり、口元をニタリと動かして。スチールの拳が床を擦っている。焚火の中に入っていきそうになったとき、ちょうどゼンマイが切れた。上下していた頭が中途でとまってスロースロップを凝視した。

金髪をもう一束、焚火にくべる。「こんばんは」どこだろう。子供の笑い声がする。子供なのに古い（オールド）笑いだ。

「出ておいで。だいじょうぶだ」

オランウータンに続いて、くちばしの赤い小さなカラスがやってきた。これも車輪がついていて、ピョンと跳ね、カーと鳴き、メタルの翼をパタパタさせる。

6 ハンス・カムラーはナチス親衛隊（SS）の将校。ペーネミュンデ爆撃後、国防軍のドルンベルガーに替わってロケット製造を指揮。彼の下で五つのロケット大隊が活動した。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

「あたしのお人形さんの髪の毛、どうして燃やしちゃうの」
「もともとこの子の髪だったんじゃないよ」
「うん、ロシアのユダヤ女の髪の毛だって、パパが言ってたわ」
「焚火のところまでおいで」
「煙いから、いや」 こんどは何だろう、またネジを巻く音が聞こえる。何も動かない。代わりにオルゴールが鳴りだした。繊細な短調のメロディだ。「一緒に踊って」
「きみはどこだい、見えないよ」
「ここよ」 青白い炎の光の外側から、小さな霜の花が現れた。腕を伸ばして探るとほっそりした手があった。その手を取り、もう一方をしなやかな腰に回す。始まったダンスは本物だ。スロースロップは自分がリードしているように思えない。姿は見えない。感触はボイル織かオーガンディの織物のよう。
「すてきなドレスを着ているね」
「初めての聖餐式(コミュニオン)のとき着たのよ」 焚火は間もなく消え、枠だけ残して吹きとんだ窓から、またたく星と、東方の町の上空にほのかにたなびく光が見える。もうゼンマイが切れているはずの時間なのに、オルゴールは鳴りつづけている。あたりには砕け散った古く曇ったガラスと、ひき裂かれた絹布と、死んだ兎や子猫の骨。その上を四つの足が踊りまわる。 幾何学的なダンスの軌跡がふたりを運ぶところには、ふくらみながら風に舞うぼろのアラス織カーテンがあって、それの埃が焚火の煙よりも強く鼻を突き、昔むかしの物語へ手招きする・・・ユニコーンとキマイラの・・・それから、おい、なんだ、この子供サイズのドアの縁に掛かってるのは・・・ニンニクか? コレをぶら下げるのは吸血鬼除けだ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ろう？　おいおい、きみは、ほんとは、カッチェだな、トランシルヴァニアの小さな王女だろう[7]――と首を回して尋ねようとしたら、微かにただようニンニクの薫りがスロースロップの鼻をとらえ、バルカンの血でもってイギリス人の装いを打ち破りそう・・・になったときには、音楽は止まって、腕の中の少女もふわりといなくなっていた。

　さて、ウィジャ盤上の小板（プランシェット）のようにして〈ゾーン〉へ滑りこんできたスロースロップ。彼の脳ミソにぽっかり空いた穴の中に、意味あるメッセージが綴られてくるのか、それともこないのか、これは予断をゆるさない[8]。だけど霊感者の指が、自分に軽く、とはいえ確かに、ふれているのは感じられる。カッチェの指だ、と彼は思う。

　スロースロップは今もイアン・スカッフリングという名の戦時（もう平和時か？）特派員ではあるけれども、このごろは英国の軍服に戻って、列車内のありあまる時間、マリオ・シュヴァイターにひそかに集めてもらった情報のあれこれに思いをめぐらしている。〈イミポレックスG〉に関する分厚いファイルが指し示している場所は、ノルトハウゼンであるようだ。〈イミポレックス〉の契約の、顧客サイドのエンジニアに、フランツ・ペクラーという男がいて、彼がノルトハウゼンに来たのが一九四四年の早々――ということはロケットが量産態勢に入ったときと一致する。そのときペクラーが住んだのが〈ミッテルヴェルケ〉[9]という、地下の工場複合体の営舎で、ここは主にSSが取りしきっていた。そのロケット工場が二月から三月にかけて閉鎖され空になったとき、ペクラーはどこへ行ったのか。行方についての記述はどこにもない。よし、ここはひとつ、エース記者のイアン・スカッフリングが、ミッテルヴェルケに入っていって手掛かりを探しだすぞ。

　左右にくねる列車のなか、ボロ着を着て寒さに震える同乗者が三十人ほど。瞳孔をいっ

7　407ページ〜の歌を参照。

8　ウィジャ盤ではふつう、プランシェットの上に複数の人間が軽く指を添えている。これがアルファベットを指しながら移動して霊からのメッセージを綴る。

9　「中央工場 Mittelwerk」の複数形。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ぱいに開き、唇に炎症の穴をプップッ開けて、中には歌っている者もいる。〈流民（DP）の歌〉を歌っている多くは子供らだ。この先スロースロップは〈ゾーン〉周辺の宿営地で、路上で、この歌のたくさんの替え歌を聞くだろう。

今夜、列車を見たならば
空を走るの見たならば
板の毛布にころがって
眠れ、列車をやりすごせ

千マイルもの彼方から
夜更けになるとぼくらを呼ぶ
空虚（うつろ）な街を走りぬける
停まるところのない列車

石炭くべる者もない
勝手に目玉を光らせる
乗り手のいらない夜行列車が
荒ぶる夜をひた走る

訪ねる者とてない駅舎

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

寒風すさぶ線路の敷地
ぼくらの遺した物を受け継ぎ
列車がゆく、ぼくらは老いる

汽笛が泣くのに耳貸すな
風がこたえりゃそれでいい
列車のゆく手は夜と廃墟だ
ぼくらのもとには、唄と罪

パイプがまわっている。湿った羽目板から煙が垂れ下がる。それがヒュッと隙間に飲みこまれ夜の後流（スリップストリーム）となる。寝苦しそうな子供たちの息、くる病を病む赤ん坊のわめき声……母親たちがときおり短い言葉をかわす。スロースロップは背を丸めて、彼の「紙の不幸」に埋もれる。

L・ヤンフ（Lはラスロの略）に関する例のスイスの会社の書類から、チューリッヒ就業時点でのヤンフの資産一覧が出てきた。それによるとヤンフは一九二四年の時点でなお、「グレッスリ・ケミカル・コーポレーション」[*10]の理事会メンバーに、サイエンティストとして（名目的に）名を連ねている。ヤンフのストック・オプションと会社の所有株——これは翌年、伸びてきた大ダコのIGファルベンの触手に絡めとられる——の記載にまじって、ヤンフと、マサチューセッツ州ボストンのライル・ブランド氏との間で交わされた契約の記録があった。

10 480ページに記載のある染料メーカー、一九二五年から次第にIGファルベンに吸収される。このパラグラフ（と小説の他の部分）に書かれていることの本筋は史実で、主要出典は、Richard Sasuly. *I. G. Farben*（一九四七）。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ストライクだぜ、ジャクソン君、ライル・ブランドってのは知ってる名前だ。その名前が、ヤンフ自身による私的なビジネスの記録にちょくちょく登場する。ブランドさん、二〇年代初頭に、ドイツでフーゴ・シュティネスがやっていた事業（オペレーション）にずいぶん関わりがあったようだ。シュティネスといえば、生前はヨーロッパ財界の神童（ヴンダーキント）としてならした男だ。ルール地方の炭鉱王の家系に育ち、二十代にして、鉄鋼、ガス、電気、水力、市電、港湾交通を包みこむ大規模な産業帝国を築き上げた。第一次大戦中は、当時の経済全体に眼を光らせていたヴァルター・ラーテナウと緊密な関係を保って、戦後、電気業界におけるジーメンス＝シューヘルトの水平トラスト[*11]を、ラインエルベ・ユニオンからの石炭と鉄の供給と結合させ、水平にも垂直にも伸びるスーパーカルテルを実現。以後は、造船、海運、ホテル、レストラン、森林、パルプ工場、新聞……と、あらゆる領域を買いあさるとともに、通貨への介入を進めて、帝国銀行（ライヒスバンク）から借り入れたマルクで外国通貨を買い入れ、マルクを下落させることで賠償額の実質を大幅に減らすという作戦に出た。戦後ドイツのハイパーインフレに対して、最大の責任を負う財政担当者は彼をおいて他にいない。人びとがマルク紙幣を手押し車に積んで店に持っていき——糞になるべき食物が腹の中にある場合には——トイレットペーパーとも交換したという日々が続いた。シュティネスの渉外担当者は世界へ繰りだした。ブラジル、東インド諸国、そしてアメリカ合衆国。ライル・ブランドのごときビジネスマンは、シュティネスの伸張パワーに抗いがたい魅力を感じた。シュティネスがクルップやティッセン[*12]らと手を組んでマルクを破綻させ、ドイツの戦争賠償責任を逃れることを謀っている、といううわさが当時は行き交っていた。

ブランドの関わりは曖昧である。ヤンフの書類に、ブランドとの契約交渉のことが書い

11 同業社間の企業合同。

12 クルップについては318ページ註40参照。ティッセンは一八九一年デュイスブルクで創業し

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

てあった。「ノトゲルト」の名で知られる緊急通貨[13]を何トンもシュティネス一派に届けるとともに、「メフォ手形」[14]をヴァイマル共和国に調達するという契約。「メフォ手形」の製造は、帝国銀行総裁ヒャルマル・シャハトの演出した数々の簿記工作のひとつである。当時ドイツでは、ヴェルサイユ条約下で禁止されていた兵器調達を少しでも匂わせる事項を公的書類にいっさい残さないための数々の操作が行われていたが、紙幣の製造も、このようにして一部を、マサチューセッツ州の一製紙工場に請負わせていた。その工場の重役のひとりがライル・ブランドだったという話である。

その請負業者の名前が「スロースロップ製紙会社」

自分の名前にスロースロップはさほど驚きを感じない。デジャヴュの風景の細部が何の違和感もなく収まるように、しっくり感じられる。**SLOTHROP**の八つの文字が妙にチラチラしてくることもない（人の輪郭をした金色の光がこちらを監視することさえもない）。その代わりに胃袋の中から反吐のように体感できる恐怖が這い上がってきた。ずっと以前にヒムラー遊戯室（シュピールザール）で襲ってきた眩暈と同じだ。頭に巻いた巨大なゴムの袋に空気が入って四方からグングン圧力が増してくる感じ——といえばみなさんにも通じるだろうが、なんと……一緒に勃起も始まったのだ。性的な刺激はどこにもないのに。そして、ほら、またあの匂い。自我の意識が生まれる以前の記憶の底からただよってくる、柔らかくケミカルな、つきまとい脅迫するような匂い。外の世界には存在しそうもないような——これぞ**《禁断の買棟》**の息だ……その内奥で彼を待つ不動の人影が凝縮して、彼を挑発する、ここへ入ってきて秘密を調べてごらん、それを知ったら生きてはいられんがね……

むかし、何もわからず寝かされていたどこかの部屋で、何かの処置がスロースロップに

た製鉄会社。現在二社は合併して「ティッセンクルップ」という巨大グループをなしている。

13 ドイツの製造業界向けの決済に密かに使われた通貨。

14 兵器産業への支払いを記録に残さないための方便として使われた約束手形。一九三四年に始まり、三九年までに国債全額の六割以上に相当する額が発行された。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

はじこまれた・・・

自分の物語が、遠くでブーンとうなっている感じがする。まるで自分に取りつけられた装置のようだ。自分の体に〈かれら〉は基地を埋めこんだのか。われらの、生々しく騒がしい未開の地に、〈かれら〉の白きメトロポリスの統治府を・・・

悲しい物語だよ、まったくね。すっかり心を掻きみだされて、スロースロップは読みつづける。ライル・ブランドさん。うんうん、思い当たる節はある。ぼんやりとした記憶だが、ライルおじさんには、一度か二度あそんでもらった。父親のところへときどき訪ねてきていた。実際ブランドは愛想がよく、金髪で、ジム・フィスク[15]のローカル版ともいえるやり手だった。いつも幼いタイロンの身体の足首を握って持ち上げ、ぐりぐり回しをしたけれど、それはオーケー——頭が上でも足が上でも構わなかった幼い日のこと。

書類によるとブランドは、シュティネス帝国が崩壊[16]することを、他の大半の犠牲者たちより先にわかっていたのだろうか。それとも単に生来の心配性だったのか——というのも、一九二三年早々にブランドは、シュティネス工作にかかわる持ち株一切の売却を始めているのだ。株の一部は、ラスロ・ヤンフを通してグレッスリ化学（後のサイコケミーAG）に売られた。この取り引きで譲渡された資産のひとつは「シュヴァルツクナーベ企画[17]における全利権。購入担当者によってシュヴィンデルの効力の引き継ぎが完了するまで、売却者がひき続き監視の義務を負う。その妥当性の判断は売却者が行うこと」[18]

ヤンフの暗号帳も別の書類から出てきた。なるほど〝シュヴィンデル〟とは、これをフーゴ・シュティネスのコードネームとして使うとは、ヤンフって男もなかなかユーモアの才がある。そして、ほらほら「シュヴァルツクナーベ」という単語の脇に「T・S」のイ

15 南北戦争中に綿花、織物ビジネスで蓄財し、ジェイ・グールドとともに、米国初期の鉄道を支配したニュー・イングランド出身の悪名高き金融家。

16 一九二五年、フーゴが死去して一年たらずで、傘下に収めた数千の企業連合は解体した。

17 Schwarzknabe は英語で black boy のこと。

18 Schwindel はドイツ語で「めまい」「眩惑」

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ニンベンがある。まいったなあ、これ、おれのことだろ。Tough Shitって意味じゃなきゃ、どう考えても「タイロン・スロースロップ」だよね。

〝シュヴァルツクナーベ〟の将来の支払義務として記載されているのは、ハーバード大学の学費未払い分で、これが利息込みで約五千ドル。〝シュヴァルツファーター〟[19]とは誰かといえば、となりに出てくるイニシャルが「B・S」である。これは、Bull Shit の意味でなけりゃ、父「ブロデリック・スロースロップ」のことだろう。ふむ、〝黒い父〟かい。

二十年前に親父が息子の教育のため、ある取り引きを結んだって——その事実にこんなところで引き合わされることになるとはね。考えてみりゃ、大恐慌のさなか、家計はいつも破産宣告の一歩手前だったわけで、そんななか、自分はハーバード大学で快適な学生生活を送れていた。変だなとは思っていたが、裏の事情を思い悩んだことはなかった。それにしても、オヤジとオジキの間にどんな取り引きがあったんだい？　おれは売られたのか。ひどい話じゃないか、IGファルベンなんぞに、牛のあばらかなんかのように売りさばかれたんだ。監視だと？　シュティネスも産業界のエンペラーの常として独自のスパイ組織を持っていた。IGもそうだとすれば、スロースロップは、お、おそらく生まれて以来ずっと彼らの監視の視線を浴びてきたわけか、あわわわわ……

脳内の恐怖の風船が、またふくらみだした。ファッキューと罵ったくらいで、こいつはとてもしぼまない。……記憶の底の奥まったところにある〈禁断の翼棟〉。いや、見えない。輪郭が見えてこない。見たくもない。そいつは〈最悪のもの〉と結託しているんだ。

匂いの正体に関して、確信がわいてくる——いや、この書類によるなら記憶に残るには幼なすぎるし、人生の白昼の部分において、その物質の匂いに行き当たったことはない。

「詐欺」の意味。

19 Schwarzvater は英語で black father のこと。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

にもかかわらず、この生暖かく暗い部屋、時計の針もカレンダーも意味を失う幼い光景の記憶の中で、確信は固まるばかり――この匂いはいつかきっと〈イーポレックスG〉の匂いと判る、と。

それで、最近こんな夢を見た。二度と見たくない夢だ。実家の自分の部屋にいる。ファイファクトーラバッナの夏の午後。開け放った窓からキンソウリした空気が入ってくる。見ると非常に古いドイツ語の科学技術辞典があって、たまたま開いたページの、眼にチクチクする黒い肉太の活字をなぞっていると、JAMFの項に行き当たった。説明はただ一語。ただ「I」とあるだけ[20]。〈それ〉に向かって、やめてくれと懇願しながら目覚めたのだが、目覚めた後も、また〈それ〉に好きなように嬲われるという確かな印象が消えずに残った。きみもおそらく、そんな夢を見たことがあるんじゃないか。きっと〈それ〉はきみに禁じただろう――それの名を口にしないが身のためだと。もしそうならきみにもスロースロップの気持ちはよーくわかるはずだ。

彼はいま、よろよろと立ち上がり、貨物車輌のドアに向かって歩く。列車は坂を上っているところだ。引きずりながらドアを開け、外に出る――アクション、と自分にいいきかせ――ラダーを登って車輌の屋根に首を出したら、自分の顔の二フィート先に、二列の白い歯が宙に浮いていた。まいったぜ、こんな時に。そこにあったのは、合衆国陸軍兵器部隊のマーヴィ少佐の顔でなのだ。〈マーヴィズ・マザーズ〉といえば、〈ゾーン〉一帯にうずまくあまたの科学技術諜報チームの中でも、抜群のえげつなさで知られている。その首領がマーヴィ少佐。少佐だけど、気兼ねはいらない。「デュエイン」と呼んでかまわないって。そいつがいきなり「ブギ、ブギ、ブギ」と喚いてる。「次の車輌がジャングルのバ

20 「我」すなわち主体的自己を意味する「I」の意味に解釈できる。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ニーだらけだぞ。一匹残らず捕まえてやる。またな！」
「なんだってえ」と、スロースロップ、「おれ眠ってたのか、きっとそうだ」足も冷たい。このマーヴィという男は超デブで、ピカピカの戦闘靴にズボンの裾をたくし込み、腰に巻いた布ベルトの上に三段腹が波打っていて、肉の間にサングラスと45口径のピストルとロイド眼鏡が差しこんである。オールバックの髪をオイルで固め、目玉は、脳内圧力がすごいのだろう、左右ともボコンと突き出ている。

パリからドイツのカッセルまで、重戦闘機P-47機をヒッチハイクしてきたマーヴィは、ハイリゲンシュタット*21の西でこの列車に乗りついだ。目的地はイアン・スカッフリングと同じ〈ミッテルヴェルケ〉。そこでゼネラル・エレクトリックの〈ヘルメス計画〉*22の担当者となんらかの調整を図る必要があるらしい。だが隣の車輌のニガー連中が気になって仕方ない。「ちゃんと捕まえてレポートせんとな。故郷のアメリカ人にも、ええ警告になるわ」

「やつら、GIかい？」

「とんでもねえやな。ドイツ野郎さ、南西アフリカっていうんか。そんなもんだ。なあんだ、おまえ、聞いたことがねえの。よせやーい。そりゃイギリスのスパイは間が抜けてるって話だけど、ハハハハ。いや、悪気はないけどな、この話、世界中みんな知ってると思ってたもんでな」そう言って、ずいぶんケバい話を始めた。きっと連合国最高司令部が振りまいたんだろう。ゲッベルス宣伝相の想像力はこんなにギンギラしてねえぞ。アルプスの砦の南までは及ばんかった。ヒトラーもな、暗黒アフリカにナチス帝国を打ち立てようとしたんだが、パットン将軍の血と根性に砂漠で戦車隊がコッパミジンにされちまって

21 現在はウィーンの一角をなす、ベートーヴェンゆかりの地。

22 米軍とGE社合同で進めた計画の暗号名。ドイツ軍のロケットをニューメキシコ州ホワイトサンズに運びこんで解明する。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

な。ロンメル元帥のケツに、引導が渡ってしまった。「元帥、これがあんたのオケツだよ」
「アッハ、ダイジナ・ダイジナ・ワタシノ・オケチュ！　ヤー——ウハァハァハァ・・」
と大笑いしながらジェスチャーを演じるマーヴィ少佐、特大サイズのズボンのケツを、コミカルなしぐさでギュット握った。でだ、折角育てたニガーの幹部がアフリカで使えなくなっちまって、ドイツに居残った。言ってみりゃ認知なしの亡命政府みてえなもんだがな。その連中がどういうわけか兵器部隊に入りこんでロケットの技術を学んだ。戦争が終わってソイツら、ジャングルの生き物みたいにこの辺を好きにうろつきだした。戦犯として抑留されたのでもなく、マーヴィの知るかぎり武装解除もされてない。「ロシア野郎やフレンチやエゲレス野郎——おっと、気ぃわるくすんなよ——の心配してるだけじゃ足りねえの。いいか、ただのニガーじゃなくて、ドイツ人(クラウト)のニガーってのがうろついてんだ。まいったねえ。VEデイの当日にはな、ロケットのあるところぜんぶにニガーがいた。もちろん砲兵隊全員がニガーなんてありえねえさ。ドイツの野郎もそこまでバカじゃねえ。砲兵中隊っていや、八十一人って数だよな。それに加えて、サポート兵員、発射制御、バッテリー、推進燃料、測地の人員を合わせりゃどれだけの数になる。そんなでっかいニガーの山、見たことあるかい。そいつら、今でもアッチャコッチャに散らばったまんまいるんかな。あんた、調べてみねえかい。大スクープになるぜ。クロちゃんが一ヶ所に大集合ってことんなりゃ、こいつは一大事だ！　そこの車輌の中にはよ、少なくともニガーが二ダースはいる、すぐそこだぜ、見てみなよ。しかもな、行き先がどこだと思う？　ノルトハウゼン、ときたもんだ」——少佐のデブった指が、一語一語スロースロップの胸をつつく。「狙いは何だ？　何だと思うね？　おれの思うにゃな、あいつら、きっと企んでるぞ。目当ては

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ロケットだ。ロケットで何するつもりかなんて聞くなよな。おれは勘でいってるんだ。こんとこころがピンと来た。こいつぁ危険だ。ニガーにロケットだとよ。子供が扱ったらヤバイもんじゃねえか。あいつら、子供の人種だろ、脳のサイズがこれっぽっちで」

「だが忍耐力は——」暗闇の中に穏やかな声が流れる。「きわめて大きい。しかしそれにも限界はある」長身のアフリカ人が現れる。顎に立派な皇帝ひげを生やしたその男は、デブの米軍将校をひっつかみ、グイとわきに投げ捨てる。ギャッと一声発するのが精一杯の少佐は、スロースロップとアフリカ人が見ている前で、手足をバタつかせながら土手をころがり、姿が見えなくなっていく。丘には樅の林。そのギザギザの頂上のひとつに三日月が上がっている。

黒い男は〈シュヴァルツコマンド〉の一員で、エンツィアン陸軍大佐と名乗り、英語で自己紹介をすると、手荒なふるまいを詫びた。か、スロースロップの腕章に気づくと、こちらが一言も言葉を発する前にインタヴューを断った。「話すようなことはひとつもない。我らも流民なのだ。みんなと同じだ」

「さっきの少佐、あんた方がノルトハウゼンへ向かうのを気にしてましたけどね」

「マーヴィには悩まされることだろう、きっとな。だが実の問題は——」と言ってスロースロップの目を覗きこんだ。「フム、きみは本当に従軍記者か?」

「いえいえ」

「フリーで調査しているのか」

「〝フリー〟かって言われると、どうだろう。考えこんじゃいますね、大佐」

「だが、きみは自由だろう。いまは我らみんなが自由だ。それはきみも、いずれわかる

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

よ」男はドイツ式の、手招きするような別れの挨拶をして、貨物列車の屋根の「背骨」づたいに去っていった。「そのうちにな・・・」

スロースロップは屋根に腰をおろし、ハダシの足をさすった。味方ができたか？ 幸運の印か？ **黒人ロケット隊？** そんなもん、考えてみたこともないぜ・・・

やあみんな、きょう一日を
祝砲ならして始めようぜ
WW2は終わりだ、オーバー
あたりは一面クローバー
ほら、太陽のひかりを浴びよう——
喧嘩してるの、どこのドイツだ
（ゲアハルト、何やっとると）
クニじゃ平和な日々がまってる
ここ、楽しいロケットタウンに
しかめっ面はありません
エヴリデイ、イズァ・ビューティフル・デイ
（グレッチェン、ほら、いけまっちぇん）
今日も一日、ハヴァ・ビューティフル・デイ！

朝のノルトハウゼン。牧場はグリーンサラダ、雨の雫がサクサク感を増している。すべ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

てが洗われ新鮮だ。周囲をハルツ山地が囲む。色濃い斜面は、嶺に向かってトウヒ、モミ、カラマツが生えている。切妻の高い家々、大空を映す水の広がり、ぬかるんだ通り、居酒屋のドアや間に合わせのPXのドアから米ッのGIが出たり入ったり、みな小脇に何かを抱えている。草原に、谷間の開墾地に、光のパッチが流れる。雨を降らせた雲がチューリンゲンの森の上を流れさる。街の上に高く、鳥がとまったような城がいくつか、ちぎれ雲のまにまに見える。ドロンコの膝が節くれだった短足で胸厚の老馬が二頭、対になって引き具に首をつながれ、いっぱいに樽を積んだ荷馬車を引っぱっている。ぬかるみに入るたび、重い蹄鉄で泥の華を飛ばしながら、葡萄畑を出てボックリボックリ、居酒屋までの道のりを進む。

スロースロップは屋根のない街の一角に足を踏み入れる。黒服の老人が壁の間を蝙蝠のように行き交う。このあたりの売店や住居は、ドーラ[23]強制収容所で労働を強いられたユダヤ人の生き残りが奪いとっていくに任されている。いまもまだ、ホモ野郎たちが至るところに群れている。胸に「175」[24]と書かれたバッジをつけ、戸口に立ってぬれた目玉をこちらに向ける。ガラスの欠けた洋服屋の出窓の中は薄暗く、石膏のマネキンが禿頭のまま、ゴロリ横たわっている。差し上げられた腕の先には、もはやブーケにもカクテルグラスにもふれることのないだろう手が、何かをつかもうとしている。その出窓の奥から少女の歌声が流れ、スロースロップの耳に届く。バラライカの伴奏、四分の三拍子、もの悲しいシャンソンの調べだ。

愛はふしぎね、消え去らない

23 ミッテルヴェルケでV1とV2の製造を専門に行った総勢六万と言われる囚人たちの収容所は、近くのトンネルの中にあった。一九四五年四月十一日、収容所入りしたアメリカ軍は、中に数千の死体を発見。数百人の半餓死者が食べ物を収奪している姿も見られた。

24 同性愛の禁止を定めたドイツ刑法典の条項番号。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

思いもしないところから
想い出の木霊打ちが
わたしを悲しみに突きおとす

あなたは消えていったのに
お祈りの本のページから
薔薇の花が一枚ハラリ
想い出の押し花ヒラリ

行ってしまったはずの時間
剝げおちたはずのわたし
なのになぜ涙ながれる
リンデンバウムの幹の下

ほんとの愛なら亡びない
夜も昼もかえってくるの
やわらかな緑のままで
萌えいずる
リンデンバウムの葉のように

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

女の子の名はゲリー・トリッピング。弾いていたバラライカはチチェーリンというソ連諜報部員の所持品だった。それはある意味、ゲリーも同じである。少なくとも一定の時間は彼の所持品。このチチェーリンという男、ハーレムを持っていて、〈ゾーン〉内のロケットタウンのどこにも一人ずつ女がいる。まいったぜ、他にもロケット・マニアがいたとはな。スロースロップはツーリストの気分になる。

愛する男のことをゲリーが語る。彼女の屋根なしの部屋に腰を据え、地元でノルトホイザー・シャッテンザフト[*25]と呼ばれる軽くちのワインの栓を開ける。頭上の空を交差して飛ぶのは、黒い羽根に黄色いくちばしの鳥たち。巣のある山上の城を飛び立ち、廃墟のような下界の街へ、陽光のなか、輪を描いて飛んでくる。遠く——きっと市場でだ——トラックの一隊がこぞってアイドリングをしているのか、排気ガスの匂いが、迷路のような街の壁へただよってくる。その壁に苔が這い、水がにじみ、ゴキブリが餌を求める。壁に反響したエンジン音があらゆる方向から聞こえてくる。

ゲリーは細身で、少々ぎこちない。なにしろ若い。その眼には一点の腐食もみられない。まるで、戦争の歳月すべてを屋根つきの家で何ひとつ心配なく過ごし、庭の奥で森の小動物たちと遊んで暮らしたかのような表情をしている。あの歌は、願望を歌っただけと彼女は認めた。「彼っていないときはいないんだもん。あなたが入ってきたときチチェーリンが帰ってきたのかと思った」

「あいにくだね。やってきたのは、嗅ぎまわるしか能のないニュースの犬さ。ロケットもない、ハーレム（アレンジメント）もない」

「そういう手はずなの」と彼女は言った、「だって、この辺もうメチャクチャなの。アレ

25 「シャッテンザフト Schattensaft」、訳せば「シャドー・ジュース」。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ンジしていかないとやっていけない。あなたもわかるわ」その通り、彼はこの先、ことごとくアレンジに頼るしかなくなるだろう——暖をとるにも、愛を交わすにも、食べ物のことでも、道路と線路と運河をちょっと進むにも。いま占領軍の中にG5という組織ができて、これがドイツを治める唯一の正統なる機関という幻想が生きているが、これだって勝利を形にするためのアレンジのひとつにすぎず、その他の、プライベートな、ひそかな、歴史からすり落ちた無数のアレンジだって、その現実味にいささかの遜色もない。スロースロップ自身にしても、まだ本人にその意識はないが、これは終戦直後の〈ゾーン〉に乱立した無数の国(ステイト)のどれと比べても見劣りはしない。いや、これはパラノイアではない。現実としてそうなのだ。一時的な連合が組んずほぐれつするだけ。崩落をまぬがれた壁の内側、占領された道路から隠れた場所で、彼とゲリーはふたりだけのアレンジに到達する。暗くて大きな姿見に面した古い四柱式のベッドの中で。吹き飛んだ屋根を通して、木々に覆われた山がそびえ立つのが見える。ゲリーの吐息にはワインの香、腋の下は柔毛(ダウン)の巣、太腿は風にしなう若木の弾力。スロースロップが入ったとたんにゲリーは達した。その表情に、チチェーリンの幻影を見ているようすがまざまざと伝わってくる。そんな顔は見たくないスロースロップも抑えきれずにいってしまう。

愛欲の緊張が去った頭にたちまちトンマな疑問が浮かぶ。チチェーリンのいない間にやって来たのがおれ一人で、他のやつらはこない、ってことは何かよからぬうわさが流れてるのか？　それともおれにどこか、チチェーリンを思わせるところでもあるのか？　それって何だ？　それに、おいおい、いまチチェーリンはどこにいるのよ。眠りに落ちると、ゲリーの唇と、指先と、彼の足を滑る露にぬれた脚が覚醒へ引き上げる。頭上に仕切られ

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

た空に太陽が跳び上がり、乳房と重なって日蝕となり、子供のような彼女の目にキラリと映りこむ…雲、そして雨…屋根代わりに広げた緑色の防水カバーにゲリーは飾り房(タッセル)を縫いつけていた。まるでベッドの天蓋のように…それをつたって冷たい大粒の雨がしたたり落ちる。夜。ゆでたキャベツを鍋からすくって口へ運んでくれる、そのスプーンは紋章つきだ、この家の先祖伝来の宝物。さっきのワインをまた注ぐ。影は柔らかな緑青色。雨がやんだ。どこか丸石の道を子供らがガソリンの空缶を蹴ってゆく。

空からバサバサと降りてきたその爪が天蓋のてっぺんを引っかいた。「なんだよ、あれ？」ゲリーは寝ぼけたまま上掛けを引っぱる。なあ、ゲリー…

「フクロウさんよ」ゲリーが言った。「ヴェルナーっていうの。タンスの一番上の引き出しにお菓子があるから、あなた(リープヒェン)、あげといて」

リープヒェンってか。よろよろと起き上がる。今日初めて直立したスロースロップは、“ベビー・ルース”のチョコバーの包みをむいて咳払い。どうしてフクロウなんか、とは聞かない。答えは知れている。チョコバーを天蓋の上に投げてやって、ふたたびベッドへ。並んで寝そべるふたりの耳に、パリパリ、カチカチ、嘴でピーナッツを砕く音が聞こえた。

「チョコバーを食うのか」スロースロップが文句をたれる、「ふくろうのくせに変だぜ。外で生きた鼠とか捕まえてりゃいいだろうに。軟弱な飼われフクロウにしてしまっていいの」

「あなただって、たかってるじゃない」赤ん坊みたいな指先が肋骨をくだる。

「あのさ――へい、くすぐったいぞ――チチェーリンには頼まないんだろ、鳥に餌をやれとかさ」

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ゲリーの指先が止まった。気持が冷えこんだか。「ヴェルナーはチチェーリンを愛してるの。彼がいないときは、餌をもらいにきたりしないわ」
今度はスロースロップが冷えこむ番だ――いや凍りつくというべきか。
「おい、まさか、チチェーリンはもう・・・」
「来てるはずなの」と言って、ため息。
「いつの約束だ?」
「今朝なんだけど、ときどき遅くなるのよね」
ペニスを萎らせベッドを飛び出たスロースロップ、片足にソックス、もうひとつを歯でくわえ、アンダーシャツの片袖に頭をつっこみ、ズボンのチャックは引っ掛かって、クソ、と叫んだ。
「ねえ、あたしの勇敢なイギリス人さん」ゆっくり引きのばされた声。
「どうしてもっと早く言わないんだ、ゲリー、えっ?」
「ねえ、もどってきて。あの人、夜はかならずどこかの女と一緒なの。ひとりじゃ寝られないたちなの」
「きみは、ひとりで眠ってくれ」
「だまって。一緒にいて。ハダシなんでしょ。ハダシで外を歩いちゃダメ。あとで彼のブーツのお古、あげるから。彼の秘密も話してあげる」
「秘密?」あぶない、あぶない。「どうしておれが、他人の秘密なんか――」
「従軍記者だなんて、ウソなんでしょ」
「また同じこと言われた。誰も信じちゃくれないのかよ。おれは正真正銘の戦場特派員だ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ぜ」と腕章を振って、「読めないのか？　War Correspondent って書いてあるのに。口ひげだって、ほら、ヘミングウェイと同じじゃないか」[26]

「ふうん、そうなの。じゃあ、ロケットナンバー00000号のことなんか興味ないのね。あたし勝手に勘違いしちゃった、ごめんなさぁい」

なんだよ、これ、ヤバイよ、逃げてかないと。色仕掛けのゆすりかよ。六〇〇〇機もあるロケットの中で一機だけ〈Sゲレート〉を搭載したそのロケットに、おれ以外、誰がかかわりあるっていうの。

「おまけに〈黒装置(シュヴァルツゲレート)〉なんか、ちっとも関心ないんですものね」ゲリーは続ける。

「はっ、あああ？」

「〈Sゲレート〉とも言うらしいけど」

憶えてるな、スローストロップ、「一段高い組み立て(ネクスト・ハイアー・アセンブリー)レベルの。[27]天蓋の上でヴェルナーがホーと鳴いた。きっとチチェーリンへの合図だろう。

パラノイドは本来パラノイドだからパラノイドなのではなく、むしろおのれを故意にパラノイド的状況に追いこむバカタレだからパラノイドなのだ（格言その5）。

「ねえ、いったいどうして——」と、ここで新しいノルトホイザー・シャッテンザフトのボトルを手にとり、直腸にゾワゾワ恐怖を感じながらも、どうにかこうにかケーリー・グラントを真似た手つきでコルク栓をシュポンと抜いて、注いだグラスのひとつをゲリーに渡し、「きみのような、スイートガールが、ロケットのこと、知ってるのかな、それも、機体(ハードウェア)のことなんか」

「ヴァスラフのところにきた手紙を読んだのよ」バカなこと聞く人ね、という口調。実際

26　アーネスト・ヘミングウェイは、第一次大戦中に負傷した後、フリーランスの海外特派員をしていた。

27　482ページ参照。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

バカな質問だった。
「人にベラベラしゃべることじゃないだろ。あいつに見つかったら殺されるぞ」
「だってあなたのこと好きなの。陰謀が好きなの。遊ぶの好きなの」
「ああ、人をトラブルに巻きこむのが好きなんだ、きみは」
「どうせそうよ」下唇がプイと突き出た。
「わかった、わかった。いまの話、してくれよ。ただ『ガーディアン』[28]の編集室が面白がるかどうかはわからんぞ。うちのデスクはけっこうお堅いからさ」
ゲリーの小さな乳房に鳥肌が立った。「あたし、前にロケットの宣伝のモデルをしたことがあるの。あなたもどこかで見てるかも、A4ロケットにかわいい魔女の女の子がまたがっているポスター。いらなくなった箒は肩にかついでる。あたし、485砲兵部隊の第三中隊[29]で、スイートハートに選ばれたんだから」
「きみ、ほんものの魔女？」
「その気はあるみたいよ。あなた、ブロッケン山に登ったことある？」
「いやいや、まだここに着いたばかりで」
「あたしね、ヴァルプルギスの夜祭[30]には初潮が始まってからずっと行ってるの。よかったら連れてくわよ」
「そのさ、〈黒装置（シュヴァルツゲレート）〉ってやつの話をしようよ」
「あら、興味がなかったんじゃないの」
「そもそも何に興味を持ったらいいのか悪いのかもわからないんだ。それに興味があるかないか、どうしてわかる？」

28 イギリスのリベラル寄りの新聞。当時は「マンチェスター・ガーディアン」といった。

29 第485砲兵部隊は「北組」と呼ばれ、ハーグ周辺でV2打ち上げを行っていた。戦隊は二つに分かれ、「第三中隊」というのは現実には存在しない。

30 「メイディ」の前夜、魔女たちがブロッケン山に集まって催す宴。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「あなたの言葉づかい、おかしい。特派員の記者さんやってるってやっぱりホントか」
チチェーリンの乱入。火を吐くナガン拳銃[31]をにぎりしめ怒号とともに窓から押し入る。チチェーリンが落下傘で舞い降りてチョップ一発、スロースロップをぶち倒す。チチェーリンがスターリン戦車で部屋の中まで突入し、76ミリ砲でスロースロップをふっ飛ばす。ありがとう、リーブヒェン、よくぞこいつを引き止めておいてくれた。こいつはスパイでな。じゃ、チェリオー、ペーネミュンデで、ヴァニラアイスのようなおっぱいをしたポーランド娘が待ってるんで、またな、あばよ。
「もう行かなきゃ」スロースロップが不安げに、「タイプライターのリボンを交換しないといけないんだ。鉛筆も芯が減ってるし。ほら、わかるよね――」
「あのひと、今夜は来ないって、言ったでしょう」
「どうしてだ。シュヴァルツゲレートを追っかけてるからか、えっ?」
「いいえ、そのことまだ知らないはずよ。その件のことは、きのうシュテティンの町から入ったばかりなの」
「明文で、来たってことだよね?」
「それじゃいけないの?」
「たいして重要じゃないってことだ」
「売りに出てるわ」
「情報が?」
「Sゲレートかよ、ばかね。それを手に入れられる人がスヴィーネミュンデにいるんですって。五十万スイス・フラン。買う気があるなら、その人、毎日おひるまで海岸のプロム

31　ベルギーでナガン兄弟が開発した七連発回転式拳銃。ロシア軍は長らくこれを採用していた。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ナードにいるって。目印は白いスーツよ」
ほんとかよー。「ブロートヘット・ワックスウィング」
「名前は書いてなかったけど、ワックスウィングじゃないと思うわ。彼の持ち場は地中海のほうだし」
「きみは、地中海のほうのことまで知ってるの」
「だって、ワックスウィングっていったら、もう〈ゾーン〉じゃ伝説よ。チチェーリンもだけど。あなたも伝説？　名前はなんだったかしら？」
「ケーリー・グラント。ゲ・リ、ゲ・リ、ゲ・リー。[32]・・・スヴィーネミュンデか。そこはソヴィエトのゾーンだよな」
「ドイツ人みたいな口ぶりね。誰のゾーンとか、分けるのやめなさいよ。区分なんてないんだから」
「しかし兵隊が立ってるだろ」
「それはそうね」スロースロップをじっと見つめる。「でもそれとはまた別のことなの」
「ほう」
「じきに慣れるわ。すべてが宙ぶらりんになったままなの。チチェーリンが言うには〈空位の時〉なんですって。だからあなたも、ふんわり浮かんでいればいいのよ」
「じゃ、ふんわりと飛んでいこう。情報サンキュー。敬意を表して、スカッフリング帽子の先を――」
「行かないで」ベッドの上でくるっとカールした体。眼に涙を浮かべている。バカだなあ、スロースロップ、すぐ情に動くんだから・・・だってほんの子供なんだし・・・・・・

32　ハワード・ホークス監督の映画『コンドル』（一九三九）で、ケーリーがジュディ役のリタ・ヘイワースに向かって言う"Ju-dy, Ju-dy, Ju-dy."のもじり。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

来て・・・」

だがいったん挿入すると、この子はとんでもなく性悪になる。半狂乱の魔女みたいに、いつも歯でガジガジ噛んでノコギリみたいに尖らせている爪で、脚、肩、尻に切り掛かる。心やさしきスロースロップが、自分を抑えてゲリーの達してくるのを待ってるところへ、突然バサバサッと、重たい、羽の生えた、突き刺すようなものが腰のあたりに落ちて跳ね上がった――その瞬間、スロースロップも脈打ちはじめ、おお、ゲリーも、ズンング！イイイイイ・・・ああ、いってる、翼バサバサ、ヴェルナーが暗闇の中へ舞い上がってゆく。「いまいましい鳥だ」スロースロップが叫んだ。「今度やったらベビー・ルースを尻の穴から食わしてやるからな」仕組まれた、陰謀だ、パヴロフの条件反射かなんかだろ、これは。

「いまの、チチェーリンが仕込んだのか」

「違う、あたしが仕込んだの！」ゲリーの笑顔は四歳児のように屈託がない。スロースロップはもうこの子の言うことは何でも信じようと心に決める。

「きみは魔女だ」パラノイドのスロースロップは、すらりと脚の伸びた魔女の子と一緒に上掛けに包まれたまま、煙草に火をつけ、スロースロップ用の破壊兵器を手にしたチチェーリンが屋根のない壁を飛び越えて襲撃してくるイメージに繰り返し脅やかされながらも、眠りに落ちていく――少女の露わな腕の中で。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

□□□□□□□

まっ青な空、派手なピンクの雲――日曜日の新聞漫画みたいな夜明けだ。丸石の舗道の上の泥土はツルリとして光を反射する。道というより縞入りの生肉という感じ。狼男のくるぶしや、〈野獣（ビースト）〉の脇腹の上を歩いているようだ。チチェーリンはなんという大足なのだ。その靴をスロースロップが履いていけるように、ゲリーはブーツの先に古いシミーズのボロキレを詰めこんだ。通りはジープ、十トントラック、騎乗のロシア人の往来が激しい。身をよけながら歩きつづけたスロースロップは、ようやく十八歳のアメリカ人中尉の運転する、あちこち凹んだ灰色の参謀用メルセデスベンツに乗せてもらった。口髭をいじり、腕章をちらつかせ、怪しく思われないよう必死の防御。すでに日射しが暖かい。山の常緑樹の香りがする。運転している若い士官は、ミッテルヴェルケの護衛にあたる戦車中隊の中尉だが、スロースロップが中に入る資格のある人間だと疑わずにいる。イギリスのSPOG[*1]の一行はすでに来て、帰っていたのに。今はアメリカの陸軍兵器部隊がA4ロケット百機分の部品や工作機械を木枠に囲いトラックに詰み上げる作業に大わらわである。「ソ連の占拠部隊が来る前に、みんな運び出してしまおうって」なるほど〈空位の時代〉で

1 522ページ註10参照。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ある。毎日お偉方がやってくる。民間人も役人も、驚嘆の目を向ける。すっかり[illegible]トになっている。「こんな巨大なの、だれも見たことがないんでしょう。なんていうか、ストリップの客のようですよ。何もしないで、食い入るように見ている。カメラ持参でくる人も多いしね。そういえばあなたはお持ちじゃないようだけど、どうです、正面ゲートのところで借りられますよ」

便乗商売をねらう輩は多い。コックのイエロー・ジェイムスは、しゃれた小型のサンドイッチ・ワゴンを持ち込み、坑道内で声を張り上げる。「さあさ、寄ってらっしゃい。ホットにコールド、グリーンの野菜も満載だ」五分後には、大勢の阿呆がパクパクやって、その半数が脂で眼鏡をベトベトにしてるんだろう。中隊きってのたかり屋だったニック・デ・プロファンディスは、みんな驚いたことに、坑道内の電話ボックスを「A4記念グッズ」の土産屋に変えてしまった。並べてある、ロケットゆかりの小物たちは、ちょっとした工作でキーホルダーにもマネークリップにも、故郷で待ってるあの娘のためのブローチにもすることができる。燃焼チェンバーに使われていた真鍮製のバーナーカップも、サーボ操舵装置から取ったベアリングもある。今週の粋な商品ナンバーワンは、どんぐり型「SA100エーコン二極管」。テレフンケン社の無線装置から抜きとってきた小さなかわいい整流用の真空管である。さらにレアな「SA102」も置いてあるが、こちらは当然値段が張る。もうひとり、〝マイクロ〟の渾名をもつ揉みあげ男のグラハムは、横坑に潜んで、迷いこんだカモに声をかける。「チョイト」

「チョイト?」

「あ、いいっす」

2 [illegible]

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

「なんだい、気になるなあ」

「気前のいいお兄さんに見えたんだけどネ。探検ツアーとか面白がりそうな」

「え、いや、その、ちょっと列を離れただけなんで、戻らないと」

「退屈なさってんでしょ」口のうまいマイクロが、カモににじり寄る。「ここで実際、何が起こっていたか、知りたいとは思いませんかい?」

大枚をはたいても失望する客はまずいない。なにしろマイクロは、〈ミッテルヴェルケ〉に隣接するドーラ強制収容所に通じる岩道への秘密の扉の場所を知っているのだ。ツアー客はひとりひとり電気提灯を手渡され、死者に会ったらどうすべきか、手短な指示を受ける。「いいですか。彼らはここで攻撃される一方だったわけですよ。で、アメリカ軍がドーラを解放しにくると、生き残っていた囚人たちは一斉に飛び出して収奪を始めた。分捕る、食べる、飲む。胸が悪くなるまでね。別の一群には、アメリカ軍の代わりに〈死〉が踏みこんで、この世から解放してしまった。ここはですね、だから亡霊がよく暴れるところなんです。ご自分の頭の中をちゃんと守ってくださいよ。精神の自然なバランスを保つのが一番いいんで。それが崩れると亡霊にたかられます」

ここの人気の呼びものは、とてもエレガントな宇宙兵器用宇宙服[3]の展示室だ。著名なるベルリンのミリタリー・デザイナー、ハイニ氏のデザインによる。立ち並ぶ衣装のそのきらめきは、スペース・オペレッタを歌う少年少女らをもウットリさせる。特殊カラーのテレビジョン映像が、つま先に至るまでチラチラしているのだ。電気の鞭を手にした、たのしそうな宇宙騎手用の絹のスーツも作られた。いつかこれを着て、未来の〈ロケット・ミサイル〉を縁どる光輪のすぐ外を走り回る日がくるのか――精巧に作られた流星の"馬"

3 フォン・ブラウンら飛行兵器開発チームは、二段式の大陸間弾道弾A9/A10をデザインし、(遅くともアメリカに渡った翌年の一九四六年までには)人工衛星打ち上げ用ロケットA11、一種

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

にまたがって。それらの馬はみな同じ様式の顔をして、狂ったように敵を追う荒馬の目、歯、尻の下の暗がりを、強いコントラストで強調したイマーゴだ。その〝尾〟の先からおならのように噴射する推進ガス――お風呂の中での失態を思いだした少年少女合唱団は笑いをこらえきれない。その〝泡〟のひとつひとつが蛍光プラスチックのディスプレイにきらめきながら上下するさまは、「重力のため息」とでも形容するほかない。その泡が〈ワルツ〉に還っていく。妙に共同体的な〈未来のワルツ〉。その合唱に、くるくる回る物言わぬ表情に、ごくわずか、不安をかき立てる不協和音の気味が混じり、むきだしの肩胛骨が吊り上げられて宙に舞う姿はもろに「宇宙のウィーン」を思わせ、〈明日〉への倦怠がむきだしだ……

次に出てきたのが――〈宇宙ヘルメット〉！　これには最初ギョッとさせられる。頭蓋骨をモデルにしているからだ。少なくとも上部の丸い円蓋は、人間が巨大化したクリーチャーの頭蓋骨としか思えない。……この山の下に棲むタイタン族の、巨大なマッシュルームのごとき頭蓋を収穫してきたのか。……眼窩にはクォーツのレンズがはめてあり、カラー・フィルターも着装可能だ。その鼻骨と上列の歯は、溝や格子がいっぱいの金属製呼吸装置となっている。顎の部分は補強され、さながら顔面に股袋（コッドピース）がついているという印象――鉄とエボナイト製で、きっと中には無線装置が入っているのか、黒く、不気味に突き出ている。数マルク余計に払うと、このヘルメットも被らせてくれる。さて、ひとたびこの黄色い空洞の内側に頭を入れ、いまは減光フィルターの入っているその「眼」を通して眺め、頭蓋の中でシューシューいってる軋みその音を頭蓋のてっぺんや回りで聞きはじめれば、いくらきみの精神のバランスがよくても無駄だろう。それを被って〈シュヴァルツ

のスペースシャトルであるA12まで構想を広げていた。開発チームは当初より宇宙を目指していたわけである。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ヨッフンド〉が活動本部にしていたアジトはもはや、野蛮人が、二十一世紀に適応して生きている国としては見えてこない。ミルク入れの瓢箪もプラスチック製にしか見えない。エソフィアンが、夢精の過程ではっそりした白いロケットと交って〈啓示の光〉を得たと聖伝に記されたスポットには、たしかに黒っぽいシミが残って、それは奇跡的にまだぬれているんだが、今もただようその匂いはザーメンのものだとは知れていても、実際、石鹸か漂白剤のようにしか匂わない。壁に描かれた絵も、プリミティヴな粗々しさを失って、プリミティヴな空間性、深み、輝きを帯びてくる――そして変貌していくのだ、〈宇宙旅行〉の夢の実現をテーマにした三次元のジオラマになっていく。カーバイドの眩い光が、シューシューと音を立て、親しい誰かの口臭みたいに匂う。その光に照らされたジオラマからきみは目を離せない。数分後には、眼下で実際、何がどう動いているのか理解できてくる。縮尺のスケールを考えれば、とんでもなく遠くの出来事であるわけだけれど――そう、我らは今、〈ロケット・シティ〉[ラケーテンシュタット]に向かう軌道のゴール寸前のところに浮かんでいるのだ。磁気嵐に悩まされた苦闘の夜はすでに去った。われらの鋼鉄のまわりには今もチラチラと渦流が巻いているが、それも車窓についた雨粒のようなもの……そうだ、ここが〈シティ〉だ。「たまげた」[ホーリー]「すごいねえ」などの単調な声がエコーとなって去っていくなか、みんな地下の岩塩に開花した窓に群れる。……中は奇妙な造形だ。こういう場所につきものだと思っていた対称性[シンメトリー]がない。ヒレも、流線形のコーナーも、高圧線や鉄塔も、どれひとつ、正統な国家的ヴィジョンの、単純でソリッドな幾何学に依拠していない――その種の形状は、さっきの、番号つきの坑道をツアーしている役人たちのものだ。この〈ロケット・シティ〉、静かなる宇宙空間の暗がりを背景に、あまりにも白く照らしだされた〈ラ

4 ノルトハウゼンの地下ロケット工場は、もともと岩塩採掘場だったところに作られた。

ケーテン＝シュタット〉は明らかな意図をもって〈対称を避け、複雑性をかき抱き、〈序文から生の機械化[5]の諸項目まで〉恐怖を導入する〉ものなのだ——だがツーリストは眼前のその形態を、自分の時代、自分の惑星の事物に見立てずにはいないだろう——水盤中で打ち砕いたワインボトルのようだ、追いすがる死を振り切って生きつづけるヒッコリーマツ[6]にも似ている、長年放置されたコンクリート道路みたい、一九三〇年代後半にこんな髪型が流行った、いやこれはインドール系の分子じゃないか、それがポリマー化したやつ、〈イミポレックスG〉みたいに——

待て、どいつだ、いま検知された思考の源は？ モニター、しっかりチェックをかけろ、急げ——

だが、標的はすり抜ける、「中の連中は、自前のセキュリティでやってるんでね」と、例の若い中尉がスロープに説明する。「われわれの任務は地表面のガードに限られるんだ。責任分担は〈ゼロ番横坑の電源と照明〉で終わり。仕事としちゃ軽いもんだよ」悪くない人生だ。隊の人間で配置換えを望んでいる者もいない。娘たちにセックスのお相手から飯炊き、洗濯までやってもらえる。シャンパンも、毛皮も、カメラも、煙草も、なんなら用立ててましょうかね。……ロケットだけしか関心ないなんてことはないでしょ、それって狂ってますよ。うん、たしかに。

戦勝の甘い汁といえば、安眠と掠奪の自由だが、次にくるのはきっと、駐車禁止標識を無視していいことだろう。そこら中、丸で囲ったPの文字に斜線を引いたマークが、樹に打ちつけられ、あるいは鋼材に針金で縛りつけられている。だが凹みだらけのメルセデスが到着したとき、メインのトンネルへの入口はすでにほとんど車でブロックされていた。

5 この特殊な単語の綴りは immachination。

6 アメリカ西部乾燥地帯に生育する、樹齢五千年ともいわれる不規則なかたちの樹木。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「クノッ」と若い戦車隊員は大声でののしって、エンジンを切り、そのドイツ車を泥んこの広場に、いい加減な角度のまま置き去りにした——中にキーを残したまま。スロースロップも、このごろそういうことに目敏く気づく……

トンネルの入口は放物線。パラボラである。アルベルト・シュペーア風のタッチだ。一九三〇年代、放物線に目がない独裁指導者が、新生ドイツの建築をアルベルト・シュペーアに委託、後には彼を軍需大臣に抜擢した。つまりA4ロケットを受注する事実上の責任者ってことだ。ここのパラボラの着想を得たのは、シュペーアの弟子のエッツェル・エルシュである。エルシュ[7]は、アウトバーンの立体交差やスポーツ競技場などに見られる放物線の形のよさに注目していて、これこそ何よりも現代的な形だと感じていたが、その形が、同時に、空間を進むロケットの軌道の形でもあると知ったときはさぞかし驚いたろう（実際それを見て、「オー・ザッツ・ナイス」と言ったらしい）。エッツェルの名は、フン族の王アッティラにちなんで母親がつけた名前だったが、なぜアッティラなのかはその理由は今も不明である。彼のパラボラ・トンネルの上部には高いロフトがついている。下を鉄道線路が這い、鉄の色がそのまま闇に続いている。入り口をカモフラージュしていた布が巻かれて脇に置いてある。そそり立つ山肌には、灌木や樹木の闇に岩があちこち露出している。

スロースロップは、連合軍最高司令部発行、通行許可証を提示する。こいつは万能だ。アイゼンハワー元帥の署名があり、そのうえパリにいて米軍「V2スペシャル・ミッション」の長官を務める大佐の署名つき。ワックスウィングの手掛けるスペシャルな偽造品である。第五機甲師団、第四七機甲歩兵部隊、B中隊、という文字列には、ここのセキュリ

7 ヒトラーより十六歳若いシュペーア（一九〇五〜八一）は、みずからも建築家志望だったヒトラーの信望を得てベルリン建設総監となり、首都大改造計画に着手。一九四二年には軍需相に抜擢された。エルシュという人物はピンチョンの創作。

ラーを携えた仕事をしているという雰囲気がつきまとう。スロースロップがそれを見せると、みな肩をすぼめて通してくれた。検問所の兵士らはうろうろ、だらだら、田舎者の冗談を言い合ったりしている。中にはきっと鼻をほじっていたものもいて、二日後、スロースロップの目にする証明書には、洟の固まったのがこびりついているだろう。その褐色の結晶が、ノルトハウゼンへの査証(ビザ)なのか。

白い監視塔を過ぎて中へ。春の朝に変圧器がブーンとうなる。どこかで鎖がチャリン、トラックの後板がバタンと鳴った。轍の間、泥の盛り上がった嶺や縁は陽を浴びて半がわき、色は明るくひび割れている。近くから大きな汽笛の音。列車が寝起きの欠伸と伸びをしたみたいに聞こえる。日向に積まれたまぶしい金属球を過ぎて中へ。コミカルな標識つきだ――「プリーズ、ノー・スクイーザ＊8、酸素ユニータ、詰めコーンジャ、ダメーネ」え、イタリアーノ、いつから、きてルーノ。……放物線(パラボラ)の下へ、寓意(パラブル)の下へ、山のなか、太陽の光の届かない、寒さと闇と〈ミッテルヴェルケ〉の長いこだまの響きわたる中へ入ってゆく。

タンホイザー症として知られる、そう珍しくない人格障害がある。山の下のトンネルに入りたくてしかたない。それもべつにエッチな期待を抱いてじゃない。必ずしもヴィーナスの色香、ホルダ夫人＊9の愛撫を求めるのではなく、地の精を、きみより小さなクリーチャーを求めて、みずから頭巾をかぶって洞穴の通路を何マイルも歩く、そんな墓の中の時の経過を味わいたくてたまらなく好きでやってくるものがけっこう多いのだ。迷子になるのも恐れずに……公衆の目から、きみを裁こうとしている目から、逃れられるのがいい……愛の歌人(ミンネゼンガー)＊10だってひとりになるのは必要だ……曇天の日の長い屋内散歩が……閉所の安らぎ

8 原文 NO SQUEEZ-A は、Do Not Squeeze（詰め込むな）の意味のイタリアン・イングリッシュ。

9 ホルダ夫人（女神ホルダ）は性愛の神として、ヴィーナス（ヴェーヌス）と等価の存在。タンホイザー伝説については、690ページに註記した。

10 ミンネザング（宮廷恋愛の伝統にのっとった歌）をつくり歌う、フランスのトゥルバドゥールやトゥルヴェールに相当する中世ドイツの歌人。ヴァーグナーの歌劇で知られるタンホイザーはミンネゼンガーである。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

が必要だ。誰ひとり〈死〉に関して、別様の考えを持たないところで。

スロースロップはこの場所を知っている。カジノでもらった地図を見て研究したという意味ではなく、誰かいるぞとわかる、そんな感じで知っている。

工場の発電機から今も電気がきている。裸電球もほとんどが灯り、光の輪が切れているところは稀だ。闇を切りだし、大理石のようにあちこちに運び出すとしたら、その闇を不動の停滞から切りだして届けるのが電球という鑿（のみ）である。電球は〈屈辱（ヒューミリティ）〉のシンボル、〈神〉と〈歴史〉が踏み越えていった群れなす人びとを表す、大いなる秘密の聖像（イコン）のひとつとなったのだ。ドーラ収容所の囚人たちが掠奪に走ったとき、まず最初にロケット工場内の電球がなくなった。食べ物より前に、一番坑道の医療品ロッカーや医務局のクスリ・コーナーから悦楽の元が奪われつくす前に、〝解放〟された者たちは、まずなによりも、この壊れやすく、「ソケットから抜かれた」（ドイツ語でソケットのことも「母」と同じ単語で呼ぶ——ということはすなわち「母なしの」）イメージを自分のものにせずにはいられなかった・・・

ロケット工場の基本設計も、エッツェル・エルシュのインスピレーションによるものだ。ナチの魂が入っているところはパラボラと同じだが、同時にこちらは〈ロケット〉に属するシンボルでもある。SSの二字を少々上下に伸ばした形が、山中、優に一マイル以上も伸びているのだ。あるいはちょっとS字っぽく波うつ梯子を寝かせる——四十四本の格（こ）に当たる横坑（シュトレン）が、二つの主要な坑道をつなぐ形で。最深部では、厚さ二〇〇フィートほどの岩山が頭上からのしかかっている。[11]

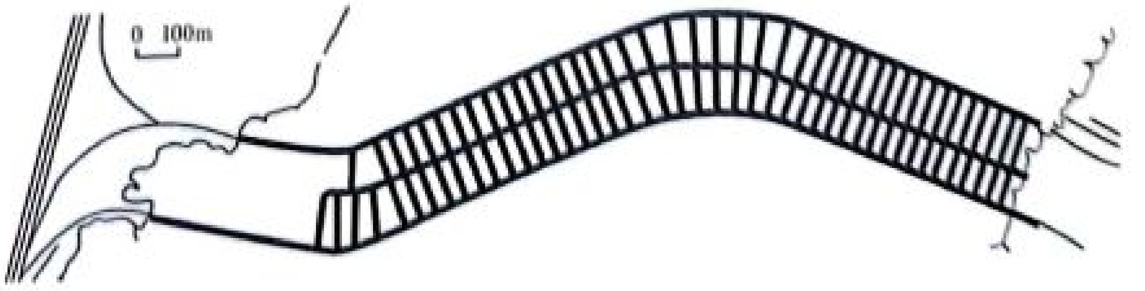
だがその形はただの長いSSではない。弟子のフーブラが建築家エルシュのそばに走り寄

11 Mittelwerk の他、Raketentunnel で検索すると有益な画像、映像、テレビドキュメンタリーなどにヒットする。トンネルの略図を左に示す。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

って「巨匠！」と叫ぶ。「巨匠！」エルシュはミッテルヴェルケの一区画に陣取っている。そこは個人用の（どんな地図にも表記のない）横坑によって工場自体からは隔離されたところにある。そこで彼は、建築家という存在の誇大なイメージを練り上げた。助手全員に「巨匠」と呼ばせているのもその現れだが、彼のエキセントリックな性癖はそれに留まらない。ヒトラー総統に最後に提示した三作品はどれも、視覚的にはしっかりしていて、新ドイツ建築として美しいのだが、どれもちゃんと立たないのだ。見かけはノーマルでも、倒れるようにデザインされている。まるでオペラの客席にすわったふとっちょの男が横に居眠りして横の席に倒れこむかのよう。最後のリベットを打ち込み、新たに置かれた新しい寓意的彫像から最後の型枠が取り去られると、まもなく倒れこむのである。これはエルシュの「死の欲望」に由来する問題であると、小さな助手たちは語る。食事時の配膳所でも、陰鬱な石の積載ドックにあるコーヒー沸かしのまわりでも、大将に関するゴシップは絶えない。……日没はとっくに過ぎた。丸天井の、ほとんど戸外にあるような仕切り部屋のそれぞれに白熱灯が点いている。地下の小人たちは夜はここにすわっている。電球はある条件下でのみ光る。心許ない……次の瞬間にもプッツリ切れてしまいそう。……小人たちは製図板の前で作業中。今夜は夜なべだ。締切に間に合わせようと必死になっているのか、それとも、締切に遅れてしまった罰として仕事をやらされているのかは不明である。奥の勤務室からときどきエッツェル・エルシュの歌声が聞こえてくる。ビアホールで合唱するような卑俗な歌だ。今度は葉巻に火をつける。これが爆発する葉巻だということは先刻承知、今ちょうど走りこんできた弟子の小人のフープラも知っている。何者か知らないが、革命家気取りの男が、彼のシガーに火薬を仕込んだ。ただしそれが火薬としてヘナチ



CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ヨコなので冗談ですんでいる。「だめです、巨匠、火を点けちゃ。巨匠、消して下さい、おねがいです、爆発します！」かくも無礼な入室を敢行するとは、よほどの報せだろう。

「何を伝えにきた、フーブラ。言ってみたまえ」

「しかし——」

「フーブラ君・・・」ここで一発、巨匠にふさわしい紫煙の雲をプワーッと吐きだす。

「そ、それは、このトンネルの形状についてであります、巨匠」

「モゾモゾするのはやめたまえ。わたしはそれを稲妻二本を並べた形にデザインしたのだよ、フーブラ君——SSの紋章だ」

「でも、それは二重積分（ダブルインテグラル）の記号でもあることを巨匠はご存知でしたか？」

「当然だ。ライプニッツは何と言った。ズメ、ズメと言っただろう」[12]

パーン！

被害なし。だが、ロケットに関係したイメージは、自分の死も顧みず受け入れてしまうところにエッツェル・エルシュの天才がある。駆け出しの建築家として静的空間を扱っていた頃も、ちょくちょく二重積分の世話にはなっていただろう。数式的に把握された面に囲いこまれた体積値を求めるときも、質量やモーメントや重心の計算にも。だが、このところ何年も、そんな基本的な計算を自分でやることはなくなった。最近の計算といえば、マルクとペニヒの勘定であって、rとθによる想定上の角速度や、xとyによる単純な座標の計算は弟子任せだ。・・・だが生きたロケットのダイナミックな空間において、二重積分は別の意味を持っている。つまり、ここで積分は、変化率を操作して時間を消すという

12 「ズメ Summe」は英語の sum（寄せ集める）に当たるドイツ語。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ことなのだ。いわば変化を停止へとみちびくこと。∴毎秒メートル（m/s）を積分することで、メートルが得られる。動いている乗物が空間に凝結し、タイムレスな建築となるのだ。発射されたためしもない、この先落ちる恐れもないものに。

誘導の際に起こったのは以下のことだ――磁力によって中心に保たれている小さな振子があって、ロケット打ち上げ時に、重力gに抗して加速する際これが中心を外れる。振り子にはコイルがついていて、コイルが磁場を移動すると電流が流れる。振子が発射の加速による力で中心を逸れると電流が流れ、加速度が大きくなるにしたがってより大きな電流が流れるというしくみだ。飛行する〈ロケット〉の側では、まずその加速度を感知する。いっぽう、その軌跡を追っている人間が最初に感知するのは、位置や距離である。加速度から距離を得るために、〈ロケット〉に必要なのは二度の積分。そのために、動くコイルと、変圧器、電解槽、複数の二極管ブリッジ回路とひとつの四極管（管内での容量性カップリングを遮断するために二つめのグリッドがついている）を必要とする。距離という、人間の目が直接感じるレベルに達するのに、それらが精巧に組み合わさったデザインの舞踏が必要とされるのだ。

例の後ろ向きの対称性が、ここでまた登場した。ポインツマンの目には映らなくても、カッチェはそれをとらえて、「ロケットみずからの命」と表現した。[13] スロースロップは思いだす、カッチェの口元にようやく現れた笑みを、地中海の夕景を、剥離した樹皮がくるり捻れたユーカリの幹を、薄暮の空のピンク色がむかしスロースロップが一度はいた米軍士官のズボンと同じピンク色だったことを、木の葉の酸っぱく鼻を突く臭いを。∴電流がコイルを流れ、ホイートストン・ブリッジを通ってコンデンサーに蓄電する。蓄電され

13　この言葉をカッチェは言っていないが、情景から察すると、428ページの発言を指していると思われる。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

る電荷の値は、コイルとブリッジを流れる電流を時間で積分すると得られる。これが「I・G誘導」[14]と呼ばれるものだが、この改良ヴァージョンでは、二重に積分される結果、蓄電器の片側に集まる電荷が、ロケットの進んだ距離に正比例して増加する。もう片側には、打ち上げ前に、空間内の一点（燃焼終結）までの距離に対応する電荷がチャージされていた。正確にその点で燃焼が止まった結果として、ロケットはウォータールー駅の東一〇〇ヤードという目標に命中するのである。飛行中に集積する電荷（B_{II}）が、逆側にプリセットされた電荷（A_{II}）と等しくなった瞬間にコンデンサが放電。スイッチが切られ、燃料供給が絶たれ、燃焼終結となる。〈ロケット〉はみずからの命で、みずからの飛行に入る。

以上は、ここミッテルヴェルケのトンネルの形のもつ、ひとつの意味だ。他にも解釈はありえるだろう。これを古代ルーン文字でイチイの木、さらには〈死〉を表象する文字だとすることもできる。[15] エッツェル・エルシュの潜在意識の中で、二重積分とは、「隠された中心」を、「知られざる不活性（イナーシャ）」を、探り当てる方法の象徴となっていた、とも。その〈中心〉にあっては、〈文明〉の理念が堕落したものが、黄昏の薄明の中に巨大なモノリスの建造物を彼に残した。そこではコンクリート製の鷲たちが、十メートルの高さで凝固した姿をさらしているスタジアムがあって、そこに人びとが——〈人民（ザ・ピープル）〉の理念の堕落したものとしての人間たちが——群れ集まってくる。そこで、鳥が飛ぶことはない。そこの、凝結した石の死性の奥底にある中心を想像しようとして、〝核（ハート）〟、〝叢（プレクサス）〟、〝意識〟等の言葉を並べても役には立たない（声にしだいに皮肉のトーンがにじんでくる。無益なリストを並べながら、演技ではなく、マジに涙ぐんでいる）、〝聖域（サンクチュアリー）〟とか〝運動の夢〟とか、

14 [illegible]

15 204ページ註3に示した文字で、読みは「エイワズ」「イーワズ」など。北欧では「ユー」、英語でイチイを表すyewの語源となった。

〝永遠の現在を胎孕する胞嚢〟、〝生きている石たちによる集会でひときわその灰色の高潔さを際だたせる重力〟、そんな言葉では言いあらわせない。それらの無益な言葉を拭いさってできる空間の一点、燃焼が止まるべくして止まるまさにその一点、打ち上げられることも落下することもないロケットの〈燃焼終結（ブレンシュルッス）〉の一点。その点を重心とする形象はどのように具現化されるのか。無限数の形象が可能だなどと言いだすなよ。ひとつだけしかないのだ。物事のひとつの秩序と別の秩序の界面をなすインターフェイスに描かれる――ほら、どの発射地点に対しても「燃焼終結」の点がひとつずつ存在するだろう。それら空の上の点々をつないでいくとどんな星座をなすだろう。その星座は、ゾディアックの十三番目の宮（きゅう）としての名がつくのを待っているのだ。だがそれらの「星」はどれも地表から近すぎて、地上の別の場所からは見えないところも多いし、〈ゾーン〉内の見えるところからも、まったく別の姿になってしまうのだ・・・

　ダブル・インテグラル記号はまた、ぬくぬくと背を丸めて寝ている恋人たちの姿でもある。まさに今のスロースロップの願い――カッチェと過ごした時に戻りたい。たとえそれが再度の喪失を、今以上の傷みを意味したとしても――たとえ（いまも正直（オネスト）にカッチェのことが忘れられないから）偶然（アクシデント）によって守られながら、その偶然のより残酷な正直さから身を守るのはお互い同士のぬくもりしかないことを痛いほど知らされるのだとしても・・・そんな暮らしにいったい耐えていけるのか？　カッチェとふたり、そうやって暮らしていくことに〈かれら〉は合意してくれるのか？　カッチェについては、いままで誰に対しても、何ひとつ語れることはなかった。紳士的な配慮から黙っていたんじゃない。ACHTUNGのオフィスでタンティヴィ相手にロンドンの女たちのことを語ったときに、話を改

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

奪したら、名前を奪ったら、それらの名前を騙りこんだりしたのとは違う。むしろ、類似のイメージが、またはあるひとつの名前に、魂が縛られてしまうことへの心底からの不安があったのだ。……それらがもたらす数々の副作用から。カッチャを保存したかった。それらの甘美から身を守りたい。もしカッチャに関してそれを守ることが必要なら、自分に関しても同じことができるのではないかという気がする。……スリーソリッドと、自分のものだと思っていたペニスンのことで。こんな気高いことは、ただの夢だけど。

第一の作物のように蛇行している物金の導管の中で、工場の換気音がうなる。ときどきそれは誰かの声のようだ。どこか遠くの往来のようだ。スロースロップに直接話しかけてくるのではないのだが。もっとはっきり聞こえてこないものか……

光の線、闇の通路。トンネルのエントリーの外装が途切れた先は、断層の表面に白い痕跡を残した壁面となる。遊園地の洞窟のようなウソっぽさだ。トンネルとクロスする横坑の向こうは、いかにも排気しているチューブドパイプのように過ぎていく……ひと頃はここで旋盤がギーンギーンと音を立て、いたずら好きの作業員が、切削油の入った小さな真鍮の油差しで、油をひっかけあっていた……握り拳の関節がグラインダーの回転輪にふれて血を滲ませ、毛穴と爪と生肉に細かな鋼鉄のクズが刺さった……合金やガラスの管が細い中高い音が真冬を感じさせ、小さなネオン管の間を琥珀色の光が密集して走りぬけた。そのすべてが現実だった時があったのだ。ここビッテルヴァルトでは「現在を生きる」ことを長く続けるのはむずかしい。きみが感じるノスタルジアも、きみ自身のものではない。だがそいつの力は絶大だ。暗がりの、断続的なたそがれの中で、あらゆるものが静止し、

溺れ、力を失った。金属の表面を酸化の硬膜が薄く覆って――分子一個ぶんの厚さのところもある――映りこむ人の顔にフェードをかける。麦藁色したポリビニルアルコール樹脂のベルトが弛んで、工場の最後の臭いの痕跡を吐きだす。漂流中に発見され、霊の気配がただよい、最近まで人のいた気配がする点は同じだとしても、ここミッテルヴェルケは、伝説の難破船マリー・セレスト号[16]とは違う。まず行き先が一方向ではない。足下の軌道は前後に、静止したヨーロッパ全体にめぐっている。そして、われわれに冷汗と鳥肌をもたらす恐怖感も、中で起こった謎に対してではない。それは、〈ここで起こったかもしれないこと〉に対する屋根裏部屋的恐怖ではない。ここで事実起こったことを、かなり具体的に知っていることの恐ろしさだ…広大な物寂しい場所にひとりで立つと、すぐにも荒野の恐怖のパニックに襲われそうになるが、これは基本的に、都会人の不安である。きみは時の経過の内側で迷子になり、隔絶され、それで動転しているのだ。〈歴史〉が消失し、帰還するためのタイム・トラヴェル用カプセルも見つからず、疎開が終わって誰もいなくなった大都市の中央駅の、終末的な寂寞感に包まれる。明かりの途切れたところで、都市に棲息する牧神の従兄弟がいつもと同じメロディを吹き鳴らす。みんないなくなりしずまったぶん、その音はいつになくくっきり聞こえる…納屋のツバメの魂たち、褐色の黄昏でできた魂たちが、白い天上へ昇る。…これは〈ゾーン〉だけでしか見られない。新しい〈不確定性〉に応えるものだ。かつて幽霊といえば、死者のイメージか、生霊を意味した。だがここ〈ゾーン〉では、物事のカテゴリーの境界がひどくぼやけてしまった。きみが思慕し、探し求める大事な人の名前のステータスが、曖昧で疎遠なものになってしまった。それも単に人間の大量消失に役所の管理がついていけなかったというレベルのことで

16　一八七二年、ポルトガル沖を無人で漂流しているところを発見された商用帆船。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

はない。まだ生きている者も、すでに死んだ者も、多くが自分がどっちに属しているのかを忘れてしまったのだ。彼らの仮姿が役に立たない。ここにあるのは、単に明るみや暗がりに晒された包み物だけ――〈不確定性〉のイメージだけだ・・・

ボストA4時代の人類が動いている。トンネルのあちこちで物を打ち鳴らし、声を張り上げているのが聞こえる。カーキ服にバッジをつけた民間人。ヘルメットライナーにGEのロゴマークがステンシル印刷されている。ときどき、こちらを向いてうなずくものがいる。眼鏡が遠くの電灯の光をキラリとさせる。たいていの物はこちらを無視して歩みさる。軍の作業隊が、リラックスした足取りで、文句を言いながら、木枠を担いで進んでいる。スロースロップは空腹で、イエロー・ジェイムスの姿は見えない。だがここには、このフリーランス記者のイアン・スカッフリングにハローと呼び掛けてくれる人もなく、まして食べ物の心配をしてくれる人などいるわけは――いや、おい、待てよ。なんだこの女子派遣隊は。みんなピッチリした（ピンク色の）ミニ白衣を、むきだした太股の最上部まで垂らし、おしゃれな金のウェッジ・ヒールの靴を履いて、足元をふらつかせながらやってくるではないか。「アー・ゾー・ライツェント・イスト！」こんなにたくさん一度に抱き留めきれないよ。「ヒュプシュ・ヴァァス？」ちょっとちょっと、カワイコちゃん、一人ずつお願いしますよ。みんなクスクス笑いながら腕を伸ばし彼の首にかけてくれる――銀色に繁茂する六角ナットや継ぎ手の埋め輪の花輪を。深紅の抵抗やら鮮黄色のコンデンサーやらが小さなソーセージのように連なっている。ガスケットの廃物もだ。何マイルものアルミの割り符はクルリ、ふんわり、キラキラしてシャーリー・テンプルの頭のよう――ホーガシ兄貴さ、ツチ・ガールズならオレ、いらないから――でもこの娘たち、おれをどこへ

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

連れてこうっての。ひとけのない横坑かい、そこで信じらんないご乱交か、ケシはたんまり、来る日も来る日もプレイと歌とに明け暮れるのかい。

二十番坑道から先は、人の往来がもっと頻繁だ。A4の組み立てをやっていたのがここだが、同時にV1やターボプロップ機の組立も行なわれていた。これら、二十番台、三十番台、四十番台の横坑で組み立てられたロケット部品は、左右のトンネルに作られた二本のアセンブリー・ラインに送り出されていた。奥へ歩いて行くにつれ、ロケットがロケットになっていく過程を逆向きにたどることになる――過給機（スーパーチャージャー）、中央部の各セクション[17]、機首のアセンブリー、パワーユニット、制御装置、尾翼……この尾翼の板はまだトンネル内にいっぱいだ。上向きのもの、下向きのもの、交互に立てかけられている。どの列もまったく同じ、窪みのついた波打つ金属曲面だ。スロースロップが通りすぎると、面に映った自分の姿が異様に歪んで流れていく。これはまた、地下洞にずいぶんでかいビックリハウスを作ったもんだ。……小さな金属車輪のついた空のトロッコが連なっている。それが運ぶのは、天井を向いて立っている、尾翼が四枚ある矢尻型の物体だ――ああ、そうか――この尖ったホルダーはきっと、ロケットの推進チェンバーの開口ノズルの内側にガチャンとはまったものなのだろう。ほらみろ、いっぱい並んでいる。スロースロップの背丈ほどはあるデカ物だ。バーナーカップ近くには白ペンキで大文字のA。……頭上は、白い被覆材でおおったパイプの列だ。太いやつがくねくねと這い、焼け焦げた頭蓋のリフレクターはスチール・ランプの光を反射していない……トンネルのセンターラインにそって走るラリー支柱はほっそりとしたグレイ、露わになった繊条に古サビがこびりついている……青い影がスペアの部品を収めたケージを通って、その先の厚板とIビームにかかって

17 中央部には上に大きなアルコール・タンクが、下に液体酸素用タンクが収まった。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

いる……線路脇にはガラス綿の絶縁体が雪のように積みあがって……

最終の組立作業が行われるのは、四十一番の横坑だ。そいつは完成したロケットが収まるよう、五〇フィートの深さがある。その底からどんちゃん騒ぎの声がわき上がってきた。明らかに常軌を逸した連中の声がコンクリートの壁に響き渡る。メイン・トンネルの先で、うつろな目と赤ら顔をした人員が、みんなして体を揺らして騒いでいるのだ。スロースロップが目を細めて深い穴の底を見やると、大勢のアメリカ人とロシア人が巨大なオーク材のビア樽のまわりに集まっている。ヒンデンブルク風の赤い口髭をはやした小人サイズのドイツ人が、泡いっぱいの大ジョッキを配り歩いている。連中のほとんどの袖口から立ちのぼる紫煙は、銃口から出る火薬の煙のようだ。アメリカ人が歌うのは――

《ロケット小唄》[18]

むかしV2というのがあって
操縦しなくも飛んでった
ボタンひと押し
跡に残るは
おおきな穴と吐瀉だけ

この節は、アメリカ中の寮生に知られた節なのだが、なぜかそれを、〈ナチ突撃隊員〉のスタイルで発声するのだ。すなわち各行の最後の音を鋭く切る。そして一拍おいて、次

18 「小唄」と訳すのは「リメリック」と呼ばれる五行定型の戯れうた。原詞は三拍子で歌うのに適しているが、日本の端歌風に翻訳した。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

の行頭に強いアタックをかけるという唱法だ。

〔リフレイン〕ヤー、ヤー、ヤー、ヤー！
プロシャじゃプッシー食べません！
小猫いっぴき、歩いちゃいない
あるのはゴミだけ、うんざりだ
露助(ラスキ)の兄さん、ワルツ踊って

酔っ払いどもが鉄の梯子からぶら下がり、キャットウォークからダラリと垂れている。長い巣窟(キャヴァーン)をビールの泡が這い、立ったり転がったりしているカーキ色のロケット部品の間を流れる。

クロケットという若え(わけ)のが
ロケット姉御とできちゃった
ハメハメするのを
見てるはいいが
下手に手をだしゃ、おおこわい

スロースロップは空腹だし喉もかわいている。四十一番の横坑が毒に染まった悪の臭気を発しているのは明らかながら、どうにかそこへ降りていってランチにありつく手立ては

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ないものか。どうやら唯一の方法は、頭上の巻揚げ機から垂れているケーブルを使うことらしい。赤ワインを口飲みしながら操作盤の前を行き来している、南部訛りの太った上等兵が「オーケー、ジャクソン、降ろしてやっぺ、WPA[19]の現場仕事で動かしかた教わったから」口髭をピンと伸ばし、キッと気を引き締めたイアン・スカッフリング、片足を結び目にかけ、もう片方は宙ぶらりんのままケーブルに乗り移る。モーターが電気のうなりをあげる。最後の鉄の手すりを放し、ケーブルにしがみついたら、足の下は五〇フィート下まで薄暗がりの空間だった。ああ・・・

ケーブルが巻き降ろされ四十一番横坑の上にぶら下がる。ずっと下でうごめく人間の頭、頭。ジョッキにわき立つビールの泡が、暗闇の松明の揺らめきのようだ――と突然モーターが止まった。スロースロップは岩のように落ちていく。オー、ファック。「まだ若すぎる！」甲高い自分の叫び声が、ラジオでしゃべるティーンエイジャーのようだが、恥ずかしいなどといってられない。下からコンクリートの床が自分めがけて猛スピードで襲ってくるのだ。型枠のマークのひとつひとつが、自分がその上にビシャッと飛び散るであろうチューリンゲンの砂岩の黒ずんだ結晶のひとつひとつがはっきり見える。体が飛び散ったら――起き上がろうにも無理だな。複雑骨折ですむ可能性はゼロだ。・・・あと一〇フィート。ここで上等兵がブレーキをかけた。上からも背後からも、狂ったような笑いが起こる。ピンと張ったケーブルが、それを握りしめるスロースロップの手の中で歌っている。その手が離れた。落ちる。そして片足をひょいと吊り上げられた恰好でぶら下がる。[20]頭の周りはビア樽に群れる陽気ないたずら者たち。彼らはこんな感じのご到着にはもう慣れっこになっているから気にも留めない。歌いつづけるばかりである。

19 [illegible]期、ローズヴェルト政権下に発足した「公共事業促進局」。

20 タロットカードの「ハングドマン」の図。A・E・ウェイトによれば、このカードの象徴的

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ヘクタってぇ名の若造が
ローンチャ＝エレクタ[21]に恋をした（けど）
ピュッときてポン
水圧低下
ヘクタのコネクタ、フニャけてしもた

若いアメリカ兵が代わりばんこに立ちあがり（立ちあがれる場合）大ジョッキ（タンカード）を差し上げて、A4またはその部品とどうやってやるかについて歌うのだ。ところで、スロースロップ自身も、歌っている当人も気づいていないが、これらの歌はまさにスロースロップに向けて歌われているのだ。逆さになった世界を落ちつかず眺め回し、脳が充血して視界のまわりが赤くなる頃、奇妙な思いがスロースロップを捕らえた――今自分の踝をつかんでいるのは、ライル・ブランドおじさんではないのかと。酔いどれパーティの縁に、そうやって堂々とぶら下がっていると、「ヘイ！」クルーカットの若いのが声を出した。「こいつ、ターザンみたいだぜ、アッハハーー！」。酔っ払って大声でわめいている兵器部隊の兵士が数人、スロースロップを引っつかもうとする。捻ったり突ついたり、しばらくしているうちにワイアの輪から足が外れた。巻揚げ機がヒュルヒュルと、さっき落ちてきた道を上がっていく。悪ふざけの操縦士のもとへ、次のカモのもとへ。

ブランドーって名の若旦那

意味は諸説あれど不明。吊るされた男は必ずしも犠牲者とはいえず、背後の木も葉が繁っており、男も恍惚とした生者の表情をして、〈神聖〉なるものを被っているかに見える。544ページには子供時代のスロースロップが逆さ吊りになったエピソードがあった。

21 ロケットを水平に運び、垂直に立てたあとは発射台として機能する「マイラーヴァーゲン」のこと。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

弾頭と浮気をしたそうな
それみて母ちゃん
出て行った、ソレ
ブランドーなんか、シランドー

ロシアの連中は無言のまま激しく酒を飲み、ブーツを引きずって歩き、眉をしかめている。もしかしたらこれらの小唄を訳そうとしているのか。ロシア人がアメリカ人滞在を黙認しているのか、それともその逆なのかは不明である。誰かがスロースロップに薬莢を押しつけた。氷のように冷たくて、脇から泡が垂れているやつ。「なんだい、イギリス人も来るなんて聞いてねえよ。まったく、いいパーティじゃねえか。帰っちゃうなよ——こいつもすぐに仲間さ」

「誰だい、そいつは」スロースロップの視界に、何千もの夜光虫がうごめいている。忘れていた足の痛みがまたチクチクいいだした。それにしてもこのビールはよく冷えてる、ホップの苦みも利いているし、外に出なくても一息つける、こりゃいいや——ゴクン、ハアア、いいねえ。顔を上げたら髭が真っ白、泡がぶつぶつ。いきなり一団の周囲から、がなり声のお囃子が始まった。「おいでなすった」「ビールを注げ」「こんちわ、少佐、ベイビー、サー」

アーパンって名の下士官が
ターピンと抱き抱きしたそうな

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

おんな抱くより
気持ちいい、いい
バーボン飲むより安あがり！

「何が始まってんの」自分の手の中に突然出現した二杯目のビールの泡ごしに、スロースロップがたずねる。
「マーヴィ少佐さ。これは少佐の送別会なんだ」〈マーヴィズ・マザーズ〉は全員今度は「あいつは陽気ないいヤツだから」[22]を歌っている。そのことはまあ、世渡りの術を心得ている人間なら誰も否定はしないだろうって、そんな印象は否定しがたい・・・
「で、少佐、どこへいくんだい」
「遠くさ」
「ここで、GE社の人間と会うんじゃなかったのか」
「会うさ。この勘定を誰がもつと思ってんの」
　地下の灯下に見るマーヴィの姿は、貨車の屋根の上で月光に照らされていたときにもましてヒドイ。ダブダブの脂肪塊、出目金の目玉、ニタリきらめく歯列、どれもここでは灰色に滲んで、映像として粗悪である。鼻梁にはスポーツ選手風絆創膏。片目を隈どる紫・黄・緑の輪っかは、あの晩、鉄道の土手を転げおちていった証しだ。送別会に集った面々と握手をし、男同士の友愛のしぐさを見せて、ロシア兵にはまた特別に気をつかっている――「あんたのそれ、ウォッカでカツ入れしてんな」といって続けざまに「ポコチン元気か？」ロシア人に通じているようすはない。彼らは薄ぼんやりと歯をむいて、イースター

22　ギネスブックによると世界中で二番目によく歌われる歌。原題は"For He's a Jolly Good Fellow"。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

エッグの目玉で見つめるばかり。スロースロップが鼻からビールの泡を吹いたそのとき、マーヴィ少佐と目が合った。相手の目が大まじめに飛び出す。

「いたぞ、そいつだ」震える指でこちらを指しながら、猛獣のような声を轟かせる。「コン畜生め、あのエゲレス野郎、捕まえるんだ。いけ、おめえら！」捕まえろって。スロースロップは、一瞬その場に突っ立って、相手の指を見続けた。ぽっちゃりキュートな脂肪の飾り書きや渦巻き模様はどんな意味を伝えようとしているのだろう。

「まあまあまあ」イアン・スカッフリングが弁解を始めようとしたときには、敵意に充ちた多数の顔がにじり寄っている。フム。・・・ってことは、そうだよ、逃げんと――最寄りの頭にビールをひっかけ、からっぽの薬莢を別な頭に振り上げて、群れの中に隙間をみつけ、そこをすり抜けていく。酔いつぶれた赤ら顔をヒョイとよけ、軍服にゲロが花綵のようにかかったビール腹を飛び越えて、ロケットの部品が散らばる中、深く掘ったクロス・トンネルの奥へと逃げこんだ。

「目ーさませ、ウスラトンカチ」マーヴィは絶叫している。「あん畜生を逃がしたら許さねえぞ！」少年の顔に白髪を生やした軍曹が、胸に抱いて眠っていた軽機関銃（グリース・ガン）をもって立ち上がり「ドイツ兵だ」と叫ぶや、ビア樽に向かって耳をつんざく音とともに45口径の弾丸が飛んで樽の下半分を破壊した。噴出する琥珀色の洪水が追っ手のアメリカ兵にうちかかり、その半数はスッテンコロリン。たっぷりリードを奪ったスロースロップは早くも坑穴の向こう端、見つけた梯子を一段とばしで這い上がる。銃声の嵐――サウンドボックスと化した坑穴にすさまじい音で反響する。マザーズ軍団の泥酔ぶりに救われたか、それとも暗がりがさいわいしたか、息を切らせたスロースロップは梯子の最上段まで登り切った。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

もう一本のメイン・トンネルに出たスロースロップは、出口めざして長い道のりを走り出す。息が続くかどうかなんて心配しているときじゃない。二〇〇フィートに満たないところで、追っ手の先頭が梯子を登りきって追ってきたのがわかった。身を翻して脇に跳びこんだ場所がちょうどペンキ室で、ドイツ国防軍のグリーンのペンキだまりの上をツッーと滑ってひっくり返ったスロースロップ、黒と白と赤の大きなペンキだまりを滑りぬけ、止まった先が一足の戦闘ブーツ。そこに立っていたのはツイードのスーツを着た、白い水牛ヒゲの老人だった。「グリュースゴット」[*23]

「あの、追っ手に殺されようとしてるんですが、どっか隠れるところとか――」

老人はウィンクし、スロースロップにその横坑へ手招きし、そこからさらにもう一本のメイン坑道へとみちびいた。途中ペンキの筋がついたオーバーオールを見つけてつかみ取ったスロースロップ、横坑を四つ過ぎて次をいきなり右に曲がると、そこは金属保管エリアである。「見てごらん」老人は笑いながらメタルの間を進んでいく。冷間圧延鋼板の青いラック、アルミニウム塊の山、三七一一番の延棒の束、一六二四、七二三。……「これは楽しくなるぞ」

「そっちじゃない、そっちからみんな来るんだ」だが妖精（エルフ）にしては大きすぎるこの老人はせっせと頭上の巻揚げ機からケーブルを垂らし、その先にモネル合金[*24]の束を引っかけている。スロースロップはかっさらってきたオーバーオールを着こみ、オールバックだった髪を前に垂らし、ポケットナイフを取りだして口ひげの両端を切りおとした。

「そんなにヒトラーそっくりの顔にしていいのかね。連中はもっと殺気立つぞ」これがドイツのユーモアってやつか。老人が名乗った。グリンプフ、ダルムシュタット工科大学

23 南ドイツ、オーストリア地方の、ごくふつうの挨拶。

24 酸化しにくく耐熱性の強い、ニッケルと銅を主成分とした合金。戦後もロケットの機体に使われた。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

数学科教授、連合政府科学アドヴァイザー云々。肩書きがしばらく続いて、「さて――こっちへ連中を引き入れよう」

そんな悠長な・・・こっちは狂った殺人鬼の手中に落ちようとしてるのに――「ここにずっと隠れていればいい。やつらがきみのことを忘れてしまうまで」だがすでに、モワンとした叫び声がトンネルを渡ってきた。「三七と三八はオール・クリアだ」「オーケー、おまえら奇数の番号を見てくれ、おれたちは偶数をチェックする」。忘れるどころか、坑道を片っ端からしらみつぶしに捜索している。もう戦争はおわった、勝手に銃をぶっぱなしてはいけないんだが・・・しかしあいつら酔ってるから・・・まずい、これは。スロースロップは顔面蒼白。

「どうしよう?」

「きみにはイディオム英語のエキスパートとして、何か連中を挑発する言葉を吐いてもらう」

メイン・トンネルに顔を突きだしたスロースロップは、自分にとって最高のイギリス・アクセントでこれを叫ぶ――「マーヴィ少佐のオフェラ野郎」

「こっちだぞ」GIブーツの飾り鋲がコンクリートを早駆けで蹴る音。それ以外のたくさんの不吉な金属音も一緒に聞こえる。

「ほれ」グリンプフ教授の目がいたずらっぽく輝いた。巻揚げ機が起動する。

スロースロップの頭の中に新鮮な考えが訪れた。もう一度顔を突きだして、「マーヴィが舐める、まっクロけのチンポ!」

「もう逃げたほうがいい」とグリンプフ。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「そりゃ惜しいな、あいつの母親の悪口、すごくいいの思いついたのに」巻揚げ機と合金棒の束をつなぐケーブルの弛みが、少しずつ減っていく。これが高く上がり、米兵軍団がちょうど駆けこんできたタイミングで、上から降ってくれたら万々歳だ。

反対側の出口から駆けだしたスロースロップとグリンプフが、トンネルの最初のカーブにさしかかる。後方からの灯りが途だえる。換気装置はうなり続けている。暗闇の中でうなり声は迫力を増す。

モネルの束がすさまじい音を立てて崩れた。スロースロップは岩壁に触れ、真暗闇の中を壁伝いに進んでいる。グリンプフ教授は、まだどこか洞穴中央の線路上だ。息も荒くない。なんと一人でクックックッと笑っている。後方からは、バタバタと追ってくる連中の騒ぎが空洞を伝わってくるが、灯りはまだこない。そのときカチンという小さな音がして、老教授が鋭く「ヒメルおお！」と言った。追っ手の叫び声が大きくなって、最初の懐中電灯の光がキラリと差す。のんびり風呂に浸かってる場合じゃないぜ——

「何なんだい？　早くしないと・・・」

「来てごらん」グリンプフは、お猿の電車のようなものとぶつかったのだ。暗闇に、その輪郭が微かに浮かび上がる——かつてはベルリンからの訪問客をこれに乗せ、工場を案内して見せた。その牽引車両にふたりよじ登って、グリンプフがスイッチをいじりまわす。

出発進行！　マーヴィが切ったのは灯りだけだったとみえる。背後で火花がバチバチしてる。今は頬に風もかかり、快調な汽車旅とあいなった。

ナチの兵隊さんも玉突きしてる

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ミッテルヴェルク・エクスプレス
おかしなファンスト将校さん
口髭ひねって、どこゆくの？
行く手に見えてこないかね
物不足も税金も
存在しない明るい国家
トンネル抜けたら素敵な未来だ
ミッテルヴェルク・エクスプレス！

グリンプフがヘッドランプのスイッチを入れた。ブーンと飛びさる横坑から軍服の人影がこちらを睨んで、汽車の過ぎさる前に一瞬、その白眼がキラリと光を返した。手を振るものもいる。へ――イと呼びかける声が、ドプラー効果で、ヘイ-エイ-イ-イとなって届く。昔ボストン・メイン線で夕べの帰宅をするとき、踏切で待つ車から聞こえたクラクションがちょうどこんな感じだったっけ。……このエクスプレス、スピードはかなりのもんだ。湿った風がヒューヒュー頬を過ぎていく。ランプの後方散乱の中に、ロケット弾頭部のシルエットが浮かぶ。機関車の引っぱる平台の貨車二台に乗っているのだ。線路脇のほとんど光が届かぬ暗がりで、小人族の住人らは逃げたり身をすくめたり。みんなこの小型列車を自分たちの所有物だと思っていて、大きな人間どもが我が物顔で乗り回すのを苦々しく思っているに違いない。梱包用の箱の山から、足をぶらぶらさせている者。暗がりで逆立ちしている者。その目が緑や赤に輝く。頭上から垂れたロープに飛びのって、グリン

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ブフとスロースロップにカミカゼ特攻隊もどきの攻撃を加えようとしている者さえいる。その「バンザーイ、バンザーイ」が笑い声に変わって消えていく。すべては遊び、みんなすごく人好きのするやつら――

と、すぐ後ろでメガフォンを通したようなダミ声の大合唱――

蓄電池(バッテリー)に目のないスラッテリーってのが

「オー・シット」不意を衝かれたスロースロップが罵った。

やった相手がコースジャイロ・バッテリー[25]
五〇ボルトに
ビリビリしたあと
お股ぐんにゃり、ベットリー

ヤー、ヤー、ヤー、ヤー！
プロシャじゃプッシー食べません！［以下同文］

「後ろへ行って、あの貨車を切り離せるか？」グリンプフが尋ねる。
「はあ、なんとか……」とは答えたものの、何時間もまごまごしそうだ。その間にも――

25 飛行進路を一定に保つためのジャイロスコープ用蓄電池。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

波乗り好きの　ボーブってのが
ネンネした相手がオシロスコープ
ゆらりふんわり
直流交流
絶頂曲線、急勾配のキュ！

「やったぞ機関士」グリンプフがポツリ。貨車を切り離した機関車はぐっとスピードを上げる。軍服の襟先、袖口、バックル、ベルト、すべてを風が引きちぎっていくかのようだ。後方から岩盤に金属がぶつかる大音響。暗闇でわめく男たちの声。
「あれで始末がついたろうか」
そういうわけにもいかないようだ。軍団はすぐに態勢を立てなおし、今度はパートにわかれ、

流体好きのユーリってのが
つっこみました、ベンチュリ管＊26
ガラス、キュイっと
すぼんだところが
気持ちいい、いい、センズリ管

「オーイ、ゲーイ、野郎ども、燐光トーチを持ったか？」

26　管の途中が一部細くなったガラス製などの管で、太さの異なる部分の圧力の違いから流量が測定できる。

「スタンバイ！」

警告はそれだけ。ガーンと目のくらむ衝撃をともなって〈白燐弾〉が炸裂する。トンネル内ぶたちまち白光の洪水が起こり、一、二分の間は誰ひとり、なにひとつ見えない。驚愕の白い闇をまっしぐらにつき進むだけだ。熱くはない、白いだけの光。見えない世界を慣性だけで疾走する。スロースロップにはこれが恐ろしく懐かしく感じられるのだ。自己の中心に――いつも避けていた、記憶するかぎり面と向かったことはない――彼自身の時の趨勢（モーメンタム）そのものに、いま初めて肉迫している。こまごまとした顔や事実のいっさいが取りはらわれ、彼と〈ロケット〉との一対一の契約だけが浮かび上がる。カモフラージュも目くらましもないホワイトな瞬間。空しくもやたらに袖を引っぱるもの――重要なのだ……見てくれ……わたしらを……だがすでに時おそし、声はただの風に変わり、g荷重[27]がのしかかるだけ。彼の目玉の充血にふれた白さは象牙色にくすみはじめ、金色の筋を生じ、網状のエッジを生じ、だんだんと割れた岩に変じていた。彼をすくい上げた手はふたたび彼を降ろしたのだ、さっきと同じミッテルヴェルケに――

「やったあ、さっきのあん畜生、みつけたぞーい」

白燐光の中から、ディーゼル機関車が現われた。ピストルの弾の容易に届くところだ。スロースロップが切り離した二台の貨車を後ろから押している。機関車の中に詰まっている、充血した目、モジャモジャの髪、ふくれた体。それらの米兵の肩に斜めになって担がれているのが、マーヴィ少佐御大である。でかいステットソン・ハット[28]をかぶり、左右の手に二丁の45口径自動拳銃を構えている。

スロースロップは牽引車後方のシリンダーの陰にまわって頭を引っこめた。マーヴィが

27 （加速度による荷重のない）重力による重み。

28 カウボーイ・ハットの代名詞となったブランド。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

拳銃のめくら撃ちを始める、兵士らの醜悪な笑い声に後押しされて。スロースロップはそのとき気づいた。自分が身を晒したこれ、これもまたもう一個のロケット弾頭であるようだ。この中に、もしまだアマトールが入っていたら[29]——ねえ教授、この距離で45口径の弾丸が当たったら、その衝撃波で、この弾頭が爆発しますかね、外側に当たっただけで。ヒューズが装備されていなくても？ それはタイロン君、単純にいえることではないな。弾丸の初速、外壁の厚さや組成——

マーヴィの乱射する銃弾がバギュン・ガキンとトンネルの全域に跳ねかえるその中を、グスロースロップは、引きつる腕と脱腸になりそうな腰を頼りに、弾頭をエイヤと傾け、グラリ動かし線路脇へ落とした。それは一度弾んで、一本のレールを斜めにクロスするように止まった。でかした。

燐光は引きはじめ、横坑の入り口にふたたび影が集まる。マーヴィの乗った前の車輌が恐ろしい音を立てて障害物と衝突。逆V字に折れ曲がり、ディーゼル機関車はあわててガギガギとブレーキを効かせるけれども脱線し、ズジズジと滑走してグラリ傾く。狂乱した米兵たちは必死になって手すりに、お互いに、空気につかみかかる。スロースロップとグリンプフが積分記号の最後のカーブを曲がったところで、背後からもう一回、壮絶な衝突音がした。金切り声が長々とこだまする。とそのとき、トンネルの出口が見えた。緑の山の斜面、降り注ぐ陽光を縁どる放物線がだんだん大きくなる。

「きみは車で来たのかね」眼をきらめかせ、グリンプフが尋ねる。

「えっ？」スロースロップは、乗ってきたベンツにキーが差したままだったことを思いだした。「ソウダ——」

29 V2ロケットの弾頭はおよそ一トンのアマトール爆薬を搭載していた。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

グリンプフがゆるやかにブレーキをかける。パラボラの下を通り、日射しの中で、なかなかスムーズで堂に入った停車である。ふたりはB中隊の歩哨に敬礼し、そのまま進んでベンツをいただく。それは、あの若い中尉が乗り捨てたままの位置にあった。

道路に出るとグリンプフは、スロースロップの運転ぶりを用心深くうかがいながら、北を指さした。ハルツ山地へのクネクネ道を、山陰から出たり入ったり、松や樅の木の香りに包まれながら、カーブをキーキー、ときどき危うく転落しそうになりながら登っていく。スロースロップは、道路状況に対していつも間違ったギアに入れる天賦の才があるうえ、追っ手のことが気になって、目玉はバックミラーか、さもなくば背中の側に行きっぱなしだ。頭の中は、後ろから強力エンジンを搭載した兵員輸送車や轟音を鳴り響かせるサンダーボルトの戦隊のイメージで充ちている。見通しのきかない角を曲がるのに、舗装された道幅をいっぱいに使う——それってロードレーサーのテクでしょうよ——のだが、折しも坂を下ってきた米軍二トン半トラックと鉢合わせしたときは危うかった。接触寸前のすれ違いざまに、向こうの運転手の口からFucking idiot（クソバカタレ）の文字が現れるのがほとんど見えそう。喉元の近くで心臓がバクバクし、トラックの後輪が翼状に飛ばした泥が、バサリと落ちて車を揺らし、フロントグラスの半分を覆う。

太陽がだいぶ西に動いたころ、車はようやく森に囲まれたドーム状の山のふもとに止まる。その頂上は荒れはてた小さな城。数百羽の鳩が止まり、狭間胸壁から無数の白い涙の跡ができている。緑の森の息吹きがくっきり感じられる。肌寒さが増してきた。

岩がごろごろしているジグザグの山道を上り、生い茂るモミの木の間を抜け、日に照らされた城へと向かう。ぎざぎざに尖った茶色の城は、鳥たちが何世代にもわたってついば

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

み続ける大きなパンの塊のようだ。

「ここで暮らしてるんですか？」

「昔の仕事場だ。ツヴィッターはまだいるのではなかろうか」ミッテルヴェルケの坑内では、細かな組立作業までやるスペースがなく、主に制御システムを組み立てた。細かな仕事は、ノルトハウゼン一帯のビアホール、店舗、学校、城、農家、その他指導者らが屋内ラボとして使えると判断したあらゆる場所で行われた。グリンプフの同僚、ツヴィッターはミュンヘン工科大学出身。[30]「バイエルン流儀の電子工学さ」と、グリンプフは眉をしかめる。「ツヴィッターの場合は、まあ、我慢できる程度だがね」バイエルン流儀の電子工学からいかなる秘匿の不正がはびこっていくというのか。残りの道を上っていく間、教授の目のきらめきが失われ、憂慮にふけるかのような不機嫌な表情が続いた。

城の側門をくぐるふたりを、ほとんど液状に凝集した鳩の声、白い羽毛に覆われた湿った鳴き声が出迎える。床は汚れ、埃や紙屑が散乱している。紙屑の中には、GEHEIME KOMMANDOSACHE[31]という赤紫のスタンプが読めるものもある。破れた窓から鳥たちが出入りしている。浸食の進む建物の裂け目から細い光線が差しこんでいる。埃の微粒子は、鳩の翼にあおられ、波の逆巻く動きをやめない。壁には、フリードリヒ大王のような大きな白い髪型の貴族の肖像画。つるりとした肌、楕円形の眼。貴婦人たちの、胸元の大きくあいた絹のドレスが拡がりおちて、部屋部屋の暗がりに舞う埃と翼の音に紛れている。そして、いたるところ、鳩の糞。

うってかわって上階のツヴィッターのラボは照明も明るく、秩序づけられ、さまざまなガラスの容器、仕事机、多色の光、斑点のついた箱類、緑色のフォルダーがギッチリ。ま

30 フランツ・ベクラーとクルト・モンダウゲンも同じ大学の出身。

31 極秘指令文書。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

さにナチのマッド・サイエンティストの仕事場だ。おーい、プラスチックマンはどこだ？
　ここにはツヴィッターただひとり。がっしりした体格、黒髪をまん中で分け、眼鏡のレンズは潜水球の丸窓のようにぶ厚い。その眼鏡から覗いた世界は、どんな数式の海なのだろう。どんな蛍光性のヒドラとウナギとエイがくねっているのだろう。
　だがスロースロップが現れると、彼らは一切を遮蔽した。ガラスの覆いをかぶせたように。ふむ、T・S、[32]こりゃいったいなんなの？　この男たちは誰なのだ？　グリンプフの陽気なリンゴの頬はどこへいった？　ガルミッシュのフェンス[33]のこちら側で、ナチのロケット制御専門家が、戦時中の姿のままのラボの中で、いったい何をしてるんだ？

ほうら、出てきた——
机の間からナチ党員
壁の中からファシスト党員
出っ歯のジャップも飛び出した
大戦おわった、こんつぎは
日独イタ公、味方につけて
露助野郎をぶっとばせ
第三ラウンド、ゴングが鳴るぞ

32　タイロン・スロースロップ＝タフ・シット。545ページ参照。

33　戦後引かれ直した、オーストリアとの国境。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

□□□□□□□

ロケットのフィーダー・システム[*1]に関する諸数値について白人エンジニアが議論を重ねていた頃、そのうちの一人がプライヒェレーデ[*2]のエンツィアンのところへ来て言った。

「チェンバーの圧力が定まりません。計算から導きだすと、40工学気圧[*3]が一番望ましいことになるのですが、実験データを確認してみますと、どうも10工学気圧あたりのところに良い結果が集中してるんです」

「それなら明らかに、そのデータのいうことをきかなくてはなるまい」とングアロレルエが答えた。

「でも、それだと最も完全な、有効な数値ではないものになります」と、ドイツ人技師は納得しない。

「技師よ、奢ってはならない」ングアロレルエがいった。「実験データとは何か。それこそ、現れるべきロケットが直接示した啓示ではないか。紙の上で計算した数値を〈ロケット〉本体の数値と引き比べるとは、それだけでも傲慢だぞ。プライドを捨て、妥協した値にもとづいて設計しなさい」

スティーヴ・エデルマン編『シュヴァルツコマンド——説話集』

1 推進チェンバーに燃料を送りこむシステム。

2 ノルトハウゼンの西南西約十五キロにある町。

3 「1工学気圧」とは1平方センチ当たり1kg重の圧力。通常の「1気圧」よりやや小さい値。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ノルトハウゼンとブライヒェレーデ周辺の山中、廃棄された立坑の下に〈黒の軍団（シュヴァルツコマンド）〉が住んでいる。これはもはや軍団名ではなく、ひとつの民族名である。彼らが南西アフリカから亡命してきた、二世代にわたる〈ゾーン・ヘレロ〉だ。まずは初期のライン伝道団によって、絶滅の運命にあるとされる人種のサンプルとしてメトロポリスへ、大きな退屈な動物園へ、連れてこられ、それとなく実験材料にされた。大聖堂やヴァーグナーの夕べに連れていかれ、イエーガーの下着[4]を着せられ、そうやってドイツ魂への関心を喚起できるか試された。中には、一九〇四年から一九〇六年のヘレロ族大蜂起の平定に向かった軍人兵士が、召し使いとして連れ帰った者もいる。だが彼らを統帥する力が生まれたのは一九三三年以降のことだ。けっして公にはされなかったが、ナチ党は、暗黒アフリカにおける英仏植民地の転覆を狙い、黒人による革命政権（マグレブ地方に打ち立てる計画でいた形態のもの）の樹立を画策していたのだ[5]。「南西アフリカ」は、当時南ア連邦の保護領となっていたが、実権を握っていたのは旧ドイツ植民者の一族で、彼らも協力的であった。

　ノルトハウゼンとブライヒェレーデの近くには彼らの地下共同体がいくつもある。それらをひとまとめにして「土豚穴（エルトシュヴァインヘーレ）」[6]と呼ぶ。ヘレロ族の人びとにとっては、苦いジョークだ。彼らの中でももっとも貧しい、自分の家畜や村を持たぬ人びとは「オヴァトジンバ」と呼ばれ、「ツチブタ」を霊族動物（トーテム）としていた。彼らはみずからの名をトーテムであるツチブタの名からとり、その肉は決して食さず、ちょうどツチブタがやるように地面を掘って食物を得た。そして放浪者と見なされ、草原（ヴェルト）の空の下に住んだ。かつて夜汽車からよく、ライフルの銃弾の届かぬ距離に、風にめげず焚き火の炎を堂々たる高さに上げてい

4 ウール地の上下一体型、尻のところがめくれる構造になっている。

5 マグレブは、リビア、チュニジア、アルジェリアを含む。ヒトラーは、ロンメル将軍のドイツ・アフリカ軍が勝利したら、この地に駐屯基地を置いて、旧独領南西アフリカを最奪取する計画だった。

6 原語はドイツ語で、Erdschweinhöhle。英語の earth と swine と hole に当たる言葉が連結している。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

る彼らの姿が見られた。あの空漠の中で、彼らに場を与える力は、それ以外にはなかったのだ。きみたち白人入植者は、彼らが何を恐れたか——何を望んだかでも、何につき動かされていたかでもなく——知っていたし、きみたち自身、奥地の鉱山に仕事があったから、やがて焚き火が見えなくなれば、もうそれ以上彼らのことを思う必要もなかった・・・

だが列車がカーブを描いて去っていこうとした瞬間、チラリと見えた、あれは誰だったんだ。地面の穴に肩まで埋まっていた。いわば大地に植えつけられた女の頭が、一面の平面を見つめていた。後ろの遠景には山々の斜面がせり上がり、日暮れた後は黒々と折り重なる。女には腹の上にかかる、とてつもない圧力が感じられる。何マイルもの水平の砂と粘土。小径を行った先には、生きてこの世に生みだせなかった四人の子供の薄光りした霊が待っている。野生種のタマネギの間を、満たされようもなくうごめく四匹の太った芋虫。小さな霊たちが代わりばんこに夜泣きする。村の瓢箪の中から祝福されつつ飲んだのよりもっと神聖なミルクを求める。棄民たちの回線を通して母親に、潜るべき場所を指示したのはその子らだ。いま女はすべての門を通してパワーの滋養を感じている。太腿の間から川が流れ込み、手足の指先から光が跳ねている。眠りと同じように、それは、その温もりは、力を授けてくれる。昼の残光が失せていくにつれ、女はますます——暗闇に、空気から降り下る水のしたたりに——身を委ねる。そして大地の種となる。聖なるツチブタが彼女の寝床を掘ったのだ。

南西アフリカで〈土豚穴〉は豊穣と生の強力なシンボルだった。だがここ〈ゾーン〉において、現実にどれほどの地位を得ているのかは明らかでない。

現在〈シュヴァルツコマンド〉内部には、不妊と死を選択した勢力がある。闘争はほと

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

んどが沈黙のうちに起こる——夜間、妊娠と流産に伴う吐き気や痙攣とともに。だがそれも政治闘争に変わりはなく、そのことを誰よりも悩ましく思っているのがエンツィアンだった。エンツィアンはここの〈ングアロレルエ〉である。その意味は「リーダー」とは少し違う。むしろ証明された者、折り紙つきの者という意味合いだ。

エンツィアンはまた、面と向かって口にする者はないにせよ、Otyikondo すなわち「混血者」として知られている。父親はヨーロッパ人だった。もっとも〈土豚穴〉に住む人間のうち彼一人が混血だったわけではない。ここにはすでにドイツ、スラヴ、ジプシーの血が混じっている。過去二世代、帝政期[7]以前には考えられないような加速力に彼らは動かされてきた。その結果獲得しつつある新しいアイデンティティが、最終的にどういう形に落ちつくか、ほとんど誰も見通せていない。〈ロケット〉は最終的な形態をもつだろうが、ロケットに帰属する人間は違う。エアンダ[8]もオルゾも、こちらにきてからは力を失ってしまった。母方も父方も、血統は南西アフリカの地に残された。初期の移民たちの中には、故郷を去るだいぶ前に、ライン宣教師協会の教えの道に入ってしまった者も多い。それぞれの村で、燃え上がるような日光が、影法師を本人にピタリと寄せる真昼どき、その恐怖と避難のときに、族長は聖なる袋から、信仰が失われた者の革紐を取りだし、生まれたときにゆわえた結び目を解く。キリスト教への改宗者が出るたびにこれをやる。結び目の解かれた紐は、部族にとって死んだ魂だ。だから〈ゾーン〉の〈空無派〉は、各自一本、結び目のない革紐を持ち歩いている。この過去のシンボリズムを彼らは有用だと考えたのだ。

彼らはみずからを Otukungurua と呼ぶ。えっ？ Omakungurua の間違いだろうって？

7 ドイツ帝国が存在したのは普仏戦争後の一八七一年から、第一次大戦に敗北しドイツ革命によりヴァイマル共和国が成立した一九一八年まで。

8 [illegible] はヘレロ族の母方の系譜、[illegible] は父方の系譜。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

いやいや、年配のアフリカの労働者のみなさん、oma- というヘレロ語の接頭辞は、生きてる人間にしか使わないでしょ。無機物や死者の国からきた者をいうには、otu- が正解。彼らは自分らを「カラッポの者」ではなくて「カラッポの物」と呼ぶ[※9]──この徹底した周到さは、抜け目がないというよりは薄気味わるい。「ゼロの革命家」として、彼らは、一九〇四年の反乱[※10]が失敗したあと、ヘレロの老人たちが始めたことの継続を誓った。出生率をマイナスにする。民族の自殺プログラムを実施する。一九〇四年にドイツ人が始めた「根絶」の完遂を。

その一世代前、ヘレロ族で無事に生まれる赤ん坊の数が減少して、それがアフリカ南部一帯に医学的な関心を呼んだ。白人たちは、牛疫(リンダーペスト)の流行で減っていく牛を見るかのような、残念そうな目つきで彼らを見た。[※11]せっかく飼い慣らした土人が、毎年毎年減っていってしまうのを見ているのは、実にむかつくことだ。土人のいない植民地など何だというのだ。みんな死んでいってしまったら面白みが失せてしまう。でかい砂漠がもっこり一個あるだけで、メイドもいない、戸外で働くクロンボもいない、鉱石を掘ろうにもその労働力が──おっと、そこを行くのは、カール・マルクスだろ、カチンと歯を閉じ、眉つりあげて、トコトコ駆けていくのは、あの狡猾な老レイシストだろ。植民地とは安価な労働力の提供の場にして、海外の市場となる‥‥ってなことをほざいた男。‥‥違うね、違いますとも。植民地がそれだけのもんであるはずがない。いいかい、植民地とは、ヨーロピアン・ソウルが作った野外便所なんだ。ズボン下ろしてリラックスして、てめえの糞の臭いを心ゆくまで満喫するところさ。ほっそり痩せた餌食の女にウォーと吠えて、ガブッとやって、ニンマリしながら生血をズルズルすする。体中がアソコん中の闇色してて、頭のへ

9 カバラの教義にある前出の「クリッフォト」とも響き合う、非ヘレロ的というべき概念。

10 一八四二年にライン宣教師協会の宣教師が到着して以来、南西アフリカは、鉱山資源を目当てにした植民が進んでいた。一八八〇年代、〝鉄血宰相〟ビスマルクは、「ズュートヴェスト(南西)アフリカ」をドイツ保護領と宣言し、他部族が並存するこの地域に、単一の傀儡政権をつくるべく、ヘレロの族長のひとりサミュエル・マハレロを擁立した。ところがそのマハレロが一九〇四年、反乱を起こした。このとき鎮圧軍のフォン・トロータ将軍が「根絶命令」を出し、セツルメン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

アまで陰毛みたいにモジョモジョの、泥のように柔らかーな肢体の中にウヒャウヒャ言って飛びこんで、好色と淫乱のかぎりをつくすところ。ケシと大麻とコカの木が、うっとりするような緑色してバンバン生えてくるところ。これが植民地ってとこなんだ。ヨーロッパに生育するのはどういう植物だね。麦角とハラタケ。葉を枯らす菌と、日陰にジメジメ生えるキノコじゃないか。色もスタイルも、死を表現してる。キリスト教のヨーロッパってのはいつも死であったのさ、マルクスさんよ。死と抑圧の二本立て。それが、遠くの植民地に出かけていきゃ、思いきり生に耽ってかまわない。快楽のすべてをハメを外して楽しんで、それでメトロポリスに害はないんだ。大聖堂も白い大理石の女神像も、高貴な思想も汚されない。……ひとつの言葉も本国に届きはしない、何をしても、どんなに汚い、陰獣の行為に耽っても、みんな南の国の巨大な静寂が吸いとってくれるんだって……

　医学にかかわる合理的な考えの持ち主には、ヘレロ族の出生数の減少の原因を、ビタミンEの不足に帰したり、ヘレロの女の子宮がとても細長くて受胎の確率が低いことを指摘する者がいた。だがそんな理性の言葉を繰りだし、科学的憶測をめぐらせても、心の底に消えずに残る不気味さを言葉にすることができたアフリカーナ[12]はひとりもいなかった。……この地方の草原(ヴェルト)には何か気持ち悪いものがただよっている。白人は、土人の、特に女の顔を見るようになった。茨の柵越しに並んだ彼女らの顔を見ると、論理的には証明されなくても、あるひとつのことが判然としてくるのだった。ここには〈部族の心〉というのがあって、そいつが自殺を決意した。……しかしなぜだ。わからんな。そりゃ、われわれのやり方も、最高にフェアなものではなかったろう。彼らの土地と家畜を奪ったといえばいえる……もちろんワークキャンプで労働もさせているし、寝泊まりする場所も柵と有刺

トの外で見つかったすべてのヘレロ族を即時射殺する許可を与えた。帝国主義の歴史の中でも悪名高いエピソードである。

11　一八九七年に始まった牛疫の大流行でヘレロ族の経済の命綱だった牛の九割が死に、原住民人口の著しい減少をもたらした。ドイツの支配層が自分たちの牛を守るだけで、原住民を事実上見殺しにしたことも、〇四年の反乱の背景となった。

12　南アフリカ地方のオランダ系白人。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

鉄線の中だ。……ひょっとして、こんな世界にもう生きていたくないと思ったんだろうか。なんとまあしかし、クロンボらしいことよな。簡単にあきらめてゾロゾロ死んでいくとは……交渉しにくることくらい、したらどうなんだ。そうすりゃ、われわれだって、策を考えないわけではないのにな。どんな答えになるかはしらんが……

〈ヘレロ〉の人間たちにしてみれば単純な話だったのだ。部族の死と、キリスト教の教える死のうち、どちらを選ぶか。部族の死は意味をなすが、キリスト教の死はまったく意味をなさなかった——死ぬだけのことに、なぜ罪だの贖いだのを持ち出さなくてはならないのか。だが〈おさな児イエス信用許状〉にひっかかったヨーロッパ人は、その単純な理屈がわからず、〈ヘレロ〉の単純な死に、まるで象の墓場や、集団で海に飛びこむレミングを見るかのような神秘を感じたのだった。

自分たちは認めなかったが、いまは故国を去って〈ゾーン〉にある〈空無派〉のものたちも、部族としてのまとまりから引き剝がされ、欧化された言語と思考に取りこまれていて、「なぜ」なのかは、神秘でしかなかった。それでも、病身の女がお護りを握りしめるように、彼らは決意を握りしめていた。円環についても回帰についても考慮することなく、民族全体がひとつになって亡びゆくというそのストイックな英雄的ポーズに、彼らは恋した。〈空無派〉の連中たちは自殺の美徳を語る預言者だ。堕胎と不妊術のスペシャリストにして、口淫と肛門、手指と足指、同性と動物相手の性行為の宣伝マン——彼ら快楽主義者のアプローチをとる。その客寄せ口上は巧妙で、〈土豚穴〉の連中は彼らの唱えることに耳を貸している。

ゾーン・ヘレロが最後のひとりまで死に絶え、民族のその歴史を完了してカラッポにな

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

る〈最終のゼロ〉の日の到来を〈空無派〉たちは請け合う。この言説は魅力的だ。ふたつの陣営が目に見えるところで権力を争うわけではない。すべては誘引の問題、どっちの引きが強いかで決まる。広告の勝負、ポルノグラフィーの原理だ。ゾーン・ヘレロの歴史が、ベッドの中で決められようとしている。

夜の地下で、すべてのヴェクトルは中心から逸れようとする。中心とは力であり、〈ロケット〉こそ、その力であるように思われる。〈ロケット〉とは——旅と呼んでもいいし運命と呼んでもいいが——なんらかの機械との合一化（イマシネーション）の進行にほかならない。それは、激しく対立しあう同士を、〈土豚穴（エルトシュヴァインヘーレ）〉の中で、ひとつに制御することを可能にする。ちょうど、その推進チェンバーに燃料と酸化剤を集めて激しく交わらせつつも、計測と操舵によって、期待通りの放物線が描かれるように。

今宵エンツィアンは、住処となした山の下に座している。今日もまた企画と促進、新たに生みだされた紙を図面に描く一日だった。誕生した形を彼は壊す、さもなくば日本の折り紙のように折りたたむ。一日が終わるころには、羚羊（ガゼル）や蘭の花、獲物を狙う鷹の形が並んでいる。〈ロケット〉が次第に作動する形と十全さをまとっていくのに応じて、彼自身も進化し、新たな形をまとっていくのが感じられる。それがまた、彼の心配の種なのだ。昨夜は遅くまで青写真を見ていたクリスティアンとミーツィスラフが顔をあげ、突然ニコリとして黙りこんだ。その表情にはあけすけな敬意があった。ふたりは設計図を、まるでエンツィアン自身のものであるかのように、まるで天啓であるかのように見つめていた。エンツィアンにとってそれは喜ばしいことではない。

エンツィアンが創造を目ざしているものに歴史はない。デザインの変更を必要としない

もの。時間というものが――他の国々で知られているものとしての時間は――この新しき世界の内側では消えさるだろう。〈土豚穴〉は時間に拘束されない。〈ロケット〉も同様だ。人はふたたび〈中心〉を見いだす。タイムレスな〈中心〉を、ヒステリシス[13]のない旅を。そこからの出発が同時にそこへの帰還となるような、唯一絶対の中心を。

この思考によってエンツィアンは、〈空無派〉、とりわけ、ハノーファーのヨーゼフ・オムビンディとの奇妙な和解を保っている。〈永遠の中心〉は、彼らの〈最終のゼロ〉に置きかえることもたやすくできるのだ。名前や方法は違っても、静止へと向かう運動性は同じである。このことが、ふたりの男の間に奇妙な議論を飛び交わせた。「いいですか」オムビンディは目を逸らし、自分にしか見えない鏡の中のエンツィアンに向かって、「誰もふつうは……エロティックとは思わないんだが、ほんとうは、この世で最高にエロティックなものがあるんだ」

「ほんとうかい」エンツィアンは戯れモードでニヤニヤしている。「そいつって何だろうな。ヒントをくれよ」

「まずそいつは繰り返しがきかない」

「ロケットの発射かな？」

「違う。ロケットには次がある。だが、こちらは――いや、やめとこう」

「わかったぞ、次はない、と言おうとしたんだな」

「もうひとつ、ヒントをあげましょうかね」

「どうぞ」だがすでに、エンツィアンには察しがついていた。あごに手のひらをやり、笑いがこぼれそうになっているのを見ればそれはわかる……

13 過去に受けたりに左右される心の状態

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

「そのひとつの行為の中に、すべて常規の〈逸脱（ディヴィエーション）〉を含むもの」。なんとも不愉快な言い方であって、エンツィアンはため息をつくが、〈逸脱〉という言葉を使ったことを咎めたりはしない。過去を持ちだすことは、オムビンディの演じるゲームの常套作戦なのだ。
「たとえば、ホモセクシュアリティ」これを言われても平然としたまま。「サディズムと同時にマゾヒズム。オナニズムもだろう。屍姦・・・」
「それ全部をひとつの行為の中でやるのか？」
それで全部ではない。他のこともだ。ふたりともすでにわかっている。民族の自己抹殺の話をしているのだ。だからこの中には、獣姦も（「どれだけ甘美だろう」——宣伝文句はうたう、「傷つき鳴いている動物を性的に慰撫する慈愛の心は」）、小児性愛も（「子供にふれただけで若さの輝きが増したという報告例がこんなに」）、レズビアニズムも（「そう、もぬけの小部屋を風が吹きぬけるころ、女の影がふたつ、死につつあるシェルの小室（チェンバー）を抜けだし、灰に包まれた最後の岸辺で出逢い、そして抱き合う・・・」）、嗜糞症と嗜尿症も（「さいごの痙攣・・・」）、フェティシズムも（「死体フェチの広い嗜好へも、もちろん、すべてに・・・」）もちろん、とね。ふたりはそこに腰をおろし、煙草を指に挟んでいられなくなるまで飲み回す。これはただの駄弁なのか、それともオムビンディはマジにエンツィアンに圧力をかけているのか？ それがわからないと、エンツィアンも次の手に出られない。もしここで「おまえ、本気でおれを・・・」と切りだして、ただの冗談だったとしたら——だが、もしその通りだったら、エンツィアンは本当に奇妙なものを売りこまれていることになる——

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

《ソールド・オン・スーィサイド——自殺にハマって》

食い物なんかぁうんざりだ
ブギウギ・ビート我慢ならん
けど、自殺にゃ、グーッときた！

B・クロスビーも、ほしけりゃ持ってけ
ブーブブ歌うの、聞いてられん
胸に迫るなぁ、自殺だけ！

ああ！　配給スタンプもいらないぜ
ベビー・ヴァンプ[14]上がりの母ちゃんも
俺のほしいの、スーィサイド！

くたばれカーズもブラウンズも[15]
故郷の街に、ションベンかけろ

俺はSOSなんだ、と、この調子で、何番も何番も続いていくのだ。歌詞全体を見ると、この歌は、この世の事物を片っ端から拒絶していく歌になっている。だがそれで世界を拒絶し尽くせるのかといえば、ゲーデルの定理[16]により、リストから漏れるものが必ず生じる。その欠落を頭で考えて埋めるのは、ほとんど不可能だ。で、どうするかというと、

14　子供っぽいふるまいで性的に戯れる娘。「ジャズエイジ」を描いた、スコット・フィッツジェラルドの小説で使われた言葉。

15　かつてセントルイスには「カーディナルズ」（略称「カーズ」）の他、後にボルティモアに売られて「オリオールズ」となった「ブラウンズ」があり、一九四四年のワールドシリーズは同じ都市の両チームの対戦となった。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

もう一度はじめからシラミつぶしにやっていく。間違いを直し、ダブリを削除し、きっと思い浮かぶだろう新しいネタを挿入——ってことをやっていると、題名にある「自殺」は際限なく繰り延べになる!

というわけで、近頃オムビンディとエンツィアンの間には、一連の売り込み言葉(コマーシャル・メッセージ)が交わされるという展開。別にエンツィアンがお客さんになっているわけではない。どちらかというと、気の進まぬままサクラを演じている共謀者といった感じだ。最後までつきあう意志はあっても、ちゃんと聞いているかどうかはわからない。

「あっ、ングアロレルエ、ペニスがデカくなってません?……いや、それって、むかし……南西アフリカで愛したお方のことを思ってるだけなのかな」 部族の過去を消散させてしまうには、すべての記憶を公的な記録にしてしまうに限る。〈最終のゼロ〉を待ち望んでいるときに、歴史を保存しようとしても仕方ないのだ。……だが、オムビンディはシニカルにも、この考えを、部族の団結(トライバル・ユニティ)という古い名において説教した。その点が、「売り」という点では弱みだ。まるでキリスト教の厄災を受けなかったような言い草になってしまう。オムビンディのやつ、何を隠蔽しようとしているんだ、われわれ全員、キリスト教に感染してしまったじゃないか、そのために命を落とした者もいるじゃないか。たしかにちょっとハッタリ(ジャイヴ)っぽい。人から聞いただけで、自身まともに信じていないことを持ちだすというのは——対立項を集めて純化するとか、村がひとつのマンダラであるとか。[*16] ……それでも彼は訴えてやまない、ひとつの聖杯イメージをふれ回っている。その聖杯の光輝な像が部屋を通りすぎるかたわらで、円卓の周りのおふざけ者たちは、探求者がすわろうとした尻の下、その〈命取りの座〉[*17]にブーブー・クッションを差しいれる。聖杯もこのごろ

16 本小説の主要情報源の一冊、ヘンドリック・ルティヒ『ヘレロ族の宗教体系と社会構造』(オランダ、ライデン大学に受理された一九三三年の博士論文)の第三章で、ヘレロの村が図解されている。円形に小屋を並べた中心に、「聖なる牛」の柵があり、村の入口は北、チーフの小屋は東にある。

17 アーサー王伝説で円卓に設けられた空席。聖杯を見いだせぬ者が腰かけると死ぬことになる。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

では、プラスチック製のやつが、一ダース十セントとか、一グロス一セントとかの値で売られているというのに。それでもオムビンディは自分をだましつづけるのか。キリスト教以前にこの地球にあった〈ひとつなるもの〉、その最後に残ったいくつかのひとつに自分が住み揃ったからといって、その無垢なる時を讃え、その再来を予言するというのでは、まるでキリスト教徒と同じじゃないか――「チベットは特殊なケースさ。[18] チベットに関しては、〈帝国〉が自由中立地帯として選りすぐり、峻別した。いわば〝精神のスイス〟として、そこに逃げこむ者については引き渡しを要求しないことにした。アルプス－ヒマラヤの高みでは、魂は空へ導かれる。そのくらい許容しても下界に危険はないっていう判断だ。……そう、スイスとチベットは地球の真の子午線で繋がっている。むかしの中国人が人体に引いた子午線すなわち経絡と同様のリアルなつらなりを地球ももっているんだ。……我らも地球の新地図を学ばねばならない。……内奥への旅がごくふつうになっていくにつれ、そして地図が別の次元を加えてゆくにつれ、我ら自身も同様の変化を……」さらに彼は、ゴンドワナ大陸についても話した。かつてアルゼンチンが南西アフリカに身と身を寄せ合っていた、大陸が遊離漂流をはじめる前の〈ひとつなるもの〉。……皆は耳を傾け、やがて、洞窟へ、ベッドへ、家族のヒョウタンの所へ散ってゆく。ヒョウタンの中のミルクは、神にも捧げられず、まさに北方的な白さ、冷たさのまま人びとの口の中へ流れこむ……

そんな次第で、このふたりの間では、日々の挨拶が交わされるだけのときも火花が散る。互いの弾頭に意味が満載され、願わくば相手の思考を爆破せんと。エンツィアンは、自分が、名前ゆえに現に使われているのを知っている。彼の名前にはいくばくかの呪文の力が

18 清朝崩壊に伴うダライ・ラマの帰還（一九一二）から中華人民共和国による制圧（一九五〇）まで、チベットは他国とほとんど交わることなく事実上の独立を得ていた。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ある、だが彼は、ふれることができなかった。あまりに長いこと、ニュートラルでいたため……すべては流失し名前だけが、エンツィアンという音が、唱えるべき名前だけが残った[19]。残った名前に、何かひとつだけでも、叶うべきときに叶える力が残っていてほしいと彼は思う。〈中心〉はまだまだ遠くても。……ひとつの民族に拭いがたく居残る習慣、伝統や祈禱、それは落とし穴でなくてなんだろう？　キリスト教は、いつもそれらを性的呪物のように使って、我らを誘引してきたではないか。我らの最初期の幼児愛を想起させるものとして。……彼の名「エンツィアン」に彼らのパワーを打ち破ることができるか？彼の名前に勝利はありえるのか？

〈土豚穴〉は最悪の罠の中にある——言葉の対立止揚が具肉化し、その「肉」が、なにやら別のものへ向かって動いている。……エンツィアンには落とし穴がはっきり見えるのだが、そこからの出口は見ていない。……点火したばかりの一対の蠟燭の間にすわった彼は、グレイの野戦服の首のホックを外して上胸をはだけた。顎ひげが首をダークに這いおりて、より短くまばらで艶のある、渦巻き状の体毛と一体化している。喉仏の南極点のあたりには鉄の詰め物……極……軸……中心樹……。〈生命の樹〉。……オムンボロンバンガ……ムクル……最初の先祖……アダム[20]……まだ汗は出つづけている……一日の仕事のあとその手は疲労のために感覚が麻痺するほどだ。この時間、彼の心は一分ほど南西アフリカの記憶をさまよう。大地の上、日没の中にいた自分、霧と埃を混ぜ合わせた靄がかかって——埃はクラール[21]と乳搾りに帰っていく牛たちが巻き上げる——彼の部族はむかし、日の入りのたび起こるバトルを信じた。日の没する北には片腕・片脚・片眼の戦士がいて、太陽と戦うのだと。槍に突かれ、地平線と空いっぱいに血を流して死にゆく太陽はしかし

19　Enzian の名の由来はリルケ『ドゥイノの悲歌』。198ページ参照。

20　ここでエンツィアンはヘレロの村の宗教＝社会体制と、キリスト教のそれとを統合的に思考しているようだ。ヘレロの村の聖なる中心である家畜の柵の近くには、（前述のルティヒの本の記述では）「オムンボロンバンガ Omumborombonga」の木が植えてある。「ムクル」は「老者」の意味で、村の宗教的指導者を指すとともに、この世に最初に現れた先祖神の名。

21　Kraal とは、先述の「聖なる中心をなす家畜柵」を表すアフリカーンス語。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

地の下で、夜の間に再生し、夜明けには戻ってくる。同じでありながら新しい太陽が。だが我らゾーン・ヘレロはどれだけの時間、この北の地で、死者の地で、待たなくてはならないのか。これは再生のためなのか、それとも我らは単に、先祖と同じに北のほうへ向けて葬り去られただけではないのか。北は死の土地である。神々はいないかもしれないが、パターンはある。名前それ自体に魔力はないが、名づけの行為に、物理的な発話は、そのパターンにしたがう。ノルトハウゼンはドイツ語で「北の住まい」という意味だ。このノルトハウゼンと呼ばれる場所で、我らがロケットは製造される必要があった。そのとなりには「ブライヒェレーデ」[22]と名づけられた町がある。同じ意味合いの町をふたつ並べるというのもいささか冗長だが、その冗長さもメッセージが失われないようにするためだろう。過去のヘレロの歴史は、メッセージ喪失の歴史だった。それはもう神話の時代に始まっている。狡猾な兎が月に住んでいて、月からの真のメッセージではなく、それに代えて死を人びとにもたらした[23]。真のメッセージはついぞ来なかった。ロケットはいつか我らを月に連れていくかもしれない。そのとき月はようやくその真実を語るだろう。〈土豚穴〉には蒼白色のヨーロッパしか知らない若い世代もいる。彼らは月を宿命(デスティニー)の行き先と信じている。だが年長者たちは、月はンジャンビ・クルンガと一緒で、悪をもたらしつつ悪をやっつける存在であることを、今もどこかで憶えている……

エンツィアンにしてみれば、ブライヒェレーデ（Bleicheröde）という名は、古代のドイツ人による死神の呼称「ブリッカー」（Blicker）にじゅうぶん近い。彼らは死を「白」と見なした——ブリーチ（bleach）する、ブランク（blank）なる存在として。この名はのちにラテン語化して「白の冥王」（Dominus Blicero）となった[24]。これに惹かれたヴァ

22 Bleicheröde ＝白き（荒涼たる）開墾地。

23 前述のルティヒの研究によれば、ヘレロにとって月はウサギの住処。月からの伝令役だったのが、伝えるべきメッセージを取り違えたゆえに、人間世界に死がもたらされた。月はまた、そのはたらきにおいて地底世界と同一視される。最高神ンジャンビ・クルンガは地底に退いている。白人たちがやってきたとき、西海岸のヘレロは彼らの

イスマンは、「ブリツェロ」を彼のSSコードネームとした。そのときにはもうエンツィアンはドイツに来ていた。ヴァイスマンはこの新しい名前を自分のペットのところに持ち帰ると、それを見せびらかすというのではなく、むしろロケットに引き連れられていく避けがたき一歩のようなものとして示した。だがこうした名づけの行為はエンツィアンにとって、それ自体不吉な暗号文のようで、それを解読して運命の地を見通すことはできていない。読み解くには、パターン化の度合が足りないが、だからといって棄却することはできない荒々しさをもつそれは、二十年を経たいまも叫びつづけ、もたつく彼を悩ましつづけている……

かつてエンツィアンには、還りゆかない生というものを思い描くことができなかった。母方の村（マンダラ状の円村）が遠くカカウ草原（ヴェルト）の[*25]、死の国に隣接したところにあって、記憶もない幼いころに何かの用で何度か連れていかれたのだが、その村へ出入りすることは、行くことであると同時に還ることだった。……そのときの話を後に聞いた。生後まもなく彼の母は、スヴァコプムントの町から自分の村へ彼を連れ帰ったのだ。ふつうの時代であれば、それは追放を意味しただろう。その名を発音することもできないロシアの海軍兵士との間に子をもうけたのだから。だがドイツの侵略のもとでは、しきたりなどにこだわるより、お互いを助け合うことが必要だった。揃いの青い制服を着た殺人鬼は繰り返しやってきたが、エンツィアンはその都度見過ごされた。その点から彼をまつりあげる一種のヘロデ王神話[*26]が生まれ、苛立たしいことに今日でもエンツィアンの心酔者たちがそれを好んで語っている。エンツィアンは母に連れられてサミュエル・マハレロの大隊に加わり、生後数ヶ月にして、カラハリ砂漠を自分の足で歩いて横断したというのである。

白い肌を見て、地底の霊界から来た神の分身だと考えた。

24 63ページ参照。なおヴァイスマン（Weiss-mann）はドイツ語でWhite-manの意。

25 カラハリ砂漠に接した山地。ヘレロ族のブッシュマンであるオヴァトジンバの居住地。

26 「マタイ伝」によれば、ユダヤの王ヘロデは、ベツレヘムに向かう東方の三博士からユダヤの王として生まれてくる子の情報をせしめ、イエス殺害のためベツレヘムに人をやるが、夢のお告げや天使のお告げにより、マリアと幼児はエジプトへ向かい、難を逃れた。260ページでヘロデはヒトラーと並置されている。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

このときのようすを物語った話のうち、最大の悲劇を語ろう。流民はすでに何日も砂漠を歩いていた。ベチュアナの王カーマは彼らを助けるため、ガイドと雄牛、荷車、水を差し向けた。最初に到着した流民は、少しずつ水を飲むように警告された。だが、後から行進の落伍者たちが到着したとき、他の者は眠っていて、警告してくれる者がいなかった。メッセージはここでも失われ、何百人もが水をがぶ飲みして死んでいくことになった。そのうちの一人がエンツィアンの母親だった。空腹と喉の渇きによって疲弊した幼いエンツィアンは、牛の皮の下で眠りこんだ。目がさめると周りは死者ばかりだった。言い伝えられるところによると、彼を見つけ、一緒に面倒を見てくれたのはオヴァトジンバの一隊である。母親の故郷の村はずれまでくると、あとはひとりで歩いて帰るようにと言われて別れた。彼らは遊牧民だったし、あの荒涼とした国で、どの方向をめざして進むこともできたのだが、わざわざ子供を還すべき場所に戻してくれたわけだ。だが戻ってみると村にはもう人がほとんどいなかった。多くは連行されて遠方へのトレッキングに出た。海岸に連れていかれた者たち、家畜柵（クラール）に押しこめられた者たち[27]。ドイツ人が建設している砂漠横断鉄道の現場に連れていかれた者たちもいた。他に大勢が、牛疫で死んだ家畜を食べて死んだ。

ノー・リターン。帰還なし。ヘレロ族の人口の六〇パーセントがただ抹殺された。残りは動物のように使われた。エンツィアンは白人の領有する社会で成長した。捕囚と、突然の死と、戻ってこない旅立ち、それが毎日のこと。物心ついて、自分はなぜ生きられたのか疑問に思ったときも、答えようがなかった。選択のプロセスがあったと言われても、まるで信じることができなかった。ンジャンビ・クルンガとキリスト教の〈神〉はあまりに

27 一九〇四年の反乱時、スヴァコプムント港から内陸のヴィントフークまで五七〇キロの鉄道敷設作業が始まっていた。"根絶令"に伴う人口減に遭遇した鉄道会社は——『V.』第9章でも描かれているように——労働可能なヘレロ人口を強制収容所に捕獲して労働に当たらせた。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

かは働かない。神々なるものは、特殊な偶然の作用への期待、魂との見いだせない
ものたち、探求者たち、[illegible]のファンタジーは、シンディアンを宗教的信仰
から逃走[illegible]。それだけでなく、神々が勝手に行ってしまったのである。人
[illegible]。だから、ツァイナーは好きに思わせておくことにした。
か人々の罪の意識を求めるのは、神秘が本を求めるのと同じで、命じようがない。
人の列が最後に[illegible]。最後に話をしたのは、[illegible]シンデか
[illegible]移動する最中の[illegible]。今は[illegible]は死んでい
[illegible]。1日曲、南西[illegible]1年曲、また、シンディアンが彼の言葉を話
[illegible]の人は最後の爆発を――[illegible]、恐怖を貫く絶頂の叫
[illegible]――そんな夢、と知っている。その彼が戦争を生き延びたと思えるはずがない。
[illegible]みずからの死[illegible]――[illegible]SSサーキットのまわり
[illegible]殺人局のように、音源で合唱化された絶叫を演奏しようとしているはず
けない。日本人が[illegible]の瞬間を[illegible]ような時と場所を選んで。結局はみずからの
[illegible]、発生する[illegible]に軽く引っぱられながら最終的には輝き
の絶対の軌跡のなかへと静止するなんて[illegible]。そんな、ツァーラーの[illegible]劇を
やるみたいなことは[illegible]かなにかのような管楽器の音に、ストリングスの歌声
がいい加減に鳴らないかな……

[illegible]夜に、シンディアンはわけもなく目をさます。それはほんとに〈彼〉だったの
か？ 刺し貫かれた[illegible]様か、白人オーケストラの夢みるドリームボーイか、やせ細った足よ、
こんな金色の目をして、あんたの上に乗っかってきたのか？……ボロの腰布の下にオリ

28 一九四五年一月か[illegible]

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ーヴ色のペニスがチラリと見えたか？　木にくくりつけられた、その苦行の汗でも舐めたくなったか？　いったいそいつは、いまこの、我らが〈ゾーン〉のどの区域にいるんだ？　消えちまえよ、キリストなんか、はりつけ板のこぶと一緒に、その神経質そうな帝王の笏と一緒に・・・

羽毛とビロードの島に安楽に横たわって夢みる瞬間は、彼にはめったに訪れない。権力への道に敷かれているのは大理石だ。エンツィアンは冷えてきた。いや火が消えて冷めてくるというのではなく、寒さの実体がやってきて、愛の最初の一舐めを期待した舌一面に苦味を走らせるみたいに。・・・冷え込みは、ヴァイスマンに連れられてヨーロッパに着いたときに始まった。彼ら白人の男たちの間では、単純な肌の悦びと精の射出をいちど越えたら、その向こうは男性的なテクノロジーの世界であって、愛が向かうのは契約と勝ち負けの世界なのだと知ったときに。エンツィアンの場合は、要請によって、〈ロケット〉へのおつとめが始まった。・・・単なる鋼鉄の勃起にあらず、〈ロケット〉とは女性的暗黒から勝ちとられるシステム全体なのであり、それは愛すべき存在だけどオツムのほうはとっちらかってる〈マザー・ネイチャー〉のエントロピーに屈せずに保持しておくべきもの。これが最初にヴァイスマンから学ばされたこと、〈ゾーン〉で市民権を得る第一歩だった。〈ロケット〉を理解するには、まずおのれの男性性（マンフッド）を真に理解する必要があるのだと、彼は信じさせられたのだ・・・

「あのころは今と違ってナイーブだったものだから、当時目にしたワクワクする光景は、みな、ワタシへの贈り物で、ワタシに見せるためにヴァイスマンが演出してくれたんだと思ったほどだ。ワタシを抱えて、閾をまたぎ、家の中へ入れてくれた彼が、おまえはこれ

[illegible]

一九七〇年　単独初優勝、またしかも、決勝戦で最優秀選手になり、まさに日本にとって最大にくーー時間かかった。国家の主のあたたかな時間に、かくも幸福で臨まっかった。あれはどれだけくさんの春日の息子が、毎日毎日、チャンピオンを目指す仕事に汗を流し、彼をおびえるその姿、トランペットの輝きの間が、ステージの上には生理的な空白の時の中の間を突き進んでいく……女たちは大きな拍手で、動きにも拍手をおくり……列に並ばされ、四つん這いにさせられ、足輪くステージの輪の中に引きずりおとされたところを俺は想像したよ。

「彼は、試合中することも失ってましたかね。あんたが若者たちにいったようなその表情をくださるよ」

「いや、あのころやっぱりまだ肉体の快楽に縛られていたな。だが大関はそのステージは過ぎていた。いや、だからといって嫌がっていたわけではない。無論だ。……ちょっとのほうはなっていたから。大関の心の中までは見えていなかったし、その苦しいところもわからなかった。だがわかっていた。わかってるさ。あいつはお前の命を守ったぞ。ちゃんはおふくろの一部になる約束だったのかな」

「そうか。一度も話していなかったことは多いのですか。彼のスーパースターぶりは、お義理にも、僕は見ていないことはいえないな」

「いいえね　──やっぱりそう言えるかどうかおかしいのでないんだが……すでにスーパースターを数え信じることはだめか」

「二時間は……あっという間だった」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「街を歩いていて、キリスト様に会ったことはあるか。ある人がキリスト様だと知った、という経験は。そうであることを望んだとか、そっくりだと思ったとかではなく、一瞬にして確信したことは。救世主が、昔の物語で約束した通り、ちゃんと戻ってきて人びとの間を歩いている……オマエが歩みよっていくとその印象はますます強まっていく——最初の驚愕を打ち消すようなとこはまったくない……近づいて、通りすぎざま、話しかけられるんじゃないかという恐怖にかられて……オマエの目が引き攣る……だが最初に思った通りなのだ、目の前にイエス・キリストがいて、さらに恐怖すべきことに、向こうもオマエを知っている。オマエの心は見すかされていて、どうふるまっても無駄だと……」

「それから……ヨーロッパに来て日が経つにつれて、だんだん、マックス・ヴェーバーがいう、"カリスマの日常化（ルーティン）" みたいなことになっていったと？」[29]

エンツィアンはここで「オウタセ」と言った。ヘレロ語で「糞（シット）」を意味する多くの語のうちのひとつで、ここでは、大きな、出たての、牛の糞の意味である。

アンドレアス・オルカンベは、部屋の奥の岩穴に並んだ、アーミー・グリーンのざらざらした質感をしたリンクル仕上げの送信・受信装置の前にすわっている。ゴムのヘッドフォンを両耳にかぶせて。〈黒の軍団（シュヴァルツコマンド）〉が使用しているのは五〇センチの周波数帯だ。「ハワイII」と呼ばれるV2ロケット誘導電波と同等の周波数である。[30] 五三センチとかいう周波数にダイヤルを合わせてくる者は、ロケット狂いの連中にきまっている。自分たちは〈ゾーン〉内にいるすべての対抗ロケット・グループから傍受されているんだ——〈シュヴァルツコマンド〉の面々はそれを覚悟していた。〈土　豚　穴（エルトシュヴァイン・ヘール）〉からの送信開始は午前三時頃。明け方まで続く。〈シュヴァルツコマンド〉の他の無線局は、それぞれのスケジュー

29 159ページ註**43**参照。

30 395ページに「ハワイ」についての言及があった。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ルに基づいて送受信している。やりとりはヘレロ語だが、中にドイツ語からの借用が含まれる（それがたいてい技術用語なので、じつはたいへんやばいのだ。盗聴者にとって価値ある手掛かりが提供されてしまう）。

　アンドレアスの担当は六時から八時まで。だいたいは書き取りに専念し、自分で送信することはほとんどない。トランスミッターのキーをいじってみると、瞬時のパラノイアに陥ることがある。アンテナのかたちが突然、目の前に現れて、〈ゾーン〉内数千平方キロのあちこちにキャンプを設営している顔の見えない敵が、モニターしているという感覚に襲われるのだ。敵どもはお互いに接触していて――それはこちらだって彼らの通信を傍受する努力は最大限やっている――〈シュヴァルツコマンド〉に対する彼らの攻撃計画があることは確実なのだが、いつになっても仕掛けてこないのは、一気に殲滅するための最良のタイミングを計っているのだろう。……エンツィアンが思うには、彼らはアフリカ人による最初のロケットが完全に組み立て終わり、発射の準備が整うのを待っている。自分たちが事実、脅威のハードウェアを手にした脅威の民族であることが証明できたほうが、攻撃する側には都合がいいわけだから。エンツィアンとしては、自軍の安全を確保しなければならない。ここ本拠地は問題なし。ここに侵入してくるには、まるまる一連隊の兵力が必要だ。だが本拠地を離れた〈ゾーン〉の各地[31]――ツェレ、エンスヘデー、ハーヒェンブルクといったロケットタウンでは、敵は我らをひとりずつ狙いうちすることも可能だ。最初は消耗戦、つづいて一斉攻撃……あとは、包囲を保って、ここメトロポリスが苦しむに任せる……

　ただの見せかけなのかもしれないが、もはや敵は連合国ではないようなのだ……ヨーロ

31　これらドイツ西部やオランダの町は、互いに百キロから二百キロほど離れている。

ッパ人が発明したヒストリーの観念は、戦後の時代に両陣営対立の構図が現れるという期待感を植えつけてやまない。だが、事実進行しているのは勝者の側も敗者の側もニコニコ顔でそこにある分け前を分かち合うという巨大なカルテルの動きだけかもしれないのだ。

……それでも、エンツィアンは敵の裏をかこうと奮闘してきた。言い争いながら群れてくるハイエナのような彼らを、互いに衝突させようと……見かけはたしかにリアルな衝突なのだが。

……マーヴィはきっと今ごろはロシア軍と一緒だろう。ゼネラル・エレクトリック社も一緒のはずだ——あいつを汽車から転げおとしたこととのメリットは？ 一日か二日の時間稼ぎになったこと。問題はその時間をどのくらい有効に使ったかだ。

こんなふうに作戦を織っては解くことを繰りかえす毎日。小さな成功、小さな失敗。何千ものディテールがあって、そのどれも、ひとつ処理を間違えれば命取りになりかねない。このプロセスの内部から抜けでて、全体がどのように進んでいるのか見きわめられたなら、とエンツィアンは思う。リアルタイムで、選択すべき分岐点に立ち、どちらの方向へ進むのが正しいのか決めることができたならと。しかしこれは彼らの時間で彼らの空間なのだ。今なおナイーブに彼は、白い連続体が何世紀も前にそれを求めるのをあきらめて発展していった[32]、過程の結果を待ち望んでしまう。ディテールは——バルブも、存在するかしないかわからぬ特殊なツールも、〈土豚穴〉内部の羨望や策謀も、失われた作動マニュアルのことも、東から西からやってきて走り回っている技術系の専門家も、食糧不足も、病気の子も——露粒のように宙に舞っていて、そのひとつひとつが力と向きを備えている……その全体を同時に処理することはできない。ひとつひとつにこだわってしまえば他を失うだけだ……しかも個々のディテールがすべてなのではない。夢想や絶望に陥った瞬間の彼

32 数世紀前の近代の成立に伴い、ヨーロッパは一つの発展するシステムとしての時空連続体を形成した。その中ではもはや個々の細部へのケアは全体の優先のために見捨てられるしかなかった。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

は、どこか遠くで（空間的にではなく、現世の力を超えた彼方で）用意された台詞をしゃべっているような奇妙な感覚に襲われる。決意を述べてもそれはすでに、たくさん自分の決意ではなく、リーダー役を演じている役者の決め台詞のように感じられる。情け容赦ない巨大な命令に駆り立てられる夢も見る。覚めようにも覚められない夢だ……革命軍を率いて、しばしば船で人間をのばっている。負けることは見えているのに、権力側の作戦として、定期間反乱の続行が許されるという状況だ。追っ手は彼に迫り、毎日が際どい脱出の連続。そのアクションに彼の血は沸き、肉は躍る……陰謀の優美さにもだ。それは厳格かつ鮮烈な美を有する。それは音楽だ。『北のシンフォニー』、ヴァリーンの作な[illegible]魂の叫びな過ぎ。巨大氷山のふもとへ向かう北極航海の交響詩。その音楽に心底からさらわれ、踊き、染料で染めたように青い海に心を洗われる。果てしない北の国。巨大沈黙の響か。巨人の悠久の歴史と文化を。他の世界から隔てている……その半島の名も海の名も、巨人の力強い河川の名も。端麗な地域にまでは知られてゆかない……回帰なのだ。この航海は。自分の名前の中で歳を重ねてしまったインディアン。自分をさらってくれたかのような音楽は彼自身が作曲した。あまり前のことなので完全に忘れてしまっていた……が、いまそれがふたたび彼を見いだす……

「ハンブルクでのトラブルは——」アンドレアスが書きなぐる。いま彼は外した片方の受信器は汁がいっとりだ。これで、片方の耳が、自分のつないでいる両端に接続できた。

「どうもまた流民からの発信らしいな。ちゃんとシグナルがこない。命が消えかけたかんだ——」

ドイツの降伏以来、一般市民と収容所から解放された外国人捕虜との間で争いが絶えた

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

い。北部の町のいくつかを、行き場のないポーランド人、チェコ人、ロシア人らが占領し、兵器工場や鉛物庫を襲って、収奪品を返さぬ構えだ。だが、地元にいる〈シュヴァルツコマンド〉についてはどうだろう。何をどう感じたらよいのか、誰もわかっていない。そのボロボロのSSの軍服だけを見て、ああだこうだと論評する者もいる。モロッコ人かインド人がイタリアから山を越えてやってきたんだろうといってすます者もいる。ドイツ人は、二十年前にフランスがラインラントを占領した折、植民地から連れてきた黒い兵士が駐屯したことを忘れていない。[33]（SCHWARZE BESATZUNG AM RHEIN! と派手に書きたてたポスターが貼られたものだ）。そんな中、新たな緊張が加わる。先週ハンブルクでふたりのシュヴァルツコマンドが射ち殺された。他の者もめった打ちにされた。統治するイギリス軍が兵をさし向けることはしたのだが、それは殺しが起こった後のことで、出動の主な目的は、夜間外出禁止の徹底にあるように見えた。

「オングルヴェだ」アンドレアスはヘッドフォンを手渡し、くるり回って、エンツィアンに場所を譲る。

「…我らが目当てなのか、精油所が目当てなのか…」声が割れて、ところどころしか聞こえない。「…百、いやおそらく二百人…大挙し…――フル、棍棒、ハンドガン――」

ピーと鳴ってザザーというノイズの炸裂。その上に割りこんできたのはなじみの声だ。

「十二人ほどの援軍ならオレが届ける」

「ハノーファーが応えた」エンツィアンが、面白そうなふりを装って、つぶやく。

「ヨーゼフ・オムビンディじゃないか」アンドレアスの声は暗い。

33　このドイツ語は「ライン河岸の黒き駐屯兵」の意味。第一次大戦後、フランスは、アフリカ植民地から集めた数万に及ぶ兵士をライン河沿いに駐屯させた。ドイツに屈辱を与える意図が読めるこの処置は、国際的な物議を醸し、ミュンヘンでは、黒人駐屯兵がドイツ人女性を恐怖させているようすを描いた映画も製作された。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

援助を求めているオングルヴェは「空無派問題」に対しては中立だ。少なくとも、中立たらんとしている。だが、もしオムビンディがハンブルクへ援軍を連れてゆくとすると、オングルヴェは帰還しないことになるかもしれない。ハノーファーにはフォルクスワーゲンの工場があるが、彼にとってはそこも足掛かりのひとつにすぎない。ハンブルクを手にすれば〈空無派〉にとってより強力なパワー・ベースとなる。いまがそのチャンスと見たか。〈北〉はそもそも彼らの自然の領分だしな・・・

「出かけないと」エンツィアンがアンドレアスにイヤフォンを返す。「どうした、そんな顔して」

「いや、ロシア人が大佐を誘いだそうとしているのかもと思って」

「大丈夫だ。チチェーリンについて心配するのはよせ。いま北ドイツにはいないだろう」

「しかし、あのヨーロッパ人が言ってたでしょ——」

「あいつ？　どこまで信用がおけるかわからんな。やつはマーヴィと列車の屋根の上で話していた。おれ自身の耳で聞いたんだ。それがノルトハウゼンでチチェーリンの女と一緒にいる。こんな男を信じるかね、おまえは？」

「でも、マーヴィがやつを追跡しているということは、やつにも何かの価値がありそうだってことにはならないかと」

「もしそうなら、きっとまた会うことになる」

エンツィアンは装具をつかみ、覚醒剤ペルビチンを二錠飲んで旅に備え、アンドレアスに明日なすべきことをひとつふたつ確認する。それから、岩塩の混じった石の斜面を登って地上へ出る。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

外でハルツ山脈の常緑林の空気を吸う。南西アフリカの古い村々なら、夕べの乳搾りの時間だ。一番星オカヌマイヒが出ている。甘いミルクを飲んだ幼児の星が・・・

しかし、これは北の国の別の星にちがいない。慰めはない。我らの民に、何が起こったんだ？ これが我ら自身が運んで行ったことでないのなら、ゾーン・ヘレロが、我らの民をこの世から一掃しようとした〈天使〉の胸の中で生きる運命にあるということ、これはどういうことなんだ？ 我らは過ぎゆかれた（パスオーバー）ということか、それともさらにもっと恐ろしいことのために選ばれたということなのか？

明日は、太陽が槍に刺される前に、ハンブルクに着いていないといけない。列車の移動は安全面の問題があるが、歩哨たちは顔見知りだ。長い貨物列車が昼夜を問わずミッテルヴェルケを出て、A4ロケットの部品を西のアメリカへ、北のイギリスへ運んでいる。東のロシアへも、新しい占領地図が発効すれば、さっそく運ばれていくだろう。・・・ノルトハウゼンはロシア人の管理下に置かれるだろうし、我らとしても対応を余儀なくされる・・・そうなると、いよいよチチェーリンと顔を合わせる可能性が出てくるな。まだ一度も会ったことはないが、いずれは出会う運命にある。ふたりは異母兄弟、同じ血肉を分け合っているのだ。

坐骨神経がズキズキする。すわりすぎだ。足を引きずる。ひとりで。頭はまだ垂れたまま。地下の〈土豚穴（エルトシュヴァインヘール）〉の天井の低さが身体にしみついているせいだが、外界に出たとて、頭を高く上げすぎれば、どんな目に遭うかわかったものではない。明るさを増す星明りのなか、高架鉄橋をめざす。北へ向かうエンツィアンの、高い灰色の影がゆく・・・

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

□□□□□□□

いま夜が明けようとしている。眼下一〇〇フィートに青白い雲のシート、それが西方へ見渡すかぎり延びている。スロースロップと見習い魔女のゲリー・トリッピング、ふたりは今ここ、ミッテルヴェルケから北北西二〇マイルのブロッケン山頂（ってことはゲルマンの悪の中枢だ）に立って日の出を待つ。メイデイのイヴ[1]はとっくに終わった。はしゃぎ回るこのふたりは悪魔の饗宴（ブラック・サバス）に約一ヶ月乗り遅れたが、あたりに痕跡はまだ残っている。戦時ビール[2]の空ビン、レースの下着、ライフルの使用済カートリッジ、ひき裂かれた赤いサテン地の鉤十字の旗、刺青用の針と青いインクの飛び散った跡——「なんで刺青が要るんだ？」スロースロップは不思議そう。

「悪魔のキス[3]のためよ、きまってるじゃない」ゲリーは、腋の下にピタリ寄りそって、おバカさんねという口調。そんなことも知らなかったスロースロップは、自分の阿呆ぶりに腹が立つが、実際、魔女については無知同然なのだから仕方ない。スロースロップ家の先祖にひとり、正真正銘のセイレムの魔女がいるにもかかわらず。絞首刑にされた最後の一人に名を連ねたエイミー・スプルーという名のご先祖さまが、二世紀の時を経てなお家

1 558ページでゲリーが話していたように、「メイデイ」の前夜、四月三十日の晩は「ヴァルプルギスの夜」。古代の異教徒の祭典として、ドイツのブロッケン山での催しは現代も盛んである。

2 水で薄めた、耐乏生活のためのビール。

3 新入りの魔女が、神を罵り、悪魔へ信仰を表明するのに行うキス。そのとき刺青針で印を入れられる。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

系樹の枝からぶら下がっている。彼女は一族の変節者で、二十三歳のときアンチノミアニズム[4]に走り、クレイジー・スー・ダナム[5]に先んじること二百年、バークシャー山地を狂ったように駆け回り、赤ん坊をさらい、夕闇の中を雌牛に乗って「スノッドの山」[6]に登り、鶏を生贄に捧げた。さぞかし鶏に、たいそうな恨みを抱いていたのだろう。牛と赤ん坊は、なぜだか知らぬが必ず戻ってきた。エイミー・スプルーは、ドロシーの敵となった『オズ』の国の跳ね回る魔女と同様、卑しい魔女ではなかった。

庇護を求めてエイミーは、ロード・アイランドの地をめざし[7]
途中セイレムに寄ろうとしたが
その恰好にケチがつき、そのスマイルも嫌われて
ナラガンセット湾はついぞ見られなかったとさ・・・

エイミーは魔女の容疑で逮捕され、死刑をくらった。スロースロップの狂った縁者がここにもいた。彼女のことを、子孫の者は肩をすくめて語る。〈一族のタブー〉にするにはあまりに遠い時代のことで、むしろ好奇の対象だ。子供の頃スロースロップはこの突飛な先祖様のことをどう考えていいのかわからなかった。一九三〇年代、魔女の処遇ときたらひどかった。魔女とは「ねえ、おまえさん」と呼びかけてくるシワクチャの鬼婆と相場がきまっていて、健やかな魔女なんて想像できない。映画で知ったかぎりのイメージと、いま目の前にいるテュートン系の魔女っ子はまるで違う。ドイツの魔女って、足指六本、アソコに毛がないはずじゃなかったか。ナチスの電波塔だったこの山の塔の階段の壁にも、

4 信仰の絶対をうたって社会道徳からの逸脱を是とした一派。

5 短篇「シークレット・インテグレーション」にも登場する、実在とおぼしき人物。

6 架空の地名。「スノッド」は「シークレット・インテグレーション」に出てくる天才少年の姓と同じ。

7 アンチノミアン運動の指導者アン・ハッチンソンは一六三七年、マサチューセッツ湾植民地を追われ、信奉者とともにロード・アイランド州ポーツマスに設立されたコロニーに加わった。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

そんな姿の魔女が描いてあったじゃないか。政府の折り紙つきの壁画だよ。誰かの無責任なファンタジーとはわけが違うと思ったのだが、ゲリーによると、アソコがつるんとした魔女のイメージは、フォン・バイロス[*8]の描画に由来するんだそうだ。「そんなこと言って、おまえ、自分のを剃るのがイヤなんだろ」とスロースロップの大きな一声。「ハッ、ハッ、たいした魔女だよ、まったくね」

「あなたには特別いいもの見せてあげる」神も眠るこの時間にふたりが起きているのはそれを見るためだ。静寂のなか、太陽が地平線に輝きはじめた。「ほら、見て」ゲリーがささやく、「あっちよ」

ほぼ水平な朝日の光がふたりの背中に当たると、真珠色の雲の堤の上にそれは始まる。ふたつの巨大な影法師が、クラウスタールの牧場地帯を越え、ゼーゼンやゴスラーを過ぎ、ライネ川が流れるあたりを横ぎってヴェーザー川のほうへグングン伸びていくのだ……

「すげえっ」スロースロップは少々ドギマギ、「妖怪だ」この現象は、故郷のバークシャーでもグレイロック山あたりで見られる。このあたりでは〈ブロッケン山の妖怪〉として知られている。

神の影。スロースロップが片腕をあげる。指はひとつの都市、上腕はまるまるひとつの州を覆う――スロースロップであれば腕を上げるのは当然だ。腕の影が、後ろに虹を引きながら東へ移行し、ゲッチンゲンをつかもうとする。ただの影じゃない――三次元の影だ。ドイツの夜明けに投げかけられた――ここらの山中か地下にはタイタン族がいたんだって。……こんなに並外れた図体だったら、川を下っていくこともできないし、地平線を見ても、大地が無限に続くなんて思えないだろう。登る木もない。長旅もない……ただふたりの

8 141ページ註5参照。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

似姿（イメージ）が残っている、後光の差したふたつの外殻（シェル）が、雲の上に伏して横たわり、下でうごめく人間たちを覆っている……

ゲリーはダンサーのように片足をまっすぐ前に蹴り上げ、頭を傾ける。スロースロップは西へ向けて中指を立てる。突き立つ指が、秒速三マイルの速度で雲に影を広げる。ゲリーがスロースロップのペニスに摑みかかり。スロースロップは身を傾けてゲリーの乳房を噛もうとする。見渡すかぎりの空のダンスフロアいっぱいに踊る、壮大なふたりの影。彼の手が彼女の衣服の中へ。彼女の片脚が彼の片脚に巻き付く。影全体の縁に、赤から藍へ、津波のように揺動するスペクトルが滲む。雲の下はまったくの静寂、沈んだアトランティスのような失われた世界。

だが「ブロッケン妖怪（ゲシュペンスト）フェノメーン」と呼ばれるこの現象は夜明け時のわずかな時間に限定されたものだ。影ははかなく、オーナーめざして縮んできてしまう。

「おまえ、チチェーリンとこれやったのか――」

「チチェーリンは忙しすぎるもの。こんなことしないわよ」

「どうせおれは怠けもんの雄蜂だよ」

「あなたは他の人と違うの」

「そうかい……チチェーリンだって、こりゃあ見といたほうがいいだろうに」

ゲリーの顔はすでに疑問形。質問の表情が浮き出ているけど、なぜとは聞かない――歯が下唇の上にとどまり、口の中にはほとんどwarum[*9]という言葉が（「ヴァルーム」って、プラスチックマンの音だよな）宙づりになっているのに。いや、聞かれても困る、なぜかなんて自分でもわからない。尋問にかけられたって、スロースロップは相手にとって役立

9　warum はドイツ語で why の意。発音はアメリカ漫画で使われる爆発の擬音 varoom に近い。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

たずだ。昨夜はふたり、古い坑道入口のところで〈シュヴァルツコマンド〉の見張り兵にひょっこり出会った。一時間にわたって尋問された。いやその、ただぶらついてるだけですよ、何のためって、ほら、新聞にも「ひと」のコーナーってあるでしょ、一風変わった話って興味を引くじゃないですか、あなた方のやってること、かねがね興味持ってたんです。……闇の中でゲリーがクスクス笑っている。兵士らはゲリーを知っていたにちがいない。ゲリーには何も聞かなかった。

後でその事にふれたとき彼女は言った。何だかよくわからないけどチチェーリンとアフリカ人の間には、お互いずいぶん感情的になることがあるみたいだ、と。

「そうよ、憎しみあってるの」とゲリー。「戦争は終わったのに、バカね、大バカだわ。政治と関係ないことなの。敵味方がどうのじゃなくて、昔からの、純粋な個人的憎悪なの」

「エンツィアンと?」

「そう」

ブロッケン山はアメリカ軍とソ連軍の両方に占領されていることがわかった。ソ連の占領ゾーンとのちょうど境目にこの山は位置していたのだ。かつての無線送信所や観光ホテルが、煉瓦や漆喰の廃墟になって、焚き火の灯りが微かに届くところにぼんやり佇んでいる。駐在するのはほんの二、三の小隊だけで、下士官より上の者はいない。士官はみなバート・ハルツブルクやハルバーシュタットの街のどこかでいい気持ちで酔っぱらっているか、女と寝てるかなんだろう。山に残された兵士の機嫌はよろしくないが、それでもみなゲリーを気に入り、スロースロップも受け入れた。何より、あのマーヴィの部隊と誰もっ

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ながりがないというのがラッキーだ。

だが安全なのはつかの間のこと。マーヴィ少佐は歯ぎしりしながらハルツ山を荒らし回り、何千羽ものカナリヤに心臓麻痺をもたらしている。黄色い鳥の死体が腹を上にして、バタバタ木から落ちてくる中、少佐の破壊的な怒声が響くのだ——あのイギリスのマザッアッカ野郎をつかまえてこいバカヤロー何人がかりだろうが知ったことかおれに一個師団よこしやがれイイかテメエらワカッタカ。尻尾をつかまれるのは時間の問題だろう。あのオッサンは正気じゃない。たしかにスロースロップも頭がヘンだが、次元が違う。マーヴィは不健康そのもの、迫害の狂気を病んでいる。もちろん……スロースロップにもこんな懸念は浮かんでいた——チューリッヒで自分を待ち構えていたロールスロイスの一味と[10]、マーヴィも結託しているのではないか。彼らのつながりときたら際限がないのだ。マーヴィはGE社とオトモダチで、GEといえばモーガン・マネー[11]で動いている。ハーバードにも流れているのもモーガン・マネーだ。だからどこかで必ずライル・ブランドともつながっている。……いったい彼らは誰なんだ？ なぜスロースロップをつけ狙う？ 今や彼はツヴィッター——かのナチのマッド・サイエンティスト——も彼らの一味だと確信している。あの親切そうなグリンプフ老教授も、スロースロップを連れ帰るためにミッテルヴェルケのトンネルで待ち構えていたわけなのか。まいったぜ。日没後にツヴィッターのラボを脱け出して、ノルトハウゼンのゲリーのところへ戻ったからいいようなものの、そうでなきゃ監禁されて、きっとぶちのめされ、もしかしたら殺されていたかもしれない。

山を下って帰る前に、ふたりは見張り兵からちゃっかり煙草六本とK号糧食をせしめた。ゲリーが言うには、友達の友達がゴルデネ・アウエという谷間の、とある農場に宿泊して

10 501ページにロールスへの言及あり。

11 J・P・モーガン（一八三七〜一九一三）は、アメリカ大資本の合併を進めた資本家。「ゼネラル・エレクトリック」や「USスチール」を誕生させた。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

いる。シュノルプという名前の、気球に夢中の人で、これからベルリンへ向かう。
「ベルリンなんか行きたくないよ」
「マーヴィのいないところへ行きたいんでしょ、リープヒェン」
シュノルプは目を輝かせる。一緒に来るか、大歓迎だぜ、ちょうど地元のPXから戻ってきた。白い平箱を腕いっぱいに抱えて、これをベルリンへ持って行ってあっちこっち動かす計画らしい。「大丈夫だってえ」とスロースロップに請け合う。「心配いらんさ。気球の旅なら何百回もやってる。空を飛べば邪魔者は来ない」
シュノルプはスロースロップを家屋の裏手に連れだした。坂になった緑地の真ん中に、真っ黄色と鮮紅色、二色の絹布の山がある。その隣は、柳で編んだゴンドラだ。
「脱出って、コッソリやるもんかと思った」とスロースロップが漏らす。リンゴ園から走ってきた一団の子供たちの働きで、エチルアルコールのはいったブリキのジェリカン[12]がゴンドラに積みこまれていく。午後の日射しが、丘の上り斜面に彼らの影をつくる。風は西よりだ。スロースロップの差しだしたジッポ・ライターで、シュノルプが点火、バーナーが燃え上がる脇で男の子らが折りたたんであった絹のガスバッグを広げた。シュノルプが炎を強める。横向きに噴出した炎のうなりが一定になったところで、巨大な絹袋の開口部へ吹き込みが始まった。隙間から見える子供たちが、熱気のゆらめきの中へ散っていく。ゆったりとバルーンが膨れてゆく。「あたしのこと忘れないでね」ボーッというバーナーの音をついて、ゲリーが叫んだ。「また会おうな……」シュノルプと一緒にスロースロップが乗りこんだ。気球がわずかに地面から持ち上がった。吹いてきた風がそれをとらえる。出発だ。ゲリーと子供たちは、ぐるりとゴンドラの縁をつかんでいる。まだ完全にはふく

12 ドイツ軍がガソリンを入れて運んだ二〇リットル缶。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

らみきっていないバルーンは、だが次第にスピードを上げ、笑い囃し立てながら全速力で足を動かしているみんなを引きずり丘の斜面をのぼっていく。スロースロップは、あれこれチェックしているシュノルプの邪魔にならないよう必死だ。炎の先が袋の外にいってしまったら大変だし、籠を吊す綱もそれぞれピンと延びていなくてはならない。モッコリといまや垂直に立ったバルーンが太陽光と交差する。球皮の内側で黄と鮮紅の熱が渦を巻きながら放縦に乱舞する。ひとりまたひとりと地上のクルーが離れおちる。さよならの手振り。最後までつかんでいたのはゲリーだ。耳の後ろに梳かした髪の先端は三つ編、柔らかな顎と口、大きな真剣な目がスロースロップの目を見つめ続ける。ついにバルーンに振り切られると、草の上に跪いたまま投げキッス。スロースロップのハートも、もう一杯にふくらんで、すーっと空を登っていくようだ。よせやい、そんな純朴なの、と言い聞かせるのが、〈ゾーン〉の暮らしが長くなるにつれ、だんだん億劫になってきた。いったい〈ゾーン〉は彼の脳に、どんな作用をしているのだろう?[13]

　モミの木立の上に舞い上がった。ゲリーと子供たちの姿が小さくなって、緑の芝の上のいく筋かの影となった。丘が下へ離れて、フラットになっていく。やがて、振り向いたスロースロップの目にノルトハウゼンの街の光景だ。大聖堂、市役所、聖ブラジウス教会・・・屋根のない一画、ゲリーに出会ったのはここだった・・・

　シュノルプが肘で突く。指さしている。スロースロップが気づくまでに時間がかかる。黄褐色をした護衛隊の四台の車、埃を舞いあげ、農場のほうへ急いでいた。どうやらマーヴィズ・マザーズの登場だ。で、スロースロップはといえば、ド派手なビーチボールに祭り上げられている。ま、それも、いいって――

13　「自己」の相が変化していくキャラクターとしてピンチョンは、たとえば『V.』に登場するファウスト・マイストラルを描いているが、これは[illegible]

「おれにかかわったのが運の尽きだな」ややあって、スロースロップが下へ向けてシャウトした。北東コースへしっかり乗った気球は、アルコールの炎にピタリと身を寄せ、風よけも立ち、背中の風と前面の暖気の間の温度勾配もきちんと五〇度あるだろう。「いきなり乗りこむ前に考えておくべきだったな。おれたち知らない者同士が、ロシアのゾーンへ飛んで行こうっていうんだから」

休日の乾し草のようなワイルドな髪をなびかせたシュノルプが、上唇でいかにもドイツ風の、切々とした表情をつくってみせる。「そんなゾーンはない」。このセリフ、ゲリーも口にしたっけ。「"誰々の"ゾーン、なんてのはありえない。ただひとつの〈ゾーン〉があるだけだ」

まもなくスロースロップは、シュノルプが持ちこんだ箱をチェックする。数は一ダース、中身はどれもざっくり分厚い黄金のカスタードパイだ。ベルリンでは途方もない値を呼ぶだろう。「ワオ」スロースロップが声を上げる。「なんてもんが見えるんだ、これ、ぜったい幻覚だよね」とか、幼い従者（サイドキック）のセリフを吐く。

「軍のPXカード持ってなきゃ売れないな」と、売人の口調。

「今おれ、割当スタンプがスッカラカンでさ、蛾のふんどしも買えないくらいだ」スロースロップが事実をさらす。

「それじゃ」タイミングをとって、シュノルプが切り出す。「このパイひとつを半分ずつ食うか。なんだか腹が減ってきた」

「オー、オー、スゲエ」

さて、スロースロップがそのパイ！にかぶりつき、手についたカスタードをペロリ舐め

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ているそのとき、後方ノルトハウゼンの上空に、黒い点のように見える妙な飛行物体が現れた。「あれは――」

シュノルプが首をまわす。「コート！」[14] 真鍮製のピカピカの望遠鏡を持ちだし、舷縁上に固定する。「コート、コート――マークがない」

「ってことは・・・」

空は本当に真っ青で、そんな汚れは指でつまんで擦れば青空に吸いこまれていきそうだが、見つめているとそいつはだんだん、錆びた古い偵察機の形をなしてきた。やがてエンジンのブーン・ダカダカという音が届く。見ていると機体は翼を傾け、追い越しにかかる。二機の間を渡る風にのって、微かに聞こえる復讐に燃えたぎる歌声――

マクガイアっていう若いのが
ピッチ・アンプリファイヤ[15]とやったらば、
パチパチ・ショートして
全身イボイボ
おまけに部屋が火事ボーボー

ヤー、ヤー、ヤー、ヤー！
プロシャじゃプッシー食べません――

プロペラ機は下腹を見せて、ほんの一、二ヤード上をかすめていく。出産間近いハラボ

14 Kot は shit にあたるドイツ語の罵倒語。

15 ロケット機体の傾き（ピッチ）によって発生する直流電流を増幅して尾翼のサーボモーターに送り方向修正する装置。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

テの怪物。機体の小さな出入口から革帽をかぶりゴーグルをつけた赤ら顔がのぞいている。気球を追いこし際、「このエゲレス野郎めが、てめえのケツでも食らえ」

スロースロップは考えもなくパイをつかみ、「ファッキュー」の一声とともに投げつけた。投球はパーフェクト。ゆっくり降下していく機体は空中の小さな斑点を見事に横切り、それがマーヴィの顔をベシャッととらえた。イェイ。手袋をはめた手が猫のように顔を拭う。ピンク色した少佐の舌が現れる。カスタードがボタボタ風にちぎれ、黄色い雨粒が長い弧をひいて地表に落ちていく。ハッチが閉まり偵察機は滑るように離れていき、一度スローロールの旋回をしてから、輪を描いて戻ってくる。シュノルプとスロースロップはパイを差し上げ、待ち構える。

「あのエンジン、まわりに蔽いがないな」シュノルプは気付いていた。「あそこを狙え」。いま飛行機の背面が見えている。コックピットにはビール浸りの米兵がぎっしり、相変わらず歌っている。

リッターってえ名の奴がいて
誘導トランスミッターと寝てみたら
チンコ縮んで
ソックスにポトリ
こりゃまた辛酸（ビッター）なことでした

百ヤード先から急接近。シュノルプがスロースロップの腕をつかんで右側を指す。天が

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

助けてくださった。前方に大きな白い雲の山がある。風に乗って素早く中へ潜りこむ。もくもくわき立つ生き物(クリーチャー)は、白い触手を伸ばし、急げとばかり手招きする。ふたりは中へ逃げ込んだ。ひんやり湿った避難所へ・・・

「これで奴らは待つしかない」

「いいや」シュノルプは耳に手を当てている。「エンジンを切ったぞ。中に一緒にいるな」

綿雲に巻かれたような沈黙が一、二分。すると、来た来た――

シュレーダっていう兄さんが
サーボモータ*16のオカマを掘った
気がつきゃ先っぽ
二股フォーク
プロモータつけて、チン列会

シュノルプは炎を調整している。ローズグレイの光雲――目立ってはいけないが、高度を失ってもいけない。いま自分たちが乗っているのは、なんとも弱々しい光の球、どこにいるか知ることもできない。露出した花崗岩の山肌が、ときどき雲の中へメチャクチャに拳を突きだす。偵察機はどこだろう、独自のスピードでみずからきめたコースを飛んでるはずだが、気球のほうは黙ってただ漂うしかないのだ。こちらかあちらかというバイナリーな選択は、ここでは意味をもたない。息苦しいほどの雲の圧迫。凝縮した雲がパイの上に大きな水滴を結んだと思ったら、突然やってきた――しゃがれた声でまだ歌っている、

16 原文は vane servo-motor と明記。これは、ロケットの四枚の羽根をフィードバック制御するための電動機。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

二日酔いのような歌――

兄さん田舎はイリノイのディケイター
はめはめしたのがLOXジェネレイター[17]
チンチン、タマタマ
たちまちパリパリ
おケツが凍ったのは、ちょいとレイター

蒸気のカーテンが退いて米兵どもの姿が見える。十メートルもないところを気球より若干速い速度で滑空している。「今だ!」とシュノルプが一声、むきだしのエンジンめがけてパイを放り上げる。スロースロップの投げたパイは目標を外し、操縦士の目の前のウィンドスクリーン一面に砕け散った。その間にシュノルプのほうは、浮揚調整用の砂袋をエンジンめがけて投げ始めた。そのひとつが二つの気筒の間にスポッとはさまった。不意を突かれた米兵どもは慌てふためき、銃、手投弾、マシンガン、兵站部隊がこういうときに所持するあらゆる物に手をのばすが、その間にも滑空してどんどん離れていく。気球はまた雲に閉ざされた。銃声が二、三発。

「やべえ、もし球皮に弾が当たったら――」

「静かに。昇圧磁石発電機の導線にうまいこと当たったようだぞ」雲の中央からなかなかスタートしないエンジンの音。連動装置が必死にキーキーいっている。

「オー、ファック!」遠くから、消音された悲鳴。うめくような音が途切れながら消えて

17 液体酸素発生装置。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ゆく。そして何も聞こえなくなった。シュノルプは仰向けで、苦笑しながらパイを食う。商品の半分を投げすててしまった。スロースロップも気が咎める。

「いいさ、心配するなって。今は言ってみりゃ商売システムが起ち上がってまもない時期なんだ。大昔に戻ったのさ。二度目のチャンス。輸送路は長くて危険で、運搬中のロスなんて人生の一部だよ。あんたは原始市場（ウル・マーケット）を実地見学したわけだ」

数分して雲が消える。ふたりは太陽の下を静かに飛んでいる。支索はポタポタ水滴を垂らし、湿った球皮は陽を受けてキラキラ輝く。マーヴィたちの影は消えた。シュノルプが炎を調整し、気球が上昇を始める。

日暮れどき、シュノルプは思索にふける。「ほら、見ろよ、境界（エッジ）が見える。この緯度だと、夜の影は時速六五〇マイルでドイツを横切っていくんだ。ジェット機のスピードだ」。広大な雲のシーツは今や茹で海老の色をした小さな霧の毛布に変化した。緑のパッチワークだった田園も、迫り来る夕闇によってダークな色合いを増している。気球は進む、大地を這う小さな川が夕陽に燃える中を。またもや現れた屋根のない町がその入り組んだアングルの模様を見せる中を。

日没は赤くて黄色い。この気球と同じ色だ。柔らかな光の球体が陶器の上の桃のように、歪みながら地平線へ没してゆく。「南へ行けばいくほど、影のスピードは上がってさ、赤道じゃ時速一〇〇〇マイルに達する。想像してみろよ、音速を超えるのは、緯度でいうと南仏のカルカソンヌあたりだ」

煽ぐ風がバルーンを北東へドライヴする。「南仏かい」スロースロップの追憶。「おれもたしか、あのへんで音速突破したんだよな・・・」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

□□□□□□□

〈ゾーン〉は夏の盛り。人の動きは鈍い。崩れた壁の後にはりつき、爆撃跡のクレーターの中で背を丸めぐっすり眠る。鉄道の溝橋の下でグレイのシャツの裾をまくってファックし、原っぱの真ん中で夢の中をただよう。食べ物を、現実の忘却を、違う歴史を、夢みながら・・・

ここの沈黙は音の退却だ。津波が来る前に海水が一度大きく引いていくように、すーっと音が引いてなくなる。響きの通路を下り、どこか遠くで力を集め、大きなノイズの山をつくると、それが一気に襲ってくるのだ。馬がほぼ絶滅した〈ゾーン〉では、雌牛たち――大柄な白黒ブチの鈍重な乳牛――が、引き具をつけて耕作に駆り出される。冬の間に地雷が撒かれた畑へ、表情ひとつ変えずに入っていく。田園地帯にすさまじい爆音が響く。角と皮とハンバーガーの塊が雨となって降りおちる。へこんだカウベルがクローバーの葉の中に静かに横たわる。馬だったら気がついて近寄らなかったかもしれない。だがドイツは馬を浪費した。種全体を愚かにも潰してしまった――押し寄せる鋼鉄の大軍のなかへ、粘液質の沼のなかへ、最後の前線の吹きすさぶ冬の冷気の中へ追いやって。まだ馬に愛着

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

を示すロシア人につかまって命拾いをしたものも少数はいるのだろう。彼らの騒ぎが聞かれるのは夕闇が降りてからだ。海辺に設けたロシアの野営地の裏手から発するキャンプファイアの光が、北国の夏の、ほとんど乾いた霞を通して、ナイフエッジのかすかなきらめきを何マイルも先まで伝える。一ダースものアコーディオンと手風琴(コンサーティーナ)が一斉に発するコードがもつれ、その上にリード楽器のソロが絡まる。歌声には、もの悲しそうな「ストヴィーエ」や「ズニー」[1]がいっぱい。濁声の中から、ひときわ澄みきった少女らの声も聞こえる。馬はいななき、草むらを動きまわる。ここは男も女も親切で、やりくり上手で、熱狂的。〈ゾーン〉の生き残りのうち一番楽しげにやっているのが彼らである。

うち震える肉体の内外で、狂気の屍肉漁り(スカベンジャー)チチェーリンが動く。この男はメタルの体部がなにより目立つ。話しながらスチールの歯がキラリ。オールバックの髪の下は銀の面皮で、粉々に砕けた右膝関節の骨と軟骨の間は、金のワイアが3Dの刺青のように縫いつないでいる。刺青の形は、手づくりの痛み(ペイン)の紋章として脳に刻まれ、その形が常に意識される。目に見えず、自分で感じるだけのそれは、最も誇らしい戦いの勲章だ。暗闇の中で四時間に及ぶ手術を受けたのだった。東部戦線のことで、サルファ剤も麻酔もなかった。チチェーリンはもちろんそれを誇っている。

この男は永遠に脚を引きずる。金のごとくに永遠のびっこを引きつつ、冷気と草地と神秘を抜け、この地までやってきた。モスクワの航空流体力学中央研究所、略してTsAGIに報告するのが彼の公務で、技術情報の諜報を指示されている。しかし〈ゾーン〉で実際チチェーリンが使命としているものは、個人的で、妄想的で、人民の公益にならない。彼の上司が繰り返し微妙な言い方で警告している通りだ。それはチチェーリンも了解してい

1 両方ともロシア語の典型的な語末の音。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

る。たしかに「人民の」公益にはつながるまい。しかし彼に指図をする幹部の利益には叶うのではないか。口で言うのとは裏腹に、彼らにしてもエンツィアンを消し去りたいと思う理由があるだろう。違いがあるとすればその時期、あるいは動機だ。チチェーリンの動機に政治的なものはない。いま真空のドイツに独りで作っている小さな私的「国家（ステイト）」は、どうにも抑えられない、なぜなのか理解するのもあきらめたほど深いニーズを礎としている。〈シュヴァルツコマンド〉を、神話的な異母兄弟エンツィアンもろとも抹殺せずにはいられないのだ。彼の家系は名うてのニヒリストを輩出した。喜び勇んで爆弾を投げ暗殺を引き受けた者は数知れない。ヴァルター・ラーテナウに協力してラパロ条約[2]締結にこぎつけたゲオルギー・チチェーリンとの血縁関係はない。あちらは長年にわたって折衝工作を続けた外交家だ。党分裂後、少数穏健派のメンシェヴィキからボルシェヴィキに鞍替えし、追放中も帰還してからも、人間を超越した〈国家〉の存続を信じ続けた。自分がトロツキーの座席にすわったのと同じように、いつか誰かが自分の座にすわるだろう——すわる人間は交代しても座席自体は・・・時を経ても一応は安泰であるという、そういうタイプの国家がある。ところが一方に、チチェーリンが築くタイプがあって、この精神（ソウル）の国家は、そこに住む人間を超えては生きつづけない。彼の思いは捕えられている——、鋼鉄の車輪の下で死んでいった学生たちへの愛と身体的な恐怖に。眠り知らずの夜に裏切られた彼らの眼に。絶対権力による死に向かって狂おしく開かれた彼らの腕に。彼らの孤独にチチェーリンは嫉妬する。戦闘の組織すらない状況で、彼らの多くは誰からの愛も支援も受けずに、独りで死んでいったのだ。その意志の力に彼は嫉妬する。〈ゾーン〉一帯にドイツ娘（フロイライン）の忠実なネットワークを張り巡らせているのはひとつの妥協であって、彼女らから得られ

2　318ページ註38参照。ヴェルサイユ体制下の二大弱者が締結した形の体制は、一九三三年のヒトラー政権成立後まもなく解消した。

る情報は役に立っても、慰安のほうは実は余計である。とはいえ見たところ愛が割って入ったら、絆が強まったりする危険はいまのところ軽微で、彼がみずから課した任務を脅やかすには至っていない。

スターリン時代の初期[3]のこと、チチェーリンは七河地方[4]の奥地にある「熊のコーナー（メドヴェジィ・ウゴロク）」に駐在していた。夏には、灌漑用運河から泌みでる水が、緑のオアシス一帯に、ぼんやりとした透かし彫りの模様を描く。冬には窓の下枠にべっとりとティーグラスの模様が走り、兵士らは「プレファレンス」のカードゲームに浸り、外に出るのは小便と、配備されてまもない最新型のモシン銃[5]で狼を不意撃ちにするときに限られる。そこは都市を恋する酔っぱらいの国、無言のまま馬を進める草原の国、大地の絶え間なく揺れ動く国…地震のおそれから建物はみな平屋で、埃っぽい褐色の通りに、見せかけだけの二階、三階が並ぶようすは、まるで西部劇（ワイルド・ウエスト）の映画だった。

こんな僻地まで彼は何をしにきたのか。土地の人びとにアルファベットを与えにきたのだ。彼らの言語は純粋なサウンド、身ぶり、ふれあいとしてあった。アルファベットに置き換えるべきアラビア文字の表記さえない。チチェーリンはモスクワの司政官が「赤の天幕（ジュルト）」と呼ぶ一連の民衆教育の拠点のひとつに送られ、当該地区のリクベズ・センター[6]との協働の職務に当たった。馬、サワーミルク、吸い草の匂いをプンプンさせた老若のキルギス人が草原をわたってきて天幕の中に入り、チョークのマークがびっしり並んだ石板を見つめる。そこに書かれたこわばったローマ字系のアルファベットは、ロシア人の基幹員（カードル）たちにも奇妙なものに見えた——放出された軍隊ズボンの上にコサック族の灰色のシャツを

3　ヨシフ・スターリンの書記長就任は一九二二年。二四年のレーニンの死後、徐々に体制を固めていく。トロツキーは国外追放される前の二八年、カザフスタンのアルマ・アタ（現アルマトゥイ）に飛ばされた。

4　カザフスタンのバルハシ湖南東側、セミレチエ地方。

5　一八九〇年代以来第二次大戦まで、ロシアの歩兵が持たされた標準的なライフル銃。

6　旧ソ連の文盲撲滅キャンペーンの略称。

着た長身のガリーナにも・・・その親友でマルセル・ウェーブの髪型をした、ソフトな顔のルーバにも・・・そして政府側の監視役ヴァスラフ・チチェーリンにも。みんな、まったくの異世界であるこの地において、NTA（新テュルク文字[*7]）を根付かせる任務を負ったエージェント（そんな意識は誰にもなかったが）である。

食堂での朝食が終わると、チチェーリンはたいてい〈赤の天幕〉まで散歩をして、お目当ての女教師ガリーナの仕事ぶりを覗きこむ。チチェーリンの人格にも、一、二本は女性への接続ラインがあるようで、そこに訴えるタイプの女だ・・・としておこう・・・チチェーリンが外に出ると朝の空は幕電光（いなびかり）に充ちている。ひどい突風とぎらつく光。可聴域に届きそうで届かぬ音で大地が震える。この世の終わりを思わせるが、これが中央アジアでは平凡な一日だ。大地の拍動。天まで届くようなパルスの連続。輪郭のクッキリとした、黒くてゴツゴツした雲が、艦隊を組んでアジア北極圏に向かっていく――その下には風の吹きぬける草原が何町（デシャチーナ）歩も続く。風はモウズイカの茎を吹き分け、緑と灰色の揺らぎを視界の果てまで伝えていく。途方もない風。だが彼はその中へ出ていき、路上に立つ。ズボンを引きあげると、襟の折り返しがパタパタと胸に当たる。〈軍〉であれ〈党〉であれ〈歴史〉であれ、ともかく自分をこんな場所に置き去りにしたものが憎らしい。この空も、草原も、住人もその動物も、けっして好きにはなれないだろう。この土地を振り返ることもあるまい。彼の心の最悪の湿地帯においてさえ。レニングラードで自分と仲間が粛清されることが確実になった時点でも。七河地方の想い出に彼が包まれることはありえない。その音楽を聴くことも、夏の旅行に出かけることも、夕暮れ時のステップの残光に佇む馬の姿を見ることも・・・

7 New Turkic Alphabet＝トルコ系遊牧民の諸言語のローマ字化政策を、ソ連政府は一九二〇年代から三〇年代にかけて推進した。

CamScannerでスキャン

ましてやガリーナのことなど。ガリーナなどまともな「記憶」にすらなるまい。すでに彼女はアルファベットの文字か、モシン狙撃銃の分解手順のような存在だ。彼女のことを忘れないというのは、右手でボルトをはずすときに左手の人差指で引き金を引いた状態にしておくことを忘れないというのと同じだ。それで、三人の関係が暴発しない予防にはなる。そうしておけば、ガリーナ／ルーパ／チチェーリンの三体の異境生活者が、そのちっぽけな弁証法的変容を遂げる過程で、その構造以外の記憶など持たぬまま年季を終えられるというわけだ……

　ガリーナの目は鉄の陰りの中にある。眼窩が、きわめて精確なパンチを受けたかのように黒ずんでいる。あごは小さく、角ばり、しゃくれあがっていて話すときに下の歯が覗く。……笑みを浮かべることはごく稀だ。強く曲げて溶接したような顔の骨。チョークの粉と、洗濯石鹸と、汗の霊気(アウラ)を発している。彼女の端っこには、部屋隅あるいは窓際に、常にがむしゃらなルーパがいる。かわいい鷹のルーパを仕込んだのはガリーナだが、飛べるのはルーパだけ。何里(ヴェルスタ)にもわたるダイブ、鉤爪の衝撃を、血の味を知るのはルーパだけ。痩せた鷹師のガリーナは地表に留まり、教室で言葉の中に閉ざされる——白い言葉の吹きだまりに。霜のパターンに。

　雲の向うに稲光のパルス。通りの泥を引きずりながらチチェーリンが〈センター〉に入る。ルーパは頬を赤らめ、コミカルな中国人雑役夫のチュー・ピアンがモップの先でする挨拶は叩頭の礼というものか。ひとりふたり早く来た生徒の視線は読めない。〝ネイティヴ〟の移動教師、ジャキップ・クーラン[*8]が煙草をせがむ。パステルカラーの測量地図、黒い経緯儀、ブーツの紐、トラクターのガスケット、プラグ、油で汚れた連結棒の先端、ス

8　アルファベットでQulanと表記される彼

チール製の地図入れ、七・六二ミリ口径の弾丸、レピョーシュカのくずや食べ残しが散らばる机から顔を起こして。だがそのとき煙草はすでにチチェーリンのポケットから出て、彼に向かって差し出されていた。

ジャキップは感謝の微笑を見せる。微笑まないという選択肢はない。チチェーリンの意図はよくわからないし、ロシア人の示す友情には信頼が置けないのだ。ジャキップ・クーランの父は、一九一六年の反乱のときに、クロパトキンの軍隊から逃げ、国境を越えて中国へ渡ろうとしたところで殺された。ここを進めば地球の頂点へも行きつけるという、干上がりかけた川縁で、一夜にして虐殺された百人のキルギス人逃亡者のうちの一人となった。ロシア人の植民者は、自警団特有のパニックにすっかり陥って、シャベル、熊手、古いライフル、身近なあらゆる武器を繰りだして肌のあさ黒い流民たちを取り囲み、殺害した。当時の七河地方で、鉄道からあれほど離れた場所で、そういうことが日常的に起きたのだ。あの恐怖の夏、サルト人、カザフ人、キルギス人、ドンガン人は、野生の獲物のように狩られた。「狩り」のスコアが日々つけられた。それは親睦のうちに行われる競争ではあったが、ただのゲームではない、それ以上のものだった。休まることのない何千もの魂が、死の灰を噛みしめた。死者の名も、虐殺の数すらも、永遠に葬られた。皮膚の色の、衣服の風習の違いが、捕らえ、打ち据え、殺すことの充分な理由となった。彼らの言葉で話すことすら理由となった――ドイツやトルコの政府の手先が流した流言が（ロシアの協力もなかったわけではない）、平原一帯を走ったせいだ。土着民の反乱を仕掛けたのは外国人だと。第一次大戦に新しい戦線を開くことをもくろむ国際的な陰謀だと。これまた〈西〉のパラノイアの産物。欧州のバランス・オブ・パワーにしっかり根を張った出来事

の名は、キルギス語で「野生馬」。Dzhuyp は「ヤコブ」。

9　一九一六年、戦時徴用に反対してカザフで起きた反乱に対して、ロシア皇帝はクロパトキン大佐の騎兵隊を遣わして鎮圧にあたらせた。この反乱を皮切りに、中央アジアのムスリム人民のロシアへの抵抗は、二〇年代初頭にピークを迎える。

だったのだ。カザフやキルギスの、つまり〈東〉の理由などありえただろうか？　この地の多民族は幸せに暮らしていたのではなかったか？　五十年にわたるロシア人の支配は進歩を、富をもたらさなかったか？

さて、現在のモスクワ政権下で、ジャキップ・クーランは国家の殉死者の息子という扱いだ。あのグルジア人[*10]が権力の座について、昔ながらのロシアの絶対権力をもって、「連邦諸国民に親切であること」を宣言した。だがこの愛すべき絶対権力者の意向とは関係なく、ジャキップ・クーランは「ネイティヴ」であり続け、ネイティヴとしての不穏さの度を、派遣されてきたロシア人に、日々測定されている。その赤褐色の顔、切れ長の目、ほこりまみれのブーツはどうでもいい。馬に乗って出かける場所も、風吹きすさぶ草原に立ち並ぶうら寂しい獣皮の天幕、一族の天幕が群れる〈外地〉にあって彼が何をしているのかも謎のままでかまわない。ロシア人は知りたいとも触れたいとも思わない。愛想よく煙草を与え、彼の存在を書類上で作り上げ、「教育のあるネイティヴ・スピーカー」として彼を使う。かくしてジャキップは機能を与えられるが、それ以上ではない……いや、ときどき、ルーパから鷹を思わせる一瞥が——足緒と、空と大地と、遠出への示唆が来ることはある。……ガリーナから言葉に代わってある静けさ（サイレンス）が投げかけられることも……

この土地でガリーナは数々のサイレンスと心を通じ合うようになった。七河地方の大いなるサイレンス。それをアルファベットに書き起こしたものはまだいない。ふとした瞬間に部屋の中へ入ってくる、心の中へ忍びこむサイレンス。文盲一掃運動の手先が持ち込もうとするソヴィエトの理屈を、チョークと紙へ押しもどそうとするサイレンス。NTAをもってこれらのサイレンスを埋め尽くすことも、打ち払うこともできない。それらは〈熊

10 スターリンはグルジアの出身で、本名はヨシフ・ヴィッサリオノヴィチ・ジュガシヴィリ。

ウラーアーンを形作る基本元素のようなものだ。これらの元素で地球を作れば、より巨大な惑星となり、太陽からもっと遠い軌道を回るだろう。・・・ガリーナの育った町では、風も雪も熱波も、こんなに巨大ではなかった。ここにきて初めて、地震というものを感じ、砂嵐が通りすぎるのを待つことを覚えた。いま都市へ戻ったらどうだろう？ ガリーナの夢の中にはしばしばボール紙で作った都市が出てくる。設計者が作る、精密な都市模型だが、多数の地区をブーツの底で一踏みにしてしまえるほど小さい——だが同時に彼女はその模型都市の住人でもあって、深夜に目をさましたり、目に痛い昼の光に瞬きしながら、自分の町が、空からの襲撃によって潰されるのを待っている。何がやってくるのか、その名前を言うこともできず、ギュッと身を固くして待っている。だが実は知っている——口にするのが怖いだけだ——やってくるのは自分自身、中央アジアの巨大女に変身したガリーナ自身こそ、彼女が恐れる〈名前のないもの〉なのだ。

天空の星を覆いかくす巨いなるイスラムの天使たち・・・*O, wie spurlos zertrdte ein Engel den Trostmarkt*[11]・・・チチェーリンの思いは揺らぐことなく、西方へ、アフリカ人の異母兄弟へ、炭のように黒々しいドイツ文字を刻印された詩集へ向かう——一ページずつ汚しながら彼は待つ、その距離を数値で表現できぬほど離れた低地のこちら側で。帯状に天を走る光を見上げて。光の帯は、今年もまた秋がめぐりくれば斜めに傾くだろう。サーカスの曲馬乗りのように地球の背峰に向かって身を傾けるだろう。パブリックな顔だけで見る者の目を引いて、周回のリングが峠を滑らかに完璧に超えるところでついえていく。

だがジャキップ・クーランはときたま、ごくたまにだが、紙の教室の向こうから、あるいは深緑の平原が見える窓の前でもいきなり、チチェーリンに意味ありげな視線を向けは

11 リルケ『ドゥイノの悲歌』第十の悲歌、「おお、天使なら跡形もなくこの慰安の市（いち）を踏みくだいてしまうだろうに」（手塚富雄訳）。

しなかったか？　その眼は「あんたが何をしようと、向こうが何をしようと、ふたりとも死ぬ運命なんだ」と語っていなかったか？　「だってあんたら兄弟だろう。一緒にいるのも、離れているのも自由だが、どうしてそんなにこだわるんだ。人間、生きて死ぬだけだろう。名誉の死もあるし、野垂れ死にもあるが——しかし兄弟の手にかかって死ぬってのは、どうなんだね…」と。秋の日のありふれた日射しが、同じ無料アドヴァイスを運んでくるが、その日射しもしだいにあきらめ顔だ。兄弟とも耳を貸すことができない。黒い血をひく弟のほうも、どこかで自身のジャキップ・クーランを得たにちがいない。あどけないドイツの少年が、「第十の悲歌」の、天使到来の夢の中から彼を見つめる。翼の音がすでに目覚めの縁に聞こえる、みずからを追いやった白き市場[*12]を跡形もなく踏みくだいてしまうために舞いおりた。…東を向いた弟の黒い顔は、どこかの冬の河岸から、土色をした目の細かい石の壁から、プロシアの、ポーランドの低い荒れ地を、その何リーグも続く牧草地を見つめつづける。チチェーリンも同様だ。ひと月またひと月と、からだの西の面が張りつめるのを、風にこすられるのを感じる。歴史と地政がふたりを対決に向けて着実に動かす。無線の音はかん高く絶叫し、夜にはダムの水圧管が水力発電の激怒にふれて震動する。その高鳴りが、空漠とした大峡谷と峠を越える。昼の空を何マイルにもわたって落ちてくる天蓋が厚く満たす。金持ちたちに天国の天幕（ジュルト）を夢想させる白さ。今はまだゲームのようでぎこちないが、それぞれのばら撒きのパターンからしだいにゲームらしさが消えて…

後背地の背骨の中を、チチェーリンと忠実なキルギス人の友、ジャキップ・クーランが

12 リルケの原文にあるTrostmarktは「慰安の市（market of solace）」と訳されるが、ピンチョンはここで敢えて"white marketplace"という表現を使っている。

馬で進んでゆく。チチェーリンの馬は、チチェーリンをそのまま馬にしたようなやつだ。名はスネイク。このアメリカ産のアパルーサ種は、言うなれば本国からの送金で暮らしている。一昨年はサウジアラビアにいた。月々の小切手を送ってくるのはテキサス州ミッドランドのイカレた（パラノイア・システムをお好みの向きには、恐ろしく理性的な、と言い替えよう）油田主。地元合衆国のロデオ会場から、こいつを遠ざけておくために送金を負担しているのだ。かつて、有名な振りおとす荒馬（バッキング・ブロンコ）ミッドナイト[13]が西部の若者を右に左に振り飛ばし、日の照りつけるフェンスに叩きつけていた頃のことだ。だがここに来てからのスネイクは、ミッドナイトのような野生児ではない。計算ずくの殺人馬。何を考えているかわからない。跨るときは無表情で乙女のように従順であったとしても、突如警告もなく、すさまじい鼻息一発、狂気の操るままに蹄の一蹴りをお見舞いする。蛇のようにすぼめた首で、あんたが死んでいく場所と時を指ししめす。気まぐれといえば気まぐれで、何ヶ月もトラブルひとつ起こさずにもいるし、今までチチェーリンに対してはいっさい無視を決めこんできた。だがジャキップ・クーランで三度ほど試している。そのうち二度は、まったくの運が味方して難を逃れた。三度目のとき、このキルギス生まれの青年は、必死に荒馬にしがみついて長時間乗りまわし、なんとかしたがわせたようだった。だがチチェーリンは納得していない。スネイクをつないだ山腹の、鈴の鳴る杭（ピケット）へ上っていくたび彼は、革の引き具と背に付ける傷んだつづれ織りの布とともに、心に疑念を抱えている――あれはジャキップが乗りこなしたのではなく、スネイクが、やつを仕留めるのを次の機会に委ねただけではないかと…
鉄道線路が遠ざかる。この大地の中で人に優しいゾーンは終わりだ。アパルーサ馬スネ

13 一九一五〜三六。ロデオの世界チャンピオンも七秒で振りおとし、生涯誰も乗りこなせなかった実在の荒馬。

イクの臀部では、黒と白の星々が炸裂している。それぞれの新星(ノヴァ)の中心はまったき虚空で色はない。真昼のロードサイドでキルギスの男たちがそれを覗き込み、首をまわしてニタリ笑いを地平線の彼方に向けた。

奇妙なもんだ、石油のダイナミクスも石油を扱う人間のふるまいも本当に変だ。スネイクは、アラビアからこの男——自分の片割れとおぼしきチチェーリン——のもとに来るまで、たくさんの変化に出会ってきた。あまたの馬泥棒、荒々しい騎乗、政府の差し押さえ、さらに辺鄙な土地への脱出。今回の遠出では、キルギスのキジたちが蹄の音で四散する。七面鳥ほどもある白黒ぶちの鳥で、目のまわりにぐるりと血がはねたような赤い縁取りがある。スネイクにとって、荒地へ向かう今回の旅は最後の冒険になるかもしれない。すでに彼の記憶にはほとんど何も残っていない——オアシスで煙と一緒にくねくね揺れる水パイプのことも、男たちの髭面も、彫りこんで雲母を埋めラッカーで塗った鞍も、山羊革を撚って作った手綱も、鞍の後ろに一緒に乗せた女が夜のコーカサスの山麓に悦びあふれる嘶き(いなな)きを響かせるのも、その声が欲望と砂嵐に運ばれて途だえそうなほどかぼそい道沿いにたなびくのも…世界の果ての草地に、ただ蹄の跡だけが後ろへ散っていく。影は露に湿り、過ぎゆきてキジの群れの中に落ち着きを得る。ふたりの騎手が奥地に入る、その動きにはずみ(モーメンタム)が増す。夜の森の臭いはゆっくりと消える。待つ。まだ曙光は遠い。太陽はまだ彼らのものではなく、それは…それを…待つ。信じられない長身の、燃える者を待つ…

…大人になった今もガリーナの眠りをかき乱す、翼の生えた騎手(ライダー)の訪れ。子供のときに見た革命のプラカードに描かれていた赤いサジテリウス。あのボロ着と雪と砕けた道路

CamScannerでスキャン

の故郷から遠く離れて、アジアの砂塵の中で、尻を空に突きだし、彼の、それの最初のひと触れを待つ。・・・スチールの蹄、歯、ヒューヒュー風に鳴る翼の羽軸が彼女の脊椎を這う・・・広場の騎馬像を、その響き渡るブロンズを感じながらガリーナは震動してやまない大地に顔を押しつける・・・

「彼は戦士よ」ルーバが話しているのはチチェーリンのこと、「故郷を遠く離れた戦士」——荒野の東部（ワイルド・イースト）に配属されて、黙々と表情ひとつ変えずに任務に当たっている。それ相応の呪いをきっと上層部から受けたのよ、と。何も起こらないこの土地では、そのぶん途方もないうわさが飛び交う。娯楽室で伍長らが女の話にうち興じる——ソヴィエトの高級娼婦（コルティザン）がいてな、白い山羊毛のキャミソール姿で、完璧なおみ足をさらし、股の付け根まで毎朝シェーブするそうだ。白テンをまとったまばゆいばかりの、馬とも寝たという淫乱女帝エカチェリーナの再臨って話だぜ。大臣の愛人に収まっていないで、下の位の者とも交わる。で、当然のことに本当のお気に入りがチチェーリン大尉だったんだと。つまりな、現代のポチョムキン[*14]が、腕利きの技術官僚の狼として、彼女のために北極の奥地を這いずり回って、凍土の上にセツルメントを建てたり、雪と氷で抽象的な都市パターンを描いている最中にだよ、チチェーリンは大胆にも首都に戻って彼女の別荘（ダーチャ）に入りびたり、魚と漁師ごっこだとか、国とテロリストごっことか、緑の波の世界の果てを探検するとか、そんな遊びに打ち興じていたってわけだ。そのふたりにとうとう権力が目を向けたんだが、チチェーリンは死刑にならずにすんだんだと。それどころか流罪にもならず、ただ出世の可能性を先細りにされた。あの頃のヴェクトルの向きを言えば、壮年期の大半を中央アジ

14　十八世紀ロシア陸軍のトップ、グリゴリ・ポチョムキン公爵（一七三九〜九一）は、エカチェリーナ女帝の愛人としても知られる。

CamScannerでスキャン

アで送らせるとか、中米コスタリカの大使に随行させるとか（いや、コスタリカなら彼もいつかは行ってみたいだろう――この煉獄から放免されて、波打ち寄せる緑色の夜へ――そりゃあ海が恋しいだろう、自分の目と同じ黒く潤んだ瞳、コロニアルな瞳が朽ち行く石造りのバルコニーから見下ろすのを夢みているに違いない…）。

他方、チチェーリンにはまた別のうわさが付きまとっている。伝説的人物ヴィンペとの関係だ。ヴィンペといえば、ＩＧの子会社である「東方薬理（オスタルツナイクンデ）」の販売担当部門のトップ。ＩＧの国外販売人といえば、実体はドイツのスパイ、「ＮＷ７」として知られるベルリンのオフィスに情報を持ち帰っていることは有名な話だから、チチェーリンがそこと関わりがあるという話はにわかには信じがたい。もしそれが額面通り真実なら、チチェーリンは今ここにいないだろう――東方の駐屯地をクスリでふらふら歩き回るために彼を生かしておくなど考えられないからだ。

もちろん、ヴィンペと知り合った可能性はありうる。ふたりの人生の時空間はある期間、充分近接していた。ヴィンペは古典的なタイプの〝連結人（フェアビンドゥングスマン）〟*[15]で、これと決めた相手は徹底的に攻め抜いた。自信満々に押してくるそのやり方がチャーミングでハンサムだった。愛想のいい灰色の目、花崗岩製を思わせる垂直な鼻、けっして揺るがぬ口元、幻想など生まれそうにない顎…ダークスーツ、清潔な革ベルト、銀ボタン、帝政時代の天窓の下でも、ソヴィエト政府のコンクリートの上でも輝いた馬のなめし革の靴。常に小粋でこざっぱりして、ほとんどいつも正しく、情報通で、専門の有機化学には、それを信仰していると他人に言われるほど情熱を燃やす男。

「チェスのゲームを思ってみてはいかがでしょう」首都近辺にいたころのことだ、ロシア

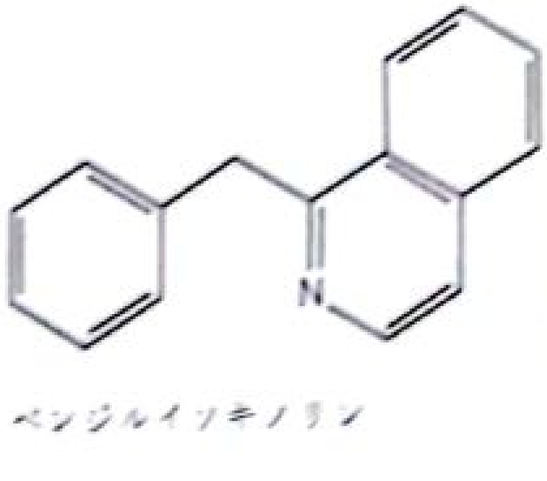
15 318ページ註39参照。ポリマー結合する分子のように巨大化する企業連合の中にあって、耽溺性化学物質によりコネクションを増やしていった存在。

ン好みの駒を持ち出して、チェスといってでも、かなり壮大なものですがね」。話が通じていくなかではどんどん先へ進んでいく。セールスマンの反射神経をもつ彼は、話にのってこない相手でも、関心の最低レベルをキープするのはお手のものだ——どの分子も多くの可能性に開かれていること、原子間の結合には強さの強弱があること、炭素は最大の多様性を有し、クイーンのようにふるまうが（まさに「周期表のエカチェリーナ」ですな）、水素のほうは数は多いがポーンに似て一方向的にしか動けない……いや、チェス盤では平面上の睨み合いですが、化学のゲームでは、これが三次元空間を——四次元と申し上げてもいいんですが——踊り回る。勝敗のあり方も、チェスとは根本から違っている。……その心酔のようすに、本社の同僚たちは、たち去る口実を述べて別の話の輪の中へ消えていった。チチェーリンであれば残っただろう。フーリッシュでロマンティックなチチェーリンは耳を傾け、先を促すことさえあっただろう。

ふたりの会合が、人知れずに行われた可能性がありえたか。早晩、血も涙もないプロセスが始動し、十九世紀の家族にみられたような親身のお節介が、ソヴィエトの指示連鎖を下ってふたりを引き離す策を打ち出しただろう。保存療法[16]。中央アジア。しかし、監視人らが事情をつかむ前の数週間、諜報機関の張り込みがまだ漠然と緩やかなものであったころ……その非決定性の暗いポケットの中で、コインがチャリチャリ裏になり表になりしたのだ。製薬会社の特務班員として、ヴィンペの学識は最初から、環状化したベンジルイソキノリン[17]に集中していた。すなわち阿片と、その多数の変異化合物を専門とする。そう、ヴィンペのオフィス——そこは古いホテルのスイートルームだった——の奥の間は、サンプルでいっぱいだった。圧倒的な量のドイツの薬品瓶を、〈西〉の魔神ヴィンペが次から

16 一般的に、最低限の処置・介入で済ます治療法をさす。

17 318ページ註37参照。それとネオヘロインの分子図とも比較されたい。



ベンジルイソキノリン

次へと持ちあげ、驚異の目で見上げるチチェーリンに説明する。「オイメコン、モルヒネの二パーセント溶液…ダイオニン（ご存じ、モルヒネにエチル基をひとつ加えたものです）…ホロポンとネアルポン、パントポンとオムノポン、どれも溶性塩酸基として阿片系アルカロイドを含有しております…それに、グリコポン、これの正体はグリセロ燐酸。…このオイコダル[*18]というのは、コデインに水素二個、水酸基一個、塩酸塩一個が」——と分子本体を示す拳を宙に差しだしながら——「分子の各部から、ぶらさがっている」

これら特許薬の中にあって、装飾や細かい飾りつけはゲームの一部だった。「フランス人が服にいろいろつけますよね、でしょう（ニヒト・ヴァール）？　ここにリボンを、こっちに綺麗なバックルをあしらって、シンプルなデザインを魅力的にする。…あ。これですか？　トリヴァリン[*19]ですよ！」ヴィンペの口上の中でも一番輝かしい台詞のひとつが始まる——「モルヒネ、カフェイン、コカインがみんな溶けこんでいます。吉草酸塩の系列です。吉草根（きっそうこん）といいましてな、ヤー——植物の根と根茎なんですが、あなたの親戚のご老人の中にも、昔、神経強壮剤として飲まれた方がいるかもしれない…いうなれば組紐やビーズで縁を飾るようなもので——裸の分子の上にちょっとしたギザギザを入れていくんです」

チチェーリンに返す言葉があったろうか。そもそも話を聞いていたのか。うす汚れた部屋の椅子に腰掛けた彼の耳には、何が聞こえていたのか。壁を向こうのエレベーターの、ケーブルの軋む音か、下の通りから、ごくたまに聞こえてくる軽四輪馬車の、鞭をならしながら古びた黒い玉石の上をガタガタいわせる音か。それとも、煤で汚れた窓に雪が吹きつける音だろうか。この後チチェーリンを中央アジアに送ることにした司令官らにとって、どのラインが「行きすぎ」だったのか。こうした部屋にいたというだけで、問答無用の死

18　「オイコダル Eucodal」は商標名で、物質としてはオキシコドン。分子式は$C_{18}H_{21}NO_4$・HCl

19　現在この名で流通しているハーブ系サプリメントとは別物。本文の記述通りのドラッグが存在した。

に値するのか……それとも、ここに至ってなお、返答が許されたのか。

「鎮痛の効果で痛みが、単純な苦痛が消えさったあとに……聞いたことがあるんですが……感覚のゼロ・レベルの向こう側で……」そう、聞いたことがあったのだ。この話題に入っていくには、ずいぶん粗野なやり方だ。ヴィンペは、標準的な切りだし方をいろいろ知っていただろうに。軍人の中には単に鈍い連中もいるし、そもそもの性格が無謀であって「抑える」ということをまるでしない連中もいる。大砲に馬で向かって行ったり、その先頭に立つとなれば、これはもう明らかな狂気だ。勇壮ではあろうが、これでは戦いではない。[20] 東部戦線でチチェーリンはどういう闘いぶりを演じることになるのか。最初の戦闘から、自殺狂との評判を博することになるだろう。フィンランドから黒海にかけて、軍を指揮するドイツの司令官たちも、チチェーリンに対して紳士的な嫌悪感をつのらせるだろう。この男には、軍人らしき人格が微塵もないのではないかと本気で疑われることになるだろう。捕えれば逃げる、戦闘で撃ち倒し、死んだと思っても、また頭から突っこんでくる――冬の湿地帯を、みずから雪だるまとなって。風向きがどうであろうと関係ない、危険な隘路にはまろうと、戦線が教会の尖塔のようにとんがろうと、考えなおすことなく、敵軍の自動拳銃の嵐の中へ突っこんでいく。レーニンもそうだったが、チチェーリンもナポレオンの「見ル前ニ自ラ身ヲ投ゼヨ（オン・サンガージュ・エ・ピュイ・オン・ヴォア）」という言葉が好きだった。危険をものともせずに突進することにおいて、かのIG社の男のいた古いホテルの部屋の一件も同じ、若き日のリハーサルのひとつだったとみなしてよい。チチェーリンには、裏の社会の人物、敵対的な秘密組織、反革命的分子などと付きあう性癖がある。それもみずから選んでそうするのではなく、自然とそういう流れになる。つまり、チチェーリンは、どの時点でも無数のオ

20 26ページ註6参照。

ーゾンな「腕」をもつ巨大な高分子であって・・・その場のなりゆきで・・・どんななりゆきでも・・・他の者がくっついてくるのだ。かくしてチチェーリンの薬理学的性質はつねに可変的であるから、時を追って明らかになるその副作用を、当初から見分けることなどできない。〈赤の天幕〉に雑役夫として雇われていたチュー・ピアンという名の中国人には、そのことが見えた。チチェーリンがやってきた最初の日、チュー・ピアンはそれを察知して、モップにつまずいてみせた。いや、相手の注意を向けようとしたのではない。そうやって出会いを祝福したのだ。チュー・ピアン自身、空いた「腕」を、一、二本ぶらつかせていたのである。彼は前世紀イギリスの貿易政策の生ける記念碑だ。それは麻薬取引の古典であって、その冷たき純粋さは今日もよく知られている。そう、インドから持ってきた阿片を中国人に引き合わせる——やあ、フォン。こちら阿片。阿片、こちらフォン——ああ、そう、わたし食べるあるね！——いやいや、フォン。きみ、吸うあるよ、吸うんだ、ほら。やがてフォンは、もっと、もっとと言ってくる。このクソ阿片に非弾力的[21]な需要(ニーズ)が形成される。そうやって中国政府に阿片を禁止するように仕向け、そうなったら阿片商人の利益保護をうたって中国を二度、三度と戦争に引きずりこんで破滅させる。[22]やがてそれは聖戦と呼ばれる。こちら、勝つ。中国、負ける。すばらしい。チュー・ピアンはこの歴史すべてに対する記念碑であるから、今日では旅行客が団体さんで観光にくる。どうせ見せるなら、ヤクの〈影響下〉にあるときがいいだろう・・・「皆様、ご覧いただけましたでしょうか、あの煤けた灰色の顔面こそ・・・」客は総立ちになり、チューの夢うつつな顔をのぞき見る。じっと見入る、羊の肉片(マトンチョップ)のようなもみあげを生やし、パールグレイのシルクハットを手にした男たちが。女たちはスカートの裾を持ちあげて、古い床板の上を微生物

21 一般に需要は、価格と供給量に応じて変化する弾力的（エラスティック）な性格を持つ。

22 林則徐による強硬な阿片取り締まりが始まった一八三九年にイギリス議会は出兵を決議。一八四二年の南京条約をもって阿片戦争は終結するが、一八五六年のアロー

CamScannerでスキャン

よろしくうごめく、気味悪いアジアの生き物を避けている。その間にも、案内人は、そのフェンシングの剣より細い金属の指し棒を、しばしば目にもとまらぬほどまばゆく動かして見所を指し示す――「この男の〈ニーズ〉は、どんなストレスのもとにあっても、一定に保たれるのです。肉体的疾患にも栄養不足にもいささかも影響されません…」観光客の、郊外の家の居間から聞こえるピアノの和音のように温和で浅薄な視線が、指し棒とともに動く…非弾力的な〈ニーズ〉、それは、室内の淀んだ空気に威光を与える。値のつけようのない金塊の輝き。その金塊からまた幾多の偉大な行政官の顔を刻印したソブリン金貨が鋳造され、意味づけを生んでいくのだろう。その輝きを見るだけでも旅の価値は充分だ。凍てつくステップ草原をソリでやって来た価値が。その覆いつきのソリは、大きさがフェリー船ほどもあって、どこもかしこもヴィクトリア風の飾りつき――内側には乗客の階級に応じてデッキがわかれ、ビロード張りの酒場も、在庫の豊富な調理室も、御婦人方に大人気の若き医師マレデット先生もついている、食事も「セルヴェル（のうみそ）のフォンデュ風ミルフィーユ」から「ヴェスヴィオスの急襲」までの豪華メニュー、広々としたラウンジは立体幻灯機とスライド・ライブラリーつきだ。深紅の色に磨きこまれたオーク材のトイレは、手彫りで彫った人魚の顔、アカンサスの葉、午後の庭の形象があって、便座にすわって故郷の想い出に浸りたい向きにはぴったりだ。ソリ船の中は熱いほどだが、下は一面の雪と氷の結晶世界、その上を連日連夜、おそろしい疾走を続ける。その光景を見たければオブザベーション・デッキに行けばよい。過ぎゆく平らかな白き大地、滑走するアジアの雪原、見物に来た黄金とは大違いの、鉛色した卑金属の空の下…

チュー・ピアンも見ている。彼らがやってきて、見つめて、帰っていくのを。面白い連

号拿捕事件をきっかけに、イギリスは"第二次阿片戦争"を起こし、中国支配を決定づけた。時の政府を主導したパーマストン卿の名は、ピンチョンの初期短篇「アンダー・ザ・ローズ」にも登場する。

中だ。夢の中の人影のようだ。阿片以外のことではけっしてここに来ない彼らは、阿片の世界に属している。だから彼も、ここでハッシシは、吸わないと失礼になる場合以外は、吸わない。トルキスタンに産するドラッグ、大麻樹脂の塊であるハッシシは、ロシア人、キルギス人など野蛮な趣味の連中にはふさわしかろうが、このチュー様には、常にケシの実の涙だ。それがもたらしてくれる夢のほうがしっくりくるのだ。あまり幾何学的ではない。大気も空も、ペルシャ絨毯に変えてしまうようなのとは阿片は違う。チューの好みは、夢幻の状況であり、旅であり、喜劇の味わいなのだ。そして彼の見るところ、この立派な体軀と黒い瞳をしたソ連の諜報員、モスクワからの送金で暮らすチチェーリンの趣味が一緒だ。こんな男に出会ったら、自分でなくてもモップに蹴つまずくだろう。石鹸水がざわざわ床に流れ、驚いたバケツのゴングが鳴り響くのを聞くだろう。それも嬉々として！

やがてふたりの日陰者は、場末でコソコソ逢瀬を重ねるようになった。これは町のスキャンダル。その不健康な黄色いからだから下がった、汚いずたずたのボロ袋の奥からチューが、悪臭のただよう、顔を背けたくなるような黒塊を取りだす。去年の八月十七日の『カザフ労働者新聞』の切れっぱしに包んだハッシシだ。チチェーリンが持ってきたのは――テクノロジーは〈西〉から来たこの男の担当なのか――それを吸うパイプである。黒く焦げたいやったらしいそのブリタニアメタル[23]製の小道具は、赤と黄色の二色のパターンが繰り返される。ブハラのライ病患者を収めた地区で、一握りのコペイカ貨と交換した中古品で、買ったときから見事なくらいに使いこまれていた。怖いもの知らずのチチェーリンだ。かくしてふたりの阿片窟は、地べたにうずくまる。前の地震で倒壊した壁のかさな[illegible]いの壁を背にして、たまに馬に乗った者が通りすぎる。気がつく者も気づかぬ者も。た

23　錫に銅とアンチモンを混ぜた合金。食器向けの食器などに使われた。

だ黙って過ぎていく。星々が天を満たす。町外れのさらに向こうは、風になびく草が羊のようにスローな動きを続けている。マイルドな風が一日の最後の煙の匂い、家畜とジャスミンと、よどんだ水と積もる埃の匂いを運ぶ……この風をチチェーリンはけっして思いだしはすまい。四十のアルカロイドを含有するこの生の塊を見て、昔むかしホテルの部屋で、ヴィンペがひとつひとつ取りだしてはその歴史を語った、あの切断面の磨かれた、ホイルにくるまれた分子模型を思いださないのと同じように……

「オナイイリン、それにメトナイイリン。[24] これらは一昨年『ACSジャーナル』誌[25]でラスロ・ヤンフが報告した変種でしてね。ヤンフはこのときも――今度はアメリカですが――企業の融資を受けてました。全米研究評議会（NRC）が、モルヒネ分子とその可能性を探究するための大がかりな[26]『十年計画』を始めたんですよ。それが、とても奇妙なことに、ウォーレス・カロザース――かのデュポン社の〈偉大なる合成者〉――が、継続して進めていた高分子の古典的研究と内容が被っているんですよ。関係？ そりゃありますが、話すわけにはいきませんな。NRCは毎日、新しい分子を合成していますよ。そのほとんどが、モルヒネ分子の部分[27]からです。一方のデュポン社では、アミド基をはじめいろいろな基をつなげて長い連鎖にしようとしている。二つのプロジェクト、相補的であるように見えませんか。モジュールを繰り返すことに耽るアメリカと、われわれドイツの基礎探求とを合体させる、その目的は、常習をもたらさずに苦痛をしずめる物質の開発にあるわけですよ。

「しかし、成果はかんばしくありません。自然界に存する本質的なジレンマにぶつかってしまったみたいでして。ちとハイゼンベルク的状況と似かよっているんですな。鎮痛性と常用性の間のパラレリズムは、ほとんど崩しえないほど完璧なものなんです。苦痛に対し

24 「オナイイリン」の語源は、ギリシャの夢の神オネイロス。後者の名は、オナイイリンにメチル基がついていることを示す。

25 アメリカ化学学会刊行の専門誌。

26 478〜479ページ参照。

27 ベンジルイソキノリン（653ページ）はモルヒネ分子から、ヴィンペのいう「飾りつけ」を取った中核部分。

CamScannerでスキャン

て効果があればあるほど、われわれはその物質をより強く求める。もうこれは表裏一体になっているとしか言いようがない。素粒子の研究と同じですよ。素粒子の速度に関する情報をあきらめて初めて、その位置を同定できるようになる[＊28]」

「それはわかる。あんたに教えてやれるくらいだ。しかし何故なんだ」

「何故とおっしゃるか、大尉。何故と?」

「カネのことだよ、ヴィンペ。そんな見込みのない研究に…わざわざ大金を便所に投げ捨てるとは――」

軍服の肩章に、別の男の手がふれる。世間を知りすぎた中年男の倦怠がこもる微笑。

「バランスをどこでとるかですな、チチェーリンさん」売人のささやき。「どちらか一方だけ優先するというのではなく。研究者を飼っておくなんて安いもんですよ。IGのようなところも同じでね、夢を見続けていて大丈夫、可能性のなさそうなことに希望をもたせておいて損はないのかもしれない。…もし本当にそんなドラッグが見つかったらどんな世界が開けるか――苦痛の排除を、耽溺という余計なコストなしにできるようになる――中すまでもなくそれはマルクスとエンゲルスの」、顧客の気持ちを落ちつけるために、「資本論の枠内の議論ですよ。現実の苦痛とは関係しない〝常習〟がつくる需要が広がったらどうなるか。現実の経済のニーズとも、生産や労働とも関係しない需要――そんな不可解なものは、増えるより減ったほうがいいでしょう。現実の苦痛なら、われわれは生産の方法を知っています。戦争はもちろんのこと…工場の機械、労働災害、安全ではない車の製造、食品や水や空気の中にさえある有害物質――これらは経済と直結する数量的ファクターです。こういうものはコントロールできます。だけど、〝耽溺〟? そんな霧みたいな、

28 ヴェルナー・ハイゼンベルクの不確定性原理（一九二七）への言及。素粒子の世界では、観察の行為が観察されるものを攪乱するために、確定できる限界が存在する。

CamScannerでスキャン

ファントムみたいなもの、何がわかるっていうんです。研究者同士で定義が噛み合わない。苦痛とは"強迫"ですか？　強迫のない人間がいますかね。それとも"許容"？"依存"？　それらはどういう意味ですか。千もの漠然とした学術理論があるだけで、それ以上のものではない。そんなあやふやな心理学の上に合理的な経済は成り立ちゃしませんよ。だって計画しようがないでしょう……」

　ナチェーリンの右腕の中で、このときどんな疼きが始まろうとしていたのだろう？　苦痛と金との間に、どんな直接の交換関係が……？

「あんた、本当にそんな男なのかね。それともこれは単なる演技か。本当に苦痛の売人をやっているのかね？」

「医者も苦痛の売人をしてますが、誰もその高貴な職業を非難しないでしょう。それでいて私のようなコネの連結人が、ヤクのケースの掛け金に手をのばしただけで、あなた方はみな、悲鳴を上げて走りだす。私らの中には常用者はさしておりませんよ。医療関係者には大勢いますがね。私らセールスマンはリアルな苦痛とリアルな解放を信じていて、その〈理想〉のために奉仕する騎士なんですね。私らの市場のためには、苦痛はリアルでないといかんのです。そうでないと、私の雇い主が幻想と夢に我を忘れてしまうでしょう。私らの化学カルテルは、まさに国家間結合のモデルであるわけで、混沌の中に消え失せてしまってはまずいんです。あなたの雇い主も一緒ですよ、大尉」

「俺の雇い主は、ソヴィエト連邦だが」

「ほう、そうですかね」ヴィンスはたしかに「モデルである」と現在形で言った。「モデルになるだろう」と、未来形で言ったのではない。将来から何からまったく異なるふたり

が、これほど打ち解けた話をするとは驚くべきこと。とはいえ、遥かにシニカルな性格のヴィンペは、真実をこの程度漏らしたくらいで気まずい思いはしなかったろう。また彼は、経済に関するチチェーリンの赤軍ばりの議論も充分許容できた。ふたりは実際なごやかに別れた。ヒトラーが首相になると、まもなくヴィンペはアメリカ合衆国（ニューヨークのケムニコ）[29]に配置換えとなった。駐屯地のゴシップによれば、チチェーリンはそのとき永久にコネを失ったとのことである。

だがこれはうわさだ。うわさをそのまま歴史に組みこむことはできない。かならず矛盾が出てくる。それらのうわさも、中央アジアの冬を越すための四方山話のひとつとしては悪くない――もしあんたが、チチェーリンでなかったら。もしチチェーリンだったら、そんな単純な収まり方はしないだろう。だって、どうだい。自分はなぜこんな冬を越さなくちゃいけないか、その理由をパラノイアックに考えるしかすることがないんだ……

すべてはエンツィアンにかかわる。あの忌まわしいエンツィアンのせいなのだ。チチェーリンは『クラスヌイ・アルヒーフ』[30]で見たことがある。ロジェストヴェンスキー提督[31]の叙事詩的な、運命の航海の航海日誌を見たことがあった。二十年後もまだ一部は機密扱いだったものだ。だが彼はいま事実を知っている。そして日誌が今も資料館にある以上、〈かれら〉もまた事実を知っている。妙齢のご婦人たちとのことや、ドイツの麻薬売人との件を理由に、東方へ追放するというのは、いつの時代もよくあること。だが〈かれら〉の復讐概念には、ダンテ流のタッチが必要とされるのだ。[32]それがなければ〈かれら〉が関わったこととの示しがつかない。単純な報復も、戦時中ならよいだろうが、戦間期の政治には、対称パターンとより優雅な裁きの概念が必要とされる。その裁きに慈悲の化粧をほど

29 連合国の中でアメリカを特に重視していたドイツが、軍事関係の技術情報を得るためにニューヨークに会社を装って置いた機関。ここから吸い上げた情報はNW7（652ページ）に送られた。

30 「赤のアーカイブ」という意味で、中央公文書館が隔月で発行していたソヴィエト連邦の歴史に関するジャーナル。

31 バルチック艦隊の指揮官。

32 ダンテ「地獄篇」で、死者が生前犯した罪によって厳密に分類されることへの言及。

こす退廃すらも要求される。そのほうが大量処刑よりも複雑で難しいし満足度にも欠けるが、チチェーリンには見すかすことのできない取り決めがヨーロッパ中、いや世界中にできていて、非戦時にそれを揺るがすことは大してできないしくみになっているのだ・・・
一九〇四年十二月のことらしい。ロジェストヴェンスキー提督率いる四十二隻のロシア艦隊が、独領南西アフリカの港リューデリッツ湾に蒸気を吐きながら入港したようだ。折しも日露戦争の真っ盛りで、ロジェストヴェンスキーは日本軍によって何ヶ月もの間旅順に閉じこめられているロシア艦隊救助のために、太平洋へ向かう途中だった。バルト海を出航した艦隊が、ヨーロッパ、アフリカを回ってインド洋を横断、東アジアの海岸沿いを北上するこの航海は、歴史上最も華々しい航海に数えられるはずだった。ところが、日本と朝鮮にはさまれた海域まで七ヶ月、一万八〇〇〇マイルをかけた遠征は、初夏のある日、東郷提督なる人物の待ち伏せに遭う。対馬の陰からいきなり現われた日本船の攻撃に、ロジェストヴェンスキーの艦隊は散々に痛めつけられ、ウラジオストックにたどりつくロシア船はわずか四隻——残りはほとんど、狡猾なジャップの手で海に沈むことになるのだ。
チチェーリンの父は、提督の旗艦だったスヴォーロフ号の砲兵隊員で、艦隊は一週間、石炭を補給するために停泊した。大艦隊が所狭しと停泊する小さな港を嵐が襲った。スヴォーロフ号は石炭船と何度となく衝突し、両側面に穴を開けた。十二ポンド砲の多くは壊れた。スコールが吹き込み、雨を含んだ石炭の粉塵が渦を巻いて人にも金属にも付着した。水夫らは不眠不休で働いた。夜になるとデッキにサーチライトを立て、まぶしい灯りで視界の効かない中を石炭袋を運び、シャベルを動かし、汗を垂らし、咳と文句を吐きだした。発狂する者も、自殺を図る者も出る作業を二日ほど続けた後、チチェーリンの父親は、軍

CamScannerでスキャン

務を無断で離れ、出航の日まで戻ってこなかった。一人の女に出会ったのだ。彼女の夫は、ドイツの支配に対する蜂起[*33]の際に殺されていた。まるで計画にない展開。停泊するまで夢想もしていないことだったのに。アフリカについて彼は何を知っていただろう？ サンクトペテルブルクには妻と、まだ首も据わらぬ子供がいた[*34]。この航海まで彼はクロンシュタット[*35]より遠くへ旅したことはなかった。ただ作業隊から離れて休みたかっただけなのだ。仕事場のようすを見ているのはたまらなかった…石炭とアーク灯がその白と黒の色で何かを語りだしそうで、カラーのない世界から、その非現実感から逃亡したくなったのだ——ただ、その非現実にはどこか見慣れた感じがあった。〈コレハ自分ノ行動ヲ試スタメニ仕立テラレタモノダカラ、間違イハヒトツモ許サレナイ〉という聞き慣れた警告のメッセージを発していた…人生最後の日に彼は、霞む海上の彼方、不可視の遠方から浴びせられる日本戦艦の砲弾の嵐の中で知っていたはずの仲間の顔が徐々に石炭に変わっていくのを見て考えるだろう。"ヤブロチコフ・キャンドル"[*36]がバチバチ瞬き、太古の石炭がきらめく。それぞれの結晶、それぞれの薄片が完璧に照らされる…炭素(カーボン)の陰謀。いや彼はカーボンを意識したわけではない。逃げたのはパワーに恐れをなしたから。意味をなさないあまりに巨大な力が、間違った方向へ流れているのを感じたから。そこには〈死〉の匂いがあった。監視の伍長が煙草に火をつける一瞬をとらえ、単にふらりと出ていった——すべてがあまりに黒く、人為的に黒く、気づかれもしなかった——陸に上がって、重々しい顔をしたヘレロ女の正直な黒さと出会った。長期間、閉所に拘留されていた彼は、その黒さに生命の息吹を感じた。そして鉄道に近い、単調で悲しみに充ちたちっぽけな町のはずれの一角にふたりいっしょに留まった。そこは若木と荷箱とアシと泥でできた一部屋の

33 602ページ註10参照。

34 一九四五年の盛夏にチチェーリンは四十一歳、エンツィアンはもうじき四十歳という計算になる。

35 フィンランド湾のロシア領の島にある、バルチック艦隊の拠点都市。

36 ロシア人ヤブロチコフの発明した炭素アーク灯の一種。最初期の電球で、まぶしすぎる光量を抑制できないのが欠点だった。

家だった。雨が吹きこんだ。汽車が警笛を鳴らし、煙を吐いた。男と女は寝台から出ずに、カリ酒を飲んだ。ジャガイモと豆と砂糖を発酵させた酒である。カリとはヘレロ語で「死の飲み物」を意味する。クリスマスが近づいていた。男はむかしバルト海で砲撃演習をした際に得たメダルを女に与えた。男がたち去るまでに、ふたりは互いの名前を知り、相手の言語のいくつかの単語を知った。こわい、うれしい、ねむる、すきだ・・・交わされたのは新作の言語だ。使用者は世界でふたりだけという混成語（ピジン）。

　しかし男は戻っていった。男の将来がバルチック艦隊とともにあることを、男も女も疑っていなかった。嵐が吹き荒れ、霧が海を覆った。チチェーリンは船に乗って去っていった。スヴォーロフ号の吃水線の下、臭くて暗い一室で、クリスマスのウォッカを飲みながら、乾いた草地で女と過ごした、波に揺られることのない一緒の時間を思いかえした。ペニスをくるむのが、自分の孤独な手ではなく、もっと暖かく優しいものだったときのことを。その女はもう、彼の語りの中で、淫らな現地の女に変わっていた。船乗りの語るシー・ストーリーの中でもこれは最古の類型である。語り手はすでにチチェーリンではなく、過去から未来へ連綿と続く、ひとつの顔をした男になっていた。愛のすべてを失ったことを何とも思っていない男の顔。残された女のほうは、どこかの岬に立って、灰色の装甲艦が一隻ずつ南大西洋の霧の中に消えてゆくのを見ていたかもしれない。だが、もしこの場面に「蝶々夫人」[*37]のメロディを数小節ほど挟みたい読者がいたらそれは違うだろう。この女は外でせわしく働いていただろう。さもなくば眠っていたか。歌など歌える状況ではなかった。お腹には赤ん坊がいた。その子の父が対馬の切り立った崖、緑の林を目のあたりにして海に没したのが五月二十七日の日没前のこと。それから三ヶ月ほどして、男の子は

37　アメリカ海軍士官ピンカートンと日本のマダム・バタフライを描くプッチーニのオペラはちょうど一九〇四年が初演。

誕生した。
ドイツの役人は、その誕生と父親の名前を（彼はそれを文字に書き残していったのだ——船乗りはよくそうやって自分の名を現地の女に与えることをする）、首都ウィントフークで管理している書類に記録していた。間もなく母と子に、部族の村に帰るための通行許可証が発行された。ブッシュマンに連れられたエンツィアンが、村に戻った直後、自分たちが殺した原住民の数を調べるための人口調査を植民地政府が行った。死者のリストには母も含まれていた。彼女の名は記録に残ったのだ。ドイツ入国のためにエンツィアンがヴィザを申請した一九二六年十二月づけの書類も、後に行なったドイツ市民権の申請書も、ベルリンのファイルに保管されていた。

それらの書類すべてを集めるのに、チチェーリンは役所をどれだけ訪ね回ったことか。だが、海軍省の書類で見つけた、一語か二語の言及から出発して、そこまで辿りついたのである。当時はアレクサンドラ・フョードロヴナ皇后——キッド皮の下着をつけているとうわさされた皇后——の時代であり、[38] チチェーリンが資料を入手する困難は今日ほどではなかった。ラパロ条約が発効したことも、ベルリンとの情報のやり取りを自由にしてくれた。あの気味悪い条約のペーパー……チチェーリンの誇大妄想が病的に膨れあがるとき、きわめて明晰な理解が立ちあがってくる——自分と同姓のロシア人と、後に暗殺されるユダヤ人が、ラパロでうった猿芝居の真の目的はただひとつ、かれにエンツィアンの存在を示すことであったのだと……はるか東方での駐屯生活は、ある種のドラッグのように作用して、これらの想念をまざまざと脳裏に焼きつけたのである。

だが、そのオブセッションは身の破滅に他ならなかったようだ。エンツィアンに関して

38 ニコライ二世の后が、ロマノフ王朝の人間としてレーニンの革命軍に銃殺されたとき、チチェーリンは十四歳だったという計算になる。

CamScannerでスキャン

収集した情報をチチェーリンが再構成した文書（その中には、ヴァイスマン大尉に関して、及び、大尉の南西アフリカでの冒険に関してソヴィエト情報部がつかんだ情報も含まれていた）は、ある熱心な地下機関員によって写しがとられ、チチェーリン自身に関する書類の中に挟みこまれた。それから一、二ヶ月後には、チチェーリンがバクー[39]に出した指示が（顔のない何者かによる妨害で）届かなくなった。VTsK NTA（新テュルク語文字全労中央委員会）の第一回総会へ呼び出され、陰鬱な気持ちで出掛けてみると、Ƣ委員会への赴任が言い渡された。

Ƣは G の一種で、有声口蓋垂破裂音であるらしい。ふつうの G との違いは、チチェーリンには永遠に学習不能だった。後で知ったところによると、これらのいわば「珍奇文字委員会」は、チチェーリンのような不穏分子のために作られたものだったのである。シャツクというレニングラード出身の、人の鼻を偏愛するフェティシストも委員のひとりで、この男は党会議に黒いサテンのハンカチを持ってきては、権力者の鼻先に手を伸ばす。それをどうしても抑止できず、実際に、一度ならずさすってしまう――彼が追放された先はΘ委員会だった。NTA文字のΘはŒであって、ロシア語のFではない。そのことを彼はいつも忘れてしまい、どの会議の議事進行をも妨げて混乱を起こしている。仕事時間の大半を使って彼がやっているのは、Ꞑ委員会への異動の働きかけだ。「それはね」と相手の耳元に重々しく吐きかける、「ごくシンプルなNでも、いやMだってかまわないんですけど……」　衝動的で不安定な悪戯者のラドニチニは、ə委員会を引きあてた。əは曖昧母音、アともウともつかぬ弱音だが、その委員会でラドニチニは、中央アジアにおける話し言葉のすべての母音を曖昧母音に代えてしまおうという誇大妄想的計画に着手した――しかし

39　カスピ海西岸。アゼルバイジャンの首都。帝政ロシアの時代から石油の産地として発展。

CamScannerでスキャン

母音だけってのもどうなんだろう、子音もひとつふたつ曖昧にしたらどうだい・・過去の扮装と悪ふざけの履歴からすれば、いかにも彼らしい。なにしろこの男は、スターリンの顔にグレープ・シフォンパイをぶつけようという、派手やかにも破滅的な陰謀を練ったことがある。計画の全貌までは発覚しなかったので、バクーに飛ばされただけですんでいたのだ。

これら救いがたきグループに、チチェーリンは当然ながらなびいていく。ラドニチニと一緒に油田地帯に侵入し、油井やぐらが巨大ペニスに見えるよう細工する悪戯にも加わる。そうでなければバクーの町のアラブ人地区に一緒に潜行して、「声門音K委員会」（ふつうのK音はQで示され、Cは「チ」に似た音になる）の悪名高い麻薬吸いのウクライナ人、ブグノゴルコフと一緒にハッシシの売人を待っている。あるいは「鼻フェチ」シャックの接近から身を守っている。ほんとうはモスクワのどこか軍の精神病棟に閉じこめられて幻覚を見ているのではないかと思えてしまうことばかり。ここの連中にオツムのまともな人間はひとりもいないかのようだ。

なかでも悩ましいのは、気位高きG委員会に党代表として参加していたイーゴリ・ブロバジアンという男に仕掛けられた権力闘争だ。この男は、チチェーリンの委員会からՊの文字を抜き取り、すべてをGで置き換えてしまうという企みに燃えていた。まず外来語から入って、徐々に全体を改変しようと謀っている。陽光眩しい、うだる暑さの食堂。ザベカンカ[40]とグルジア風フルーツスープの載った皿越しに、ふたりの男が嘲笑しあう。stenography[41]の綴りにどちらのGを使うのかという問題をめぐって、状況は危機的な様相だ。それは愛着の強い単語だからして当然だろう。ある朝チチェーリンが会議室に行っ

40 ロシア風の（グラタン、パイなど）オーヴン料理。

てみたら、鉛筆が一本残らず謎の消失を遂げている。復讐のため次の晩、彼とラドニチニは、弓のこ、やすり、たいまつを持って、プロパジアンの委員会の会議室に忍び込み、タイプライターのGの文字を改造する。翌朝が楽しかった。プロパジアンが発作を起こし、止まらぬ金切り声とともに走りまわっている。チチェーリンの朝の会議では、一斉の着席に際して、けたたましい音とともに二十数名の言語学者と官僚が床にひっくり返った。騒音の余韻が丸々二分つづいた。尻もちをついたままチチェーリンが見回すと、テーブルのまわりに散乱した椅子の脚は、ノコギリで切断しワックスで付けた上からニスが塗ってある。これはプロの仕事だろう。ラドニチニは二重スパイなのか？　お気楽な悪ふざけの時は終わった。これからはひとりで行動しなくては。ランタンの灯りの下——夜更けのこの時間に文字をいじっていると、異なる世界から理解の光が射してきそうになる——チチェーリンは聖なるコーランの序章を、懸案のNTA文字に一字一字置き換えていく。これにイーゴリ・プロパジアンの名前をつけて、会議中、アラビア派の連中に回覧させればいい。

こうなると、もうただではすまない。このアラビア派というのが、まったく狂乱的な連中で、新テュルク文字をアラビア文字で構成しようと、激しいロビー活動を展開しているのだ。ホールでは（結束の進まない）キリル文字派と殴り合いになったりしている。イスラム教世界がひとつになってローマ文字のボイコット運動を推進すべしという声もささやかれている。（実のところ、キリル文字のNTAを心から望んでいる連中はいないのだ。帝政時代に由来する懸念は今日のソヴィエトにも巣くっている。このごろ中央アジアでは、ロシア化促進に対する抵抗の動きがやまない。印刷の活字に対してもだ。一方でアラビア文字は、母音の表記がなく、音と文字との間に厳密な一対一の対応がないという弱みがあ

41　「速記」はロシア語でも「ステノグラフィア」。

って、この戦い、最初からローマ文字の優位は動かない。しかしアラビア派も実にしぶとくて、改良したアラビア文字のアルファベットを次々と提案してくる――多くは一九二三年にブハラで批准され、ウズベク人の間にうまく定着したものを下敷きにしている。[42] カザフ語に出てくる口蓋音と軟口蓋音の発声も、分音符号を使うことで区別は可能だ。）この執拗さには、宗教的背景が深く絡んでいる。アラビア文字以外を使用することが神への冒瀆になるという感覚を、結局みなイスラム教徒であるテュルク語系の民族は抱いているのだ。アラビア語の表記はイスラムの表記である。〈力の夜〉[43]にアラーの御言葉はアラビア語で降臨した。アラビア文字こそがコーランの文字なのだ――

おっと、何だ？　コーランだって？　大丈夫かよ、チチェーリン、コーランの文字替えをやってしまったら、ただの冒瀆じゃすまされないぞ。おい、聖戦を闘う覚悟はあるのか？――プロパジアンは追われる。アラビア文字派の一群が叫びながら、新月刀を振りかざし、ぞっとするようなうす笑いを浮かべてバクーの町はずれの暗闇まで追ってくる。闇の中で見るすかすかのオイルタワーの骨組は、見張りの兵隊か。お楽しみを見るために、クル病、ハンセン病、破瓜病、肢体切断、その他の者が各種揃って、それぞれの引きこもり場所からぞろぞろ出てくる。みんなして、精油所の錆びた金属機械にもたれて観戦だ。見上げる空は原色のモザイク模様だ。ロシア革命でダッチ・シェルの派遣人員は帰国を要請され、イギリス・スウェーデンの技術者もみんな国に帰ったあと、かつての統治に使われた部屋のなか、箱のなか、それら統治の空隙のポケットに住みついた人びとだ。バクーはいま凪にある、撤退期にある。ノーベル一族がここから吸い上げていったオイル・マネーはノーベル賞の賞金となって配られた。[44] いま新油田が別の場所に、ボルガ河とウラル山

42　NTAに関するエピソードを書くに当たって、ピンチョンが下敷きにしたのは、アメリカの学術誌『スラヴ東欧圏研究』の一九五二年の巻に掲載された論文「ソヴィエト中央アジア・テュルク語系住人のアルファベット改革の諸問題」であることが知られている。そこに、この成功例も註記されている。ただし長続きはしなかった。

43　イスラムの教えによれば、その夜ムハンマドにコーランが啓示として与えられた。

44　第一次大戦開戦前、

夢の断片で触れられている。さあ、過去を吟味する時だ。地球の心の内奥からくみくみと汲み上げられる石炭の歴史を、きれいに精錬する時だ……

「中に入れ、ノリバリアン——早く」アラビア文字派が背後に迫る。油井やぐらが群れるところへ、赤褐の星々の間から追う者たちの喚きが容赦なく耳を突く。

ハッチ。最後のハッチが閉じ、錠が下りた。「待てよ、何だこれは？」

「おまえの旅立ちだ、ほら」

「いや、俺は——」

「神を拒んで、ぶった切られたやつらの仲間入りしたいのか。選択の余地はない、プロパヒアン、行くぞ……」

最初に彼が学ぶのは、自分の屈折指数を変化させる方法である。透明と不透明の間のどの数値も選べるのだが、実験の興奮も色褪せたころ、彼の選択は色味のない黒曜石の縞模様に落ちつく。

「お似合いだ」導者がつぶやく。「さあ、急げ」

「いやだ。オチャーリンに借りを返さんうちは……」

「そんなことが言える身ではない。やつはよそで裁かれる。おまえとはもはや関係のないことだ」

「しかし、あいつが——」

「神を冒瀆した。冒瀆者に対するイスラムの裁きには専門の機関があってな、天使がいて、制裁がある。念の入った尋問を経る。やつのことは放っておけ。進む道が違うのだから」

分子の性質はなんとアルファベット的であることだろう。分子の構造を見ていくと、そ

バクーの石油は、英国に設立された「ロシアン・ゼネラル・ペトロリアム」、英蘭共同の「ロイヤル・ダッチ・シェル」、ノーベル兄弟の資本でバクーに設立された「ブラノーベル」の三社が、八割以上を採掘していた。革命後、二〇年代末からは、ソ連による生産が安定的に進む。

われがNTAの全体集会にそっくりであることが見えてくる。「わかるか。自然の粗野な流動から取り出されて——形を与えられ、クリーンでまっすぐなものとなる。人が話す声としての言葉から文字を取りだした——流れて消えてゆくものにそうやって永遠の命を与えた——ときと同じさ。……これらがわれわれの文字、われわれの言葉なんだ。これらも加工、終止、切断、再結合、もろもろが可能である。新たに定義しなおすこともできれば、おたがい同士ポリマー化して繋げていって世界をつなぐ鎖にすることもできる。分子たちの永き沈黙の上に明らかなパターンが現れる——ちょうどつづれ織りの表面に模様が浮かび上がるように」

プロパジアンもやがて理解する。新テュルク文字の制定は、夢に出てくることさえない大昔から、意識もされずに続いてきた遠大なプロセスの一局面なのだと。ƢとGとの間の狂気の抗争も、やがて子供時代の些細な思い出と化し、うすぼんやりとした逸話になっていった。彼は超越したのだ。かつてチンパンジーのように上唇を尖らせていた意地汚い役人が、いまや冒険者となり、地下の流れに導かれて、おのれの進む路を、ゆく先を案じることもなく進んでいる。どこまで上流へのぼってきたのかの感覚さえも失せて、自分に見える世の理を永遠に見ることのできないヴァスラフ・チチェーリンを憐れなやつと思う気持ももはや消えた……

かくして印刷は、プロパジアンなしに、ひとり歩きを続ける。生乾きの校正刷を空中にかかげながら、手伝いの少年らが机の列を走りまわる。現地住人から印刷工が集められ、ティフリス[45]から飛行機でやってきた専門家から、NTAの組み方について速習の特訓を受ける。印刷されたポスターが、サマルカンド、ビシペク、ヴェルヌイ、タシケントの町々

45 グルジアの首都トビリシの旧称。

に貼られる、歩道に壁に、中央アジア史上初の印刷されたスローガンが、最初のファッキューの落書きが、最初の、警察長官を殺せというビラが。（そして実際殺しをやるものが現れる！　すげえぜ、アルファベットってのはたいしたものだ！）かくして、風吹きすさぶこの地で、シャーマンたちが大昔から演じてきた魔術が、いまや政治的な実効性を持ち始める。ジャキップ・クーランがＡＢＣの練習をすると、引っ掻くペンの音とともにリンチで殺された父の亡霊がＡやＢの書き方を練習するのが聞こえてくる・・・

だがそろそろ、チチェーリンとジャキップ・クーランが馬にまたがり、幾つかの低い丘を越えて、探していた村へ着くころだ。村人が集まって輪を作っている。その日は朝から祭りの宴だ。火がくすぶる。群衆の中央にできた小さな空間に若者がふたり。チチェーリンたちの耳元までその声は聞こえる。

これはアイトゥスだ。歌による対決。村中の人びとが集う輪の中心に一組の若い男女が立ち、からかい調子で、あんたのことは嫌いじゃないけどひとつ二つおかしなところがあるよね、例えばほら——とか指摘する。その脇で、ジャラジャランとかき鳴らされるコブスやドンブラから音楽が飛び出る。うまいセリフが出てくるたびに村人がどっとわきかえる。これは実に細心の微に入った芸なのであって、一回のセリフは四行、それを交互にうたっていくのだが、その四行の一、二、四番目は脚韻を踏まなくてはいけない。長さはどうであっても、とにかく一息でうたえればよいのだが、相手を侮辱することにもなる歌詞の扱いには注意が必要だ。村によっては、アイトゥスの合戦のあと何年も、パートナー同士が口をきかなくなってしまったケースもある。馬に乗ったチチェーリンとジャキップ・

46　それぞれ、ウズベキスタン、キルギス、カザフスタン、ウズベキスタンの都市の名。「ヴェルヌイ」とはアルマトゥイの旧称。

クーランがやってきたとき、ちょうど娘が青年の馬を標的にしているところで、その馬は――ちょっと、さほどじゃないけど、ズングリムックリ・・・っていうかおデブさんよね、すごーいデブ――と言われた方の青年はカチンときた。眉間にシワを寄せて、おまえなんか友だちみんな呼んできて家族もろともやっちまうからな――と矢継ぎ早のセリフに走る。みんな、ウームと静まりかえる。笑う者はない。娘はニコリとして、きっぱり歌いかえす。

あんたずいぶん飲んでるでしょ、馬乳酒(クムス)
あんたの言葉の出所は、きっとクムス
だって、あの晩どこにいたのよ
うちの兄さん、盗まれたって探してた、クムス

言ってくれるじゃないか。少女の兄が大笑い。輪の中の青年は面白くない。
「これはまだしばらく続きますな」ジャキップ・クーランは馬を下り、膝の関節を伸ばす動作を始める。「あの老人です、向うにいる」
ずいぶんと老いたアクン――カザフの吟遊詩人――が、クムスの杯を手に、焚火の近くに腰を下ろして、うとうとしている。
「確かか、あの爺さんが――」
「歌いますとも。かの地をずっと馬で回って、到着したところなんです。歌わなかったらアクンの名に恥じる」
ふたりは腰をおろす。発酵させた馬乳のカップがラム肉やレピョーシュカや苺と一緒に

向ってくる……若いふたりは依然として声の戦闘を続けている——と突然、チチューリノは理解した。そのうちきっと誰かが現われ、彼自身がその構想にかかわった新テュルク文字で、この歌を書きとめるだろう……そのことで、やがてこれらの歌は失われていくのだろうと。

ときたまアクンに視線を向ける。この老詩人は眠ったふりをしているだけで、実は歌い手に向けて、彼らをみちびく波を送っている。優しさの波を。残り火のぬくもりが感じられるのと同様に、老人の送る導きも受け止められるだろう。

ゆっくりと、歌詞が応酬されるたび、若いふたりの侮辱合戦に和やかさが生じ、滑稽味が増してくる。この村に大厄災(アポカリプス)を招いたかもしれない歌に、コミックな掛け合いの妙が生まれ、ヴォードヴィル芸人のやりとりのようになった。ふたりは自我の殻を破り、聴衆の楽しみのためにプレイする。少女の最後の言葉は——

あんたの口から聞きたいわ、結婚
ここで結ばれたふたりもいる、結婚
この暖かな歌の輪は
騒々しいさわぎはまるで、結婚

そして——あんたのことは嫌いじゃない、ひとつ二つおかしなところがあるけど、と続く。しばし、祝祭に弾みがつき、酔っぱらいは大声を上げ、女どもはおしゃべりをし、よちよち歩きの子供らが小屋から出たり入ったり。それから風が速さを増して放浪のシンガ

ーかドンブラのチューニングを始め、アジアの沈黙が戻ってくる。
「すべて書きとめる気ですかい？」ジャキップ・クーランが尋ねる。
「ああ、速記（ステノグラフィー）でな」チチェーリンはそのgの音にいささか声門の擦れを混ぜ入れた。

《アクンの歌》

この世の果てを見てきたぞ
そこから風が吹きだす肺を
畏るべき姿を見てきたぞ
ジャンブル[47]だって歌えるまい
心の恐怖は鋭くとがり
硬い鋼も切れるほど

太古の話に出てくるのだ
コルクート[48]も歌い始める前のこと
シュルガイ製の最古のコプスで
最古の歌が歌われる前のこと
この世の果てにあるという
キルギスの光の話

47 ジャンブル・ジャバジェフ（一八四六～一九四五）。一九二〇年代にはカザフ共和国はもとより、ソ連邦全体に名を馳せていたアクン。

48 カザフスタンに伝わる、伝説上の歌の開祖。死すべき人間たちの世界を逃れて自然に向かい、シュルガイの樹からコプスを作って歌ったとされる。

[illegible]
[illegible]
ウシの頭骨の向こうから
神々の動物が騒いでいる——
砂漠にみずから黒い岩を
この世が果てる最後の日々を

ソノ地があれほど遠くないなら
言葉が知られ、話されるなら
神は黄金の像たりうるし
本のページで表せようが
目にしたソレは〈キルギスの光〉
ほかにソレを知るすべもなし

ソノ声は耳をつんざき
ソノ光は目をつぶし
砂漠の宮を轟かす
ソノ顔は伝えられない
ひとたび〈光〉を見た者は
もはや同じでいられない

ソノ〈光〉を見てきたのだ
闇が生まれる以前の国で
アラーの神すら届かぬところで
わが髭はご覧のとおりの氷の野
杖にすがって歩く身だが
〈光〉のもとでは誰もが赤児

もう遠くへは歩いてゆけぬ
赤児は歩みを学ばねばならぬ
わしの言葉が聞こえるか
それは赤児のたわごとだ
〈キルギスの光〉に盲(めし)いた
我は赤児、〈全地〉を感じる

北へ、北へ、六日のあいだ馬をすすめ
灰色の死の渓谷をわたり
岩の砂漠をこえて
白き天幕(ジュルト)を被った山へ
すべて事なきを得るならば

だがもし未見になるのをおそれ
あかあかとした焚火を浴び
妻と一緒にテントにいるなら
ソノ〈光〉にはけっして会えない
おまえの心は齢で重い
おまえの眼は眠りに閉じる

「書きとめたぞ」チチェーリンが告げる、「行こう、同志」。離れゆくふたりの背後で、焚き火が消され、弦をつま弾く音も祭りの騒ぎもやがて風に飲みこまれる。

深い谷へ馬を進める。遠く北方で白い山頂が、没する寸前の夕陽を受けてまばたいた。

峡谷はすでに夕べの影の中にある。

〈キルギスの光〉まではチチェーリンも到達するだろう。だが自分の誕生にまで行きつくことはあるまい。吟遊詩人（アクン）の心がなければ無理である。夜明けの直前に、彼はソノ光を目にするだろう。そして十二時間後、砂漠に横たわった彼は、尖った山頂の影がぐんぐん東へ伸びてゆく中で、バビロンより巨きな太古の都市を、みずからの背の下に感じるだろう。地下一キロの圧力下で息苦しい鉱物的睡眠にひたる都市を。彼の側には、人形を気遣う子供のようにしてジャキップ・クーランが侍っている。二頭の馬の首筋に流れた汗が、干からびた花のレースのようだ。が、いつの日か、チチェーリンは忘れるだろう。山々のこと

を、彼に対する無邪気で揺るがぬ愛を抱いた無国籍の娘たちのことを、朝の地震を、雲を動かす風を、粛清と戦争と、背の下の大地に消えた何百万もの魂を忘れるように、〈ソレ〉を忘れていくだろう。

だが〈ゾーン〉に、夏の〈ゾーン〉に隠れて、〈ロケット〉が待っている。彼はまた引き入れられていくだろう、以前と同じように・・・

□□□□□□

先週、イギリス占領区で、スロースロップはトンマなことにティーアガルテン[*1]の人工池の水を飲んで腹をこわした。水は沸かして飲めというのが近頃のベルリンでは常識だというのに。その際、地元の人はいろいろ植物を入れて煎じたりする。たとえばチューリップの球根。これはしかし、こわいのだ。球根の中心には命にかかわる毒があるって話だから。それでも連中はやめるようすがない。まもなく〈ロケットマン〉として知られるスロースロップは当初、チューリップの球根のようなことは教えてやろう、ささやかなアメリカ的啓蒙を授けてやろうという気でいた。だが今ではすっかりめげた。ヨーロッパの傷を掲げて、その緞帳の向こうでコソコソしている彼らに愛想をつかした。波打つ紗幕の影から彼らを引っぱり出そうにも、最後には必ず剝ぎとることのできない幕が控えているのだ……

彼はいま、真夏の繁りと開花を迎えた樹木の下——といっても、多くはなぎ倒され、炸裂し、割けた傷跡をさらしている。日射しのなか、乗馬道から細微なおが屑がおのずと舞い上がるのは、消えた馬の亡霊が平和に戻った早朝の公園を、走りもどりしているからか。夜通し眠れず、喉がからからのスロースロップは、腹這いになって水をすすった。水場に

1 ベルリンの中心、ブランデンブルク門の西側に広がる大公園。戦中の薪不足で樹木は倒され、終戦直後はイギリス占領軍によって芋や野菜の畑が作られた。

やってきた大西部の無宿者みたいに。・・・バカ者め。吐き気、急性腹痛、下痢。これで、チューリップの球根のことを講釈しようだなんて呆れたもんだぜ。破壊された教会の向かいにある、無人の地下室へどうにかこうにか這い進んだ。体を丸くし、それから数日、発熱、悪寒、しみ出る下痢が酸のように肌にヒリヒリするなかで途方に暮れていた。同じ穴蔵にもう一人、映画で見るナチの悪漢のようなやつがいて、握り拳を苦しい腹に押しつけ、ヤー、マタ糞(クソ)を垂らしゅんか、と詰問する。生きてバークシャーに帰れる日が来るのだろうか？　ママ、ママ！　戦争は終わったのに、どうしてぼくは帰れないの？　母ナリーンの二重顎の先は、金星章[2]の輝きを受けてキンポウゲの花のよう、窓辺でニンマリするだけで応えてくれない・・・

もう辛いったらないのだ。夜は、自分を追い回すロールスロイスとブーツの足跡の幻聴に悩まされる。外の通りではバブーシュカを被った女たちが、やる気なさそうに溝を掘っている。舗道脇には埋めこまれるべき黒い鉄のパイプが積み上がったまま。一日ぶっ通しでおしゃべりが続く、班が代わり、日が暮れてからもしゃべり止まない。スロースロップが横たわる物陰に日が差すのは一日に半時間ほど。ちっぽけな温もりをもたらす日溜まりは、すぐに他の連中のところへ移っていく——あばよ、わるいけど、時間は守らんとな、そいじゃ、雨が降らなきゃまた明日、へへへ・・・

一度スロースロップはアメリカ特務班が通りすぎる音で目をさました。リズムをとるのは黒人兵の声——ヨー・レップ、ヨー・レップ、ヨー・レップ、ヨー・ライ、オー・・・レップ・・・ドイツの民謡のように、八拍目の right(ライ) のところで音が高くスライドする——スロースロップは想像できる、踵を強く打ちつけて型どおり腕を突きだし頭を左に回す、

2 息子が"名誉の戦死"を遂げた母親に与えられる。

本物多神の時間に教わったあの動きが・・・そいつのスマイルが見える。一瞬、我を忘れそうになった。駆けよってアメリカへの政治亡命を求めようかという狂った考えが湧いてきたのだ。だがその力も出ない。胃腸も衰弱、気力も減退。横になったまま聴いているだけ、行進の足音と掛け声が去っていくのを、祖国のサウンドが消えていくのを。・・・WASPの亡霊のように。足を引きずりながら記憶の彼方へ消えてゆく古い時代の根無しの流民（DP）のように。彼らが群れる忘却の貨物列車の屋根の上に流民の、そのナップサックと哀れに流民的なポケットには、誰にも読まれぬまま新たな宿主を求めるアジビラやパンフレットが詰まっていて、それらがどっさり、ここで倒れたままのロケットマンに永遠に託される。ヒリヒリする頭と、ヒリヒリするケツの穴、ふたつのヒリヒリが混在するどこかで彼は、消えゆく黒人兵のリズムに合わせてある幻想を練り上げる――エンツィアン、例のアフリカ人が自分を見つけて、どこか出口へ連れていってくれないだろうか・・・

というのも、実際、彼と二度目の対面をした憶えがあるのだ。首都ベルリンの南方、葦の茂る沼のほとりで、髭ぼうぼうで、汗を垂らし、体臭を放ちながらベルリン郊外へ向かうロケットマンが、彼の人民の間を躓きながら歩いている。太陽は霞み、沼地はスロープロップ以上に臭い。ここ数日の睡眠は二、三時間ほどしかない。ふと見ると、ロケットの部品を求めて沼底をせっせとさらっている〈シュヴァルツコマンド〉がいた。黒い鳥が隊列をなして空をクルーズする下で、アフリカ人隊員の出で立ちは、古びた国防軍、SSの制服、オンボロの市民服など、いかにもゲリラ風にバラバラで、共通なのはひとつの徽章だけ。しかるべき場所ではいつも身につけている――赤、白、青、三色に塗られた金属製の徽章である。

一九〇四年、ヘレロ族の反乱をつぶすため南西アフリカにやってきたドイツ軍の兵士が付けていた——広縁の中折帽の片側をそれで留めていた——徽章を元にしている[*3]。〈ゾーン〉のヘレロにとって、これは何か深い、ちょっと神秘的な意味を持つのだろう——とスロースロップは想像する。A4の制御パネルを収めた車の中の発射スイッチに付いた五つの頭文字が表すものをスロースロップは知っている。Kは「準備完了(クラール)」[*4]、Eは「排気(エントリュフトゥング)」[*5]、Zは「点火(ツュンドゥング)」、Vは「前段階(フォルシュトゥーフェ)」[*6]、Hは「本段階(ハウプトシュトゥーフェ)」[*7]——しかしそれをエンツィアンには隠している。

丘の斜面に腰をおろして、パンとソーセージを食べるふたり。まわり中から集まってきた子供たちが、近くを駆けぬける。誰かが軍用テントを建て、誰かがビールの小樽を持ってきた。十数名の寄せ集めからなるブラスバンドは、すり切れた金と赤の制服を着て房飾りを垂らし、『マイスタージンガー』[*8]の曲を演奏する。煙が厚くたなびく。遠くから酒飲みどもの大声が、歌になり大笑いになって届く。今日は〈ロケット昇天祭〉[*9]、この国に新たに誕生した祭日である。やがて人びとはヴェルナー・フォン・ブラウンの誕生日と春分の日を一緒に見立て、往時の春の祝いと同じスピリットを舞台で表現しようとするだろう。町から町へ〈花船〉を走らせ、若き〈春〉と蒼白の老いた〈冬〉との闘争が演じられる代

3 ドイツ軍に徴用されたヘレロ族の兵士も同じ徽章をつけていたことが知られている(『GRC』)。

4 英語の clear (ed) に相当。ロケット発射の障害がすべて取りのぞかれたことの確認の合図。

5 これによってアルコールと液体酸素の燃焼室への吸引が始まる。

6 補助燃料(過酸化水素と過マンガン酸塩)の燃焼によってターボポンプが作動し、アルコー

わりに、若々しい〈科学者〉を演じる役者が、道化役の〈老重力〉と一緒に回り、子供らのにぎやかな笑い声を誘うことになるかもしれない・・・

〈シュヴァルツコマンド〉の隊員は泥の中に膝までつかって一心不乱に部品の引き揚げに励んでいる。収奪しようとしているA4は、ベルリン死守の闘いで打ち上げに失敗したもの。弾頭が爆発しなかったのだ。彼らは機体の眠る墓場のまわりに厚板の囲いを打ち込み、バケツや桶をリレーして陸地へ泥を掻きだしている。近くにライフルや装具が積まれている。

「マーヴィ少佐の言ってたことは事実だったってことかい。あんた方は武装解除されていないって」

「居場所さえつかまれていないのだからな。我らはサプライズなのだよ。パリには、われわれの実在を否定する強力な一派がいるそうだ。いや、ワタシ自身、自分の存在にしばしば自信が持てなくなるんだが」

「どういうことだ」

「いや、われわれはここに存在するとは思うんだが、しかしそれはあくまでも確率論的な話だろう。向うにあるあの岩は、まず一〇〇パーセントの確かさで存在する。岩自身、そのことを知っているし、周りも知っている。だが、われわれが今ここにいる確率は、五割よりちょっとマシという程度なのだよ。その数値が、ちょっと変わるだけで、われわれは消えてしまう——ヒュッ!と、いとも簡単にだ」

「なんちゅう話ですか、大佐」

「いや、われわれの故国に行ってみれば、奇妙でもないのだ。四十年前、南西アフリカで

ルと液体酸素の吸引が加速される。

7 ロケット本体の浮上開始のコール。

8 ヴァーグナーの楽劇『ニュルンベルクのマイスタージンガー』(一八六八年初演)。

9 一九一二年三月二十三日。

われわれはほとんど絶滅しかかった。理由はない。きみに理解できるかね？　民族が理由もなく消えるということが。「神の思し召し」と考えても、心安らかにはなれなかった。ちゃんと名前も軍務記録もある、ブルーの軍服を着たドイツ兵が、ぎこちなく、良心の咎（とが）めもなく、殺しをやるんだ。毎日毎日、索敵殲滅（サーチ&デストロイ）の使命[10]を果たす。それが二年も続いたのだよ。命令の出所はひとりの人間だ。フォン・トロータという生真面目な虐殺人さ。慈悲の親指が、この男の鱗の皮膚にふれたことはない。

「ものごとが悪い方に転じそうになるときに、われわれはこんなマントラを唱える。ンバ＝カイェレ。きみにも役に立つかもしれない。ンバ＝カイェレ。『われは過ぎゆかれた』[11]という意味だ。フォン・トロータ将軍に殺されずに残った者にとって、この言葉は、こんな意味も持つ——われわれは歴史の外に立ち、あまり感情を動かすことなく成り行きを見守ることを学んだと。やや分裂症気味だが、これがわれわれの抱いている、統計学的存在感覚というやつだ。われわれが〈ロケット〉をこれほど近しく感じる理由のひとつはだね、思うに〈A4〉という集合体（アグレガート）が偶然に支配されて生きるその存在のありようが、われわれのそれと非常に近いことを鋭く意識させるからだ——お互い、ほんと些細なことに左右されるわけだよ・・・タイマーに埃が入りこんだだけで回路の接触が切れてしまう・・・人の指がふれて目に見えない油膜がバルブの内側についたというだけで、液体酸素を注入した瞬間に燃え上がって機構全体の爆発を引き起こす——実際に見たことがあるんだよ・・・雨が入ればサーボ内のブッシングは膨張するし、スイッチへのリークも起こる。腐食は、ショートへ、シグナルの流失へ、早すぎる燃焼終結（ブレンシュルッス）に通じる。その結果生き残るのは再度〈アグレガート〉だけ、死んだ物質の細片の集合だ。もはや動くことも、ひとつの形ある〈運

10　148ページ註13。

11　原文は passed over。キリスト教神学の「過ぎゆかれし者」という言葉（214ページほか）と響きあう。

命〉をもつこともできない——やめなさい、スカッフリンダ、そんなふうに眉を動かすのは。〈ゾーン〉にいて、ワタシも少々原住民化したかもしれないが。きみだってここに長いこと滞在すれば、きっと〈運命〉についてあれこれ考え出すだろう」

沼地の向こうで鳴き声がする。鳥たちが空へ飛び立つ。丸く黒く、ブィヤベースの空に粗いコショーの粒をばらまいたかのよう。駆けっこの子供たちが地面を滑って留まり、楽隊は小節途中でラッパを離した。エンツィアンは立ち上がり、仲間の集う所へ大股で走りさっていく。

「どうしたのだ、わが沼の男たちよ?」兵士たちは、笑いながら、泥をつかんで指揮官に投げつけた。エンツィアンは首をひっ込め、身をかわし、泥をつかみ取ると投げ返す。岸に立ったドイツ人らは、こいつらには規律のカケラもないのかと呆れて、目をパチクリだ。板に囲われた沼地から、泥にまみれたトリムタブ[12]が二枚、姿を現した。二枚の間は十二フィートの泥である。エンツィアンの喜びあふれる白い歯が疾走する。その数メートル後を、引っ掛けられた泥をボタボタ垂らしつつ彼の体が追いかけ、囲いを飛び越えて穴の中へ。そしてシャベルをひっつかむ。その瞬間、ちょっと儀式ばった空気がただよった。アンドレアスとクリスティアンは彼の両側に侍り、翼の泥をこすり取りつつ、掘りだしにかかる。尾翼の表面が、とうとう一フィートほど見えてきた。さて、ナンバー確認だ。ンガアロレルエが屈んで泥を払うと、スラッシュの線と白い2が現れる。続いて7。

「オウタゼ」。失望の表情がみんなに伝わる。

スロースロップはピンときた。「ゼロが五つ並んだのを期待してたんじゃないかい」と、後でエンツィアンに言ってみた。「00000、当たり、でしょ!」わかっちゃったもん

12　飛行中の機体の姿勢を調整するための小翼片。

ネ——
　両手を投げ上げ、「バカな。そんな番号はありえない」
「確率ゼロ?」
「それは、どれだけの数の人間が探し求めているかによると思う。きみの仲間も探しているのか?」
「それは知らない。たまたま耳にしただけでね。おれには仲間なんかいないよ」
「シュヴァルツゲレート、シュヴァルツコマンド。スカッフリング、どこかに誰かのアルファベット順のリストがあったとしてごらん。どこかの情報部門にインプットされているとか。どこの国でもそれはかまわん。だがどういうことになるね。そのリストの上で、Schwarzgerät と Schwarzkommando とは隣同士にくるだろう。たまたまそういう位置関係になる。それだけのことだ。アルファベット上の偶然だ。われわれが実在していなくてもかまわない。シュヴァルツゲレートのほうもだ、だろ?」
　ミルク色の雲からこぼれる光で泥土がパッチ状に輝いている。物の輪郭の向こうに白い影がチラチラして、写真のネガのような光景だ。「こんな薄気味わるい場所で」とスロースロップ、「そんなこと言われてもねえ」
　スロースロップの顔を見つめるエンツィアン。口元がほころんでいるのかどうか、圧倒的な髭のためにわからない。
「じゃあ聞きますけど、それを探してるのは誰なんですか」謎めいたことばかり言って答えてくれないんだから——こっちが突(つつ)くの、待ってるのかな。「マーヴィ少佐かな」スロースロップがいった、「そ、それと、あいつ、チチェーリンもですか!」

やったぜ！ 名前の効果、テキメンだ。エンツィアンの表情が一瞬のうちに固まった。

まるで敬礼のような、ブーツの踵の踏み鳴らしのような素早さだ。「聞かせてはくれまいか」と言いかけて、方向を変えた。「きみはミッテルヴェルケの坑道にいたわけだ。マーヴィの部隊は、ロシア人としっくりいっていたのかね」

「そりゃもう、親友同士のようでしたよ」

「どうも、占領国がつい最近、反シュヴァルツコマンドの旗印のもとに団結したようにワタシには思えるんだ。アンチ・ブラック人民戦線を形成したようにね。きみが誰かも知らんし、敵と味方の線引きもわからんが、自分らの排除が画策されているのはわかる。さっきハンブルクから戻ってきたところなんだが、急襲があった。難民の襲撃を装ってのものだったが、イギリス軍当局の後ろ楯があり、おまけにロシアの協力もある」

「そりゃお気の毒に。何かお役に立てますかね？」

「無謀はいかん。事の推移を見守っていよう。きみについては、ひょいひょい顔を見せるという、そのことしか知られていない」

日暮れ時、何百万という数の黒い鳥が近くの枝に舞い降りる。木々が鳥で膨れあがり、神経細胞の樹状突起のような枝々が太くなり、これから重要なメッセージが送信されようとしているのか、さえずる軸索が黒みを増していく・・・

スロースロップが熱に浮かされた身を地下室に横たえる、後日のベルリン。尻の穴からピリピリが毎時数ガロンの勢いで漏れ、熱心な眼を宙に向けて走り回るネズミを足で蹴散らそうにも振りしかできない。昨今のベルリンでネズミは新たな高い地位を得ているということを信じるまいとがんばるが、太陽は沈んだままふたたび昇る気配も見えないいま、

CamScannerでスキャン

彼の精神衛生を示すグラフは最低点に落ちこんだ。アイドリング状態のスロースロップの心の中で空回りしている言葉といえば――シュヴァルツゲレートは〈聖杯〉じゃない、〈イミポレックスG〉のGは、gral の意味じゃない。それにおまえは騎士でも英雄でもない。強いてたとえるなら、タンホイザー、[13] あの大バカ者の漂泊詩人ってとこだな――ノルトハウゼンの山の下に入りこんだし、ウクレレの伴奏で唄のひとつふたつは歌える。それに、スロースロップ、今おまえ、罪の泥沼を転がってるという気がしないか。いや、ご先祖のウィリアム・スロースロップが一六三〇年、アーベラ号[14]の船べり越しにゲロを吐いて過ごした日々に口にした「罪」って言葉と同じ意味じゃないかもしれん。……でも、おまえがしてきたのは、考えてみりゃ、他人の――女神ホルダの、どこかしらの山中のヴィーナスの――航海に相乗りしてた彼女の、そいつの、ゲームをプレイしているだけじゃないのか……それが取り返しのつかない悪徳のゲームだということは承知していながら、そのくらいしかやることがないのでやってるだけ、だからって正当化できないぞ。それに、タンホイザーというなら聞くが、おまえのために奇跡の花が咲くという教皇様の杖はどこよ？

それが実は、スロースロップも、彼のリザウラに――しばらくの間くっついて、また離れていく女性に――出くわすところなのである。タンホイザーなるミンネゼンガーはリザウラを捨て、自殺に追いこんだのだが、スロースロップはどうだろう。元映画女優グレタ・エルトマンをどういう運命に引き渡すのかはまだ明らかではない。ノイバーベルスベルクのハーフェル川のほとりで待つグレタ。だがその像は弱々しい。〈ゾーン〉の至るところに、いや海外にまで、配給された数知れぬフィルムの中で生きつづけている映像の力

13 中世ドイツの伝説。ヴァーグナーが脚色した歌劇（一八四五年初演）で知られる。ミンネゼンガー（宮廷恋愛歌手）のタンホイザーは、女神ホルダ（歌劇ではヴェーヌス）の誘惑により、山中の洞窟での性愛に耽り、恋人リザウラ（歌劇ではエリーザベト）の愛をないがしろにした罪を悔いて教皇に懺悔するが「枯れ木の杖に花が咲くまでは許されない」と拒絶される。悲劇のあと、教皇の杖が実際に花をつける。

14 389ページ註27参照。

CamScannerでスキャン

[illegible]天使たちは、みな歌手にとられ、あるいはあとにとりおきとられ、いま彼女を染めるのは、天の神から降り注ぐ、おそろおそろしい、畏ろしく蒼白的な白色光だけである。……眉毛を抜いたあとにペン描きした眉、白髪の筋の混じった長い髪、両手は全色取りそろえた指輪の濁りと醜悪で重たげだ。戦前のシャネルのダークなスーツを着込み、帽子は被らずスカーフを巻き、いつも一輪の花を差しているグレタには、中央ヨーロッパの夜のささやきが霊気のようにつきまとっている。霊気は、太りゆく肉によって破損した美貌のまわりに吹いて、ベルリンの皮膚のカーテンをはためかせる。スロースロップが近づけば近づくほど妖気を強めて……

ふたりの出会いはこうだ。ある晩のこと、スロースロップが食糧を狙って公園の野菜畑へ入っていく。何千人もが夜空の下で暮らしている。その焚火を避けてこそこそ、こちらから青物を一握り、そっちからはニンジンか飼料ビート、生きてゆくためのわずかの糧が欲しいだけなのに、見つかると石や材木が飛んでくる。この間など、不発手投弾が飛んできた。爆発はしなかったが、彼の股間に温かい便が漏れた。

今夜彼は〈グロッサー・シュテルン劇場〉近くを歩きまわっている。もうとっくに、夜間外出禁止の時間帯だ。木を燃やす煙の臭いと腐敗臭とに覆われたベルリンの街。頭を砕かれた辺境侯や選帝侯の石像が並ぶなか、キャベツなど植わっていそうな場所を偵察していると、突如、あれれ、これって絶対、ウソそんなバカな、でも間違いないリーファ(マリワナ)の匂いだ！　ずいぶん近いぞこりゃ。モロッコのリフ山の斜面に茂る、湯気のでるような花をつけた、樹脂たっぷりの、夏を彩る大麻様の香ばしい煙が、倒木の下の茂みと下草を抜け

彼の鼻先をくすぐる。枝にすわっているのは何者?

倒れた木の根が縁どるシーンは、まさにレプラコーン[15]の野営地といったところ。その中央、空洞になった幹の中にいたのは、エミル・(〝ゾイレ〟)・ブマー、一時はヴァイマル一の悪名高き麻薬通の怪盗として恐れられた。両脇にはふたりの美女が寄りそい、燃えるオレンジの星をうれしそうに回している。不良老人め。スロースロップは気づかれぬまま頭上から覗きこんだ。ブマーはほほえんで、手を伸ばし、吸っていた残りを差しだした。泥で汚れた長い爪でスロースロップがそれを摘む。こりゃどうも。スロースロップはしゃがみ込む。

「ヴァス・イスト・ロース(どうしたことだか)?」とゾイレ、「いきなり大麻(キフ)に行き当たった。アラーの神がわし等にほほえんだってか。いや、アラーはみんなにほほえんだのだが、たまたまわし等が目の前にいたということか・・・」ドイツ語で「酸(アシッド)」を意味する「ゾイレ」の通称、その由来は一九二〇年代に遡る。当時彼はウィスキー・ボトルにシュナップスを入れて持ち歩き、まずい状況になると、それを発煙硝酸に見せかけて振りかざしていたのだ。太いモロッコ産のリーファをもう一巻きゾイレは取りだし、スロースロップが、我が忠実なるジッポ・ライターで火を点ける。

その日ブロンドのトゥルーディと、お色気たっぷりのバイエルン娘マグダは、ヴァーグナーのオペラ衣装の保管場所に忍びこんであれやこれや失敬してきた。そこには、二本の角が飛び出たとんがりヘルメットも、緑のビロード地のロングケープも、バックスキンのズボンもある。

「ヘーイ」とスロースロップ、「なかなかシャープな衣装だねえ」

15 童話「小人の靴屋」や『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』などでも知られるアイルランドの髭の妖精。地中の宝物のことを知っている。

「あなたのものよ」マグダがほほえむ。
「おっと・・・そりゃいかん、〈中央交換所〉に持っていきなよ。いい値がつくんだ・・・」
だがゾイレは言い張った。「おまえさん、気づいたことはないのかね。人間、運に見放されてボロボロのときは、必ず助っ人が現れるもんさ」
石炭のように燃える大麻を女たちが回す。その火がヘルメットの金属面に、さまざまな形、濃さ、色合いで映りこむのを見つめている・・・フム、スロースロップは気がついた、このヘルメット、角をとればまるでロケットの頭の形だ。いま履いてるチチェーリンのブーツに、三角形の革の切れ端を縫いつけて・・・あとは、そうだ、ケープの背に大きな真っ赤の大文字Rをつける。そうすりゃ——これは「ローン・レンジャー」のトントが、かの伝説的な待ち伏せの後で試みたのと同じくらいドラマチックな瞬間ではないか[16]——「ラケーテメンシュ！」[17]ゾイレがヘルメットをつかみ、角をはずして大声で叫んだ。名前自体は空虚であっても、名づけの行為は、それ自体が・・・
「へえー、あんたも同じこと考えるの」[18]妙な話だ。ゾイレは慎重に手を伸ばし、スロースロップの頭上からヘルメットを被せる。儀式でもするように、両側からケープを掛ける女たちの手つきも儀式めいている。トロールの偵察隊は、地下の住人に報告するため、すでに伝令を遣わせた。
「これでよしと。実はな、ロケットマン、ちょっと聞いてほしいんだが、わしはいまちょっとしたトラブルに・・・」
「はあ？」スロースロップはいまロケットマンをどうやって派手に売り出すか、想像をフルに膨らませていたところだった。人びとが彼のもとに食糧とワインと乙女を運んでくる。

ャーのダン・リード隊長と共に待ち伏せの襲撃で死んだと思われた弟のジョン・リードは、インディアンのトントに助けられ、正義の味方「ローン・レンジャー」に変身する。

17 「ロケット人間」を意味するドイツ語。ゾイレは（より一般的な）Raketemann ではなく、Raketemensch と言った。なお、アメリカン・コミックスにおいて「ロケットマン」は、一九四一年発刊の『スクープ・コミックス』で、「ロケット・ガール」と同時にデビューしている。

18 612ページではエンツィアンが名づけの行為（act of naming）の持つ魔法の力について考えていた。

CamScannerでスキャン

その総天然色の図柄には、軽やかなスキップと「ラララララ」の歌声がいっぱい。空爆されたリンデンの樹からビフテキの花がさき、ベルリンの街には大きなロースト・ターキーがソフトな霰のように降りおちる。さつまいもと、そして、う〜ん、とろけたマシュマロが、大地からフツフツと湧いてくる・・・

「配給タバコ、持ってるの?」とトゥルーディ。スロースロップ、いやロケットマンは、しわくちゃになった半箱のタバコを差しだす。

大麻が次から次へと回ってきて、木の根に囲まれたこのシェルターに、赤い先端の軌跡が走る。みんなの頭から、それまでの話の記憶が失われる。大地の匂いが包む。飛び交う虫が風を起こす。スロースロップの煙草にマグダが火をつけてくれた。吸い口にキイチゴに似た口紅の味。え、口紅? 今時口紅とは・・・いったいコイツら、どんな世界に出入りしているんだ?

とっぷり暮れたベルリンの空に星が出ている。見慣れた星だが、こんなにくっきりと並んだのを見るのは初めてだ。自分自身の星座を作れそうなほどである。「そうそう」ゾイレが思いだす。「わしはいまトラブルに巻きこまれていて・・・」

「それよりおれ、腹ぺこなんで」スロースロップは今そのことを思いだした。

トゥルーディがマグダに話している。ボーイフレンドのグスタフがピアノの中に住みたがっているのだそうだ――「足が飛び出てるのしか見えないのよ。中に入ったまま、みんなぼくが嫌いなんだ、このピアノも嫌いなんだって叫んでるだけ」。ふたりが笑っている。

「中で弦をひっかいてるんでしょう?」とマグダ。「すっごいパラノイドね」

トゥルーディの足は、プロシア人らしく大きくてブロンドで、脛に生えた金の繊毛が星

明りの下できらきら踊っている。きらめきは膝の暗がりを抜けてスカートの下へ走りこんでは戻る。ガランドウの木に囲われた内側で星屑がまたたくのだ。…包みこむ空洞の幹は巨大な神経細胞。樹状突起がシティへ、夜へ、伸びる。全方位からシグナルが来る。過去からもだ。未来からはどうなのだろう…

いつもビジネスのことが頭から完全には離れないゾイレは、体を転がし、足のほうへ身を流し、どれかの根にしがみついては、頭のいちばん休まる位置を捜している。マグダはヘルメットの穴に片耳をもっていって、棒でロケットマンのヘルメットを打ち鳴らしている。いくつもの不協和音が重なって響く。それぞれが音程をぜんぶ外しているから、一緒に鳴ると、とても変な響きだ…

「いま何時だか見当がつくか」見回すゾイレ・ブマー。眼がすわっている。「わし等、〈シカゴ・バー〉に行ってる時間ではないか？　それとも約束は昨夜だったかな？」

「忘れたわ」トゥルーディがくすくす笑う。

「いいか、あのアメリカ人とは大事な話があるんだ」

「ねえ、エミル」トゥルーディがささやく、「心配しないで。その人はきっと〈シカゴ・バー〉にいるわよ」

偽装が必要だ。四人はこみ入った策に出る。ゾイレのジャケットをスロースロップが着て、トゥルーディが緑のケープをまとう。マグダがスロースロップのブーツをはき、スロースロップは、ポケットにマグダの小さな靴を入れたまま、ソックス姿で歩く。みんな木っ端や草葉を集めてヘルメットを一杯にする。それをゾイレが手に持って、マグダとトゥルーディは、スロースロップにバックスキンのきつめのズボンをはかせる。膝っ小僧を地

CamScannerでスキャン

面につけて、スロースロップの脚や尻の上をふたりの手がさすっていく。セント・パトリック大聖堂にボールルームはないが、このズボンもそれは同じ。[19] スロースロップの硬く、デカくなったペニスが落雷のように痛む。

「イギリスの男にしちゃ、なかなかだわね」女どもが笑う。仰々しい形(なり)のスロースロップはよろけながら三人の後をつける。視界は一面さざ波立って網目状に交錯し、まるで雨のようだ。手はガツンガツンで石のよう。ティーアガルテンから外へ。散弾を浴びたライムの木や栗の木の列を過ぎ、道から道、そして道ならぬ道へ。さまざまな国のパトロール隊がたえず通りすぎる側を、ラリラリの四人が前にのめって土を舐め、ゲタゲタ笑いだすのをこらえている。スロースロップのソックスは露でグショ濡れだ。戦車が通りで演習をしている。アスファルトと石屑の嶺をキャタピラがかみ込む。醜悪なトロールたちも木の精ドリュアスと空地で遊んでいる。橋や林に籠もっていた彼らも、五月の猛爆撃で解放されて、今やすっかり都市住人だ。「あの人ダサイの」、流行遅れの若者をトロール族の小娘が批評する——「何ひとつ〝木から抜けてない〟んだから」。手足がもげ、骨組を露出させた彫像が、鉱物的な鎮静の中に横たわる。フロックコート姿の官僚の大理石のトルソ像が、色あせて溝の中に落ちている。ふむ、どうやらベルリンの中心街に着いたようだが、それにしては、おっと、アレは何だ——

「気をつけろ」とゾイレ、「この辺、足もとがブニョブニョだぞ」

「あれは何なのだ?」

あれか、あれは、あれあれ、ありゃ、キング・コングじゃないか。さもなきゃその親戚だな。しゃがみ込んで、なんと、人通りの中でウンチをしている! なのにトラック一杯

19 マンハッタンのど真ん中にある由緒ある大聖堂にダンスホールはない。このズボンにも股間部にスペース(ボールルーム)はない、というシモネタの洒落。

に乗りこんで通りすぎるロシア兵たちは、誰一人気に留めるふうもない。特上の帽子を被り、惚けた微笑を浮かべた連中は、轟々と音を立てて通りすぎてしまう――「ヘイ！」スロースロップは叫びたい、「あのでっけえ、ゴリラか何か知らないけど、見えないのかよ、おい、どうなんだ・・・」だが幸いなことに実際叫びはしなかった。近づいてよく見ると、そのしゃがんだ怪物は、爆撃を受けた帝国国会議事堂（ライヒスターク）の建物だと判明。爆風にやられ、炎にやられ、爆発の圧力を受けてあらゆる方向に黒くひん曲がっている。硬いこだまが響き渡る、黒いカーボン紙のようになった内側には、キリル文字のイニシャルや五月の爆撃で命を落とした仲間の名前が白く書かれている。

ベルリンはこんなだまし絵でいっぱいだ。スターリンの大きなポスター（石版多色刷）[20]は、どう見たってスロースロップがハーバードで最初にデートした女子学生に見える。口髭や男の髪も、たまたま（口紅みたいに）付けているというだけで――そうさ、間違いない、あの娘の名前スターリンだったんだ・・・そのときスロースロップの耳に二十もの早口が一斉に――ほら、急いでしまいこめ、やつが来たぞ、すぐに角を曲がるぞ――だがその声もちゃんと聞こえてこないうちに、見えた、舗道にふたつ、ぽっとり盛り上がったパンの生地。白い布の上で、もりもり膨れあがってくる――すげえ、みーんな腹ぺこなんだ。同じ考えに、みんなが取り憑かれる。ワーオ！ パンの生地じゃないか！ あの怪物にやるのか・・・おっと、あれは議事堂の建物だったか、じゃ、これもパンじゃなくて・・・と思って見ると、明らかにこれは今日の瓦礫から掘り出された人間の死体だった。どれもちゃんと米軍の標識がついた寝袋に入れられている。しかし、ただの目の錯覚じゃない。こいつら死の床から起き上がったんだ。復活してパンになった。わかったもんじゃないぞ。夏

20 〈ゾーン〉へのソ連の進入とともに、ベルリンに多数貼られた巨大な肖像ポスターのこと。

が終わって空腹の冬になれば、われわれは何を糧にしているのか――クリスマスになるころには。

ベルリンでスモーカーのためのヤミ取引の中心が悪名高き〈フェミナ〉であるなら、ドーバーにとってのそれは〈シカゴ〉だ。ただし〈フェミナ〉の取り引きはたいてい午後に始まるが、〈シカゴ・バー〉が開店するのは十時の夜間外出禁止発令後だ。スロースロップ、ゾイレ、トゥルーディ、マグダの四人は、巨大な瓦礫の山と、夜の田舎のように灯りのまばらな闇を抜けて、店の裏口から中へ入っていく。中は、軍医や衛生兵が走り回っている。彼らの手にした瓶の中身は、フワフワの白い結晶物質や、小さなピンクの丸薬や、おはじき玉大の透明なアンプルだ。占領国の紙幣やライヒスマルク札がこすれる音が飛び交う。売人の中にはクスリ(ケミカル)一辺倒の熱狂者、商売一辺倒の者もいる。壁を飾っているのはジョン・ディリンジャー[21]の特大写真だ。単独のポートレイト、母親とのツー・ショット、仲間と一緒に映っているの、軽機関銃(トミーガン)を手にしたの。光量も声も低く抑えているのは、憲兵隊が通ったときの用心か。

金網の背受けの椅子には、オランウータンの顔つきをしたアメリカ人水兵がいて、毛むくじゃらの無骨な手で静かにギターを爪びきながら、四分の三拍子の、泥臭いカントリー調のうたを歌っている。

《ドーバーの夢》

ゆうべ夢みた、水パイプ

21 一九三四年にFBIにシカゴで射殺された伝説のアウトロー。最初のメジャー映画化はこの年一九四五年。

磨いてゴシゴシやったらば
急に飛び出たアラブの魔神
眼をパチクリして言うことにゃ——
「どんな願いもかなえましょう」
おれは必死に言葉をまさぐる
「恩に着るぜ」と叫んで言った
「ドープのありかへ連れてってくれ」
ニンマリ魔神はおれの手をとり
あっという間に舞い上がった
連れていかれた国の山々
みなハッシシの塊だ
木にはピンクと紫の
錠剤（ピル）の花が乱れ咲き
ロミラ[22]の川が流れてた
空には魔法のキノコの弧が、虹のようにかかってた
その美しさに涙がこぼれる
女らはスロー・モーションで駆けてくる
アサガオを髪に編み込み
手のひらは真白いコカイン
どんなドープもシェアしてくれる

22 デキストロメトルファン臭化水素酸塩水和物を有効成分とする咳止め剤。幻覚作用も噂されていた。

CamScannerでスキャン

バナマレッド[23]の花の中
ペヨーテ・サボテンむしゃむしゃやって
ナツメグのお茶を飲み
頭にクラリ、あのチョコ・ケーキ
いつまでも楽しくやっていたかった
帰るつもりは微塵もなかった
突然、なんと
　あの魔神、捜査官に早がわり
その場でおれをとっつかまえて
連れてきたのが、冷たい冷たい牢の中
見渡すかぎりの獄で見るのは・・・
ドーパーランドに戻る夢
いつまた自由の身になれる?

歌っている船乗り(シーマン)ボーディーンは、アメリカの駆逐艦、ジョン・E・バッダース号の乗組員。ここでゾイレが落ち合うことになっていた仲介者だ。バッダース号はクックスハーフェンに停泊していて、ボーディーンは軍務放棄も同然の身、米軍がベルリン占領を開始したあと、しばらくは消えていて、昨晩久しぶりに戻ってきた。「ネズミ一匹通さねえってよ」ボーディーンが呻いた。「あのポツダムがだぜ、目を疑うよ。ヴィルヘルム広場[24]ってどんな場所だったか覚えてるか、時計もワインも宝石も、カメラもヘロインも毛皮も、

23 バナマ産のマリワナ。

24 ポツダム市の中央にある現在の「統一広場」。

世界中の物が売っててさ、誰もじゃましにこなかったろ。それがどうだい。まわり中、ロシア人の警備だらけだ。根性のねじ曲がった大男がうようよして、近づくこともできやしねえ」

「ポツダムで何かやってるって話だけど?」とスロースロップ。うわさで聞いていたのだ。

「会議か何かよ[25]」

「ドイツをどうやって切り分けるかを決めてるんだ」とゾイレ、「世界の強国がみんな集まってよ。ドイツ人も入れなさいよ。切り分けるのは、何百年も分割国家でやってきてるわし等に任せろって」

「いま、ポツダムにゃ虫一匹入れねえって警備だぜ」船乗りボーディーンが首をふりながら、プロの熟練を披露する。半分にひき裂いたタバコの巻紙に大麻を入れ、片手で器用にクルクル巻くのだ。

「そうかもしれんが」ゾイレがほほえみながら、スロースロップの肩に腕をかけ、「ロケットマンなら入り込めるかもしれんな」

ボーディーンはいぶかしげに眺める。「こいつがロケットマンかい」

「そんなところだ」スロースロップがいう。「しかし、ポツダムってとこに行ってみたいって気は、あんまりしないなあ・・・」

「そりゃ知らねえからだ」ボーディーンが叫ぶ、「いいか、大将、ここからほんの十五マイルのとこに、六キロものブツがあるんだぜ! 最高級のネパール産ハッシシ大麻がよ! CBI[26]に行ってるダチが政府の封印から何から工面して、うまいこと五月に、このおれが埋めておいたんだ。絶対バレない、宝地図がなけりゃ誰にも見つけられないところにな。

25 米英ソの首脳によるポツダム会議の会期は七月十七日から八月二日まで。七月二十六日、日本に対してポツダム宣言が発せられた。

26 チャイナ・ビルマ・インド戦線。255ページに既出。

あんたロケットマンなら、ひとっ飛びだろ。ひょいと行って取ってきてくれねえかな」
「言うことはそれだけか」
「取り分は、あんたが一キロ」ゾイレが申し出る。
「大麻もろとも火葬にされちまうのがオチだろうが。そのカマドの前でロシア人が、ケムリ吸ってハイになる」
「きっとね」そこを通りかかったのが、いままでお目に掛かったうちで最高にデカダンな若い女、瞼には蛍光藍色のアイシャドー、髪には黒いレザーのスヌードを被せている、「そこのかわいいアメリカさん、グリーンのハーシー・バー[27]がお嫌いなのかしら、ねえ、アハハ」
「どうだ、百万マルクで」ゾイレがふっと息をついた。
「そんな大金どこで手に入れるの──」
か細い指を一本立て、耳元で、「このわしが刷る」
ウソじゃなかった。一隊は〈シカゴ〉から、瓦礫の中を半マイルほど、闇の中ではゾイレ以外、誰も歩けない複雑にうねった不可視の抜け道の上を進んで、一軒の吹き飛んだ家の地下室へたどり着く。ファイリング・キャビネットとベッドと石油ランプと印刷機が見える。マグダがスロースロップに抱きついた。勃起する上を彼女の手が踊っている。トゥルーディがボーディーンに絡みついたその形の不思議なこと。ゾイレがガチャガチャ輪転機を回しだした。ライヒスマルク紙幣が、数千マルク単位で、ホールダーの中に舞いおちる。「版も紙も、どれも本物だ。足りないものがひとつある、余白にある波線の模様──あれは特殊な打印機が必要で、それぱっかりはまだ、せしめていない」

27 ハッシシのことを、その見かけからこう言った。

みんな用紙を揃え、直角に揃えたところを、キラリと光るカッター刃でゾイレが裁断する。百マルクの分厚い札束をかざして宣言、「明日戻っておいでって。どんな仕事もロケットマンなら朝めし前さ」

一日か二日して、スロースロップは気づくだろう。そのとき「でも、おれ、ほんの二、三時間前までロケットマンじゃなかったんだ」と言うべきだったことに。だが、一キログラムの大麻と、本物同然の百万マルクのオファーを受けては目が眩まないわけにもいかない。それだけの提示を受けて、はいサヨナラ、はありえなかった。ロケットマンが飛んで逃げていく理由はない。即金で二千マルク受けとって、その夜はゾイレのベッドのなか、ぽちゃぽちゃのマグダのよがり声と夜が明けるまでおつきあいする。トゥルーディとボーディーンは浴槽の中ではしゃいでいた。ゾイレには別のミッションがあるらしく、外界へ消えていった——浮きたつ内界(こころ)に午前三時の瓦礫(ウェイスト)が、大海のように、押し寄せるベルリンの街へと。

CamScannerでスキャン

□ □ □ □ □ □ □

充血した目のゾイレが、湯気の渦巻くティーポットを持ってなにやら叫んでいる。スロースロップはベッドにひとり。ロケットマンの衣装が、船乗りボーディーンの宝物の地図と一緒にテーブルの上で待っている——おお、おお、どうする、スロースロップは本当に、このミッションを完遂せねばならんのか。

朝の空気をふるわせて、小鳥たちのアルペジオが音階を駆け上がる。遠くではトラックとジープの排気音。ゾイレがお宝までの侵入経路を説明する。スロースロップはすわって紅茶をすすり、ズボンにこびりついた精液を爪でこすりながら聞いている。包みはドイツ映画の古都ノイバーベルスベルクの皇帝通り(カイザーシュトラーセ)二番地、その別荘の庭の灌木の茂みの下に隠されている。ポツダムからはハーフェル川を挟んだ向こう側だ。アーヴス高速道には近づかないほうが賢明だろう。「ツェーレンドルフまで行って、そのすぐ先の検問をうまくかわす。ノイバーベルスベルクへは運河を使う」

「どうして?」

「市民はVIP道路は通れない——ほら、この運河だ。川とクロスしているだろ。その川

行けばポツダムだ」
「おいおい。だったらボートはどこなんよ」
「まいったな、ドイツ人に即興の演し物を期待するか。無理いうな。それはロケットマンが解決してくれ！　ワッハ！」
「むむむ」　別荘はグリープニッツ湖に面しているようだ。「湖側から行くってのは？」
「そうすると、橋の下をいくつか通らにゃならん。そのガードがただ事ではない。射撃の雨が降る。おそらく――迫撃砲もあるだろう。ポツダムの向かい側だと湖もだいぶ細くなっているから、望みはない。絶望だ」朝っぱらからドイツ風のユーモアか。ゾイレがＡＧＯカード[1]と旅行切符と通行証（英語とロシア語で印刷）をスロースロップに手渡す。「これを偽造したやつはな、〈会談〉が始まってからこれで何度も何度もポツダムに行ってるんだ。そのくらい頼りになるってことだ。二ヶ国語通行証は、今回の〈会議〉限定の特製でな。しかし、お上りさんみたいに口開けて見物してないで、すぐに帰ってきなさいよ。セレブにサインをねだったりするなよ」
「なあ、エミルさん、あんたが手に入れたその偽造カードね、そんなすばらしいんだったら、自分で行って取ってきたらいいじゃない」
「専門が違う。売人は売人だ。硝酸入りの壜を使うのがせいぜいのところで、そいつだって見せかけだ。掠奪はロケットマンの役目だろうが」
「ボーディーンはどうなのさ」
「もうクックスハーフェンへ帰り足だ。来週戻ってきて、事もあろうにロケットマンが臆病風を吹かしたなんて知ったら、どんな騒ぎになるか見ものだな」

1　アメリカ陸軍省の総務部発行の身分証明書。

「そうかよ」チッ。スロースロップは、しばし地図とにらめっこしてイメージを頭にしまい込み、ぼやきながらブーツを履き、ケープの中にヘルメットを包みこんだ。ペテン師とカモのふたりが並んでアメリカ占領区を進んでいく。

青空に馬のしっぽが白く[2]わき上がってはいるが、ここベルリンの空気(ベルリナー・ルフト)は、逃れようもない死の臭いが重く垂れ込めている。春の戦いで殺された死体が数千、今も瓦礫の山の下に横たわっている。黄色い山。赤くて黄色くて蒼い山。

ニュース映画や『ナショナル・ジオグラフィック』[3]で見たあの街はどこへいってしまったのか。〈新ドイツ建築〉が得意としたのは、放物線形だけではなかったわけだ。こういうオープンな空間を演出するのもレパートリーのうちだったんだ。太陽の照りつける、無表情なアラバスターの共同墓地も。この建築は、不可視にさざめく人間たちを刈り入れて初めて完結する。彼らの犠牲なしに意味をなさないものなのだ。もしも〈聖体都市(シティ・サクラメンタル)〉——内的で霊的な病いや健康の外的で可視的なあらわれとしての都市[4]——というものがあるとしたら、今この街にさえ、戦慄すべき五月の表皮を通して、何かしら神意の蹟(あと)が顔を見せ続けているのかもしれない。今朝のベルリンの空虚さは、破壊前の白く幾何学的だった首都を、逆マッピング変換したみたいだ。瓦礫を撒いた長い道はまだ何も生えていない、同量のコンクリートが何の造形も模様もつくらずに転がっている……だが、ここではすべてが表裏逆転している。かつて、定規で引かれたようにまっすぐな、軍隊の行進にもってこいだった大通りは、いまや瓦礫の間をくねくねうねる細道に転じた。形もすっかり有機的(オーガニック)で、獣道(けものみち)と同じく最小労力の法則にしたがう。市民たちが表に出て、軍服組が内側だ。ノンメリしていた建造物の肌理に代わって、打ち砕かれたコンクリートの内から出てきた

2 古代ヨーロッパ人は絹雲を「白き女神」の髪に見立てた(『GRC』)。

3 一九三七年二月号が「変わりゆくベルリン」を四十六ページにわたって特集している。写真のネット検索も可能。

4 イングランド国教会の祈禱書にあるサクラメントの説明——内的で霊的な恩寵の外的で可視的なあらわれ——をもじっている。

CamScannerでスキャン

ボコボコな、果てしないロココ模様を描きながら腰板のすぐ後ろまで溢れている。内が外になった。天井のない部屋が空に開かれ、壁なしの部屋は瓦礫の海に投げだされ、船の舳先、マストの見張り台になっている。・・・空缶を持って吸い殻を探している老人の胸の上に鮪がある。住居や衣類やたずね人の情報は、かつて分類（クラシファイド）され、艶やかで優美な居間の新聞ページ上で読まれたが、それが今では青・橙・黄色のヒトラーの横顔切手[*5]といっしょに風が吹けば舞い、木々やドア枠、張板や壊れた壁に張りついた——白い、消えかかったスクラップ、蜘蛛の巣のような、震えた字、泥に汚れ、見られることもない、読まれることもない、風に舞う数千のメッセージ。戦前、きみは冬期貧民救済事業（ヴィンターヒルフェ）の一品だけの日曜日[*6]、きみは鉤十字模様の下がる冬の木の下のテーブルにいた。だがあの日曜日の戸外が今は屋内で一週間変わらず続く。街はふたたび冬に向かっている。街の人は信じないふりをして日だまりをエンジョイしているが。傷だらけの樹木も緑に蔽われ、ひなは孵って巣から飛び立とうとしているが——そんな見せかけの夏の下でも冬は進行している——地球が寝返りを打ち、回帰線が逆転したのだ・・・

〈シカゴ・バー〉の壁が裏返って外に出たかのように、巨大な顔写真が、フリードリヒ通りに並べて貼ってある。三つの顔は人間の背丈より高い。そのうちチャーチルとスターリンのはスロースロップにもわかったが、もうひとりがわからない。「エミル、あのメガネの男は誰だい」

「アメリカ大統領、ミスター・トルーマンよ」

「よせやい、トルーマンは副大統領だろ。大統領はローズヴェルトだぜ」

ゾイレは一瞬目を見開いた。「ローズヴェルトは春に死んだ。ドイツ降伏の直前にな」

5 ナチス時代のドイツの切手は同じヒトラーの横顔の肖像を使い、値段別に色を変えていた。

6 ナチスの宣伝相ゲッベルス発案の慈善キャンペーンは、さまざまな形をとったが、贅沢をいましめる運動の中で、月に一度酢漬けの肉だけの食事をすることが奨励された。

パン配給の列に入りこんでしまった。すり切れたフラシ天のコートを着た女たち、そのほつれた袖口をつかんでいる子供たち。帽子を被りダークなダブルのスーツを着た男たち、無精髭の老いた顔、看護婦の脚のように白い額。・・・誰かがスロースロップのケープを引っつかもうとする。ちょっとした小競り合いになる。

「お悔やみ申しあげるよ」列から抜けでたとき、ゾイレが共感を示した。

「どうして誰も教えてくれなかったんだ？」ローズヴェルトがホワイトハウスで仕事をこなしはじめたころ、スロースロップはちょうど高校に入学しようというころで、父ブロデリックはローズヴェルト嫌いを公言していたけれど、息子タイロンの心には、この小児麻痺にかかった大統領の勇姿が刻まれた。ラジオで聞く声もよかった。一度、ピッツフィールド[*7]に来た大統領を自分の眼で見る機会もあった――そのときミンジバラで一番デブのロイド・ニップルの後ろになってしまい、二つの車輪と、ステップに乗ったスーツ姿の男たちの足しか見えなかったけれど。前大統領フーヴァーのことは、掘っ立て小屋の町[*8]とか、電気掃除機の名前[*9]と一緒に、ぼんやり覚えているだけだったが、ローズヴェルトこそは、ぼくの大統領だと認識した唯ひとりの大統領だった。選挙戦になればまた選ばれる、永遠の大統領であるかに思えた。[*10]それを誰かが変えることに決めたのだろう。それで永眠させられたのだ。もの静かで上品だった、スロースロップの大統領が。かつてロイドTシャツを着た自分の肩胛骨にFDRの顔を想像してみたりもした少年が、リヴィエラかスイスのどこかで――自分自身が消えつつあったことも半ば気づかず――あくせく動きまわっていたすきに死んでしまった。

「脳卒中だったってよ」ゾイレの声がひどく奇妙な方向から聞こえる。ほとんど真下から、

7 ピッツフィールドはニューヨーク州との境に近いマサチューセッツの実在の町。ミンジバラは、その近くの架空の町。

8 ウォール街大暴落からの四年間（一九二九〜三三）大統領を務めたのが共和党のフーヴァー。ホームレスが集まったテント小屋と掘っ立て小屋の集落は、民主党陣営から「フーヴァーヴィル」と揶揄された。

9 フーヴァー社の製品は掃除機の代名詞で、掃除機をかけることをアメリカでは今でも〝フーヴァーする〟という。

と消えていくように、今まさにこの広大な共同墓地が内側にめり込んで、スーと窄まり、クーンと延びて一本の〈回廊〉になる。この変換というか空間の歪曲は、数学的に何と呼ばれるのか知らないが、スロースロップの人生の内部に、ほとんど遺伝疾患のように、ひそんでいるものだ。大人のくすんだ眼だけ出して、残りの顔は白いマスクですっぽり蔽った医師団が、足並み揃えて通路を通りローズヴェルトの横たわる部屋へ入っていく。黒光りした手術鞄、その黒革の中で金属がチャリチャリと、しゃべるように鳴っている、腹話術師のトリックのように、オオイ、ココカラ出シテクレー。・・・誰がアレンジしたのだろう。ヤルタ会談の席で、黒のケープをまとい、他の指導者たちと一緒にとったポーズ[11]は、〈死の翼〉の、豊かで柔らかくてブラックな冬のマントの感触を見事に伝えていた。国中の見つめる人びとのためにローズヴェルトの臨終のはじまりを演出していたのだ。〈かれら〉が組みたて、いま〈かれら〉によって解体されようとしている大統領の・・・

この光景、誰かが視差まで計算している。縮尺（スケーリング）の具合も、時間の変化に伴う影の伸び具合も——しかし、このゾイレが本物であるはずはない。ダークな服を着て列をなして仮想上の電車を待っている連中もエキストラだし。中には（それっぽく）ソーセージを持っているのもいる。子供たちが数人、ハダカ同然の恰好で駆け回っているし、その子らが出入りする集合住宅の焼け跡も、驚くほど細部が鮮明だ——〈かれら〉のことだ、製作費は潤沢に使う——この廃墟を見ろよ、一度ちゃんと建ててから、打ち砕いてるぜ。破片は、人間の体のサイズから粉末まであらゆるグレードが揃っている（どうか、規格番号で注文して下さいって）、これは誰にも忘れられない〝ベルリンの正午〟の匂い[12]というやつ、人が腐る臭（にお）いつきのエキスだ、それを人の手で映画セットにふりかけた。巨大な噴霧器を押

10 一九四五年四月十二日に死去したとき、ローズヴェルト政権は第四期めに入っていた。戦後は憲法が修正され、三期目以降の出馬は禁止されている。

11 クリミア半島で行われたヤルタ会談はこの年二月。その有名な写真で、ローズヴェルトは、黒のケープをまとい、チャーチルとスターリンに挟まれている。

12 因みに、この作品全体が映画であるという指摘はよくなされる。各セクションを区切る印、□□□□□□□はフィルムのスプロケットに見えるし、しばしば激して読者に直接語りかける語り手も、ときに映画の弁士のようだ。

CamScannerでスキャン

その子は、どこかの路地の向こうにいる肉のたるんだ馬みたいにでかいんだろう。……
〈ヴィーが闇で手に入れた時計の針は、すでに正午に近い。午前十一時から十二時までは〈魔の刻〉。編んで束ねた髪をもつ〈白き女〉が山から出てきて、おまえの前に立つかもしれない。用心しろ。この女にかけられた謎の魔法を解かないかぎり、おまえに罰が下るのだ。彼女は〈不思議な花〉をくれる美しい生娘だが、同時に、夢の中でおまえを見つけて黙って立っていた、長い歯をした魔女の老婆でもある。〈魔の刻〉は彼女のものだ〉

青白い空に、浮かれはしゃぐＰ-38機の黒い編隊が透かしレース模様を編んでいる。スロースロップとヴィーは歩道にカフェを見つけ、木やピンクに染まったサインとパンとチーズの食事をとる。緑色ペーパーのヴィーは、お茶の〝棒〟を取りだした。日射しの中で交代で口にし、ウェイターにも一服すすめる。軍用煙草もえんな回しのみするご時世だ、誰にもかまやしないって。通りを流れるジープ、公用車、自転車。オレンジや緑のサンピースに若い身体を包んだスーザンチーズのような夏の娘たちがやってきてチーズについた。あれ、なぜニコリ、ここにもニコリ、早番のビジネス相手を求めて色香を振りまく。賑わっているが、ヴィーはすでにスロースロップを〈ロケット〉の話に引きこんでいた。ロケットの話ならなんでも専門家なのだが、そんなが望みだけの噂ができるからことはわかっている。

「どこが魅力なのか、おれには絶対わからんだろう。オランダじゃいつも騒いでるけどな。キャプテン・ミッドナイト・ショーみたいだな。だが話を聞いても興味がわかない。別にいいんだが、彼らが時間をかけているものが見えていない。そんなに丁寧が遠くなってやるが、かえってなれなかったのは、ものをいってやっている奴等がひどい目に遭ったことがあったんだな」

13 メリムが「ドイツ神話学」で述べている双面の女神ホルダの姿と一致する。〈不思議な花〉は「ヴンダーブルーメ」といって、宝物を秘めた彼女の山の入口を開ける力がある。

14 ロッキード社の双胴型戦闘機。米陸軍に属するものは緑と黒に塗られていた。

15 戦時中のアメリカの子供たちを夢中にしたラジオの冒険番組の…

[illegible]
「ロケットがどこかに過マンガン酸カリウム[16]を使うんだってな」
「ああ、ターボポンプに[17]」
「あの紫色のやつがないと、正直なコカインの取り引きができんのだよ。いや正直なんかはどうでもいいが。現実がなくなるのは困る。去年の冬などドイツ帝国をくまなく探したが、過マンガン酸塩など一つも出てこないのだ。それでコカインを精製しようっていうんだから、あっちこっちで燃やしっこってことになる。仲間同士がだよ。ま、仲間であっても——アメリカ人に通じる言い方で言うと——顔にパイをぶつけたいと思わん相手はいないかな」
「そりゃどうも」。待てよ。ゾイレはおれとのことを言ってるのか？ おれにパイを投げつけようって？
「おかげでな」ゾイレが続ける、「ベルリンの街じゃ、ローレルとハーディの壮大なやつが演じられることになった[18]。サイレントだよ、過マンガン酸塩が消えたのが理由だ。わしは知らんが、A4ロケットのおかげで他にもいろいろ経済への影響が出たことだろう。これはただのパイ投げの問題じゃない。マーケットの秩序が乱れたというレベルの話じゃないぞ。化学的無責任ってのが横行してるんだ。粘土からベビーパウダーからセメントから——しまいにゃ小麦粉まで別物にしてしまうんだろう！ 粉ミルクが、赤ん坊の吸い口にじゃなくコカイン吸いのところに流れてくるとかな。紛い物がコカイン以上の値で取引される——鼻から粉ミルクを思いきり吸い上げるところを想像してみろや、ハハ、ハッハッハ」ゾイレは笑って一息つくと、「だが、損して得とれだ。過マンガン酸塩がなければ何

16 [illegible]を帯び、強力な酸化剤として広く使われる濃紫色の物質。純正コカイン精製にはこれに限らず、ナトリウム、カルシウムなどの過マンガン酸塩が必要。

17 ロケットに使用されたヴァルター機関では、高濃度過酸化水素水を分解して発生する水蒸気と酸素ガスを使用するが、その触媒として、過マンガン酸塩——$NaMnO_4$、$Ca(MnO_4)_2$が使われた。

18 ローレルとハーディは、サイレント時代のドタバタ喜劇で記憶されるアメリカの二人組。口にできない件での大騒ぎ、という喩えだろうか。

CamScannerでスキャン

も見分ける手立てがないわけだから、ノボカイン[19]をちょいと混ぜて、舌先にピリっと刺激を与えるようにすれば、重曹で大もうけできるってことだ。過マンガン酸塩こそ試薬でな、粉を載せた顕微鏡の上に、そいつを落とすと溶けるから、その溶けたのがまた結晶化していくようすを見てる。最初にできてくるのがコカインだ。これが縁に現れる。それから野菜屑みたいのができて、プロカイン、乳糖と、決まった位置に生成される――この紫色の標的の輪は、外側に一番価値があって、的の中心はまったく無価値なのよ。アンチ・ターゲットというのかね。A4の考えるターゲットとは正反対だな、そうだろ、ロケットマン。おまえさんの仲良しの機械装置は、必ずしも麻薬吸い（ドーパー）の味方ってわけじゃないんだ。なぜそれを欲しがる？　教えてくれ。おまえの国が、ロシアに対して使うのか？」

「おれは欲しくなんかない。〝おれの国〟って、どこのこと？」

「すまん。ロシアの連中があんまり探し回ってるんで、つい言ってみた。わしのコネクションが、ベルリンのあちこちから連行されて尋問を受けてるんだよ。ロケットに関しちゃ、わしと同じで何も知らん連中がだよ。だが、チチェーリンは、そうは思わんらしい」

「やだな、またあいつかよ」

「やつは今ポツダムにいる。そのはずだ。古い映画スタジオに本部を構えている」

「凄い報せだぜ、エミル。おれの運が・・・」

「顔色が悪いな、ロケットマン」

「なんのこれしき。こいつはどうだ」と言ってスロースロップは、ゾイレに〈シュヴァルツゲレート〉のことは聞いていないかとぶつけてみる。

ゾイレはアイィーーッ！と金切り声を立てて通りへ走りさっては行かなかった。叫びの流

19 塩酸プロカインの商品名。『ヴァインランド』のムーチョも愛飲していたコカインの代用薬。

20 "der Springer" は「跳躍者」「高飛び男」という意味の渾名。チェスの「ナイト」に因む。

れは、体内の調整弁を通って、別の方向へ向けられたようである。「いいかな」[20]すわったまましきりにうなずいたり、姿勢を動かしたり——"デア・シュプリンガー"に会ってみな。ふたりならしっくりいくだろう。隠居泥棒は引っこんで、長い余生をロッシーニみたいに贅沢して暮らすことにしよう。[21]だからおれの名前は口にしてくれるなよ、いいな」

「その"シュプリンガー"ってのは誰だい。どこで会えるね、エミル？」

「永遠の跳ねまわる騎士——」

「ワーオ」

「——シュプリンガーにかかれば〈ゾーン〉もチェス盤だ。ロケットマンがじゃま者を飛び越えていくのと一緒だよ」と言っていじわるそうに笑う。「すばらしいペアじゃないか。やつの居所がどうしてわかるかって？ どこにも出現しうる——ってことはどこにでもいるんだ」

「快傑ゾロ[22]かよ。グリーン・ホーネット[23]か？」

「最後に聞いたのは一、二週間前で、そのときは北方の、ハンザ同盟都市の港のどこかにいたようだ。いずれ会える。心配するな」突然ヴィレが立ちあがり、握手をする手にマリワナを一本握らせる。「これから衛生士官どもに会わなきゃならん。何千もの顧客の幸せがあんたの肩にかかっとるんだから、頼んだぞ。わしんところで会おう。幸運（グリュック）を」

〈イーヴル・アワー〉の魔法は切れてしまったのか。〈シュヴァルツゲレート〉という言葉のせいだ。轟音とともに、スロースロップの背後で山が閉じ、もう少しでかかとが潰れるところだった。かの〈白き女〉が、次に現れるのは、数世紀後かもしれないってえのに、

21 数々のオペラを生んだロッシーニは四十四歳で音楽界を引退。七十六歳で没するまでサロン活動やレストラン経営などの趣味に生きた。

22 一九二〇年（サイレント）のダグラス・フェアバンクス、一九四〇年のタイロン・パワーなど、多くのスターの名演が知られている。

23 一九三六年から長期間続いた連続ラジオ・ドラマ。悪漢を装って悪の世界に入り、悪人を征伐する仮面の主人公ブリット・リードはローン・レンジャー（ジョン・リード）の息子という設定で、日系のサイドキック役ケイトー（カトー）は、六〇年代のテレビ版でブルース・リーが演じている。

あーあ、チェーッ。

特別通行証には「マックス・シュレプツィヒ」と記されていた。スロースロップに元気が充ちる。そうだ、ヴォードヴィル芸人に扮しよう。奇術師がいい。奇術ならカッチェのところで練習済みだ。ダマスク織のテーブルクロス、彼女の魔法のボディ、サロンとしてのベッド、夜毎のファンタスティックな夜会(ソワレ)・・・

午後の三時頃にはツェーレンドルフを抜ける。ロケットマンの衣装のまま検問を通ってみせるぞ。赤いペンキを塗った木製アーチの下で、ソ連の歩哨が待ち構えている。その手には、スオミ銃やデグチャレフ銃──円筒の弾倉つきの、大型サブマシンガンだ。おっと、スターリン戦車[*24]までおいでなすった。低く重々しく向かってくる。76ミリ砲台で、耳覆いつきのヘルメットを被った兵士が携帯無線に向かって怒鳴っている・・・まいったな。・・・アーチの向う側にはロシア軍のジープが一台、将校ふたりが乗っていて、ひとりが専用の無線機に向かってしゃべっている。張りつめた空気を、ロシア語の声が光の速度で駆けめぐり、他ならぬスロースロップの包囲ネットを編みあげた。スロースロップはケープを後ろに払うと、ヘルメットを傾けてウィンクし、手品師の身のこなしで、カードと旅行切符と二ヶ国語で書かれた通行証を差しだした。ポツダムで余興をやれとの命令です、と。

歩哨のひとりが通行証を受け取り、電話をかけに小屋まで走る。他の者は立ったままチェーリンのブーツを見つめている。誰もしゃべらない。電話に時間がかかっている。傷だらけの革、丸一日の無精髭、日射しを受けた頬骨。張りつめた空気をほぐしたいスロースロップは、何かできるトランプ手品はなかったっけと考えている。と、歩哨が顔を突きだした──「シュティーフェルン、ビッテ」

24 最大級の一二二ミリ砲を有する赤軍の重戦車IS-2(JS-2)の通称。

〈ブーツ、プリーズ〉だと？　ブーツをどうしたいんだ——ヤアアーー！　ブーツか。そうだよ、もうみなさんはおわかりだね。ブーツとくれば、回線の向う側に誰がいるかはお見通しだ。その男の身体に埋めこまれた金属がチリチリと歓喜にむせぶのがスロースロップに聞こえてくる。電波塔（フンクトゥルム）の左手、鉄とウールのもんわりした、煙っぽいベルリンの空に、『ライフ』誌の全面写真が照射される。スロースロップの写真だ。ヘルメットからブーツまでフル装備したロケットマンの口に、長くて硬い、ものすごく太径のソーセージ状の物体が突っこまれている。押しこむ力のあまりの強さに、目が寄っている写真である。そのバカでかいフランクフルトを持っているのは誰の手だ？　それは写真に写っていない。〈ロケットマンの打ち上げ失敗〉という見出しの下に、「〈ゾーン〉最新のセレブ、打ち上がってもいないうちに、この失態」というキャプションつき。

それならば、とスロースロップ、ブーツを脱ぐと歩哨がそれを電話のところへ持ってゆき——他の衛兵がアーチの前に彼を立たせて、あちこち調べて一本だけ出てきたゾイレのリーファ（マリワナ）を巻き上げる。スロースロップはソックス姿で待たされる。先のことは考えない。隠れ場所を求めて周囲を見るが、三六〇度まったくクリアで、発砲の障害になるような物はひとつもない。被せたてのアスファルトと、銃のオイルの臭い、ジープ、緑青色で結晶のように角張って、待機している。今、ベルリンへの帰路は、打ち捨てられた。…神様（プロビデンス）よ、おい、神様、どうしちゃったの？　席をはずしてビール飲みに出かけちゃった？

そんなことはない。ブーツが戻ってくる。歩哨がニッコリそれを差しだす。「照合した（シュティムト）。ヘル・シュレプツィヒ」ロシア語の皮肉って、どんな調子なんだろう。相手の真意が、スロースロップにはまったく読めない。チチェーリンだったら、ブーツを見せろとか注文

CamScannerでスキャン

をつけて、相手に警戒させるバカな真似はしないだろう。違うな、電話に出たのはチチェーリンであるはずはない。これはただの、規制物品のルーティン・チェックなんだ。今まさにスロースロップは、中国の『易経』にいう「若気の愚行」というのに取りつかれる。グリーンのケープをさらに何度か振りまわして、トミーガンを一丁、ずんぐりしたバルカン軍から失敬すると、南方へさっそうと歩いて行く。将校のジープは相変わらずそこに止まっている。戦車は消えていた。

ジュビリー・ジム[25]は、国中売って歩きます
ストックブリッジのご婦人方にも
リー[26]の娘さんにもウィンクしながら——
ブローチ手にして、アプローチ
馬車の鞭なら、即金で一ドル
みんな、いらっしゃい、歓喜（ジュビリー）の響くところまで！

南へ二マイルほど進むと、ゾイレの言っていた運河にぶつかる。橋の下の小道で、ちょっとの間、湿った涼気を得てから、岸辺づたいに歩き、ハイジャックできるボートを物色する。ドリーミーな草の斜面には、ホールター姿やショートパンツ姿の、褐色金色の娘たちが寝そべって日光浴だ。雲に覆われた午後に、そよぐ風が柔らかな緑どりを添える。子供たちは水辺に膝をついて釣り糸を垂らす。二羽の鳥が水面を上になり下になり、ぐるりぐるり輪を描きながら、嵐の渦が静止したみたいな緑の木々の天辺（てっぺん）へと舞い上がって、そ

25 十九世紀アメリカ金融を牛耳ったジム・フィスクの渾名。544ページ註15参照。

26 ストックブリッジもリーも、マサチューセッツ西部丘陵の古い街道沿いにできた町。

CamScannerでスキャン

こで停まりさえずり始める。遠景は、距離にしたがってゆっくりとエクリュ[27]の靄を帯び、白昼の日射しにブリーチされていた乙女らの肌に、柔らかな光が暖かな色味を戻した。太股の筋肉のかすかな陰影、張りつめた皮膚細胞のフィラメントが言っている、さわって・・・行かないで・・・。スロースロップは歩きつづける。見開かれた目にも、優しい夜明けのように開いた口にも構わずに。変な人。行っちゃうなんて。いったいどんな用があるのかしら?

ボートが二、三艘、柵につながれているが、いつも誰かの目がある。おっと、あったぞ、狭い平底の舟。オールが固定してあって、すぐ出せる。斜面に毛布が、近くにハイヒールと、男物のジャケットと、あとは木が生えているだけ。いそいで乗り込み、索を外した。お楽しみに励んでよ——少々いやったらしく——おれはムリ、でも、きみたちのボートはいただくから!　イェイ!

日暮れ時まで漕ぎつづける。長い休憩時間をとりながらだが、とても快調とはいえない。ケープの中はそのまま汗の円錐形という状態で、どうしても脱がずにはいられなかった。警戒したアヒルたちは離れて泳ぐ——その鮮やかなオレンジ色の嘴から水をしたたらせて。夕風に波立つ水面を、傾いた陽が赤と黄金のロイヤル・カラーの縞模様に染める。壊れた船の残骸が水面に顔を出している。赤い鉛と赤サビとが夕陽を受けて、膿んだ肌のように見える。ひしゃげた灰色の船体。落ちそうなリベット。縒りの戻った太索の子細が、ヒステリカルに全方位を指し、風もないのにゆらめいている。からっぽの艀が一艘、ぽつんとただよい流れていく。頭上にはコウノトリが一羽、巣に帰ってゆくのだろう。突然、眼下の水にアーヴス高速道の立体交差の青白いアーチが見えた。このままもう少し進んでいけ

27 漂白していない麻や絹の色。生成り色。

CamScannerでスキャン

ば、アメリカ占領区に行きつく。彼は斜めに運河を横ぎり、反対側の岸にボートを着けて岸にあがると、地図の右手に記してあるソヴィエトのコントロール地点を避けて南へ向かった。薄暮のなか、大きな塊が移動する。ロシアの近衛兵、緑の帽子のエリートたちが、表情ひとつ変えずに進んでいる――トラックに乗り、あるいは馬にまたがって。薄れゆく光のインピーダンスが感じられる。エナメル線を密に巻いたコイルがジリジリ音を立てているよう。ポツダムは警告している・・・遠ざかれと。・・・近づいていくほどに、ハーフェル川の向うの密室で進行中の国際会議を包む電磁場は強くなる。ボーディーンの言う通り、虫一匹入れない。それを知ってなおスロースロップは忍び歩き。敵の感度が少しでも鈍いところを求め、ジグザグに走って、目立たぬように南へ動く。

誰からも見られない――倒されずに進んでいける距離が伸びるにつれて、その確信が強まっていく。夏至の前夜、真夜中と午前一時の間に、シダの種が靴の中に入って、彼は不可視の子となった。鎧をまとった取り替えっ子、神様の小さな友だちなのだ。[28] 彼らは、敵を危険に陥れようとするときに、〈戦争〉と同じようにしか考えられない。――中にはその亡霊に一生支配されてしまう者もいる。いいでしょう、スロースロップには好都合だ。その種の脅威の集合の中にロケットマンはいないんだから。彼らは今も地理的な空間に属していて、最終的な一線を引き、生きてそれを越えさせるなと部下に命じて、これで誰も入れるまい、入れるのは、漫画に捕獲され、冊子の中から出てこられないヒーローだけだろう、と考えている。このロケットマン様を知らないからだ。敵はつぎつぎと彼を通りすぎていく。彼は誰とも遭遇しない。身につけたビロードとバックスキンが夕闇に完全に溶けたんだ――たとえ、敵の目に入っても、彼の像（イメージ）はすぐさま脳内僻地へ飛ばされ、他の夜

28　この伝承の出典は同じくグリムの『ドイツ神話学』。

クゥリーチャーの醜な異形の世界へ追いやられてしまうだろう・・・

やがてきた右へ折れ、沈む陽へ向かう。これからスーパーハイウェイを突っ切らなくてはならない。このアウトバーンが通ったとき、たまたま反対側にいたために十年も二十年も帰宅できなかったドイツ人もいたほどなのだ。神経質に重い足を動かし、スロースロップはアーヴス高速道の土手をはい上がっていく。頭上を爆走する車の音。その車を運転手は自分でコントロールしているつもりだろう。それぞれの目的地に向かって車を動かしていると思っているに違いない。だが、スロースロップにはお見通しだ。みんな〈かれら〉の必要のために、今夜駆り出されてきた。目的は〈死の壁〉をつくること。アマチュアのフリッツ・フォン・オペル[29]が大集合して、スロースロップに対して軽快な疾走を披露してくれるそうだ——かの有名なS字カーブの内側をギーンとうなって滑走する。そう、かつての白ヘルに黒ゴーグルのカーキチが、煉瓦の堤のところでタイヤをキーキー滑らせながら通りぬけていったところをだ（見とれる正装した大佐らの目、ガルボ風のフェドーラ帽をかぶった大佐夫人連、みんな安全な白い塔の中にいるが、この日の冒険に参加していて、自分のうちからジワジワと〈母なるヴァイオレンス〉が染みだすのを待っている・・・）。

ケープの中から腕を出したスロースロップ、細い灰色のポルシェを一台ビューンとやりすごすと、全力ダッシュで道路に飛び出た。車の川の下流の足にポルシェの赤いテールライト、上流の足には急激に近づいてくる軍用トラックのヘッドライト。光をまともに受けた眼球がブルーの糸鋸にふれたみたいに痛い。走りながら横にスイング、「ハウプトシュトゥーフェ！」[30]とロケットマン出動の雄叫びを挙げ、両腕を高く上げる。海緑色のケープの裏地が扇形に拡がった。続けざまのブレーキ音。その中を疾走し中央分離帯に飛び込み

29　ロケットエンジン搭載の車を作って一九二〇年代に時速二百キロを記録したスピードのプロ。

30　「本段階」を意味する「ハウプトシュトゥーフェ」は、ロケット本体浮上開始のコール（684ページ）。

CamScannerでスキャン

ゴロリと一回転、あたふたと茂みの中へ飛びこんだ。横滑りしてトラックが停車。わめき声が止まない。その間にこっちは荒れた呼吸を整えて、首にからんだケープを外す。トラックが去っていく。アーヴス道の南方面は、今夜はかなり空いていて、ジョギングで渡りきれた。土手を下り、林に続く上り道を上がる。やったぜ、ロケットマン、広いアウトバーンもひとっ飛び！[*31]

ところで、ボーディーン、あんたが描いてくれた地図は完璧だったけど、ひとつだけ、細かい点で言い忘れたことがあったと思うんだが、それはなぜかな。…行ってみたらノイバーベルスベルクの民家約百五十軒が徴用されていたのだよ。この地区一帯、ポツダム会談に集う連合国代表を収容する特別地区として立入禁止になっていた。船乗りボーディーンがドープを隠したのは、まさにそこのド真ん中。有刺鉄線と、サーチライトと、サイレンと、こいつらも笑うことがあるとは到底思えない恐い顔の保安隊。いやはや、この通行証がなかったらどんなことになっていたか。ゾイレ・ブマーに敬礼だ。そこには、海軍本部、国務省、幕僚長などの印が型板印刷（ステンシル）されている。…中に入ると、ここ一帯はハリウッドのプレミア・パーティのように明るく照らされ、スーツ、ガウン、タキシードに身を包んだ非軍人が、フロントガラスの脇に万国の旗を付けたBMWのリムジンから降りてきたり、乗りこんだり。道の敷石の上にも溝の中にも謄写印刷のビラがいっぱい落ちている。検問の詰所の中は持ち込み禁止のカメラが山積みだ。

ここにはショービズ世界のずいぶん変わった連中も顔を見せるのだろう。ヘルメット、ケープ、仮面という姿を見ても、別段驚くでもない。電話確認も曖昧なまま、ためらいがちの半端な質問もいくつかされたが、結局彼らは肩をすくめてマックス・シュレブツィヒ

31 スーパーマンのラジオ放送で毎度登場する「高いビルもひとっ飛び」をもじっている。

を中へ通した、大型遊覧バスで、アメリカの新聞記者の一団がやってきた。解放されたモーゼルのワインボトルを手に持って、途中までスロースロップを乗っけてくれる。乗りこんできたセレブの正体をめぐる議論が巻きおこった。あれはドン・アメチー[*32]だろうという者もいれば、いやオリヴァー・ハーディ[*33]さという者もいる。セレブだ? なんだいそりゃ。「いや、この身なりだとわからんだろうが、わたしはエロール・フリン[*34]ですよ」との宣言を、信じた者は必ずしも多くはないが、スロースロップはかまわずに何枚かのサインに応じた。別れ際に記者達は、一九四六年の「ミス・ラインゴールド[*35]」が誰になるかで盛り上がっていた。ドロシー・ハートを推す声が一番威勢がよかったけれども、最大多数派はジル・ダーンリーを支持しているようだ。スロースロップにはチンプンカンの話である。彼もやがて、六人の美女を並べたビール広告に出くわすだろう。そして、ブロンド髪でオランダ姓の——ぼんやり誰かを想起させる——ヘレン・リッカートという娘を応援することになるだろう。それはまだ何ヶ月も先のことだが……

皇帝通り二番地に建っていた家は、プロシア時代の田舎屋敷を誇張した様式で、反吐に似た黄褐色に塗られていた。地区一帯のどこよりもここの警備は厳重である。どうしてだろう、と思ってスロースロップが見ると、標識にこの場の別称が型板印刷されていた。

「なんだよ、これ。冗談もいいかげんにしろよ」。スロースロップに震えがきた。通りに突っ立ったまま船乗り(シーマン)ボーディーンに対し、ドロボー、悪党、死神の犬めといって罵りまくる。その標識にTHE WHITE HOUSEと書いてあったのだ。ボーディーンの地図にみちびかれて着いたところは、今朝のフリードリヒ通りの看板から静かに見つめていた小粋な身なりの眼鏡男、トルーマンの住処であったのだ。スロースロップが一度もお目にかかれぬ

32 戦後はテレビ・ショーのホストで活躍。三十代の当時も、すでに何十本という映画に出演。

33 ローレルとハーディの太っちょのほう。アメチーは痩せていて、ふつうなら混同はありえない。

34 当時三十代。ロビン・フッドやカスター将軍役で名を馳せていた。

35 アメリカの醸造会社による「ラインゴールド・ビール」の宣伝企画。コンテストの優勝者には多額の商品と、ポスターや看板のモデルになる栄誉が与えられた。

まま逝ってしまったローズヴェルトの、その顔に代わって静かにあらわれた別の大統領の住居へ、ボーディーンの野郎は自分を遣わせたのである。

ライフルを肩に掛けた衛兵は直立姿勢。スロースロップも同じくらい身が固まった。アーク灯の光の下に、ケープを纏ったブロンズ像がつっ立っているかのよう。ヴィラの裏手に波の寄せる音が聞こえる。室内で鳴りだした音楽がその音を掻き消す。エンターテインメントのはじまりだ。そうだよ、マジシャンのご登場。それでこんなに易々と入れるってわけだ。遅れてきたゲスト・マジシャンを歓迎しているのか。この華々しさ、そして名声——今なら、駆けこんで誰かの足下に身を投げ出し、赦しを請うこともできるかも。そして、どこかのラジオ局と終身契約を結んで……いや、それだったら映画スタジオがいいですね。だってそれが慈悲ってもんでしょ。さりげなく後ろを向いて、ふらり光の輪の外へ。下の湖面に出る道を探しにいく。

グリープニッツ湖岸は暗く、星が輝き、鉄条網とうろつく衛兵だらけだ。真っ黒な湖面の上で、ポツダムの街の灯りがまたたきながら、集まったり散らばったりしている。その鉄条網の向こうへ出るのに、ケツまで水に浸かること数度、それからじっと身を潜め、歩哨がタバコをたかりに受持ち区域のはずれに集まったスキを狙って一気に飛び出る。ヴィラをめざし、びしょぬれのケープをなびかせ一目散。ボーディーンの巨大ハッシシは、家の片側、ビャクシンの茂みの下に埋められている。たどり着いたスロースロップはしゃがみ込んで、手で泥をすくい始める。

中は宴たけなわ[37]だ。「リンゴの樹の下にすわらないで」[36]を歌っているのは、アンドリューズ・シスターズではないにせよ、ごきげんなプロのコーラス。大規模なリード・セクシ

36　「ぼく以外の誰とも……ぼくが戦場から帰るまで」と歌詞が続く一九四二年のヒット曲。

ョンを持つダンス・バンドが伴奏をしている。笑い声、グラスのぶつかる音、多国語のおしゃべり。世紀の会談であってみれば、平日の夜のこの盛り上がりも不思議ではない。ハッシシは腐りかけたズタ袋に銀紙で包まれていた。たまらぬ芳香にスロースロップはうっとりだ。ああ、なんでパイプを忘れてきたんだ。

いや、忘れてきて正解だったかも。スロースロップの上のほう、目線の位置にテラスがあり、垣根仕立てになった桃の木々がミルク色の花を咲かせている。ズタ袋を手に、腰を下ろした姿勢でいると、建物のガラスの引き戸が開いて、テラスに空気を吸いに出てきた者がいる。スロースロップは身を固め、見えないぞ、おれは見えない…と念じている。足音が近づき[38]、手摺りに寄りかかった——誰かと思えば、妙なこともあるもんだ、ミッキー・ルーニーである。スロースロップには一目でわかった。ハーディ判事の無鉄砲な、そばかす顔の息子役をやったミッキーが、三次元の、タキシード姿で、こっちを見て、あれ、ボク、アタマがオカシクなったのかなって顔をしている。ミッキー・ルーニーが見つめているのはハッシシ入りの袋を下げたロケットマン、ヘルメットを被りびしょ濡れのケープを羽織った幽霊だ。鼻先にはミッキー・ルーニーの黒光りした靴、その上から透かし見るテラスの奥の灯りの下に——ちょっとチャーチルに似た誰かが見える。貴婦人たちのイヴニング・ガウンは胸元の線があまりにローで、この位置からでも、ミンスキーの店[39]よりたくさん乳房が見えるみたいだ…それから、ことによると、ひょっとして、トルーマン大統領の姿も垣間見えたかもしれない。しかしミッキーの姿を見たのは間違いない——もっともミッキーのほうは、どこへ行っても、スロースロップを見た事実は押し殺すだろう。えも言えぬこの一瞬。何か言葉をかけるのが自然だろうとは思うのだが、発話中枢がまっ

37 スイングとブギの時代に人気を博した、リズム感抜群の白人コーラス・トリオ。軍の慰問にも積極的で、カーキ色の制服姿の映像で記憶される。

38 子役時代から活躍したミッキーも、終戦時には二十四歳。前年に入隊してから軍のためのエンターテイナーとして活躍し、勲章も得ている。ハーディ判事が正義の活躍を見せるシリーズは、この年までに十四本の映画が封切られた。

39 ミンスキー四兄弟は、アメリカのバーレスクの歴史を作った立役者。ストリップティーズの開拓者でもあり、一九一〇年代から繰り返し手入れを受けていた。

CamScannerでスキャン

たく機能してくれない。「おやまあ、ミッキー・ルーニーじゃないの」ってのも、どうも変だし。というわけで、ふたりともビクリともせず勝利の夜の喧騒の中につっ立っている——黄色い電光の部屋で、大いなる策動が人知れず続いているかたわらに・・・

スロースロップが先に動いた。指一本を口に当て、すたこらさっさ、走りさる。別荘を回って岸辺まで、坂を駆け下りる。ミッキーは柵に肘をついた姿勢で見つめているだけ。

鉄条網のところへ出ると歩哨に見られないよう岸辺へ近づいていく。ズタ袋の紐をもってぶらぶらさせながらボンヤリと考えている——どこかでまたボートを見つけてハーフェル川まで漕いでゆけばいい、そうだ、そうしよう。そのとき別のヴィラから話し声が微かに聞こえた。おっと、ソ連の領内に迷いこんでしまったか。

「うむむ」スロースロップの考えは決まった。「それならそれで——」

脳裏にふたたび、口にソーセージを詰めこまれたイメージが浮かぶ。人影がほんの一フィートの距離に——こいつら、水中から現れたのだろう。くるり振り返ると、髭をきれいに剃った大きな顔があった。髪はライオンのようなストレートなオールバック。ゆらめき光る鋼鉄の義歯、カルメン・ミランダ*40のような黒く柔和な眼——

「その通り」押し殺したその声は訛りのないイギリス英語だ、「きみはずっと尾(つ)けられていた」。別の男達がスロースロップの腕をつかむ。左腕上方になにやらチクリと鋭いもの。痛みはほとんど感じられないが、なじみの感覚だ。声を出す間もなく〈車(ホイール)〉に乗せられ連行される。巻き起こる感覚麻痺の風のなか、どんどん小さくなっていく自己の白点に恐怖のあまりすがりながら、〈死〉の獄の上にきまり悪そうに浮かびながら・・・

40 大きなトロピカル・フルーツを被って、踊って歌うスタイルが脚光を浴びた、ブラジル出身の歌手。

CamScannerでスキャン

― ― ― ― ― ―

夜は柔らかい。空いっぱいに黄金の星々がにじむ。レオポルド・ルゴーネス[1]が好んで書いた牧歌のパンパの夜のようだ。海上に浮かんだUボートが静かに揺れている。静寂のなか、甲板の下で、船底の汚水を汲み出すエンジン音が鳴っている。船尾ではギターを抱えたエル・ニャートが、ブエノスアイレスの哀歌や舞曲をつまびいている。聞こえる音はそれだけだ。ベラウステギは下で発動機の調子をみている。ルスとフェリペは眠っている。

ニアンドリ砲台のそばにすわって物思いに耽るのは、グラシエラ・イマゴ・ポルタレス。彼女にも、B A（ブエノスアイレス）で街の阿呆と呼ばれたことがある。誰からも危険とは思われずに、あらゆる党派の男たちと関係していた。シプリアーノ・レジェス[2]が一度彼女にちょっかいを出したことがある。アクシオン・アルヘンティーナ[3]が非合法化されるまでは、彼らのもとで働いていた。特に、文学者には気に入られ、ボルヘスも彼女に詩を捧げたと伝えられている（"El laberinto de tu incertidumbre/ Me trama con la disquietante luna"[4] 君の不安の迷宮が、静寂の月とともに私を引きとめる…）。

このUボートをハイジャックした乗組員は、各自それぞれにマニアックなアルゼンチン

1　504ページ注28参照。初期には無政府主義者として、アルゼンチン独立戦争をガウチョの俗語で綴った物語集『ガウチョ戦争』（一九〇五）を著している。

2　アルゼンチンのカリスマ的政治家で、一九四五年当時はペロンと共に労働党を率いた。

3　504ページ注32参照。

4　このいかにもボルヘス的な詩行は、ピンチョンの創作と見える。

人だ。エル・ニャート[5]は、十九世紀のガウチョのスラングに凝っていて、煙草のことは「ビート」、尻は「ブーチョ」、飲む酒[6]は「カーニャ」ではなくて「ラ・タクアーラ」、酔っ払ったときには「ママオ」と言う。フェリペが彼の通訳をしなければならないときもあるくらいだ。そのフェリペは詩作に耽る、つきあいにくいタイプの若者で、あまり愉快でないことに熱狂する。ガウチョに対しても浪漫的な夢想に傾倒して、いつもエル・ニャートにくっついている。機関士役のペラウステギは出身のエントレ・リオス州[7]の伝統に根ざした実証主義者だ。科学の福音を説く者にしては、ナイフ捌きも巧みであって、だからエル・ニャートとしても、この両河地方の無神論者のボルシェヴィキには手を出していない。グループ結束によからぬ緊張を生んでいる要因は他にもあって、たとえばエスクアリドーシの女であるはずのルスは、目下フェリペとくっついている。エスクアリドーシがチューリッヒへ旅立った後の、ある香しい夜のこと、マトジーニョス[8]沖に停泊中に、フェリペがルゴーネスの「真実の孔雀（パボス・レアレス）[9]」を熱烈に暗誦（リサイト）したのにすっかり惚れ込んでしまったのだ。このクルーにとって、過去への郷愁は船酔いのようなもの、郷愁に殉じたいという期待だけが、彼らを生につなぎとめている。

しかしエスクアリドーシが次に姿を見せたのは、ブレーマーハーフェン[10]だった。イギリス軍の諜報機関に、理由も分からず後をつけられ、敗戦後のドイツの残骸のなかを逃げ回っていたという。

「どうしてジュネーヴへ行って、われわれと連絡をとろうとしなかったんだ？」

「追っ手をイバルグエンゴイティアのところへ導いてはまずいと思ったんで、別な男を送ったんだが」

5 「しし鼻」あるいは「できそこない」の意味。

6 これらのマッチョなスラングは『マルティン・フィエロ』のウォルター・オーウェン訳についている語彙集で解説されている。

7 「河の間」という意味の州で、平坦なパンパが拡がる。ブエノスアイレスからの独立運動の歴史を持つ。

8 ポルトガルの港町。

9 六篇の詩から成る、『黄金の時 *La horas doradas*』（一九二二）の中の一作品。

10 ドイツ、ブレーメン州の港町。

「誰を送った」ベラウステギが訊いた。

「名前は聞き出さなかった」エスクアリドーシがもじゃもじゃの髪をかきむしる。「まずったかな」

「以後、接触は？」

「まったくない」

「ということは、われわれはすでに監視されているな」ベラウステギはむっつり顔で、「だれか知らんが、手配中のヤツと関わったんだ。ほんとに人を見る目があるよ、おまえは」

「どうすりゃよかったんだ？　まずそいつを精神科医に連れていけばよかったのか？　選択肢を検討しろって？　数週間観察してから判断しろというのか？」

「エスクアリドーシのいう通りだぞ」エル・ニャートが大きな拳をふり上げた。「考えたり分析したりは女どもに任せておけばいい。男なら突進あるのみ、臆せずに〈生〉に立ち向かうことだ」

「気分悪くなること言わないで」と、グラシエラ・イマゴ・ポルタレス、「そんなのは男とはいわない。汗まみれの馬よ」

「これはこれは、ありがとうございます」エル・ニャートが、ガウチョの威厳をもって頭を下げた。

だれも大声は出さない。あの夜の鋼鉄の艦内の会話は、しずかな湿り気を帯びた歯擦音のsや口蓋音のyにあふれていた。アルゼンチンのスペイン語の持つ、引きこもりがちの辛辣さ——これは長年にわたる挫折と自己検閲、政治的真実の回避に由来する。舌まわり

CamScannerでスキャン

の筋肉で国家を抑え込み、唇のすぐ奥の濡れた親密さのなかにその生存を閉じ込めておこうとするかのような喋り……ペロ・チェ・ノ・ソス・アルヘンティーノ[11]――アルゼンチンの人間じゃないオマエに何がわかる……

　ババリアの町外れの道をエスクアリドーシが躓きながら歩いていた。ほんの二、三分後を、中の見えない緑のパースペックス製[12]ドームをつけたロールスロイスが追っていた[13]。日没直後のことだ。突然の銃声と、馬の蹄と、鼻にかかった金属的な英語、それが一度に彼の耳に跳び込んできた。廃墟と化した、この古風な小さな町で。不思議なこともあるものだ。彼は煉瓦の迷路に入った。爆撃される前はハーモニカ工場だったところ[14]。鋳造所の土の上に、永遠に鳴ることのないリードの金属片が飛び散っていた。最近白く塗ったばかりの高い壁に怒濤のように走っていく馬と騎手らの影が映る。作業台や木枠に腰を下ろした十人ほどの――エスクアリドーシにはすぐに分かった――ギャングが、それを見ていた。葉巻の先が赤く光る。ひそひそとした情婦のドイツ語。男たちは歯で包みを裂いて、ソーセージを食べていた。きれいに磨かれた白い歯が映画の光線にキラリと光る。男たちの手には、この夏〈ヴィーン〉の流行であるカリガリ手袋[15]がこれ見よがしにはめられていた。骨のように白いその手袋の甲には、手首から指関節まで四本の濃紫の線が走っている。どの男も、歯の色によく似たスーツを着ていた。ブエノスアイレスからチューリッヒを経てやってきたエスクアリドーシには、ずいぶんな贅沢品に見えた。女たちは、まむしのようにせわしなく足を組み替えている。クサの燃える香りが空気を染めていた。エスクアリドーシには憶えのない匂いだ。癒しがたいホームシックに罹ったこの男が想起するのは、競馬場でツキのない一日を過ごした後の、淹れたてマテ茶の香りくらいである。冠飾の付いた

11　Pero ché, no sos Argentino.

12　ポリマー結合（478ページ）によってできた、メタクリル酸メチルの軽量透明なプラスチック。『ヴァインランド』の387ページでは「プレクシグラス」というアメリカでの商品名で登場。

13　501ページに出てきたのと同じ車か。

14　南独トロッシンゲンにあるホーナー社の工場だろう。

15　ドイツ表現主義の代表作『カリガリ博士』（一九二〇）にも出てくる、三本の骨のような線が入った手袋。

窓があり、その向うは煉瓦工場の中庭で、柔らかな夏風がそよいでいた。そのガラスのない窓枠に映写の光が青く差す。楽音を吹き鳴らそうとする息のように。すると反撃されて、映像が鈍った。「ヤイ！」ズートスーツの男たちが叫び、白手袋が上下した。彼らの口、彼らの目は、子供のように大きかった。

フィルムの一巻きが終ったが、灯りはつかない。白いズートスーツを着た巨大な人影が立ち上がり、伸びをして、怯えたエスクアリドーシが縮こまっているところへゆっくりと歩いてきた。

「アミーゴ、追われているのか」

「許してくれ――」

「誤解するな。一緒に観ようぜ。ボブ・スティール[*16]が出てる。ボブはいいヤツさ。ここにいりゃ安全だよ」後でわかったことだが、このギャング連中はエスクアリドーシが近くにいることを数日前からつかんでいた。姿は見ていなくても、追跡する警察の動きから察知していたのだ。ブロートヘット・ワックスウィング――話しかけてきたのは彼である――は「霧箱」の比喩を使った。素粒子が高速で動くと、飛跡に水滴の尾ができて、それでわかるって寸法だ・・・

「何のことだい。わからんよ・・・」

「俺にもわからん。だが、世の中の新しい動きにはついていかなきゃな。いまヘップな連中はみんな、原子物理学の話ばっかしてるんだ」

映画の後、エスクアリドーシはゲアハルト・フォン・ゲール――ギャング仲間で〈跳ね駒（シュプリンガー）〉の名で知られる――に紹介された。フォン・ゲールの一派とワックスウィングの仲間は、

16 西部劇スター（473ページにも）。

移動ビジネス会議のようなものを続けているようだ。〈ゾーン〉内の道を、コンボイをなして移動し、トラックやバスの乗り換えがあまりに頻繁で、睡眠もよくとれない。真夜中の時間、野原の真ん中、時とところを選ばず車を降り、乗り物を替え、新たな道を進むのだ。目的地も日程も定まらないこの旅をアレンジしていたのが、車のメカのことなら何でもこいのベテラン、エドワルト・ザンクトヴォルケで、この男は、とにかく車かキャタピラのついたものなら、そのエンジンを、キーなしでスタートさせることができた。目当ての車の回転アームが外れていたときの対策にと、あらゆる車種（メイク）、モデル、製造年のアームを、特注の黒檀材のビロード張りのケースに入れていつも携行しているという男である。

　エスクアリドーシとフォン・ゲールはすぐに打ちとけた。闇商人に転身したこの映画監督は、その莫大な利益を今後の自作映画のすべてにつぎ込む腹づもりである。「そうしないと、自分でファイナル・カットを決めるということはできないのだよ、だろう（ベルダ）？　エスクアリドーシさんよ、あんたが潔癖すぎて断るというなら別だが、そうでなければ、その無政府主義のプロジェクトに、わたしらから援助させてもらえないかね？」

「見返りにわれわれから何が欲しいのか、言ってくれ」

「もちろん、映画さ。何をやりたい？『マルティン・フィエロ』はどうだ？」

　商売相手は喜ばせるのが一番。マルティン・フィエロは、単にアルゼンチンの叙事詩にうたわれた偉大なガウチョというだけではない。Uボート内のアナキストからは聖人とみなされている。エルナンデスの書いたこの詩は、以前からアルゼンチンの政治思想の舞台に登場してきた――みんな独自の解釈を付与して、この詩を引用するのだ。十九世紀イタ

CamScannerでスキャン

リアの政治家が『いいなづけ』[*17]を引用したのとよく似ている。そもそもの問題は、アルゼンチンという国の根幹にかかわる二極性にある。その二極とは、ブエノスアイレス対地方ともいえるが、フェリペによれば、中央政府対ガウチョ・アナーキズムという構図になる。彼はこの二項対立の理論的指導者の立場にある。つば丸のハットに玉飾りをぶら下げ、ハッチをぶらつきながらフェリペはグラシエラを待っていた――「ブエノス・ノーチェス、ぼくの鳩よ。ガウチョ・バクーニンへのキスはどうしたい？」

「えっ、あなた、ガウチョ・マルクス[*18]ではなかったの？」グラシエラにねっとりと嫌味を言われてフェリペはすごすごと、フォン・ゲールのための脚本制作に戻っていった。エル・ニャートから借りた『マルティン・フィエロ』は、長期の使用でページもバラバラになり、馬たちの臭いがした。酔って「酩酊（ママオ）」状態のエル・ニャートは、涙ながらに、馬の名前を、一頭一頭、語り聞かせることができる。

日没時の、影の伸びる大草原。巨大な平地。カメラは低いアングルのままだ。人々が登場する。三々五々、あるいはひとりでゆっくりと、平原を越え、小さな川のほとりに建設したセツルメントにたどり着く。黒みを増す夕べの景色を背景に、馬、牛、焚火。遠く、地平線上に、馬にまたがった男の影が一つ。それがこちらへ向かってくる。ぐんと近づいたところでクレジットの文字。カメラは背中に架けたギターを捉えた。この男、マルティン・フィエロはパヤドール、すなわちガウチョの放浪歌人だ。ついに馬を降り、焚火に当たる人々に混ざって腰を降ろす。食べ物とカニャ酒が回る。おもむろにギターを手にとった彼は、低音の三弦をつまびきながら歌う。[*19]

17 *I Promessi Sposi* は、一八二七出版のアレッサンドロ・マンゾーニの小説。信仰の篤い農民の男女が圧政も貧困も病も偏見も克服して結ばれる物語。

18 カール・マルクスに喜劇役者グラウチョ・マルクス――日本では不正確に「グルーチョ」と呼ばれる――を引っかけた。

19 以下は『マルティン・フィエロ』の冒頭の詩行。

Aquí me pongo a cantar
al compás de la vigüela,
que el hombre que lo desvela
una pena estrordinaria,
como la ave solitaria
con el cantar se consuela.

いざ、うたわん
ビグエラ[20]の拍に乗せ
あまりに重い悲嘆ゆえに
夜も眠れぬのであれば
孤独な野の鳥のように
歌って心を癒すのだ

ガウチョの歌とともに物語が始まる——大放牧場（エスタンシャ）での少年時代を示すモンタージュ映像。それから軍隊が来て彼を徴兵し、インディオを殺すためにフロンティアへ連れていく。パンパの開発を、住民を皆殺しにすることをもって成し遂げようとするロカ将軍の時代[21]である。村を労働キャンプに変え、より多くの土地をブエノスアイレスの支配の下に置く。マルティン・フィエロはやがて我慢の限界にくる。自分が信じるところに照らして、すべてが間違っているから。彼は逃走する。捜索隊が送られる。が、その指揮をとる軍曹がマルティンに説得され味方になった。彼らはフロンティアの彼方へ行って、荒野の中でインディオと暮らす。

それが第一部だ。七年後にエルナンデスが書いた続編『マルティン・フィエロの帰還』では、マルティンが身売りをする。キリスト教社会へ同化し、おのれの自由を犠牲にして、憲政産業社会（ゲゼルシャフト）への道程を押し進めていたブエノスアイレスに加担する。きわめて教訓色の強い結末へ、第一部のエンディングと正反対だ。

「どうするね」フォン・ゲールは知りたがる。「二部立てでいくか、それとも第一部だけ

20 ギターのようなラテン音楽の楽器。

21 一八七〇年代末に、フリオ・アルヘンティーノ・ロカ将軍の下で進められた「荒野の討伐作戦」は、有色人種圧殺の徹底ぶりにおいて、四半世紀後のフォン・トロータ将軍のヘレロ族の虐殺とも比べられる。土地に住むガウチョは自軍に編入し、抵抗する者はその首に懸賞金をつけたおたずね者にされた。これによりパンパにおける白人種による「エスタンシャ

にするから？」

「それはだ――」エスクアリドーシが一席始めようとする。

「いや、あんたがどうしたいかは分かってるんだ。うちとしては、二本の映画を作る方が燃費の点では助かる。一本目が興行的に当たれば、だがね。しかし当たるだろうか？」

「もちろんだとも」

「あんなに反社会的な話が、か？」

「我々の信念のすべてなんだぞ」エスクアリドーシが抵抗する。

「だがな、どれほどの自由を得たガウチョにしても、最後は仲間を裏切ることになるわけだ――物事とはそういうもんだよ」

ゲルハルト・フォン・ゲールがそういう人間だということは間違いない。グラシエラはこの男を知っている。不吉な関係(リエゾン)の線が伸びているのを。プンタ・デル・エステ*22からブエノスアイレスのIGファルベン支社であるアニリナス・アレマナス*23を経て、ベルリンの（これまたIGの販路のひとつである）シュポットビリッヒフィルムAG*24と、血縁と冬越えのつながりができている。そこはフォン・ゲールがいつも割引価格でフィルムを購入していた会社である。とりわけ〈エムルジオンJ〉と呼ばれる感光乳剤には世話になった。ラスロ・ヤンフが発明した、この奇妙にゆっくりと反応する乳剤は、ある理由によって、太陽光で撮ったフィルムでも、人の皮膚を½ミリの深さまで透明にしてしまう。表面よりほんの少し「深み」にある表情を露呈するのだ。フォン・ゲールによる不朽の『夢魔』*25ではこの乳剤が随所に使用されている。『マルティン・フィエロ』でも使用されるかもしれない。この叙事詩で、フォン・ゲールを魅了したところが一ヶ所あって、それは白人のガ

体制」が確立。

22 ウルグアイ南端、ブエノスアイレスへ向かう湾の入口にある岬の町。

23 この会社は実在した。

24 こちらは架空。

25 原題 Alpdrücken はドイツ語で「悪夢」をあらわすが、語源的には「夢魔（Alp）がのし掛かった」という意味。この Alp はギリシャ語の alphos（くすんだ、骨のような白）に由来する。

CamScannerでスキャン

ウチョとエル・キレーノという黒人が歌合戦するところだ。[*26] そこはフレーミングによって面白い効果が出せそうだ。エムルジオンJを使えば、競って歌い合う両者のそれぞれの肌の色の下を「掘る」ことができる。Jを使った部分と普通の感光剤を使った部分とをディゾルブ[*27]でつなげばいいのだ。フォーカスをシャープにしたりぼかしたり、あるいはワイプ[*28]をかけるのと同じやり方で、そういうことが可能になる――この監督はワイプを愛してやまない。画面と画面がワイプによって移行するそのやり方はじつに多彩だ。〈黒の軍団〉が〈ゾーン〉に集合するのだと――彼自身とも、昨冬イギリスで彼自身が撮影した〈黒い翼作戦〉のニセの映画とも何の関わりもなしに、現実の、映画外的な生を得たのだと――知って以来、シュプリンガーは、膨らみそうな詩人妄想を抑えつつそのエクスタシーに浸る毎日である。どのようにしてかは謎であれ、彼には、自分の映画が彼らを生み出したのだという確信があるのだ。「それがわたしの使命だと思うのだよ」と、スクァリドーツィに向かって、ドイツ人の映画監督だけが醸し出せる深大な謙虚さをにじませ――「ゾーンの中に現実の種をまくことがね。いや、歴史が、歴史上の今という時が、私にそれを要求するのであって、わたしはただ、時の下僕にすぎないのだが。どうした具合か、わたしの映像が肉体をあたえられることになった。シュヴァルツコマンドに対してできたことを、パンパを求める君たちの夢に対してもしてあげられると思うのだよ。……垣根や迷宮の壁を取りこわして、誰もがはいってゆけるようにしてしまった〈園〉へ連れ戻してあげることがね……」

フォン・ゲルの見栄じみた思いが明らかにスクァリドーツィに感染し、その彼がやがてUボートに戻って仲間の連中にうつした。みな、その自信を心待ちにしていたようだった。

26 『マルティン・フィエロの帰還』の第29と30の歌に出てくるシーン。

27 二つのフィルムをつなぐときに、両者の映像が重なり合って漸次移行するようにする処理。

28 スクリーンの端から端へ、直前の場面が拭きとられるようにして場面が現れるつなぎ方。

29 現在のアフリカ、南米、インド、オーストラリア、南極、アラビア半島などを含んでいたと「実証的に」考えられている数億年前の超大陸。

30 ラ・プラタ河口にあるウルグアイの首都。

アンケーナが囁かれたあと、あたしは手堅い実践家のベラウステギまでが、会議の席上で、夢のようなことを言っている。「本当だったら、すごいことだ。大陸が分離し浮遊していく前の世界へ、本当に戻ったんだとしたら」

「ゴンドワナ大陸への帰還」フェリペがささやく。「その昔ラプラタの河口は南西アフリカと向かいあっていたんだ……中生代の流民は、船に乗ってモンテビデオ[30]じゃなく、リューデリッツ湾[31]に向かったのさ……」

計画では、なんとかリューネブルク・ハイデ[32]へ行き、そこにパンパの小牧場を設営する。そこでフォン・ゲールと落ちあうことになる。潜水艦の砲台近くでグラシエラ・イマゴ・ボルタレスは夢想する。フォン・ゲールという人物を、みんな必要な妥協として許容できるだろうか。映画よりもっとひどいものが基盤になったケースもある。寵臣ポチョムキンが捏造した村[33]は、女帝エカチェリーナの巡幸が終わってなお、存在し続けたか。ガウチョの魂はどうだろう。光と音のメカニクスに乗ったその後も、生き続けられるだろうか。それとも誰か、フォン・ゲールであれ誰であれ、最終的にパート２を作る者が現れて、夢を剥ぎ取ってしまうのか？

グラシエラのはるか上を大宮が滑行してゆく。アルゼンチンでは見られない北の星座たちが時計の時針の滑らかさで廻る。……と突然、拡声装置から電波障害の雑音がしばらく聞こえ、ベラウステギが「アア・アール、アア・アール！」と叫んだ。ウナギ？　ウナギって……あ、そうか、魚雷[34]のこと。なによ、ベラウステギもエル・ニャートと同類なの。ドイツの潜水艦員のスラングでしゃべろうっていうの？　これじゃほんとに、滅びゆくパパルの猪だわ——でも「魚雷」って、どうして魚雷だなんて叫んでるの？

31　[illegible]を乗せた戦艦も寄港した南西アフリカ（現ナミビア）の港湾。

32　一面に草と灌木で覆われたイギリス〜北ヨーロッパの荒れ野を、ドイツ語で Heide、英語で heath と称する。「リューネブルク・ハイデ」は北ドイツ平原に広がる、この小説の重要なサイトのひとつ。

33　一七八七年、エカチェリーナがクリミアを船で視察したとき、グリゴリー・ポチョムキンは、あたかも立派な村を建設したかのごとく見かけを偽装したといわれる。

34　Ｕボートの発する魚雷は、ドイツ語で「ウナギ」を意味する「Aal」と呼ばれた。

CamScannerでスキャン

それは、このUボートが、米艦ジョン・E・バッダース号[35]（笑え、Uボートよ）のレーダー・スクリーンに、〝スカンク〟、すなわち正体不明の光点として現れたからである。バッダース号が終戦直後の筋肉の条件反射によって、最高速力での逃走を始めた。今夜は完璧な受信状態で、二等レーダー技師のスピロス（通称〝スパイダー〟）・テランジークスタシスによれば、緑色の画面の像は「赤ん坊の肌のように滑らか」であって、アゾレス諸島[36]までくっきり見通せる。穏やかな夏の夕べの海面は蛍光色の残光をたたえている。それなのに、スクリーン上のこれはいったい……動きが速い、最初小さな点だったそれは、レーダーが回転するたび、光の破線を伸ばし、画面の動かぬ中心に向かって、小さいながら確実に近づいてくる。もう、こんなに大きくなった――

「ベイカーベイカーベイカー！」下のソナー探知装置室で、脅えた大声が、送話器に向かって叫ぶ。「ベイカー」とは、敵が魚雷を放ったという緊急信号。コーヒーの台がガチャン。位置推測のトレーサーのガラスの上を、平行定規とディバイダーが滑る。艦がその老体を傾けたのだ――そんなふうにして魚雷を避けるのは、クーリッジ時代[37]以前のやり方だろう。

青白い〝ウナギ〟の海中航跡は、身をよじって逃走を始めたバッダース号の土手っ腹に定められている。だがそこにはオナイイリンが介在している。ラスロ・ヤンフの開発した塩酸塩系ドラッグ。ジョン・E・バッダース号の食堂のコーヒー沸かしの中に、悪名高きイタズラ男、〝船乗りボーディーン〟が、最近ベルリンに行ったとき仕入れてきたそれを、たんまり混入していたのだ。

オナイイリンの特性に関して、まず最初に発見されたもののひとつが、その特異な時間変

35 バッダースの原語綴りは Badass (bad + ass)。

36 大西洋中央部のポルトガル領の島々。

37 共和党のカルヴィン・クーリッジが大統領だったのは一九二三年から二九年まで。

調作用だった。「主観的な経験としては……」シェツリン[38]がその古典的研究の中で書いている、「えー……こう言ったらどうかな——銀でできたスポンジを、脳ミソの中に、グググッと割りこませた感じ！」というわけで、穏やかな今宵の海のレーダー表示に、二つの航跡が空間的には交差するものの、時間においては重ならない（ノット・イン・タイム）。手遅れも甚だしい（ノット・ニアリー・イン・タイム）、へへッ。ベラウステギが魚雷を発射した的は、実は風と潮のまにまに漂うダークに錆びた遺棄物体だった。だが、その夜の恐怖をもたらす骸骨の役は充分果たした。がらんどうのメタル、その黒影の虚しさは、ベラウステギよりさらに強靱な実証主義者をも震え上がらせただろう。そして、バッダース号のレーダー・スクリーンの小さな光点として現れた像は、人間の死体だったと判明した。肌の色は黒く、おそらく、北アフリカ人の水死体と思われる。それを、駆逐艦船尾の3インチ砲台から水兵たちが半時間、粉々になるまで撃ちつづけたのだ——そいつから疫病が感染するのを恐れて。

さてと、きみが渡ったこの海は、厳密にいって、どんな海なのだ。きみが一度ならず底まで潜っていったこの海は？——神経を張り詰め、アドレナリンをあふれさせながら潜ったつもりが、結局は恐怖に歪んだ認識のなかで激しいパラノイアに苛まれて、ふにゃけ者になってしまった。まるで鉄の釜の中でグッグッと、きみ自身の言葉のスープと一緒に、潜水艦内の汚れた息と一緒に煮込まれて、ビタミンを抜かれた粥みたいにされてしまった。親ユダヤ派を行動に駆り立てるのにドレフュスの冤罪事件が必要だった[39]とすれば、きみをスープ鍋から出させるのにはどんな事件が必要なんだ？ そいつはもう起きたのか？ 今夜の魚雷攻撃と、それからの救いとがそれなのか？ きみはあの〈ハイデ〉に行って、そこで開拓を始め、〈監督〉が現れるのを待つのか？

38 ピンチョンがコーネル大学で一緒に文学を学んだ小説家デヴィッド・シェツリンのこと。ピンチョンは執筆時にも、彼と妻（後出のM・F・ビール）の家に居候することがあったようだ。

39 フランスの軍人アルフレッド・ドレフュスは国家反逆罪で有罪となったが、その判決がユダヤ人への偏見にもとづくとの抗議運動が巻き起こり、一九〇六年逆転無罪となった。

□□□□□□□

運河沿いの、背の高い柳の木陰にジープが停まっている。チチェーリンの隣にいる運転手はまだ十代、ニキビ面した、ヤク狂いのカザフの少年ジャバジェフである。アメリカのクルーナー、フランク・シナトラを真似て髪を梳かし、ワルを気取った表情で、いまハッシシ片に眉をひそめて、チチェーリンに文句をつける。「もっとたくさん、取ってくればよかったンすよ」[*1]

「あの男にとって、所有している価値のある自由はこのくらいのもんだ。その分だけ取ってきたんだ」とチチェーリンが説明する。「ほら、パイプはどこにやった？」

「そいつの自由の価値がそれっぽっちだって、当人でもないのに、どうしてわかるンすか？　大尉はちょっと、〈ゾーン〉に酔ってません？」このジャバジェフは運転手というよりむしろお付きの相棒（サイドキック）のような存在で、チチェーリンの考えの足りなさを突くことも、ある一線までは許されている。

「おい、百姓、この筆記録を読んでみろ。哀れで孤独な心が伝わってくるぞ。問題だらけだ。自由になったと錯覚して〈ゾーン〉を駆け回らしておけば、役には立つだろうが、本

1　このエピソードも次のエピソードも、724ページより続いている。

[illegible]たほうがいい。自分にとって何が自由なのかもわかってないんだ。その自由にどれだけの価値があるかなど、考えたこともあるまい。だから俺が自由に決めていいんだ。そんなくだらんことに関わりたいとも思わんが」

「偉いんだ、ヴォイチェフの旦那は」若いジャバジェフが鼻で笑う。「マッチはどこです？」

だがチチェーリンにしてみたら残念なのだ。スロースロップのことは気に入っている。普通の時代なら、きっとすぐに親しくなれるだろう。おかしなコスチュームを着ているやつというのは生きる術に長けている、ある種の人格的欠陥はあるとしても。チチェーリンの嗅覚を得られるタイプだ。レニングラードでの少年時代、母親が学芸会で被るコスチュームを手縫いで作ってくれたことがあった。狼の役だった。聖像画のそばの鏡の前で頭にそれを被った瞬間、少年チチェーリンは自分の正体が狼なのだと知った。

アミタール・ナトリウムを通して得たスロースロップの心の記録が、いまもチチェーリンの脳の内壁をたたいている。まるで彼自身がそのセッションから醒めきっていないかのようだ。深い深い——政治より性より幼児の恐怖より深い…心の中心の暗闇への潜行。…その記録は[illegible]だらけだった。繰り返しクロが立ち現れる。エンツィアンの名前も、〈黒の軍団〉（シュヴァルツコマンド）についてもスロースロップは語っていないが、あの男は〈黒の装置〉（シュヴァルツゲレート）のことは口にしたし、そればかりか「シュヴァルツ」（黒）という言葉を、適当に、さまざまなドイツ語の切れ端とくっつけるのだ。クロオンナ、クロロケット、クロエメ。…無意識に、それらの新語が出来てくるのか。誰にも探り得ない意識の奥に一本になった根があって、そこからスロースロップの〈クロコトバ〉が、一語一語、花開くように出てくるのか。それとも、シュヴァルツという言葉を通して、ドイツ的な、名付けへのマニアック

なこだわりを身につけたというのか。天の下の被造界の一つひとつを細分し、分析し、名付ける者と名付けられた物との距離をますます絶望的に大きくし、そこに組み合わせの数理さえ持ち込んで、既成の名詞どうしを連結し、新語をつくる。まるで、言葉の分子をいじりまわす化学者のように・・・

いったいどういう男なんだろう。ゲリー・トリッピングから〈ゾーン〉にこんな男が来ているという報せを受けたときは、マークすべき一ダースほどの人物の中に含めはしたが、特に強い関心を抱いたわけではない。ただ一点、単独行動をしているらしいという点が奇妙で、監視を進めるにつれてそれはますます奇妙に思えてきた。今までにスロースロップはA4型ロケットに関し、一片の情報を記録したこともタグづけしたこともない。機体の破片であれ文書であれ、発見も回収もしていない。SPOGにもCIOSにも、BAFOにもTIにも、[2] どこの情報機関にも報告していないし、どこかアメリカの機関と、いや実のところ連合国側のどの組織とも、つながっているようすは見られない。それでも、フーク・ファン・ホラントからニーダーザクセン一帯にかけてA4砲兵中隊が落としていった廃物の周囲にたかるハイエナの群れの中にあって、探求の熱心さにかけては誰にも見劣りはしない。この男もまた奇跡の跡地を訪ねては、すべての破片を聖遺物として、文書の切れ端を聖書の詩行とする篤信者のひとりである。

だが、普通のハードウェアに興味を示さないのはどういうことだ。スロースロップは何があってもめげず、この世に二つとないものを射止めようとしている。それは〈クロロケット〉か？ 例の00000号？ エンツィアンもそれを探しているし、謎の〈シュヴァルツゲレート〉をも探している。スロースロップが〈クロ現象〉に駆り立てられるのだと

2 英米共同の諜報組織CIOSと、ロケットに込められたドイツの技術の「回収」を目的としたSPOGについては、522ページ註10に記した。BAFOは占領地で活動する英国空軍、TIは「テクニカル・インテリジェンス」すなわち陸軍の技術情報局のこと。

すれば、意識下の内的必要に反応して、エンツィアンのところに繰りかえし、周期的に、戻ってくる可能性は充分あり得る。その使命が完了し、ハードウェアが見つかって隊が解散するまでは、それが繰り返されるだろう。これはチチェーリンの強い第六感なのであって、メモに書き残したりすることではない。チチェーリン自身、スロースロップと同じく単独行動を任としている。報告すべきときには、人民委員会のコミッサールの下にマレンコフ[3]が特別に任命した委員のもとに報告する（TsAGI所属というのはいわば見せかけだ）。だが、個人的に気を惹かれる相手はスロースロップなのである。大丈夫、アイツはしっかり追跡されている。追っ手を逃れることはあっても、早晩見つかるだろう。個人的にエンツィアンを狙っているようであるとありがたいのだが、しかしチチェーリンも馬鹿ではない。すべてのアメリカ人がマーヴィ少佐のように、クロさへの単純な反射反応を抱えた、操作しやすい相手だとは思っていない。

うまくいかないもんだ。スロースロップと一緒にハッシシをやりながら、廃墟の町に生きるゲリーや他の女たちについて思ったことを談義できたらよかったのに。母から教わったアメリカの歌や、キエフの子守唄や、星の輝きと恋人たちと白い花とナイチンゲールの歌を歌えたら・・・

「今度あのイギリス人に出会ったらね」ジャバジェフがハンドルに置いた自分の手を不思議そうに見つめながら――「アメリカ人かもしれないけど、こんなすごいハッシシ、どこで手に入れたンか、聞き出してくださいよね」

「それをメモしておけ」チチェーリンが命じる。ふたりは柳の木の下で、狂ったように笑い出す。

3　ゲオルギー・マレンコフは、ソ連の核ミサイルの責任者。スターリン死後（一九五三）短期間ながらソ連邦の最高権力者となる。

CamScannerでスキャン

□□□□□□

スロースロップの意識が醒めていく、さまざまなエピソードがゆらゆらと夢の中から出たり、また入ったりする中を――慎重に言葉を選んだロシア語のやりとり、脈をとる手、部屋を出て行く大きな緑色の背中。……ここは白い部屋の中、完全な立方体をしているのだが、しばらくの間、彼には、立方体も、壁も、自分が水平に寝ていることも、とにかく空間的な事柄に関して何ひとつ把握できない。ただひとつ確かなのは、またあのアミタール・ナトリウム剤を打たれたこと。この感覚、すっかりなじみになってしまった。

ロケットマンの衣装のまま、寝台に横たわっている。ヘルメットは床に置いて、その隣にはハッシシの入ったズタ袋が――おっと、マズイよ。しかし自分は動けるのか。疑いだすと怖くなるが、超人的な勇気をもって寝台からバサリと落ちると、ハッシシはあるかチェックする。銀紙に包んだうち、一個のサイズが小さくなっている。紐を解くのもコワゴワと、異様に長い時間をかけて先端を開けてみると、不安は的中、泥色をした大きな厚切りの塊の一部が、切りたての緑色を見せている。外の鉄階段を下りる足音が響く。その下で重い引き戸が動く音。やられたぜ。ヨレヨレの体で白い立方体に寝転がる。足を組み、

両手を頭のうしろにまわしたまま、どこへも行く気になれない。…そのまままどろむ。鳥の夢を見る。密集して飛ぶユキホオジロの群れ。降りしきる雪の中を、木枯らしに舞う落葉のように吹き飛んでいる。故郷のバークシャー。スロースロップはまだ小さくて、父親の手を握っている。無数の鳥がスイングし、風と雪にもまれながら、上に向かい、横に向かい、餌を求めて舞い降りる。「かわいそうだね」とスロースロップがいうと、その毛糸のミトンをした手を、父がギュッと握るのが感じられる。ブロデリックはほほえんで、「大丈夫だ、心臓がとっても速く動いて暖かい血を回しているし、羽毛もあるから。心配はいらないよ、心配は…」　ふたたび目覚める。白い部屋が静まり返っている。尻を上げ、二、三度弱々しく自転車を漕ぐエクササイズ。それからバタンと腹ばいになる。この贅肉は、意識を失っていた間に新しくついたに違いない。浮遊する細胞が百万個、不可視の王国を作ったのだ。そいつらはみなスロースロップのことを知っていて、意識を失ったスキを狙って、活動を開始する。不気味なミッキー・マウスの小声でキンキンしゃべりながら。「ヘイ、みんな、集まれ、みんなでスロースロップのヤツにたかってやろう。あのトロいの、何もしないでドテっと横になってるぞ。さあ、ほれ、とっつくぞ!「この野郎」スロースロップがうめく。「これでも食らえ」

腕と脚は大丈夫、ちゃんと動くようだ。ウォーと吠えて起きあがり、ヘルメットをかぶり、袋をつかみ、部屋を出ようとドアを開けたら、ドアも壁もグラグラ揺れた。おお、そうか。キャンバスの枠張りなんだ。映画のセットね。今いるところは老朽化した古いスタジオだったのか。頭上に小さく開いた穴から黄色い日射しが差し込んでくる。それ以外部屋は暗い。錆びたキャットウォークが体重できしむ。照明は黒く焦げ、細い蜘蛛の巣がほ

のかな日光を得てグラフの図形のよう。……埃は隅にたまり、壊れたセットの残骸を覆う――見せかけだけの心地よい（ゲミュートリヒ）愛の巣。椰子の密生する斜壁のナイトクラブ。張り子（パピエマシェ）でできたヴァーグナー風の胸壁。表現主義風のタッチでくっきりと白黒に塗り分けられた中庭式アパート。どれも人間のスケールに合わせてできていない。以前にここを固定カメラのレンズが覗いた、そのレンズに合わせて、激しく遠近の勾配をつけたものだ。[1]光の当たる部分は、セットに直接明るいペンキが塗られている。これがスロースロップを混乱させる。弱々しい黄色の筋にだまされて鋭く上を見上げ、それからぐるりとあたりを見渡すのだが、光源はどこにもない。頭上五〇フィートの高みは、梁も暗影に包まれて見えない、撮影場の古びた板の上を歩きまわるスロースロップの心はますます動揺し、自分の物音の反響に驚いて足元をもつれさせ、自分の巻き上げた埃でくしゃみをする。ロシア人たちは出ていったはずだが、スロースロップ以外にだれかいる。金属の階段を降りる。眼前にひき裂いた蜘蛛の巣と、怒れる蜘蛛と、乾からびた餌食、足下では鉄錆がミリミリと音を立てる。下に降りたったとたん、ケープがぐいと引っぱられた。注射のせいで今も意識が少々ぼんやりしているスロースロップは、荒々しく身を引くだけで精一杯。ケープをつかんだ手は手袋をしていた。つややかな子ヤギ革の下に、小さく整った指関節。パリ風の黒いワンピースの胸元に、紫と黄色のアイリスの花がついている。相手の手の震えが、ビロードの湿り気を通してスロースロップに伝わってくる。眼が合った。灰のようなソフトな黒で縁どった眼を見つめる。顔面に粒状に分れた白粉を見つめる。白粉の載っていない、または涙で流れた肌の、個々の毛穴を見つめる。マルゲリータ・エルトマン[2]との出会いがこれだった。スロースロップの、光なき夏の炉との、恐怖に染まった過去の〈インフレ時代〉への

1　以下『カリガリ博士』（一九二〇）をはじめとするドイツ表現主義映画の舞台の特徴が記されている。

2　Erdmann（英語でならEarthman）という象徴的な名前について、747～748ページで彼女自身が語る。

安全通路との、彼の甘えっ子にして、かよわきリザウラ[*3]との出会い。
彼女は通りすがり。根無し草となってさまよう百万のうちのひとり。娘のビアンカを探して、東のスヴィーネミュンデへ向かおうとしている――仮にソヴィエト軍とポーランド軍が通してくれたら。ノイバーベルスベルクに立ち寄ったのは郷愁にひかれたから――昔のスタジオを訪れるのは本当に久しぶり。一九二〇年代と三〇年代を通して映画女優だった彼女は、テンペルホフやシュターケン[*4]でも撮ったけれど、お気に入りのスタジオといえば、いつもここ。ここで、偉大なゲアハルト・フォン・ゲール監督のもと、ポルノタッチのホラー映画を何十本撮ったことか。「監督は天才なの。それは最初から分かってたわ。わたしは監督が生みだした生き物なのよ」。自分はスターという玉じゃない、とあけすけに認める。ディートリッヒ[*5]とは違うし、ブリギッテ・ヘルムみたいなヴァンプ[*6]でもない。でも、何か、彼らの望むものを持っていて――（スロースロップ「カレラってだれだ？」エルトマン「だれかしら」）自分にアンチ・ディートリッヒの呼び名がついたという。男たちを破滅させるのでなく、お人形になる――ものうく、けだるげな人形……。「監督と作った映画、ぜんぶ見たわ」と追憶しながら、「六、七回見たのもある、でも自分は動きというものがないの。表情さえ動かない。薄布を被せた長時間のクロースアップ……ひとコマ撮って延々繰りかえすのと同じよ。逃げるシーンさえ――いつも怪物、狂人、凶悪犯に追いかけられていた――わたしの顔はのっぺりと」、ブレスレットがキラリと光る、「無表情で、まるで……記念碑（モニュメント）のようだった。走っていないときはたいてい革紐か、鎖につながれていたわね。ちょっと来て。見てちょうだい」。拷問部屋の残骸へと、スロースロップをみちびいていく。歯のとれた木製のラック歯車。漆喰製の石はボロボロに剥離して埃

3 洞窟で女神ホルダとの愛に耽ったタンホイザーが裏切った恋人。

4 三つの地名はどれもベルリン郊外のスタジオ所在地。シュターケンには三〇年代初頭になって、フリッツ・ラングが自身のスタジオを構えた。

5 マレーネ・ディートリッヒは、ドイツ初の本格的音声映画『嘆きの天使』（一九三〇）で国際的な人気を得た後、フォン・シュテルンベルク（英語読みはスタンバーグ）監督と共にパラマウント社と契約した。

6 『メトロポリス』のアンドロイド役の後、ヘルムは売春婦や身を持ちくずした女を多く演じた。

CamScannerでスキャン

が舞い上がっている。死んで冷たく傾いた燭台のランプ。銀のペンキがほとんど剥げ落ちた木製の鎖に、彼女は子ヤギ革の指を走らせる、カタカタと音がした。「『夢魔(アルプドリュッケン)』で使ったセットよ。この頃のゲアハルトは、まだ大げさな照明に凝っていたわね」。拷問台のほこりを払う。銀灰色の粉が手袋の細かなしわに溜まる。グレタはそこに身体を横たえる、「こんな風にしたの」と両腕を上げ、手首と足首にブリキの枷をはめてちょうだいとスロースロップに訴える。「照明の光がね、上から下から同時にくるのよ。すべてに影が二つずつ。ひとつがカインでもうひとつがアベル――ってゲアハルトは言ってたわ。監督の象徴主義時代の頂点かしら。その後は、もっと自然光を使うようになって。ロケも増えたし」パリへ行き、ウィーンへ行った。バイエルン・アルプスのヘレンキームゼー城へも行った。フォン・ゲールは、ルートヴィヒ二世[7]の映画を作ろうという夢を抱いて、そのことでブラックリストに載りそうになった。誰もがフリードリヒ大王に熱狂していたあのころ、ドイツの為政者が狂う可能性を示すというのは、愛国者のすることではなかった。だが、黄金と、鏡と、延々と続くバロック装飾を撮りつづけているうち、監督自身が少し狂ったようになってきたのかもしれない。とくにあの、なが―い通廊。・・フランス人なら、ああいう精神状態を「通廊形而上学(メタフィジーク)」とか呼ぶでしょう。世の通廊愛好家は、フォン・ゲールについての記事を読んでニッコリすることでしょう。だってフィルムを撮り切ってしまったあとも、まだカメラと一緒にドリーに乗っかって、まぬけな笑いを浮かべながら黄金の光景の中を行ったり来たりなんだから。そのシーンの暖かみは、白黒のオーソクロマティック・フィルム上にも、失われずに焼き付いた――もちろん映画は上映にいたらなかった。『狂える帝国(ダス・ヴューテント・ライヒ)』なんて映画、彼らが黙って見られるもんですか。果てしないやりと

7 十九世紀後半、南独バイエルン王国の王。芸術家・建築家を保護し、(ヴァーグナーを含む)官僚的公務を嫌った。最終的に王位剥奪を謀る勢力から狂気(パラノイア)のレッテルを貼られ、謎の死を遂げた。

CamScannerでスキャン

り。ナチの襟ピンをつけた粋な小男の軍団がスタスタやってきて、撮影をさえぎり、そのままツカツカ進んでガラスの壁に顔をぶつけたり。「帝国（ライヒ）」のためとか、「王国（ケーニッヒライヒ）」のためとか、そういうスタンスを取れば受け入れてもらえたろうに、フォン・ゲールは頑固だった。ぎりぎりの綱渡りをして、その埋め合わせに、すぐに『良き社会』という映画を撮り始めた。うわさではゲッベルスがこれに大いに気をよくして三度も見たそうだ。笑い声をあげながら、隣席の男——ひょっとしてアドルフ・ヒトラーだったかもしれない——の腕を叩いたりして。マルゲリータはカフェのレズビアン役を演じた。「片眼鏡（モノクル）をしてるのがわたし。最後は男装のお相手に死ぬまで鞭打たれる、そのシーン憶えてて?」絹のストッキングにぴっちり包んだ重量感ある脚の輝き、その機械的な様子…思い出とともに興奮もよみがえって、つややかな両膝がすり合わさる。スロースロップも感じてきた。ズボンの鹿革の股のところがきつく引っぱられているのを見てマルゲリータのほほえみを誘う。

「あの人、美しかった。両方の意味で——どうってこともなかったけど。あなたを見てると、思い出す。特に…そのブーツ。…『良き社会』は、あの人との二作目だったけど、でもこの映画は」この映画?『夢魔』よ。それが初の共演。彼がビアンカの父親なんだわ。『夢魔』の撮影中に妊んだの。あの人、わたしを拷問する大審問官役でね。ああ、わたしたちは帝国中の恋人だったの——そうよ、グレタ・エルトマンとマックス・シュレプツィヒの、素晴らしい共演——」

「マックス・シュレプツィヒ」スロースロップが目を丸くした。「冗談かよ。マックス・シュレプツィヒだと?」

「本名じゃないのよ。エルトマンていうのだって、わたしの名前じゃない。ただ、名前に

CamScannerでスキャン

大地（エルト）がつけば、政治的には大丈夫だったってこと――大地、土、民衆（フォルク）…どれも暗号（コード）よね。監視しているナチスに意味が通じる記号。…マックスはもろにユダヤ人の名前をしていたから。ゲアハルトも改名した方が無難だと考えたのね」

「グレタ。おれの名前もさ。マックス・シュレプツィヒにした方が無難だと考えたやつがいるんだよ」そういってゾイレ・ブマーからもらった通行証を見せる。

グレタはそれをじっと見つめ、一瞬スロースロップに視線をやると、ふたたび震え出した。欲望と恐怖の入り混じった声で――「やっぱり」

「やっぱり、なんだよ」

目をそらし、屈するかのように、「あの人、死んだのよ。一九三八年に消えて、そのまま…〈かれら〉の動き、せわしかったでしょ？」

〈ゾーン〉入りしてからスロースロップは、ヨーロッパ人の、パスポートへの過剰な反応をたんまり見せられている。グレタを慰めたくなった。「こいつは偽造品だよ。どっかからいい加減（ランダム）にもってきた名前にきまってる。映画を見て名前を憶えてたんだろう、それを使ったのさ」

「ランダムなんて」いかにも女優らしい、悲劇のスマイル。顎が二重になりかける。片膝が足枷の許すところまで持ち上げられる。「そんな言葉は、おとぎ話にしかないわよ。あなたの身分証明書の署名は、マックス自身のものです。ヴィスワ河[※8]の畔にステファニアの家があって、そのどこかにあの人からの手紙がスチールボックスいっぱいあるわ。Schlepzig の z の真ん中に、定規で引いたみたいな交線があるでしょ。最後の g は花模様のようでしょ。あなたのいうパスポートの偽造人、〈ゾーン〉中を探し回ってごらんなさ

8 ポーランドの大河。ステファニアは後に物語に登場する。

い。ぜったい見つからないから。かれらに妨害されます。今、あなたが、ここにいるのも、かれらがいさせたいからよ」

　えーと、パラノイアがパラノイアに会うとどうなるんだ？　ふたつの唯我世界が交わると。そりゃあ、二つのパターンが第三のパターンを生み出すわけだ。モアレ[9]というやつだ。流動する影たちの相互干渉が新たな影の世界を生みだす。…「おれをここにいさせたいって、何のために？」

「わたしのためよ」真っ赤な、開いた、濡れた唇から、ささやきが漏れる。…とにかく股間がズキズキして仕方ない。拷問台に腰掛け、体をあずけ彼女にキスをし、それからズボンの紐を解く。ズボンをめくり下ろしたとたんに、ペニスが少し揺らぎながらスタジオの冷気の中へ飛びだした。「ヘルメットをかぶって」

「オーケー」

「あなた、すごく残酷？」

「どうかな」

「残酷にやって。お願い。わたしを叩くものが、何かあるでしょ？　少しでいいから、わたしを暖めて」ノスタルジア。古巣への苦痛の帰還。審問棒、足枷、親指締め、革のベルト。最後に探し出してきた小ぶりの九尾鞭は〈黒い森〉の精(エルフ)の鞭であって、そのラッカー塗りの黒い握りに、快楽に耽る男女が彫られている。紐の部分にはビロードの布当てがあって、苦痛を与えても血は流さない。「そう、完璧よ。さ、太ももの内側を…」

　だが、すでにだれかが彼に教え諭していた。何か…彼らの草地(メドー)でプロシア的な冬枯れの夢を見る何か…彼らの空の荒涼とした、あまりに無防備な肌をどんな筆記体の鞭跡が、

9　二つのパターンや斑紋が重なって別のパターンとして見える「モアレ」現象の例が、179ページ（ポインツマンとメキシコが浜辺を歩くシーン）で描かれている。

横切るべく、待たれているのか。…違うぞ。違う——「彼らの草地」といったら違う。自分でもわかってる。今やスロースロップ自身の草地だ、彼の空…それは彼自身の残忍さなのだ。

マルゲリータを縛りつけた鎖と枷のすべてが鳴る。ウエストまでまくりあがった黒いスカート、ストッキングは、骨製の黒い靴下留に引っぱり上げられ、二つの曲線の出会うところが型通りの尖点（カスプ）をなしている。レディーズ・ストッキングの頂点に生じる特異点。[*10]シルク地が素肌と靴下留へ変移する一点。過去百年の間、どれほどの数の西洋男性のペニスがこれを見て跳び上がったことだろう。フェティシズムを解さぬ者は、かくもパヴロフ的な条件反射のことを聞かされても、鼻で笑うだけかもしれない。だが、不健康な笑いこそを生き甲斐にする下着狂に訊いてみたまえ。きっとそのコスモロジーを語るだろうと。ここには結節点と尖点と、接触点（数学流のキッス）からなる宇宙が拓けているのだと。関数の特異点！　考えてみろよ。大聖堂の尖塔、イスラム寺院の尖塔、列車がそこをガタゴト通過した後に見える、もう一本の通らなかった線路との分岐点…天に聳えるベルヒテスガーデン[*11]のごとき、鋭く尖った山頂…スチールの剃刀の、いつも強烈な謎を宿した刃（エッジ）…チクリと不意打ちをくらわせる薔薇の棘（とげ）…さらにはロシアの数学者フリードマンいうところの、現在の大宇宙がそこから膨張を始めた密度無限大の一点。…それぞれのケースで、点（ポイント）から非点（ノンポイント）への移行には、白光と謎（エニグマ）とが伴い、それに対して、われわれの中の何かが跳び上がり、歌い出し、あるいは恐怖に身をすくめる。空を刺すように佇む、最後の点火スイッチが切られる寸前の〈ロケット〉を見よ。その弾頭の最先端の特異点、ヒューズを設置した尖点を見よ。これらの先端は、すべてがロケットの先端のように、滅ぼし

10　関数グラフが尖ったり折れたりする点。連続の観念が失われ、微分が不可能（無限大）になるアナキスティックな一点。原文は singular point。なお、cusp（尖点）という語も、ピンチョンはほぼ同義で使っている。

11　ヒトラーが「狼の寝床」と呼んだ、山の要塞。「ベルヒテ」はドイツ神話で、ホルダと関連する白き女神。

CamScannerでスキャン

を暗示しているのか？　大聖堂の上空で、剃刀の下で、薔薇の下で（アンダー・ザ・ローズ）*12、人知れず爆音を立てるあれは何なのだ？

　そして今グレタのストッキングの上端線に現れた二つの尖点、その向こうには、どんな不快な驚きがスロースロップを待ち受けているのか？　ストッキングが突然に伝線し、青白い一本の筋が太ももを伝わり、入り組んだ線となり、膝を通って視界から消える。……肌を打つビロードの鞭の音とよがり声、白地に長々と這う赤い腫れ、グレタの呻き、その胸で泣いている赤紫の花、彼女を押さえつける金具の鳴る音——その先に待っているものは何だ？　我が身を鞭に差し出す女の、ストッキングは破るまい。女の伸張した陰唇の、開いたまま力む股の間で無防備に震えるそれの、あまり近くは鞭打つまい。女の筋肉の動きは、フィルムに焼き付いた銀色の記憶と変わらない。エロティックで控え目で〝記念碑的（モニュメンタル）〟だ。グレタは一度絶頂に達し、それからたぶんもう一度イッた。スロースロップは鞭を置き、ケープをひろげてグレタにのしかかる。シュレプツィヒの代用品と、カッチェを思い出させる最新の女が……接合した腰を揺らすその下で、古びた作り物の拷問台がギーギーきしむ。マルゲリータがささやく。あなたの鞭すごかったわ。ああマックス……スロースロップが達する瞬間、きれいに揃った歯を食いしばって、演技とは別物の、澄んだ苦痛の吐露の中からグレタの子の名が聞かれる——ビアンカ……

12　「秘密裡に」という意味の成句。ピンチョンはこれを短編（スパイ小説、『スロー・ライナー』所収）のタイトルに使っている。